平成 25 年度博士論文

日本語教育を視野に入れた指示詞の日中対照研究

―非現場指示を中心として―

邱　麗君

大東文化大学大学院外国語学研究科

目　次

序章 1
1 研究動機と目的 1
2 研究方法および研究内容 2
3 本研究で使用する主要用語の概念 4
4 本論文の構成 5
5 調査資料 12

【第一部】 先行研究および日中指示詞の非対応・省略 17
第 1 章　日本語と中国語の指示詞についての概観 17
1.1 日本語の指示詞の名称と領域について 17
1.2 日本語の指示用法の捉え方 21
1.2.1 現場指示 21
1.2.2　文脈指示 23
1.2.3　ほかの指示用法 24
1.3 中国語の指示詞“这/那”の名称と領域についての概観 28
1.4 中国語の指示用法の捉え方 31
1.4.1 現場指示 31
1.4.2 照応指示 32
1.5 指示詞の日中対照研究について 34
1.6 本研究の立場 40
注 41

第 2 章　日中指示詞の非対応について 43
2.1 “这/那”の指示機能の虚化 43
2.2　接続機能の発達による非対応 44
2.3　副詞的用法による非対応 48
2.4　同格指示による非対応 52
2.5　同格指示の変形による非対応 54
2.6　観念指示による非対応 59
2.7　絶対指示による非対応 60
2.8　標識と不定標識から見た非対応 62
2.9　アスペクト・テンスによる非対応 65
2.10 まとめ 67
注 70

第 3 章　日中指示詞の省略について 72
3.1 日本語文に現れる指示詞の省略表現 72

3.2 中国語文に現れる指示詞の省略表現 76
3.3 訳文に現れる指示詞の省略現象 78
3.3.1 中国語の訳文中の指示詞の省略 78
3.3.2 日本語の訳文中の指示詞の省略 84
3.3.2.1 “这”の省略 84
3.3.2.2“那”の省略 88
3.4 まとめ 91
注 92

【第二部】日本語の指示詞と中国語の指示詞が対応する表現 94
第4章 日本語の指示詞に対応する中国語の表現 94
4.1 前方照応指示と中国語指示詞“这”の対応表現 94
4.1.1 前方照応指示の「コ」と“这”の対応表現 95
4.1.2 前方照応指示の「ソ」と“这”の対応表現 98
4.1.3 前方照応指示の「ア」と“这”の対応表現 102
4.2 前方照応指示と中国語指示詞“那”の対応表現 105
4.2.1 前方照応指示の「コ」と“那”の対応表現 105
4.2.2 前方照応指示の「ソ」と“那”の対応表現 108
4.2.3 前方照応指示の「ア」と“那”の対応表現 113
4.3 後方照応指示と中国語指示詞“这”の対応表現 116
4.3.1 後方照応指示の「コ」と“这”の対応表現 116
4.4 後方照応指示と中国語指示詞“那”の対応表現 120
4.5 まとめ 123
注 126

第5章 中国語の指示詞に対応する日本語の表現 129
5.1「回指」の“这”と日本語の指示詞の対応表現 129
5.1.1“这”と「コ」系指示詞の対応表現 129
5.1.2“这”と「ソ」系指示詞の対応表現 135
5.1.3“这”と「ア」系指示詞の対応表現 141
5.2 「前指」の“这”と日本語の指示詞の対応表現 145
5.2.1“这”と「コ」系指示詞の対応表現 145
5.2.2“这”と「ソ」系指示詞の対応表現 150
5.2.3“这”と「ア」系指示詞の対応表現 153
5.3 「回指」の “那”と日本語の指示詞の対応表現 155
5.3.1“那” と「コ」系指示詞の対応表現 156
5.3.2“那”と「ソ」系指示詞の対応表現 163
5.3.3“那”と「ア」系指示詞の対応表現 173

5.4　まとめ 178
注 183

【第三部】教科書における用法別指示詞の全数調査および日本語教育への応用 186
第6章《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》における用法別指示詞の全数調査 186
6.1 調査目的 186
6.2 調査対象及び方法 186
6.3 教材の内容分析と比較 187
6.3.1《新编日语Ⅰ》分析と比較 187
6.3.2《新编日语Ⅱ》分析と比較 191
6.3.3《新编日语Ⅲ》分析と比較 194
6.3.4《新编日语Ⅳ》分析と比較 198
6.4《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》の比較 201
6.5 まとめ 202
6.6 教科書の問題点に基く日本語教育への提案と今後の課題 202
注 203

第7章《标准日本语初级(上.下)中级(上.下)》における用法別指示詞の全数調査 204
7.1 調査目的 204
7.2 調査対象及び方法 204
7.3 教材の内容分析と比較 205
7.3.1《标日初级上》の分析と比較 205
7.3.2《标日初级下》の分析と比較 211
7.3.3《标日中级上》の分析と比較 217
7.3.4《标日中级下》の分析と比較 226
7.4《标准日本语初级(上.下)中级(上.下)》の比較 232
7.5 まとめ 233
7.6 教科書の問題点に基く日本語教育への提案と今後の課題 234
注 235

終章 238
1 本研究のまとめ 238
2 日本語教育への応用 245
3 本研究の方法論的評価と今後の研究の発展 247
参考文献 249
既発表論文と各章の関係 262

序　章

1 研究動機と目的

本研究は、日本語と中国語の指示詞について、対照研究の立場から考察を進める。日中両言語の指示詞の類似点と相違点を究明したうえで、「コ・ソ・ア」系指示詞が日本語教科書でどのように提示されているかという調査に基づき、指示詞教学に資する提言を行うものである。日常会話や文章において指示詞は欠かせないものであり、どの日本語教科書でも初級の始めの段階から指示詞を導入している。しかし、日本語の学習者にとって指示詞の使い方を理解することは極めて困難である。日本語の文脈指示用法に関しては中級レベルから、上級レベル以上になっても誤用が起きることは中国の大学で行われた日本語指示詞のアンケート調査から明らかになった。

日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」の 3 系列に対して、中国語の指示詞は“这(zhè)/那(nà)”の 2 系列しかなく、一対一のように簡単に対応することができない。一般的に「コ」系指示詞は“这”、「ソ・ア」系指示詞は“那”と対応すると考えられている。それは「コ」系指示詞と“这”が同じ近称指示で、「ソ」系指示詞が中称、「ア」系指示詞が遠称に対して“那”は遠称指示であるため、「コ」⇔“这”、「ソ・ア」⇔“那”という対応関係で認識されている。このような対応関係は指示する対象と話し手（語り手)、聞き手（読み手）の距離が「遠」であるか、「近」であるかが判断できる範囲においてのみ成り立つため、距離の遠近で説明できない指示用法はこのような対応関係を持たない。

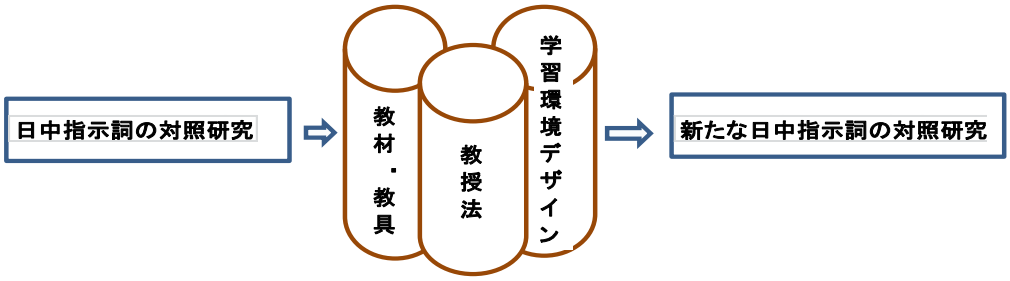
また、これまでの研究において指示詞の対応と言えば、先に述べたように、「コ・ソ・ア」系指示詞は“这/那”に、“这/那”は「コ・ソ・ア」系指示詞に訳される現象があることから、互いに対応していると理解されてきた。しかし、「コ・ソ・ア」系指示詞が“这/那”に、“这/那”が「コ・ソ・ア」系指示詞に訳されても、両言語の指示詞の用法は同一とは限らない。そして、指示詞“这/那”の虚化によって指示機能が低下し、ほかの機能が指示機能より強く働く現象が見える。確かに日本語の指示詞も中国語の指示詞と同様に基本的な機能（指示と代替）を持ちながら、接続機能や、副詞の機能を担うケースがある。しかし、日本語指示詞と中国語指示詞は歴史的な変化過程が異なるため、同じ基本的な機能（指示機能）と副機能（接続機能など）を持っていても、どの機能が発達しているかによって、日中指示詞の対応関係は変わってくる。さらに、指示詞は省略表現があるため、「コ・ソ・ア」系指示詞が“这/那”に、“这/那”が「コ・ソ・ア」系指示詞に訳されても、対応関係にあるとは言い切れないだろう。

一方、日本語文では指示詞を使用しているが、中国語の訳文では訳されない。あるいは逆に、中国語文では“这/那”を使用しているが、日本語の訳文では訳されていない例もある。つまり、日本語と中国語の指示詞が全く対応していない場合があるのだ。しかし、この点に関する先行研究はいまだ十分ではなく、日本語か、中国語か片方からのみ分析する研究ばかりである。なかでも日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞について、“这/那”との対応の視点から論じたものが多い。そこで本研究は修士論文（邱麗君 2008　未刊行）の研究に続き、日本語文で用いられた指示詞と中国語文で用いられた指示詞“这/那”の対応状況を観察しながら、双方の視点から考察する。

日本語の指示詞と中国語の指示詞との対照研究は日本語教育現場での指示詞のより良い指導への貢献にとどまらず、日本人学習者の中国語学習における中国語指示詞の正確な理解と使用に

役立つものであると信じている。

先行研究では、日本語の指示詞の分類、用法、各用法の相違と関連性、指示領域の相違、語形の違いによる意味、統語論的特徴などの観点からの研究は盛んに行われているが、日本語教育を視野に入れた指示詞の日中対照研究はそれほど重視されていなかったように思われる。本研究では、指示詞という日中両言語に共通する品詞の枠組みの中で、それぞれの類似性と相違性を見出し、互いの対応関係を狭義的な対応と広義的な対応に分けて考察する。また、日本語と中国語の指示詞の異同を表面的な観察、指摘に終始してしまわないよう、記述・説明的なアプローチから、論理的なアプローチに結びつける。また、当該枠組みを日本語教育で生かせるように、日本語教科書の調査を行い、日中指示詞を対照した結果と合わせ、日本語教科書での提示順、提示法の改善策を紹介したい。【図 0-1】で示しているように、理論の研究と実践を結びつけ、日中指示詞の対照研究から実際の教材・教具の作成、新たな教授法を生み出す学習環境デザインの構築へと連動させたい。



【図 0-1】理論研究と実践

2 研究方法および研究内容

日中指示詞の対照分析においては、日本語のテクストを調査資料として用い、研究対象に該当する用例を抽出し、その中の指示詞を日本語記述文法研究会（2009：21）の分類の枠組みを参考にして、「人・事物」「修飾」「場所・方向」「属性」「様態」の 5 種に分類する。（日本語記述文法研究会 2009：21）の分類項目の一つである「もの」は包括範囲が広いため、本論文では「人・事物」に置き替える。そして「方向」を示す指示詞が少ないため「方向」は「場所」にまとめる。ほかの 3 つの分類項目はそのまま援用する）。

まず、中国語の指示詞“这/那”に、a. 翻訳された場合と b. 翻訳されていない場合とに分ける。a. に属する例群については、田中（1981）の前方照応指示と後方照応指示の定義に従い、照応指示関係を持つ例を抽出し、a1. 狭義的な対応と a2. 広義的な対応の 2 種の対応関係で観察する。さらに、指示用法の対応、近称・中称・遠称の対応、指示対象の対応、指示詞を含む文の構造の対応など複数の角度から分析する。

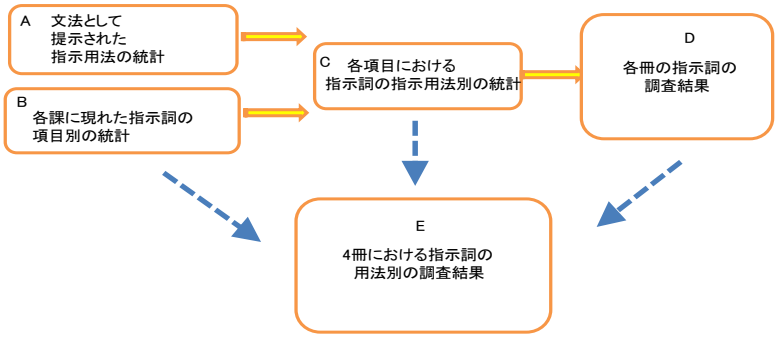
中日指示詞の対照分析においては、中国語のテクストを調査資料として用い、中国語の指示詞の用例を採集する。劉月華他（1988）の“这/那”の分類の枠組みを参照し、“这/那”の指示対象によって大きく「人・事物」「場所・方向」「時間」「修飾」の四つの枠組みに分け、それぞれ“这 1”，“这 2”，“这 3”，“这 4”と“那 1”，“那 2”，“那 3”，“那 4”で示す。まず、日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞に、a. 翻訳された場合と b. 翻訳されていない場合とに分ける。それか

ら吕叔湘(1985)が定義した非現場指示の「回指」と「前指」に焦点を当てる。各例群を指示詞用法の対応、指示対象の対応、指示詞を含む文の構造など、a1.狭義的な対応とa2.広義的な対応という視点で考察する。

次の段階として、「コ・ソ・ア」系指示詞と指示詞“这/那” の指示機能の拡張程度が異なることによって、生じた非対応現象について考察する。「接続機能」「同格指示」「同格指示の変形」「副詞的用法による」、この4つの面から中国語指示詞の指示機能が弱く、ほかの機能が発達している指示詞の例の検討を試みる。また、日中両言語の指示詞に存在する特異な機能に着目し、標識と不定標識、アスペクト・テンスとの関わりから分析を行う。そして、近年議論が多い時間を表す指示詞の表現（Dem+…）も研究の対象とし、日本語の「絶対指示」と合わせて、対応していない原因を究明する。

日中指示詞の省略に関しては、日本語文では「コ・ソ・ア」系指示詞の省略と中国語文では“这/那”の省略を検討し、両言語の指示詞の有無についての類似と相違を共通する枠組みの中で整理する。つぎに、原文で用いられた指示詞が訳文では省略されている（復元できる例のみ）用例に焦点をあてる。指示対象によって分類したうえで、各指示詞の指示用法、指示機能、指示詞を含む文の構造から、省略されている現象を検討する。

日本語教科書における用法別指示詞の全数調査は、指示詞のアンケート調査の協力者が使用している教科書に対象を絞り、主に「単語」(「前文・本文」)「会話」「文法説明・文法解説」「読解文・応用文」「練習問題」の5～6項目から指示詞を用いた用例を抽出し、詳細に分析する。それらの用例を指示対象（日本語記述文法研究会2009の分類の枠組みを参照）により、「事物・人・場所・時間・修飾関係」に大別し、指示用法を「現場指示・文脈指示・観念指示」に分けて統計する。文体は「会話文・地の文・独話・その他」に分類したうえで、「現場指示・文脈指示・観念指示」の3つの指示用法について、初級、中級、上級、各レベルの提示頻度、提示順、提示方法の観点から考察を加える。また、日本語教科書に提示された指示詞に関する練習問題を設定しているかどうか、難易度が適切であるかどうかに着目し、調査する各種類の教科書のシリーズを通して、指示詞の提示の一貫性を検討する。つまり、【図0-2】に示しているように、まずAとBの調査からCへと統計処理を行う。さらにA、B、Cの結果に基づいてDの段階に進み、最後Eでまとめる。その5つの段階は連動し、各角度から調査対象を観察できる。これによって、より厳密なデータを得ることができる。



【図0-2】教科書の用例調査と分析の手順

第 1 章では、今までの日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞と中国語指示詞“这/那”に関する従来の研究を概観する。そして、両言語において、各指示詞の概念や論理的な枠組みを整理したうえで、本研究の位置づけを述べる。また先行する日中指示詞の対照研究の問題点を指摘し、第 2 章・第 3 章・第 4 章・第 5 章では検討と考察を行う。

第2章と第3章では、両言語の指示詞が基本的な機能からほかの機能へ拡張する様相について、アスペクト・テンスとの関わり、標識と不定標識などの側面から日中指示詞の非対応と指示詞の省略現象が生じる原因を探る。

第 4 章と第 5 章では、日本語の文脈指示の中の前方照応指示と後方照応指示、中国語の「前指」と「回指」に焦点を当てる。中国語の指示詞“这/那”が日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞と狭義的な対応あるいは広義的な対応にある場合、先行詞の有無、指示対象の類別、指示詞の文中に占める位置などを含め、日中指示詞の構成と機能の異同から日中指示詞の対応条件を突き止める。

第 6 章と第 7 章では、修士論文（邱麗君 2008　未刊行）の研究で行った指示詞の使用状況のアンケート調査の協力者が使用している日本語教科書を詳しく分析し、第 2 章・第 3 章・第 4 章・第 5 章で得られた結果と合わせ、指示詞の提示順、提示法を検討する。

終章では、日中指示詞の対照分析と、日本語教科書の調査の結果をまとめ、教育現場での指示詞の指導など、日本語教育への応用に結び付ける。

本研究は、日中指示詞の会話文と地の文で表す意味的な用法、指示機能の強弱の異同、使用範囲、指示詞と構文要素の関わり、指示詞の機能と文の展開との関わりに着目する。日本語原文の指示詞と中国語訳文の相当表現あるいは、中国語原文の“这/那”と日本語訳文の相当表現との比較作業によって、両言語が等価になっている部分だけではなく、等価になっていない部分も明らかにできる。この比較対照から得られた結果は「中→日」「日→中」の単一方向から得られた結果を裏付けることもでき、2 つの言語に潜んでいる問題点を見出すことができるであろう。それぞれの特徴を解明にすることにより、中国語と日本語学習者が混乱する指示詞の難点が明らかになる。それは日本語の教材作成の提案、教室での指示詞の指導法など中国での日本語教育に生かせることが期待できる。

3 本研究で使用する主要用語の概念

本研究における指示詞の用語は対照研究の便宜上、呼称を統一する。また、先行研究で統一されていないものも定義しておく。指示詞の用語には、先行研究から直接引用したものと筆者によって定めたものの 2 種がある。

① 指示詞

「コ・ソ・ア」系指示詞に対して、指示詞・指示語・指示表現などさまざまな名称がつけられている。“这/那”は“指代词（指代詞）”・“指示词（指示詞）”・“指示代词（指示代詞）”などと呼ばれている。それらを統一して、本論文ではすべて指示詞と呼ぶ。

② 後方照応指示と「前指」

日本語の指示詞の後方照応指示用法は田中（1981）を参照したもので、そのまま「後方照

応指示」と呼ぶ。日本語の後方照応指示用法と類似している中国語の指示詞の“前指（前指）”用法については、先行研究に日本語の指示用法の呼称に合わせて、後方照応指示用法と称するものがある。本研究では呂叔湘（1985）が定義した“前指”を援用するため、中国語の“前指”用法は「前指」と呼ぶ。

③ 前方照応指示と「回指」

前方照応指示も田中（1981）を参照し、そのまま「前方照応指示」と呼ぶ。前方照応指示と似ている中国語の“回指（回指）”用法は呂叔湘（1985）が定義した “回指”という名称を直接「回指」を用いる。

④ 同格指示

“我这人/他那人”のように指示詞が人称代名詞と共起し、一度人称代名詞や人名が指し示した人物などを再度指示詞で指し示す表現である。一度人称代名詞が指し示した人物などを再度指示詞で指し示す場合、並列関係や所属関係になり、指示詞を省略しても意味が変わらないため、指示機能が弱くなっている。

⑤ 同格指示の変形

人称代名詞ではなく、名詞や名詞文とそれに後接する物事や時間などが同格である場合、指示詞が物事や時間を指す形式である。同格指示の働きと同じく、名詞や名詞文と指示詞で指している事物は並列関係や所属関係になり、指示詞を省略しても意味が変わらないため、指示機能が弱くなっている。

⑥ 略称

Dem：指示詞
PP：人称代名詞
NumCL：数量詞
Adv:副詞
Adj ：形容詞
v ：動詞
N:名詞
N1:人名を示す固有名詞
N2:場所を示す固有名詞
N3:時間を示す固有名詞
NP ：名詞文

4 本論文の構成

本論文の第一部は、第1章・第2章・第3章からなっている。第一部では、日中指示詞の従来の研究を概観したうえで、本研究の位置づけ、日中指示詞の非対応と省略について述べる。

第 1 章では、日本語および中国語の先行研究をまとめ、日本語の指示詞と中国語の指示詞のそれぞれの具体な位置づけを決め、本研究の立場を論じる。1.1 節では「コ・ソ・ア」系指示詞の名称と領域を整理し、代表的な先行研究をはじめとする諸説を紹介する。本論文では佐久間(1941)の指示詞「コ・ソ・ア」という名称と「近称・中称・遠称」の概念を援用する。

1.2 節では従来の先行研究における日本語の指示用法の捉え方を整理し、共通点を見出だす。指示用法は現場指示と非現場指示に分け、前者の指示用法は「対立型」と「融合型」2 つの枠組みとする説（主な研究は佐久間 1941）を支持する。後者の指示用法は着目した視点の異なりによって、文脈指示（阪田 1971、堀口 1978a，1978b，1990、正保 1981、吉本 1992、金水・田窪 1990、馬場 2006）、観念対象指示（堀口 1978a，1978b，1990、正保 1981、庵 1997）、絶対指示（堀口 1978a，1978b、1990）と分類されている。そのうちの文脈指示は先行詞と指示詞との間の位置関係によって、さらに、前方照応指示と後方照応指示、限定指示と代行指示に分けられている。本論文では日本語教育の立場から田中（1981）に従って、文脈指示は前方照応指示と後方照応指示に分けることとする。

1.3 節では、中国語の指示詞“这/那”の名称と領域について概観し、本研究との関連を中心に参考文献に沿って、諸説を紹介する。指示詞“这/那”の名称は马建忠が名付けた指示代字をはじめ、指代詞、指示代詞、指示詞と呼ばれているが、本論文では指示詞とする。指示詞“这/那”の用法は呂叔湘（1980）が定義した指示機能と代替機能を原点とし、九十年代後半と二十世紀の始め、呂叔湘（1985）が定めた「回指」「前指」の後、「回指」「直指」「篇章直指」「篇章回指」の 4 つの分け方が一般的である（Huang1999、Tao1999、方梅 2002、Chen2004）。近年、指示用法がさらに詳細に分類され、まず「実指」と「虚指」を分け、それから「外指」「内指」「汎指」「接続詞」を細分し、その中の「内指」は「回指」と「予指」まで分類されている(杨玉玲 2010)。本論文は非現場指示に焦点を当てるため、吕叔湘(1985)の「回指」と「前指」用法に従う。

1.4 節と 1.5 節では、いままでの指示詞の日中対照に関する研究を整理し、本研究の課題を絞り込み、調査と分析方法を定め、本論文で採用する両言語の指示詞の名称、領域、指示用法を位置づける。日中指示詞の対照研究の資料は決して少なくないが、80 年代・90 年代はまだ本格的に研究が進んでおらず、21 世紀に入ってから急に増加している。しかし、研究の多くは現場指示を対象にした段階に留まっているのが現状である。また、特殊な用例を取り上げ、日中指示詞の非対応を解説している研究もある。本研究では、日本語教育に生かすため、使用率が高い用法、用例を研究の対象とする。できるだけ、正式に出版された翻訳作品から用例を拾うこととする（適当な用例がない場合は作例や筆者による訳文を付ける)。

第 2 章は、両言語の指示詞の非対応現象について日中指示詞の指示機能から検討を試みるものである。

2.1 節では呂叔湘（1982，1985，1990）の観点を支持し、その観点に沿って“这/那”の指示機能の虚化現象について述べ、それによって生じる指示詞“这/那”の指示機能がほかの機能へ拡張する場合、“这/那”は 2 種類の機能を持つという仮説を立てる。次節では非現場指示の日中指示詞が対応していない例を示しながら、多方面から考察する。

2.2 節では両言語について、接続機能を持つ指示詞の虚化する程度の差異によって、生じた非

対応現象を論じる。つまり、「それで」「それから」のような2語以上から成り立っている接続機能と指示機能を持つ指示詞とその2類の機能を持つ “这/那”の接続機能および指示機能を比較する。これらの機能のずれから日中の接続機能を持つ指示詞が対応できない要因を見つけ出す。2.3節では同じ程度を示す指示詞「コンナ・ソンナ・アンナ」と“这样(zhè yàng) /这么样(zhè me yàng)/这么着(zhè me zhe)/那样(nà yàng) /那么样 nà me yàng)/ 那么着(nà me zhe)”の対応していない例から見た両言語の程度を示す指示詞の非対応の原因を検討する。すなわち、“这样”などは指示機能が低下し、具体的に「何かを指す」というより、副詞のような働きを果たす場合、ほぼ日本語の形容詞、副詞、擬音語、擬声語に翻訳される。本来同じ体系に属する両言語の程度を示す指示詞ではあるが、指示機能がほとんど消失したか、ある程度残されているかによって、「コンナ・ソンナ・アンナ」と対応できるかどうかの結果が異なる。

2.4節と2.5節では同格指示と同格指示の変形による両言語の指示詞が対応していない面から考えてみる。「PP＋“这/那” 」或いは「N1＋“这/那”」のように指示詞が人称代名詞と共起し、一度人称代名詞や人名が指し示した人物を同格指示する場合、並列関係や所属関係になり、指示詞を省略しても意味が変わらないため、指示機能が弱くなっていると考えられる。また、「N /PP/NP＋“这/那”+N」のような名詞（人称代名詞を含まれる）や名詞文とそれに後接する物事や時間などが同格関係の場合、指示詞が物事や時間を指す同格指示の変形は、同格指示の働きと同様に、指示機能が弱くなり、指示詞は省略できる。それらの用例がそれぞれどのように翻訳されているかを観察しながら、同格指示と同格指示の変形という枠組みで「コ・ソ・ア」系指示詞と“这/那”の対応できない原因を探る。

2.6節と2.7節は「コ・ソ・ア」系指示詞の「観念指示」と「絶対指示」用法に存在している日中指示詞の非対応現象に着目し、分析を行う。中国語では日本語の「観念指示」と「絶対指示」用法は正式な指示用法として定義されていないが、その用法の例文は存在する。一方、日本語では堀口（1978a, 1978b)、正保（1981）などがこの2つの用法について論じている。ここで両言語の「観念指示」と「絶対指示」の用例を採集し、それぞれの翻訳を対照する。その結果によって、日中の「観念指示」と「絶対指示」のずれが見えてくるはずである。また、田口（2011）を踏まえ、時間を示す表現の差異から、「絶対指示」の非対応を論じる。

2.8 節は特定指示（individual)、総称的な指示（generic）という側面から指示詞の指示機能は弱まり、総合的なマーカーとして虚化されている現象を述べ、指示詞の標識と不定標識の働きから「“这/那”＋ NumCL＋NP」の構文を解釈し、その中の日中指示詞の非対応を検討する。2.9節は指示詞が時間を指し示す場合、アスペクトとテンスと関係があれば、両言語の指示詞の使用状況が異なるという実例から、「コ・ソ・ア」系指示詞が“这/那”と対応していない原因を究明できると予測し、検討を加えたものである。

第3章は日中指示詞の省略から見た両言語の指示詞の用法に関する異同を分析するものである。3.1 節では日本語の指示詞の省略表現に関する先行研究を整理し、そのうちの代表的な馬場（2006)、佐久間（1992)、庵（2007)、長澤（2008）の意見を取り上げながら、省略率が高い指示詞の共通性をまとめる。

a. 指示詞の省略率の違いから指示詞の省略可能性に影響する文脈的な要因が見られる。

b.「ソ」系指示詞を含む「そのため」「そのうえ」「そのかわり」は省略率が低いが、「それなのに」はわりに高い。省略率は指示機能との関係の度合いが強いか弱いかと関わる。

c.「この N は型」「この N が型」「その N は型」「その N が型」の省略率の違いから、日本語文で指示詞を省略しやすいのは、主に指示対象の顕著さが低い場合と指示対象が同定しやすい場合である。

3.2 節では中国語の省略表現についての資料を概観し、代表的な研究である马建忠(1989)、王力（1959）、邵敬敏（1991）、付艳丽（2007）に基づき、指示詞が省略される原因をまとめる。中国語文では習慣的に省略するケースが多く、そのうち最も多いのは代替用法の習慣的省略、数量詞の習慣的省略である。指示詞は主に指示と代替の 2 つの機能があるため、代替用法の習慣的省略は直接指示詞の省略に関わるだろう。中国語の指示詞が省略できる例文の文体からみると会話文で使用していることが多く、ほぼ前文の内容を照応し受け止めるために使用される。そして、前文と後文の関係によって、指示詞を省略しても差し支えないし、省略した指示詞を補った後でも、全文の意味は変わらない。

3.3 節では両言語の対訳作品から抽出した例を対照しながら、日中指示詞が訳文で無標になる場合の指示詞が省略された原因を探る。抽出した原文の「コ・ソ・ア」系指示詞は物事を指す「コレ・ソレ・アレ」、属性を示す「コンナ・ソンナ・アンナ」、様態を示す「コウ・ソウ・アウ」、名詞を修飾する「コノ・ソノ・アノ」に分け、それぞれの翻訳文の前文と後文の構造を分析し、マーカーする機能を持つ語素、指示機能の低下など指示詞の省略と関わる諸要因が文に存在しているかどうかを考察する。また、後方照応指示・「前指」において、指示詞が後の内容を導く場合、後文の内容と長さによって、両言語の省略できる範囲が変わってくる現象も検討してみる。一方、抽出した原文の“这/那”は上述した日本語の指示詞と同じ方法で 4 つのパターンに分け、語素から文の構造まで分析し、指示詞と等価的（焦点化させる機能を持つ）なものがあるかどうか、“这/那”の指示機能が弱化しているかどうかを検討することによって、無標になった一因を見出だす。そして、話し手と聞き手の共有知識に関わる場合、生じた省略現象も検討範囲に入る。

本論文の第二部は、第 4 章と第 5 章からなっている。第二部では、日中指示詞の照応指示用法を重点に置き、翻訳された指示詞の対応状況を分析する（本論文は非現場指示を研究対象としているが、観念指示と絶対指示用法は “这/那”の正式な指示用法範疇に括られていないため、照応指示用法のみとする)。

第 4 章では日本語の前方照応指示と後方照応指示用法が中国語の指示詞“这/那”に翻訳された場合、指示用法の対応、指示機能の等価性、指示詞を用いる短文の構造、指示詞の形式における対応を表面的な説明に止まらず、照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞と“这/那”との対応関係から立体的に捉えようとするものである。

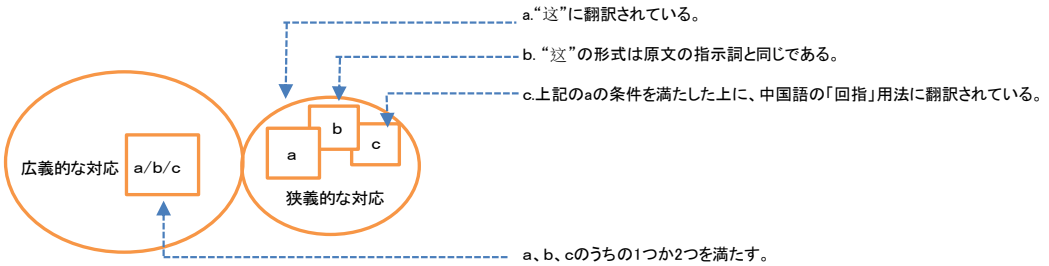
4.1 節では前方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞を指示対象によって、6 種に分類し（2 研究方法および研究内容を参照）、日中対訳作品から抽出した該当例をそれぞれ中国語の近称指示とどんな対応関係を持つか、どんな条件で対応できるかを検討する。また、日本語指示詞の近称、中称、遠称指示が中国指示詞の近称指示に翻訳されている原因を見つけ出す。さらに、近称の「コ」、中称の「ソ」、遠称の「ア」が近称の“这”に翻訳されている場合、

a. “这” に翻訳されている。

b. “这”の形式は原文の指示詞と同じである（つまり原文と訳文の指示詞が指している対象が同一で、「Dem+X」の形で現れる場合、X の品詞も原文と訳文で一致する）。

d. 上記の a の条件を満たした上に、中国語の「回指」用法に翻訳されている。

【図 0-3】で示しているように狭義的な対応と広義的な対応関係という 2 つの枠組みで考察する。4.2 節では前方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞が中国語の遠称指示“那” に翻訳された例を対象に、日本語の近称、中称、遠称指示がそれぞれ中国語の遠称指示と対応しやすい条件を検討する。その対応関係も狭義的な対応と広義的な対応関係に分けて見ていく。また 4.1 節と同様の手順で、原文に現れている前方照応指示詞を 6 種に分け、該当する例がなければ、その種を省略する。



【図 0-3】広義的な対応と狭義的な対応

4.3節では後方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞が“这” に翻訳された用例に絞って、日本語の後方照応指示として用いられた近称、中称、遠称指示が中国語の近称指示とどのように対応しているかを考察する。上述した4.1節の手順と同様に、広義的な対応（「コ・ソ・ア」系指示詞は“这” に翻訳されている）と狭義的な対応（a.“这”に翻訳されている。b.“这”の形式は原文の指示詞と同じである。c.上記の a の条件を満たした上に、中国語の「前指」用法に翻訳されている）に分けて分析する。また、指示詞と指示内容が直接引用関係か、あるいはそうではないかによって、対応する確率が遥かに異なるため、それに重点を置き考察を試みる。そして、高革萍（2002 c）が述べていた「“这”と指示対象との間、余計な表現が表れず、ストレートな指示のしかたによって“这”の指示性が明確にされる。…（中略）… “这”の後方照応性が失われ、前方照応指示性が表れる」と異なる例があるため、高説の妥当性を再検討する。4.4節は後方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞が“那” に翻訳された用例を対象とする。対照の方法は前節と同様で、後方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞が“那”と対応できる条件を究明する。また、呂叔湘（1985）が中国語の指示詞“那”は「前指」用法がないと述べているが、“那”には「回指」がある説を支持している研究が近年数篇現れている（杨玉玲(2010)など）。本論文では後方照応指示の日本語指示詞と“那”の対応状況から、“那”には「回指」があるかどうかを明らかにする。つまり、「コ・ソ・ア」系指示詞は「回指」の“那”に翻訳された用例があるかどうかを調べる。

第 5 章は第 4 章に引き続き、中日指示詞の対照という角度から中国語の指示詞“这/那”が日

本語の「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳された例に着目し、中国語の指示詞用法の「回指」、「前指」用法に重点を置き、両言語の指示詞の異同を検討するものである。

5.1節と5.2節では呂叔湘（1985）が定義した「回指」と「前指」に従い、それに属す“这”の用例を中日対訳作品から抽出し、“这”の指示対象によって大きく①の“这 1（「人・事物」）”②“这 2（「場所」）”③“这 3（「時間」）”④“这 4（「修飾」）”の4つの項目に分け、それぞれ日本語の指示詞と対応している場合、文の構造・指示機能・意味の3つの側面から観察し、主たる日中指示詞の類似点と相違点を検討していく。第4章と同じく、「広義的な対応」と「狭義的な対応」に分け、“这”が「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳されている用例を分析する。また、「コ・ソ・ア」系指示詞とは異なり、中国語の“这”は「“这”＋…」の形で用いられるが、裸の“这”もよく使用される。したがって、指示詞は文中での位置の変動、指示機能の変化も起こりうるので、本章では、裸の“这”と「“这”＋…」に分類したうえで、「“这”＋…」の後につく品詞によって名詞・動詞・数量詞に分けて述べる。また、胡俊（2006）は日本語の指示詞は「人称代名詞の機能」があるが、中国語の指示詞にはないため、そのような機能を持つ日本語の指示詞が中国語の人称代名詞に対応していると論じている。しかし、中国語の“这人/那人”あるいは「“这/那”＋N1」は人物を指示することができ、人称代名詞と共に“我这人/他那人”として人物を指すこともできる。そこで、胡俊（2006）の説に疑問を感じ、その説の妥当性を探るために、「“这 1”＋（NumCL）＋N1」と「PP+“这”+（NumCL）+N1」の形で人物を指す“这”を取り出し、中日指示詞の「人称代名詞の機能」の差異を再検討する。特に、“这”は「ア」系指示詞に翻訳された例に焦点を置き、言語の認識的な側面から話し手の領域と聞き手の領域が指示詞の選択に与える影響を論じる。

5.3 節では「回指」“那”の用例を中日対訳作品から採集し、“这”と同様に“那”の指示対象によって①の“那1（「人・事物」）”②“那2（「場所」）”③“那3（「時間」）”④“那4（「修飾」）”と分類したうえで、日本語の指示詞に翻訳された際に、それぞれ近称・中称・遠称指示詞とどのように対応関係（「広義的な対応」と「狭義的な対応」を意味する）を持つかを観察する。分析の手順は5.1節の「回指」“这”と同様である。第4章では日本語の指示詞が「前指」用法の“那”に翻訳された例を調査した。結果は4例のみで、全て特殊な例である。ここで、呂叔湘（1985）の指示詞“那”には「前指」用法がない説を支持し、指示詞“那”の「回指」用法のみを対象とする。

本論文の第三部は、現在中国で行われている日本語教育で第一外国語の教科書として用いられている《新编日语》の指示詞を調査する第6章と、第二外国語の教科書として使用されている《标准日本语》の指示詞を調査する第7章となっている。

第6章では《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》における用法別の指示詞の全数調査を行う。6.1節と6.2節ではその教科書を選ぶ理由と調査する目的を述べ、調査方法を示す。《新编日语》を構成した6項目の「語彙」「前文」「会話」「解説」「読解文」「練習」から指示詞を用いた例を採集し、指示詞の用法を「現場指示・文脈指示・観念指示」に分け、各項目の中に各用法の指示詞の提示率を統計する。また、教科書から抽出した「会話文・地の文・独話文」についても観察する。場面設定や、文脈があるかどうかを確認しながら、1 冊ずつ指示詞の提示状況を把握した上で、統計し、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを合わせて分析する。

6.3 節では《新编日语》Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの各冊を通して具体的な分析と比較の内容を述べるものである。まず各冊の文法として提示されている指示詞を指示用法別に挙げながら分析する。それから、1 冊の中の各課では「単語」から「練習問題」の 6 項目で提示された指示詞を表で算出する。それによって、1 冊に現れている指示詞の数がわかる。また、各項目における指示詞の分布も把握できるし、各課ずつの変化も一目瞭然である。「単語」以外に抽出した指示詞の例に文脈や場面設定がないケースが存在するため、指示用法別統計図に示したように「判断できない」というパターンと上述した 3 つの指示用法を分けて調べる。さらに、提示率が高い順に教科書に現れた全ての指示詞を指示用法別に分けて詳細に統計する。それによって、1 冊にどの指示詞が最も多く提示されているかを明らかにし、当該指示詞はどの項目でよく現れているかもわかる。そして、当該指示詞のどの指示用法が多く用いられているかも示すことができる。

6.4 節では《新编日语》Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの 4 冊を通して、各指示詞の提示率、提示順、指示用法の占める比率を総合的に比較する。これは本調査の特徴の一つで、1 種類の教材を 1 シリーズ通して分析することによって、この教材の導入、提示、練習問題の設定という流れと、初級、中級、上級のレベルに応じて、どの指示詞、指示用法をメインに提出しているかという編集者の意図をより客観的に示すことができる。

6.5 節と 6.6 節は、《新编日语》Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの 4 冊の調査、分析をまとめ、教科書の問題点に基づく日本語教育への提案と今後の課題を述べるものである。《新编日语》の用法別の指示詞の全数調査で明らかになった問題点は学習者の指示詞の誤用に関連があるかを分析し、その結果を日本語教材作成のために、今後どのように生かすかを検討する。

第 7 章は第 6 章の調査を補うため、独学で日本語を学ぶ学習者と教室で第二外国語として学ぶ学習者の教科書である《标准日本语初级(上.下)中级(上.下)》における用法別の指示詞の全数調査を行う。7.1 節と 7.2 節では第 6 章と同じく、調査の目的、調査の方法を論じる。《标准日本语》の構造に沿って、「単語」「会話」「文法説明」「応用文」「練習問題」の 5 つの項目に分ける。第 6 章の調査と同様にその 5 つの項目から全ての指示詞の用例を採集し、指示用法と用例の文体を分けて考察する。このような作業を各冊で行い、1 冊ずつの調査と比較してから、初級(上.下)中級(上.下)4 冊の結果を合わせて、全体的に見ていく。

7.3 節では《标准日本语》の初級(上.下)と中級(上.下)の具体的な分析と比較の内容を述べる。文法解説で提示した指示用法の実例を取り上げながら考察していく。また各冊の第 1 課から最後の課まで、表れている指示詞を項目別に統計する。どの課に指示詞がよく用いられているか、どの項目に指示詞が多いかを正確に把握することができる。《新编日语》と同じく 3 つの指示用法と判断できないものとに分け、4 つのパターンで確率を算出し、図で示す。そして、以上の調査した内容を指示詞の提示率が高い順で示し、その指示詞が各項目に出現している数と使用された各指示用法の数を明確に示し、確率を求める。そのステップによって、文法として提示された指示用法は会話文と地の文でいかに応用されているか、適切な練習問題を設けているかがわかるはずである。また、文法として提示されない指示用法、あるいは詳しく説明されていない指示用法は応用文や会話文で頻繁に用いられた場合、自然習得することも考えられるため、上述の作業を通して、検討をする。

7.4節では《标准日本语》で提示された指示詞をシリーズで比較し、指示詞の提示順と提示率および用いられた各指示用法の総合的な数を比べる。《新编日语》と同じように、1種の教材をシリーズで調査を行い、各冊の分析と比較すると同時に、初級の2冊と中級の2冊を合わせて検討することによって、調査する教科書での指示詞の提示状況を全て把握できる。

7.5節と7.6節は、《标准日本语》の初级(上.下)中级(上.下)4冊の調査結果をまとめたうえで、その教科書の問題点を見出だし、現在の教科書で日本語を教える際に、教師側がどんな教授法を実践すべきか、どんな副教材を選択し、当該教科書の不足点を補えばよいか、留意点を述べる。これらの調査結果は、新たな教材作成に生かされ、よりよい日本語教科書の作成に寄与するものである。

以上、本論文の構成に沿って、各章の研究方法・内容について概観した。

5 調査資料

本研究で用いた用例資料を下記に掲げる。例文の作品名について、論文中では次の〔 〕《 》で示したように、全て略称で示す。

【日中対訳作品（原文が日本語の作品)】

〔学歴〕「学歴詐称」松村比呂美《学历》《谎报学历》石月译《日语知识》2002，第1期
〔時代〕「夢の時代」星新一《时代》《梦幻时代》桑风平译《日语知识》2002，第2期
〔焼き〕「人形焼き」阿刀田高《烤饼》《人形烤饼》石月译《日语知识》2002，第3期
〔誘拐〕「誘拐」阿刀田高《绑架》《绑架》石月译《日语知识》2002，第4期
〔星〕「双子の星 ―（上)」宮沢賢治《星》《双子星 ―（上)》石月译《日语知识》2002，第5期
〔リオン〕「リオン」星新一《栗翁》《栗翁》黄德诚译《日语知识》2002，第7期
〔死〕「突然の死」高橋伸忠《猝死》《猝死》张林译《日语知识》2002，第8期
〔牛〕「牛」矢口以文《牛》《牛》罗丽杰译《日语知识》2002，第8期
〔時計〕「耕耘部の時計」宮沢賢治《挂钟》《耕耘部的挂钟》大戎译《日语知识》2002，第9期
〔カッコウ〕「カッコウ」矢口以文《布谷鸟》《布谷鸟》罗丽杰译《日语知识》2002，第9期
〔もったいない〕「もったいない」斎藤肇《可惜》《太可惜了》苏讯江译《日语知识》2002，第10期
〔女神上〕「女神（上)」星新一《女神上》《女神（上)》苏讯江译《日语知识》2002，第11期
〔女神下〕「女神（下)」星新一《女神下》《女神（下)》苏讯江译《日语知识》2002，第12期
〔今日〕「今日は何の日？」湯川聖司《今天》《今天是什么日子？》卜翔译《日语知识》2003，第1期
〔生きる〕「ゆっくり生きる」矢口以文《生活》《轻松地生活》刘军译《日语知识》2003，第1期
〔リス〕「リス」矢口以文《松鼠》《松鼠》霈煖译《日语知识》2003，第2期
〔サマー〕「インディアン·サマー」矢口以文《夏天》《印第安人的夏天》刘军译《日语知识》2003，第2期
〔医者〕「黒ずくめの医者」柳迫国広《医生》《黑衣医生》王保国译《日语知识》2003，第2期

〔詩〕「三月の詩」矢口以文《诗》《三月的诗》霭煖译《日语知识》2003，第 3 期
〔タクシー〕「個人タクシー」星新一《出租车》《私人出租车》苏讯江译《日语知识》2003，第 3 期
〔子〕「笑われた子」横光利一《男孩》《被耻笑的男孩》李炜译《日语知识》2003，第 4 期
〔力〕「力」松岡たつる《能力》《能力》王保国译《日语知识》2003，第 5 期
〔葉書〕「字のない葉書」向田邦子《明信片》《没字的明信片》何况译《日语知识》2003，第 6 期
〔ゆり〕「６月のゆり」矢口以文《百合》《六月的百合》霭煖译《日语知识》2003，第 6 期
〔相談室〕「こどもの相談室」伊坂重蔵《谈心室》《儿童谈心室》王保国译《日语知识》2003，第 7 期
〔中国の子供〕「詩を書く中国の子供たち」矢口以文《中国孩子》《作诗的中国孩子们》霭煖译《日语知识》2003，第 7 期
〔洗い方〕「セーターの洗い方」伊藤充子《洗涤方法》《毛衣的洗涤方法》霭煖译《日语知识》2003，第 8 期
〔山猫（一)〕「どんぐりと山猫（一)」宮沢賢治《山猫（一)》《橡子与山猫（一)》刘青梅译《日语知识》2003，第 9 期
〔山猫（二)〕「どんぐりと山猫（二)」宮沢賢治《山猫（二)》《橡子与山猫（二)》刘青梅译《日语知识》2003，第 10 期
〔不幸〕「不幸」渋谷良一《不幸》《不幸》王保国译《日语知识》2003，第 11 期
〔爆弾〕「のろわしい原子爆弾」堀尾青史《原子弹》《万恶的原子弹》石工译《日语知识》2005，第 8 期
〔電池（上)〕「不満電池（上)」大原久通《电池（上)》《不满电池（上)》石月译《日语知识》2005，第 9 期
〔電池（下)〕「不満電池（下)」大原久通《电池（下)》《不满电池（下)》石月译《日语知识》2005，第 10 期
〔女〕「追われる女」井上昭之《女人》《被追的女人》刘唱梅译《日语知识》2005，第 11 期
〔花〕「花を置く人」井川一太郎《花》《放花的人》石月译《日语知识》2005，第 12 期
〔財布〕「財布」広居歩樹《钱包》《钱包》石月译《日语知识》2006，第 1 期
〔プロ〕「プロ」木塚百川《专业》《专业》石月译《日语知识》2006，第 2 期
〔ミスコン〕「ミスコン」樗大聡《选美》《选美比赛》王秋妮译《日语知识》2006，第 4 期
〔値段〕「時の値段」家田満理《价格》《时间的价格》王保国译《日语知识》2006，第 8 期
〔眠〕「眠らせて」菅原裕二郎《睡觉》《让猫睡觉》高晔译《日语知识》2006，第 8 期
〔コンビニ〕「コンビニ」衣畑秀樹《店》《便利店》高晔译《日语知识》2006，第 9 期
〔父と娘〕「父と娘の物語」勢川びき《故事》《父亲和女儿的故事》王保国译《日语知识》2006，第 9 期
〔焼き鳥屋〕「満員御礼の焼き鳥屋」工藤正樹《烤鸡肉店》《客满的烤鸡肉店》石月译《日语知识》2006，第 10 期
〔お土産〕「おみやげ」新星一《礼物》《礼物》荣淼译《日语知识》2006，第 11 期
〔恩〕「恩返し」矛先盾一《报恩》《报恩》石月译《日语知识》2006，第 12 期

〔サラダ〕「幸せサラダ」久保田乃里子《沙拉》《幸福的沙拉》孙英译《日语知识》2009，第 2 期
〔男〕「ずれてる男」稲葉たえみ《男子》《赶不上点儿的男子》小叶译《日语知识》2009，第 3 期
〔泥棒〕「三浦家の泥棒」遠藤周作《小偷》《三浦家的小偷》孙英译《日语知识》2009，第 4 期
〔桜〕「桜の咲く頃」紫藤小夜子《樱花》《樱花开放的时候》石月译《日语知识》2009，第 5 期
〔祭り〕「木の祭り」新美南吉《节日》《一棵树的节日》芦荟译《日语知识》2009，第 6 期
〔草〕「海の草」横光利一《草》《海草》杜娜译《日语知识》2009，第 7 期
〔士〕「同行の士」原カバン《士》《爱好相同之士》石月译《日语知识》2009，第 9 期
〔恋〕「恋」渡辺温《恋爱》《恋爱》牟海晶译《日语知识》2009，第 11 期
〔ストーカー〕「ストーカー」森江賢二《跟踪狂》《跟踪狂》张汝军 ，崔凤岐译《日语知识》2010，第 7 期
〔魂〕「魂の存在証明」一田和樹《灵魂》《灵魂的存在证明》刘唱梅译《日语知识》2010，第 8 期
〔夫〕「日本の夫のジレンマ」土屋賢二《男人》《日本男人的尴尬》张兰译《日语知识》2010，第 9 期
〔対話〕「沈黙の対話」赤川次郎《对话》《沉默的对话》荣淼译《日语知识》2010，第 10 期
〔ウサギ〕「ウサギとカメとキツネ」影洋一《兔子》《兔子乌龟和狐狸》石月译《日语知识》2010，第 11 期
〔あり〕「ありときのこ」宮沢賢治《蚂蚁》《蚂蚁和蘑菇》芦荟译《日语知识》2010，第 12 期
〔夢〕「正夢」夢野久《梦》《灵验的梦》刘唱梅译《日语知识》2012，第 2 期

【日中対訳コーパス】作品名一覧
〔あした〕『あした来る人』井上靖《明日》《情系明天》林少华译
〔越〕『越前竹人形』水上勉《越》《越前竹偶》何平译
〔黒〕『黒い雨』井伏鱒二《黑》《黑雨》宋再新译
〔砂〕『砂の女』安部公房《砂》《砂女》叶谓渠译
〔森〕『ノルウェイの森』村上春樹《森》《挪威的森林》林少华译
〔坊〕『坊ちゃん』夏目漱石《哥》《哥儿》刘振赢译
〔布〕『布団』田山花袋《棉》《棉被》胡毓文译
〔雁〕『雁の寺』水上勉《雁》《雁寺》何平译
〔高〕『高野聖』泉鏡花《高野》《高野圣僧》文洁若译
〔野〕『野火』大岡昇平《野火》《野火》王杞元译
〔青春〕『青春の蹉跌』石川達三《青春》《青春的蹉跌》金中译
〔死者〕『死者の奢リ』大江健三郎《死者》《死者的奢华》李庆国译
〔斜陽〕『斜陽』太宰治《斜阳》《斜阳》张家林译
〔痴人〕『痴人の愛』谷崎潤一郎《痴人》《痴人之爱》郭来舜译
〔雪国〕『雪国』川端康成《雪国》《雪国》叶谓渠译

【日中対訳作品（原文が中国語の作品)】
《插》《插队的故事》史铁生〔大地〕『遥かなる大地』 山口守

《盖》《盖棺》陈建功〔棺〕『棺を蓋いて』 岸陽子
《丹》《丹凤眼》陈建功〔鳳〕『鳳凰の眼』 不明
《辘轳》《辘轳把儿胡同 9 号》陈建功〔轆轤〕『轆轤把胡同九号』 不明
《女人》《关于女人》谢冰心〔女〕『女の人について』 竹内実
《人形》《活动变人形》王蒙〔応報〕『応報』 林芳
《红》《红高粱》莫言〔高粱〕『赤い高粱』 井口晃
《金》《金光大道》浩然〔道〕『輝ける道』 神崎勇夫（ほか）
《家》《家》巴金 〔家〕『家』 飯塚朗
《梦》《轮椅上的梦》张海迪 〔夢〕『車椅子の上の夢』 飯塚朗
《呐》《呐喊》鲁迅〔吶〕『吶喊』 竹内好
《彷》《彷徨》鲁迅〔彷〕『彷徨』 竹内好
《歌》《青春之歌》杨沫 〔歌〕『青春の歌』島田政雄・三好一
《倾》《倾城之恋》张爱玲 〔傾〕『傾城の恋』池上貞子
《棋》《棋王》阿城〔棋〕『チャンピオン』立間祥介
《中年》《人到中年》谌荣 ①『北京の女医』〔①女医〕①田村年起
②『人、中年に到るや』〔②中年〕②林芳
《人啊》《人啊人》戴厚英 〔人間〕『ああ、人間よ』 大石智良
《上海》《上海的早晨》周而复〔上海〕『上海の朝』 不明
《霜》《霜叶红似二月花》矛盾〔霜〕『霜葉紅似二月花』 立間祥介
《鲍》《小鲍庄》王安〔鮑〕『小鮑荘』佐伯慶子
《骆驼》《骆驼祥子》老舍 〔駱駝〕『駱駝祥子』 立間祥介
《钟》《钟鼓楼》刘心武 〔鐘〕『鐘鼓楼』 苏琦
《天云山》《天云山传奇》鲁彦周〔天雲山〕『天雲山伝奇』田畑佐和子

【デジタル資料】
『日中対訳コーパス』北京日本語学センター 2002
《CCL 語料庫》北京大学漢語語言学研究中心 2005
現代日本語書き言葉均衡コーパス 2009
聞蔵 2012 年 1 月～2013 年 1 月

【日本語教科書】
《新编日语Ⅰ》上海外語教育出版社（2009）
《新编日语Ⅱ》上海外語教育出版社（2007）
《新编日语Ⅲ》上海外語教育出版社（2008）
《新编日语Ⅳ》上海外語教育出版社（2008）
《中日交流标准日本语初级上》人民教育出版社（2005）
《中日交流标准日本语初级下》人民教育出版社（2005）
《中日交流标准日本语中级上》人民教育出版社（2008）

《中日交流标准日本语中级下》人民教育出版社（2008）
『みんなの日本語』初級ⅠⅡ　スリーエーネットワーク（1998）
『日本語』第１冊　凡人社（1994）
『日本語』第２冊　凡人社（1994）
『日本語』第３冊　凡人社（1998）

【第一部】先行研究および日中指示詞の非対応・省略

第一部ではまず、日本語と中国語の指示詞の先行研究をそれぞれ概観し、いままでの日中指示詞の対照研究をまとめたうえで、本研究の位置づけを述べる。次に、日本語の指示詞と中国語の指示詞の相違点を究明するため、中国語の指示詞は「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳されていない例を取り上げ、両言語の指示詞が対応していない表現と指示詞の省略表現の 2 つの角度から考察する。

第 1 章　日本語と中国語の指示詞についての概観

指示詞の指示機能は、一般的に指し示す対象が現場に存在する場合と現場に存在していない場合の 2 種分類するが、学者によっては、さらに細分することもあり、その名称も各学者で異なる。本章ではまず、先行研究が唱えた日本語と中国語の指示詞の名称と領域をまとめ、そのうちの代表的な指示用法を取り上げながら、本研究の立場を述べる。また、いままでの日中指示詞の対照研究の成果を踏まえ、本研究の枠組みを設定する。

1.1 日本語の指示詞の名称と領域について

日本語の指示詞「コ・ソ・ア・ド」を命名したのは佐久間（1936）である。佐久間（1936）は「コ・ソ・ア・ド」を「近称・中称・遠称・不定称」と規定した上で指示代名詞を人称代名詞との関わりの中で話し手所属のものは「コ」、相手所属のものは「ソ」、他のものは「ア」という縄張りの概念であると示している。三上（1955）は「ア・コ」と「ソ・コ」の 2 種 2 項対立の指示関係について論じている。正保（1981）は 3 項対立の考えと 2 種 2 項対立の考え方の中間的立場をとり、「ソ」系指示詞を「弛緩したソ」と「緊張したソ」と捉えている。神尾（1990）は情報の内容を聞き手や話し手にとっての遠近で捉え、話し手や聞き手の縄張りの内と外によって「コ・ソ・ア」の領域を設定している。高崎みどり（1990）は、指示詞はただ一語を指すだけではなく、もっと広い範囲を指し示すため、指示表現であると主張している。田窪・金水（1990a，1990b，1996b）では談話管理理論の視点から指示詞を述べ、話者が複数の心的領域をＤ－領域（直接経験領域）、Ｉ－領域（間接経験領域）と設定し、指示詞はそれらの中に登録された要素を探して指示すると論述している。岡崎（2010）は田窪・金水（1996b）の談話管理理論を援用し、心的領域の「談話情報領域」と「長期記憶領域」を定め、「談話情報領域」は「対話中の発話内容・推論・仮想などによる要素が一時的に記憶される領域」であると述べている。その上で、「照応用法及び感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現は、現代語においては、すべて談話情報領域内に対象となる要素をもつ指示である」と記述している。

先行研究において、指示詞「コ・ソ・ア」の用法の名称はまだ統一されていない。一般的には現場の事物を直接指し示す用法と、話の中に登場する人や事を指す用法があるとされる。文脈指示用法の存在を最初に意識したのも佐久間（1951）からだと考えられる。しかし、佐久間（1951）では「文脈指示」という用語を用いず、代わりに、「前に述べていた事柄や品物をさす」と記述している。三上（1955）は文脈指示用法を「文脈承前の用法」と言っている。久野（1973）は現場

の事物を指す指示詞を眼前指示的用法、談話上の事物が対象とする指示詞を文脈指示詞的用法と規定し、堀口（1978a, 1978b）は、「コ・ソ・ア」系指示詞が現場指示と文脈指示に用いられるに留まらず、観念指示と絶対指示という用法もあると主張している。また、黒田（1979）は、指示詞代名詞には独立的用法と照応的用法の区別を立てることができると論じている。林（1983）は、指示詞はメタ指示と内容指示にわけ、その中の内容指示には現場指示と文脈指示用法があると定義している。神尾（1990）は、直示的用法と文脈指示的用法に大別している。その後、現場指示と文脈指示については、金水（1990）は「直示」と「非直示」という用語を用いているが、田窪（2010）では「眼前指示」と「非眼前指示」の語が用いられている。以下にその論説の中の主たるものを取り上げ、まとめてみる。

久野暲（1973）の捉え方

久野（1973）では、日本語の指示詞を「目に見えるものを指で指し示す際に用いられる」の「眼前指示代名詞」と「目に見えるものを指すのではなく文中（または会話中）に先出した人・物・時・場所・様式などに言及する際用いられる代名詞」である「文脈指示代名詞」とに分けている。「コ・ソ・ア」系指示詞の用法を以下のように結論づけている。

> コ-系列：その事物が目前にあるかのように生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示代名詞的色彩が強く、しかも話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない。
>
> ソ-系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。
>
> ア- 系列：その代名詞の実世界における指示対象を話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。
>
> （久野 1973：69）

黒田成幸（1979）の捉え方

黒田（1979）は、指示詞には通常眼前の事物を指す独立的用法と文脈に依存する照応的用法があると述べている。黒田は久野（1973）の「ア系列―話し手・聞き手ともによく知っている」「ソ系列―話し手または聞き手が対象をよく知っていない」という定義から「聞き手」を省き、何をよく知っているかという視点から考察し、「話し手が直接的知識として知っている」「話し手が概念的知識として知っている」に換えた。これによって、黒田の論点では久野（1973）の論文の例文を説明できるが、久野の論点では黒田が挙げている例文を説明できない。以下の例文は黒田が久野から例を少し修正して借用したものである。それを用いて「ソ」系「ア」系の使い分けについて論じ、「話し手は対象をよく知っているが、聞き手はよく知っていない場合には、対話と独り言で、指示詞の用法の平行性がくずれる」と唱えている。

(1) 先週神田で火事があったが、あの火事で学生が二人死んだのか。（独り言）

(2)話し手「先週神田で火事がありました。その火事で学生が二人死にました」
聞き手「その火事のことは新聞で読みました。」
（黒田 1979：100、□は黒田による）

例(1)のように黒田（1979）は独り言では「ア」系が使用され、例(2)のように話し手は対象を直接的知識内で認識しても、聞き手はそうではない場合、話し手は聞き手と同じ立場の概念的知識で「ソ」系指示詞を使う。つまり「対話における照応的用法においても、指示詞ソ・アの選択の本質的な要因は、話し手及び聞き手が対象を『よく知っているかいないか』ということではなく、話し手が、指示詞使用の場合において、対象を概念的知識の対象として指向するか、直接的知識の対象として指向するか、ということにあるのである」と論及している。

堀口和吉（1978a，1978b）の捉え方

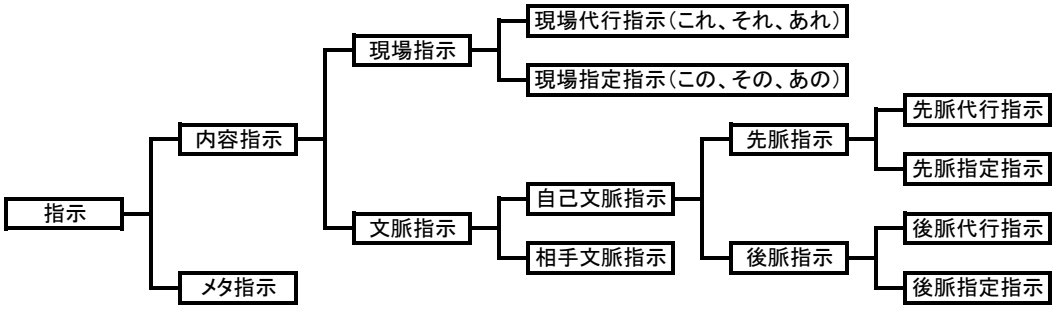
堀口（1978a，1978b）による指示詞の用法は現場指示・文脈指示・観念対象指示・絶対指示・知覚対象指示の 5 種類に分けられる。現場指示用法とは「基本的には、対話・講演など話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において、多くの場合身ぶり・手ぶり・表情などの表現行為を伴いつつ、話し手が現に知覚していて聞き手にも知覚されるはずだとする事物を対象として、コ・ソ・ア系の語を用いて指示する用法である」と述べている。文脈指示用法とは「対話などにおいて、相手の表現した内容を指示の対象にするものと、対話などに限らず文章にも内言・独白にも用いるもので、自分の表現の内容を指示の対象にするものと、二つがある」と論じている。絶対指示用法とは場所に関する「『ココ・コチラ・コノ町・コノ国』などの近称で、常に話し手がその中に存在する場所を絶対的に表わす」用法と、「対話や手紙などで聞き手が特定の場合には、『ソコ・ソチラ・ソノ町・ソノ国』などの中称で、常に聞き手がその中に存在する場所を絶対的に表す」用法である。観念対象指示用法とは「自己の観念に存在する事物を他に明示することなく指示するもの」であり、「多く独白などにとどまるのであるが、対話の場面にまったく用いられないわけではない」と説明し、「知覚対象指示は、他に実態を示すことなく、自分が知覚している事物を対象とする表現である。」と定義している。

林四郎（1983）の捉え方

林（1983）は指示詞を「内容指示」と「メタ指示」とに分け、さらに「内容指示」を「現場指示」と「文脈指示」に分類している。現場指示は「『これを見てください。』や『この本を見てください。』のような発話者が身辺に指すべき現物を持っている場合」に用いる。文脈指示は「文章の中では、指示の対象が文脈の中にある」と述べている。また、文脈指示では、「指すものが先行文脈の中にある場合」を先行文脈指示、「指すものが後続文脈の中にある場合」を後行文脈指示と呼んでいる。「メタ指示」は、「先行にせよ後続にせよ、文脈のどの部分かを述べる内容でなく、述べる行為として目立たせ、その行為を指示することをいう」とされている。

林（1983）は以下の図で示したように指示詞を分類している。

【表 1-1】林（1983）の指示詞の分類



（林 1983：5 の表を一部修正）

高崎みどり（1990）の捉え方

高崎（1990）は従来の、指示詞の定義の枠を超えて、新たな視点から指示詞を考察している。「コノ・ソノ」などについて、「単に指示する内容と一対一の関係で対応している場合ばかりではない、ほかの部分の文脈の影響も受けながら、文章の中で指示の働きをしている」ので、指示詞・指示語などと呼ぶより「指示表現」のほうが適当であると唱えている。

高崎は文章・談話における指示詞の機能を以下の４つにまとめている。「①指示詞は先行文や後続文の内容を該当文に反復して持ち込む機能がある。②主として内容面から、文章・談話の話題を実質的な意味のつながりとして表現する働きをしており、同時に、文章の全体的構造や段のまとまりを情報として作り上げる内的な統括機能を持っている。③指示詞は情報伝達の実質的内容を表現するというコミュニケーションにおける伝達機能を有している。④指示詞は、反復表現と省略表現、提示表現と叙述表現、応答表現とも密接に関連しあって情報内容の意味のネットワークを作り上げる。」と解説している。

田窪行則・金水敏(2000) の捉え方

田窪・金水（2000）は「ア系列は基本的に直示であり、現場、記憶のなかの直接指示できる要素とリンクされる。したがって、談話の中で呈示された属性以外の属性がアクセス可能である。これに対し、ソ系列は、基本的に談話の中で呈示され、一時的記憶領域の要素とリンクされる。アクセスされる属性は、談話の中で呈示されたもの、および、それに自明な推論を経て得られる属性のみである。」と述べ、「聞き手の知識を排する」という黒田の説をさらに発展させている。

話し手の心的領域を直示的な指示に関わる直接経験領域（D－領域）と、記述的指示に関わる間接経験領域（I－領域）と分けて、ア系列はD－領域に、ソ系列はI－領域に収まる情報を指示すると区別している。

岡﨑友子(2010) の捉え方

岡﨑(2010)は指示詞の用法を直示用法、照応用法、観念用法と三分している。直示用法の指示対象が対話の場に存在し、照応用法の指示対象が先行文脈に存在している。それらと異なって、

観念指示の指示対象は「エピソード記憶領域内にある、過去の直接経験に関わる要素」である。そして、現代語の指示詞の3項体系では、指示代名詞と指示副詞が「コ・ソ・ア」という語形で共通している用法を持ち、照応用法と直示用法は「コ・ソ」系指示詞、直示用法と観念用法はア系指示詞が用いられると解説している。照応用法と直示用法を以下のように定義している。

照応指示：対話により音声化、または書記化された（主に先行する）言語文脈内に、当該の指示表現と指示対象を共有する先行詞があるもの。
（岡崎 2010：11）

観念指示：過去の直接経験に関わる要素で、（長期的な）記憶の中に対象があるもの。（言語テキスト内に先行詞もなく、今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象もないもの）。（ibid.:12）

1.2 日本語の指示用法の捉え方

日本語の指示詞の指示用法は基本となる現場指示と非現場指示に分けたうえで、また現場指示は対立型と融合型、非現場指示は文脈指示、照応指示、限定指示、代行指示、絶対指示、観念対象指示などと分類でき、さらに、照応指示や文脈指示は前方照応指示と後方照応指示に細分できる。各種分類は着目点が異なるだけで、対象となる指示用法に大きな相違は見られない。本節では、各論説における「コ・ソ・ア」系指示詞の主たる指示用法の捉え方をまとめる。

1.2.1 現場指示

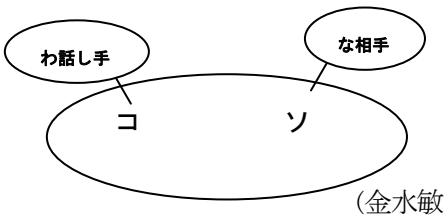
堀口（1978a, 1990）によると、現場指示とは「基本的には、対話・講演など話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において、多くの場合身ぶり・手ぶり・表情などの表現行為を伴いつつ、話し手が現に知覚していて聞き手にも知覚されるはずだとする事物を対象として、コ・ソ・ア系の語を用いて指示する用法である」と論述している。

正保（1981）は堀口の考えに沿って、現場指示に関して次のように定義した。「話し手と聞き手が存在し、しかも話題となる対象が話し手と聞き手の両方に見えるような状態で存在するというような状況である」と定義している。

現場指示の用法は対立型と融合型の二つに大きく分けられる。

対立型用法

対立型について従来の説で最も有名なものは佐久間(1941)である。図に示したように話し手と聞き手の間には一定の距離があり、異なる二空間にあって会話を進めている。



（金水敏・田窪行則（編）1992：33）

【図 1-1】対立型用法(「わ」は「われ」の略語、「な」は「なれ」の略語)

佐久間（1941）が述べている対立型を日本語教材にある用例で示すと（3）になる。

(3) A：「**それ**はあなたのふくですか。」
B：「はい、**これ**はわたしのふくです。」
A：「李さんのふくはどれですか。」
B：「李さんのふくは**あれ**です。」

（《新篇日語Ⅰ》：31 を一部修正）

(3)は現場指示用法の代表的な対立型である。話し手に近いものは「これ」で示し、聞き手に近いものを「それ」で指し、両者から遠いものは「ア」系指示詞で指示している。

以下の例（4）は場所を示す対立型の例である。

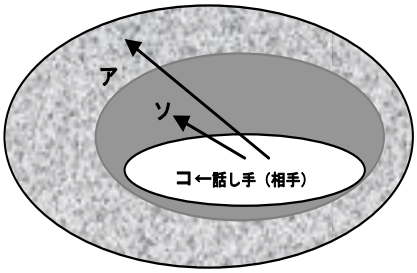
(4) （集合写真を撮る）
A：「みんな、**そこ**に集まてください。」
B：「**ここ**ですか。」
A：「**そこ**です。桜の木があるところです。」
B：「ああ、**ここ**ですね。」

（作例）

話し手 A と聞き手 B は別の位置にいて、写真を撮る話し手は自分からやや離れている場所を指すため、「そこ」で示しているが、撮られる聞き手からすれば、自分が立っている場所の近くなので、B は近称「コ」系指示詞の「ここ」を用いている。

融合型用法

融合型用法はある現場で話し手と聞き手が同じ位置にいる場合は、話し手と聞き手が同一の対象を指すのに、両者から同じぐらい近いものは「コ」、同じぐらい遠いものは「ア」、その他は「ソ」で表す。図でその関係を示すと以下のようになる。



【図 1-2】融合型用法

融合型用法として日本語教科書では（5）のような例が見られる。

（5）（話し手と聞き手が同じ場所に居る）
A：「**この**本、太郎のですか。」
B：「いいえ、**これ**は次郎のです。」
A：「じゃあ、太郎のは？」
B：「太郎の**あれ**です。」

（『日本語学入門』：140 を一部修正）

(5)は現場指示の融合型用法であり、話し手と聞き手は同じ位置にいるので、話し手 A に近い本を「この」で示し、聞き手 B にも近い本なので「これ」で指す。A と B から遠いものは「あれ」で指し示している。また、次のような用例も考えられる。

（6）A：「むこうから走ってくる車はホンダの最新デザインですか。」
B：「**あれ**はトヨタだよ。」
A：「**あれ**がトヨタなの。」
「ここに止まっている車はホンダでしょう。」
B：「ここに止まっている車はホンダです。」

（作例）

「あれ」と「ここ」の用法は現場指示の融合型用法である。話し手 A と聞き手 B は同じ位置から同じ車を見ているので、話し手が遠いと感じたトヨタに「ア」系指示詞を用いて示し、聞き手 B も遠称の「あれ」を用いている。同様に、車が止まっている場所は話し手 A からも近いので、「ここ」で表し、聞き手も「ここ」を使用している。

1.2.2　文脈指示

指示詞の研究では文脈指示を取り上げる論述が多い。久野（1973）、黒田（1979）、田中(1981)、吉田（1992）などは、指示詞の「文脈指示」とは指示対象が言語的文脈の中に存在する場合の指示であると定めている。文脈指示は先行詞と指示詞の関係によって、前方照応指示用法と後方照応指示用法に分けることができる。

前方照応指示

田中(1981)によると、照応とは、「一般に文の中の、あるいは一貫性のある文連続の中の二つの言語形式が同一の対象を指示している場合のその二つの言語形式の関係を意味する。」さらに、照応の種類に関しては、先行詞と照応詞との間の位置関係に分類され、その中で「文脈の中で先行詞が照応詞に先行する照応を前方照応(anaphora)」と定義している。つまり前方照応指示は文脈の中で先行詞が指示詞に先行照応するものである。前方照応指示の例として新聞から引用する。

(7) ２冊配るべき問題冊子を、１冊しか配らない。**そういった**試験監督者の不手際が、全体の８％にあたる５８会場であり、約４５００人が迷惑をこうむった。

（朝日新聞，朝刊，2012/01/17）

(7)の「そういった」は「そのように」という意味で、「２冊配るべき問題冊子を、１冊しか配らない」を指す。

後方照応指示

田中(1981)では、「先行詞が照応詞に後行する照応を後方照応(cataphora)」と呼んでいる。木村（1983c）では、冒頭の指示詞と後続文脈において語り明かされるその内容に照応するのは後方文脈指示あるいは後方照応であると述べている。それは以下の例(8)を示している。日本語記述文法研究会（2009:30 ）では「言語文脈 [1]では指示対象が指示表現の前か後ろの言語文脈の中にある。指示表現よりも指示対象があとにある後方照応、（中略）後方照応ではコ系が選ばれることが多く、ソ系はまれである」と述べている。

(8)「古い中国のことわざに**こんな**文句があるんだそうだ。＜恥ナクシテ富ム＞わかるかな」（木村 1983b：75）

(8)と同じ後方照応指示の例は新聞や日本語の教材にも見られる。

(9) 今回から**こんな仕組み**に変わった。２科目受ける受験生は、たとえば地理と日本史のように地歴から２科目選んでもよいし、地歴と公民から１科目ずつ選んでもよい。その２科目をまとめてひとつの時間帯で試験する。２冊配るべき問題冊子を、１冊しか配らない。

（朝日新聞，朝刊，社説，2012/01/17）

(10) **これ**は専門家から聞いた話なのですが、実用になる自動翻訳電話ができるのにあと５年かかるそうです。（金水敏他編 1989：46）

(8)の「こんな文句」は先行詞「恥ナクシテ富ム」と照応している。(9)の「こんな仕組み」は後文に書かれている受験生に関する試験がどのように変わるかと照応する。(10)の「コレ」は聞いた話を指しているが、後文に書かれている具体的な話は話のその内容だけなので、単に後方照応指示と言うよりは、代行機能がある後方照応指示と言ったほうが適当だろう。

1.2.3 ほかの指示用法

前節は指示用法の主流である現場指示と文脈指示を紹介したが、本節はそのほかの指示用法を取り上げて述べる。堀口（1978a, 1978b，1990）が定義した絶対指示、観念指示と、田中（1981）が定義した限定指示、代行指示を中心に、例文を取り上げながら説明する。本研究では絶対指示と観念指示の定義を援用し、日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞の非現場指示用法を細分して分析

する。

絶対指示

指示詞に関する研究は数多くあるが、堀口(1978a, 1978b)は最初に、現場指示や文脈指示などと異なる用法に注目し、絶対指示と名付けた。そして、絶対指示の主たる用法として「手紙など特定な場面に用いられた近称『コチラ』、『ココ』などは自分側、中称『ソチラ』、『ソコ』などは自分側に対する相手側を指す」と、「話し手の存在する時間的位置、つまり現在時を絶対的に指す用法」、その中に時間を表す「コノ春・コノ頃・コノ前・コレマデ・コレカラ」があると解説している。正保(1981)は堀口(1978a, 1978b)の考えに従って、より具体的に絶対指示用法を定義した。手紙に書かれた「こちらは相変わらず…」の「コチラ」は現場指示と思われがちだが、指でさすわけにはいかないことと「実際に話し手の居る場所とは関係なく常に特定の対象を指す」ことから、絶対指示として捉えるべきだと解説している。すなわち、絶対指示は現場指示用法を擬して生まれたが、話し手のいる具体的な場所とは直接関係がないため、現場指示とは言えない。また、堀口(1978a, 1978b)は手紙など相手に会わない状況において話し手が相手のいる場所を同定することは観念指示の用法に近いと述べている。以下の絶対指示の例は新聞から引用した。

(11)二つ目は、この時期だけは発信番号が非通知の電話にも出よう。企業から学生あてにかかる電話は非通知設定が多いが、それを無視すると、せっかくの連絡を受け損ねてしまうかもしれない。

(朝日新聞，朝刊，2012/01/13)

(12)この季節、我が家の自慢の味は鮎（あゆ）の甘露煮です。２０年ほど前、夫が釣った長良川の天然鮎で作ったのが最初。夏に白焼きして冷凍しておいた鮎を、七輪で火加減を調節しながら丸１日かけて煮ます。

(朝日新聞，朝刊，2012/01/13)

(13)倉沢重司組合長らは「なぜ、復興に向けて重要なこの時期に」と激しく抗議したが、急がざるを得ない理由があった。

(朝日新聞，朝刊，2012/01/15)

(11)の「この時期」は就職という時期を意味する。今の時期を指すこともできるし、過去や未来の時間を表すことも可能である。相手は「この時期」を読んでも、漠然と感じることもなく、誤ることもなく指示対象の同定を行う。(12)の「この季節」は我が家が鮎の甘露煮を作り、食べる季節を指している。(11) と同じ現在の時間と関わらなくても成立する。いわゆる「この季節」はただ現在の季節を指すのではなく、語り手にとってこの特別な季節を暗示している。(13)の「この時期」は東日本大震災後復興を目指す大事な時期を指す。それを読む相手は語り手が同定したとおりに指示対象を理解できるだろう。

観念指示

堀口 (1990) では以下のように述べている。

＜観念指示＞は、他にその実態を示すことなく自分の観念の中にある事物を指す用法であるが、それに対して、観念の中にある事物を指すという点は同じであるが、その事態が文脈に明示されているのが＜文脈指示＞である。＜文脈指示＞は端的に言えば文脈の中にある物事を指す用法だと言ってよかろうが、厳密に言えば、文脈に示された物事はすでに観念の中のものとなっているのであり、その観念の中のものがコ・ソ・アと指されるのである。

（下線は邱による）

堀口（1990）は文脈指示も観念にあるものを指し、観念指示か、文脈指示かを定める基準はその実態が文脈に明示されているかどうかであると唱えている。また、堀口（1990）が論じている観念指示は堀口（1978a，1978b）が唱えている観念対象指示は同じ指示用法である。

(14)A：「**あれ**をやった？」
B1：「いいえ、まだです。」
B2：「**あれ**って何？」

（作例）

(15)でも、最近は作っていません。夫の趣味が釣りから登山に変わったからです。手間はかかりましたが、夫婦合作の**あの**味が無性に恋しい**この**ごろです。

（朝日新聞，朝刊，天声人語，2012/01/13）

(16)センター試験初日の１４日朝、大分市の私立岩田高校で、試験場に出発する３年生を２年生十数人が合格祈願の「水行」で見送った。（中略）「国語」「英語」などと書いたＴシャツを着た生徒を、受験生役がやっつける寸劇の後、「**あの**時の努力を忘れないで」「夢に向かって頑張って」と絶叫。

（朝日新聞，朝刊，天声人語，2012/01/15）

(14)の「あれ」は話し手が頭に思い浮かべたものであり、A は同じ環境にいる聞き手の頭にも同じようなものが浮かぶと予想した上で発言した。これが成功すると、コミュニケーションにより仲間意識が培われ、対話者同志に一体感が生まれる。しかしながら、話し手の予想がはずれた場合は、両者の間が気まずくなり B2 のような返答が寄せられる。他方、独話文である(15)の「あの」味は妻が夫婦合作の恋しい鮎の甘露煮の味を指し、実際の味は語り手の感覚なので、どんな味か語り手自身しかわからない。語り手の観念に存在する指示と言えよう。(16)の「あの」時は典型的な観念指示用法である。受験生しか味わえなかった辛さ、受験するために努力してきた日々を示している。

(17)私は終戦を最後の予科練生として山口県の防府で迎えた。予科練では分隊長の大尉の世話係をしていた。**あの**大尉のことを思うと、感謝の念で胸がいっぱいになる。

（朝日新聞，朝刊，2012/01/13）

例(17)の波線を引いた文がなければ、「あの」大尉は観念指示だと判断できるが、前文に大尉のことが書かれ、予科練で世話係をしていた分隊長の大尉のことと説明しているので、堀口(1990)によれば、文脈指示に所属するだろう。

限定指示

田中(1981)から限定指示の例を引用しながら、限定指示を紹介する。

(18)門の前に一人の男が立っていた。**その**男は私が出て行くと近づいてきた。

(田中 1981：25)

(18)は前方照応だと思われるが、林(1983)の説く限定指示とも解釈できる。林(1983)では指示代名詞『コノ』と『ソノ』の働きと前後関係に関しては指示を「限定指示」、「代行指示」と呼んでいる。さらに、現場指示を現場代行指示と現場限定指示に分け、文脈指示も先脈代行指示・先脈指定指示・後脈代行指示・後脈指定指示に分けている。つまり、文脈指示は指示詞の位置関係によって、前方照応と後方照応に分けられるが、指示詞の機能によって限定指示と代行指示に分類できる。。林(1983)は現場指示を例にとって両指示を区別している。限定指示は今話題にしているものをいろいろな物から取り出して、限定するという働きをしている。言い換えれば、名詞の意味を内包から外延へと転じさせる働きがある。

代行指示

「それを取ってください」と話し手が聞き手の前にあるものを指しながら発話するような用法である。この場合の「ソレ」は現場にあるものを代行する働きをしている。林(1983)ではこういう指示を代行指示と呼んでいる。

(19)事件が起こったのは午後三時のことである。しかし、九時現在、いまだ**その**犯人はとらえられていない。
(20)A くんが奥さんとわかれたという話はいろいろの人から聞いて知っていた。たまたま先日、A くんに会ったのできいてみたが、**その**理由はどうしても教えくれなかった。
(21)この道をまっすぐ行くと郵便局があって、**そのとおり**に交番がありますから、そこできいてください。

(田中 1981：25)

上述した 3 例の共通点は(19)の「事件」と「犯人」、(20)の「A くんが奥さんとわかれた」と「理由」、(21)の「郵便」と「そのとおり（通り）」の間に意味論的知識の前提が存在することである。つまり、聞き手がある種の意味論的知識を持っている。また、指定指示は「この」「その」両方が用いられるが、代行指示は「その」しか使用できない。

1.3 中国語の指示詞“这/那”の名称と領域についての概観

中国語の指示詞の研究は日本語の指示詞の研究ほど盛んではなかった。中国における最初の指示詞の研究は马建忠（1898）からである。马建忠の研究では、指示代詞を「指示代字」と称して、「代字（代詞）」を「指示代字（指示代詞）」「指名代字（人称代詞）」「接続代字（接続代詞）」「詢問代字（疑問代詞）」の四種類分けている。吕叔湘（1980）は、「指示詞」を「定指指代詞」と称して、“这/那”が持つ機能を①指示する、②代替する、③指示と代替の両方、に分類している。朱德熙（1982）は「指示詞」を「指示代詞」と称して、「指示代詞」は代替機能と指示機能があり、“这”は近称に“那”は遠称に用いるとしている。劉月華他(1988)では、「中国語の指示代詞の中で基本的なものは近称指示の“这”、遠称指示の“那”であり、そのほかの指示代詞はすべてこの二つから派生して出来たもの」と述べられている。

伝統的な中国文法研究では中国語の指示詞を指示代詞と称する。数多くの研究者は、指示代詞は名詞の代わりをする品詞と理解しているようであるが、性質、方式、時間、程度など全てを代替できるため、指示代詞と呼んでも問題はないだろう。しかし、最近の研究では指示詞と呼ぶこともある（陈玉洁 2010 など）。本論では日中指示詞を対照させる際に、名称を統一するため、中国語の指示機能を持っている“这/那”を指示詞と称する。

中国語の指示詞は“这(zhè)/那(nà)”の 2 系列と言われているが、この説は中国語の標準語にある指示詞を示している。本稿でも中国の標準語で用いられている指示詞を研究対象とする。

最近の指示詞の研究は主に以下 3 つのパターンに分類できる。

Ⅰ. “这(zhè)/那(nà)”を機能から論じる研究が多い。Huang(1999)、Tao(1999)、方梅(2002)、Chen(2004)などは指示詞の機能を回指[2]、直指[3]、篇章直指[4]、篇章回指[5]に分け、指示詞“这”と“那”が冠詞化[6]しているかどうかを検討している。

Ⅱ. 指示詞の使用率の統計分析を通して、“这”と“那”の様々な文での用法を把握する。Tao（1999）、Chen（2004）によると、“那”の使用率は“这”よりも高い。杨玉玲(2006)では篇章直指で用いた“这”は“那”より遥かに多く、使用率は 23：1 になり、回指として使用された“这”と“那”の比率は 6：1 になっていると述べている。

Ⅲ. 中国の方言に現れている指示詞の分類に関する研究、小川（1981）は、「蘇州の方言に存在する指示詞“掰(bai)”」は日本語の指示詞「ソ」の役割と似ていて近くでもない遠くでもないところを指すいわゆる中称指示詞」であると述べている。また黄伯荣(1996)は小川（1981）を取り上げた上で、“掰(bai)”はさらに「①距離的に遠くと近くの間を示す。 ②遠くか近くかをはっきりさせなくても問題にならない場合に用いる。」に分けて記述している。また刘丹青，刘海燕（2005）では上海崇名の方言の指示詞を 4～5 系列に分けている。以下に指示詞“这/那”の主要な先行研究を挙げる。

吕叔湘(1980)の捉え方

吕叔湘（1980）では“这”と“那”は指示の機能について、前者は比較的遠くにいる人や事物を指し、後者は近くの人、あるいは事物を指すと述べている。“这/那”は名詞と数量詞の前に用いられ、「“这/那”＋数量＋名」になる。また、ほかの語句の後ろに使うと、その語句の指す事物を再度示すこともできる。その他、“这”と“那”には“这样，那样”や“这么，那么”と同じ動詞･形容詞の前に

用いて強調を表す役割がある。

一方、“这”と“那”における代替の機能について、“这”は近くの人・事物の代わりに、“那”は比較的遠い所にいる人や事物の代わりに用いるとされている。事物の代わりとして用いる場合は、ふつう主語に用いる。それに対して、人の代わりに使われるのは、“是（shì）”を用いた文の主語になる場合に限られる。また、“这/ 那”は節の初めに用いると、前に述べたことを再度示すことができる。そして、“这”と“那”が対で用いられる場合、不特定多数の事物を表し、特定の人や事物を指さないと規定している。

朱德熙（1982）の捉え方

朱（1982）によれば、指示代詞には代替機能と指示機能があり、近称には“这”、遠称には“那”を用いる。“这”と“那”が単独で使われる場合は、人物・事物を指すことができ、主語になる。時間を示す“这会儿”は発話時、叙述中に言及した過去の一時点を指すことはできるが、未来を指すことはできない。逆に“那会儿”は過去あるいは未来の一時点を指すことはできるが、発話時を指すことができない。“这儿/这里/那儿/那里”は場所を指し示す。“这样/那样/这么样/那么样”は動詞を修飾すると様態を表し、形容詞を修飾すると程度を表す。方式を示す“这么/那么”の後には“着”を加えて“这么着/那么着”のように使用することができる。しかし、“这么/那么”が名詞を修飾するには数量詞を伴うことが必要である。

劉月華他（1988）の捉え方

劉他（1988）は、「中国語の指示詞の中で基本的なものは近称指示の“这”、遠称指示の“那”であり、そのほかの指示詞はすべてこの二つから派生して出来たものである。」と述べている。“这/那”は事物を指すことが多く、文の中で主に主語になる。動詞の目的語になることは少ないが、介詞の目的語になることができる。そして、“这”と“那”については「フレーズまたは文の代わりをすることができ、特に“这”は前を受けて指す範囲が広い」としている。次の表は“这/那”を性質と用法に基づいて、分類したものである。

【表 1-2】劉月華他（1988）の“这/那”の分類

指示詞	近称指示	遠称指示
人・事物を代称、限定する	这（＋数）（＋量）（＋名）	那（＋数）（＋量）（＋名）
場所を代称する	这里　　这儿	那里　那儿
時間を代称する	这会儿	那会儿
性質、方式、程度を代称、限定する。	这样 这么 这么样	那么 那样 那么样

（表は劉月華他 1988：69 による）

徐丹（1988）の捉え方

徐（1988）は、中国の指示詞“这”と“那”は対称していないという新たな観点を唱えている。つまり、同じ文では“这”は使用できるが、“那”は使用できないことが多い。その内容をまとめると以下のようになる。

中国の漢字使用頻度統計によると、“这”は常用漢字の 10 位、出現回数は 138426 回、“那”は常用漢字の 182 位、出現回数は 28882 回である。そこから“那”よりは“这”のほうが中国語でよく使用されることと、“这”よりは“那”のほうが制限されて使われていることが判明した。その原因は3つあるとまとめている。①“这”は時間詞[7]あるいは時間を表す語の前に置かれて使うと現在・過去を表し、“那”は時間詞あるいは時間を表す語の前に置かれて使うと過去しか表せない。②“这”と“那”は人称代名詞の後ろにつくと同格になる場合、第一人称代名詞と第二人称代名詞の後ろには“这”しか使えないが、第二人称代名詞の後ろには“这”と“那”の両方使える。③“这”は動詞「来る」と共にセットでよく使われているが、“那”は「行く」と共にセットでよく使われている。

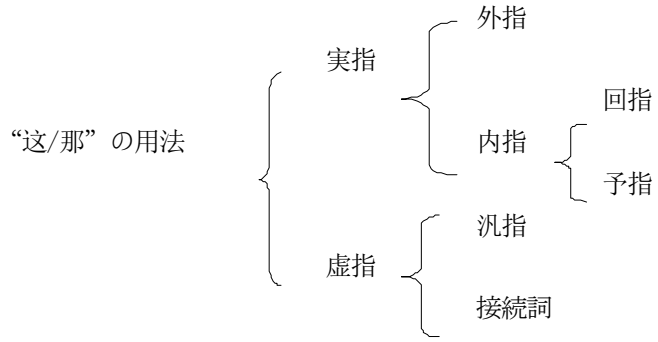
讃井唯允(1988b) の捉え方

讃井(1988b)によれば、「指示対象が話し手の個人領域にある場合には“这”を、外にある場合は“那”をもちいる。話し手と聞き手が共通談話領域を形成する場合、指示対象がその中にあれば、“这”を、外にあれば“那”をもちいる。話し手と聞き手が共通談話領域を形成しうるのは、双方が大声をあげなくても声が届く対話距離の範囲内において、しかも指示対象が双方の眼前に見えている場合にかぎられる。ただし、特殊な状況のもとで、話し手の個人領域が心理的に著しく小さくせばめられる場合、たとえ上記の条件を満たしていても、共通談話理領域を形成することはできない。」と述べている。また「中国語では、話し手の個人領域はあっても、聞き手の領域というものは認められないようである。その代り、中国語の通常の対話距離における対話では、話し手と聞き手は一般にたやすく共通の領域を形成する。」と唱えている。

杨玉玲(2010)の捉え方

杨玉玲(2010)は“这/那”の用法を【表 1-3】に示す 2 種 6 類に分類している。まず、「実指」と「虚指」に二分するが、前者が指すものは実体的、すなわち実指的である。後者が指すものは非実体的、すなわち虚指的である。また、「実指」を指示詞が指し示す対象はその文に存在せず、談話の現場などにある「外指」と、前文あるいは後文にある「内指」に分けている。後者がさらに「回指」と「予指」に細分されている。「回指」は、指示詞が指し示す対象は前文にあり、“这”あるいは“那”は指示対象の後ろにある。「予指」は、指示詞が指し示す対象は後ろの文にあり、“这”あるいは“那”は指示対象の前に使われているとの区別がある。「虚指」は「汎指」と「接続詞」に二分され、前者は具体的に会話や文章にある特定対象を指し示すのではなく、およそのことを指す。例えば、「夫妻俩整天就是这样，这个回来那个走 (ある夫婦は毎日のようにこの人が帰れば、あの人が出かける) (作例)」の中の“这个”“那个”とは夫と妻どちらを指しているかはっきりしていないがその夫婦のどちらかを指しているという用法は「汎指」である。以下の表は杨玉玲(2010)の中国語指示詞“这/那”の指示用法分類表である。

【表 1-3】杨玉玲(2010)の“这/那”の分類



（杨玉玲 2010：25 を一部修正）

1.4 中国語の指示用法の捉え方

中国語の指示詞に関する研究は日本語の指示詞の研究ほど盛んではない。最初はほとんどの研究が吕叔湘(1985)の説に基づき、指示用法を分類していたが、最近の研究では陈玉洁(2010)や、杨玉玲(2010)のように他言語の指示詞の指示機能から中国語の指示詞“这/那”の指示機能を説明するものが現れている。すなわち、現場にある事物を指す deixis、と指示対象は文脈にある anaphoric とに分け、それをさらに細分する（杨玉玲 2010 の“外指”は deixis、“内指”は anaphoric に当たる）。

1.4.1 現場指示

陈玉洁(2010：21）によると“指示存在于言谈场景中的对象。（会話の現場に存在する対象を指す）”用法は典型的な deixis[8]（現場指示）で、その現場は時間現場と空間現場の 2 類に分けられる。前者の例は（22）で、後者の例は（23）で示す。

(22) 这个人叫什么名字？（加手势或眼神等肢体语言）
(22’) この方の名前は何と言いますか。
（身振り、手振りあるいはアイコンタクトなどを加える）
（陈玉洁 2010：21、訳は邱）

(23) 这个时候你让我到哪里去找人啊？
(23’) こんな時間に、どこで人を探せと言うの。
（ibid.）

杨玉玲(2010：26)では指示詞“这/那”の deixis 用法をこのように述べている。

> 所谓“外指”就是指称词语“这”、“那”系词语的指称对象不是存在于篇章内部，而是存在于外部语境中。即在语篇上下文中找不到其所指对象，而要到谈话现场或会话人的百科知识中去寻找。
> 「外指」というのは“这”“那”系指示詞の指示対象が文脈に存在しておらず、外部の言語環境にある。つまり、文の前文や後文には指示対象が見つからず、談話の現場やあるいは会話者の

頭に保存している知識から探す必要がある。

杨玉玲(2010)は陈玉洁(2010)が定義した“这/那”の deixis 用法とは異なり、「会話者の頭に保存している知識」、つまり日本語の指示詞用法の観念指示にあたる用法を deixis に入れている。

1.4.2 照応指示

中国語の指示詞“这/那”が文脈にある対象を指す照応指示用法を杨玉玲(2010)は「anaphoric」[9]と定義した。anaphoric には“回指（anaphora）”と“前指（cataphora）”用法が含まれる。それを“回指（anaphora）”“后指（cataphora）”“预指（cataphora）”と呼ぶ学者もいるが、同じ指示用法を指している。本論では「回指」と「前指」という用語を用いる。「回指」用法に関しては、吕叔湘(1985) が以下のように述べている。

> “紧接上文，指示上文已说或是跟上文所说有关的事物，这是回指用法,也是用‘这’为多。”
> 「前文の後について、前文に述べられていることや前文の内容と関わる事物を指すのが『回指』の使い方である。‘这’を‘那’より多く用いる。」
>
> （吕叔湘 1985：203）

つまり、「回指」というのは指示対象が“这”や“那”より先に現れ、指示詞は話題を指したり、話題の一部のみを指したりすることができる。中国語の指示詞の「前指」用法については、吕叔湘（1985）により次のように定義されている。

> “这字间或用来指示下文即将说明的事物，这可以成为前指；那字没有这种用法。”
> 「“这”は後文にあるこれから説明するものを指し示す。“这”のこの用法は『前指』と称する。“那”には『前指』用法がない。」
>
> （吕叔湘 1985:205）

※以下の例は吕叔湘（1985）から引用したもので、訳文は邱による。

(24) 不知甚的意思，打了我<u>这</u>一顿。
(24’) なぜかわからないが、殴られた。
（吕叔湘 1985:203《元代白话碑》）
(25) 几百钱是小事，难得<u>这</u>个脸面。
(25’) 数百円は大した事ではないが、私の顔を立ててくれたことはありがたい。
（ibid.《红楼梦》）
(26) 把好的给他，剩的才给我，我宁可不要……也不受<u>这</u>口气。
(26’) 良いものは彼が取り、残りものは私にというならむしろ要らないわ……恥をかかせないで。
（ibid.）

(27) 这话也不可告诉第三个人。

(27’) この話も第三者に話してはいけない。

(ibid.)

(28) 你不要管这闲事。

(28’) あなたはこの事に関わらないでください。

(ibid. :《三侠五义》)

(29) 我可背不起这个名誉。

(29’) 私はこの名誉を受けることができない。

(ibid. ：曹禺《日出》)

(24) から (29) は吕叔湘 (1985) の指示詞“这/那”の「回指」用法を説明するためにとり挙げた例である。6 例は全て指示詞“这”の「回指」用法で、“那”は用いられていない。

(30) 这么着罢，就叫雪姑娘去罢。

(30’) こうしよう、雪ちゃんを行かせよう。

(吕叔湘 1985:272《红楼梦》)

(31)这么着，我合姑太太倒个过儿：姑太太在家里招呼媳妇，我跟了外甥去，这放心不放心呢?

(31’) こうしましょう、私がおばさんと交替して。おばさんが家でお嫁さんを世話して、私が甥についていきます。これなら、安心でしょう。

(ibid. :《儿女英雄传》)

(32) 这么样罢，咱们两个结盟拜把子罢。

(32’) こうしよう、私たちは義兄弟の契りを結ぼう。

(ibid. :《三侠五义》)

(33)只记得他的这么两句：老二大概是进了天堂……我还在这儿砸地狱的门呢!

(33’) ただ彼のこの二、三の言葉しか覚えていない。二番目はもう天国に入っただろう。だけど、私はまだここで地獄の門を叩いている。

(ibid. ：老舍《黑白李》)

(34)少说闲话罢，是这么回事儿：老王第一个不是东西……

(34’)もういい加減にしよう。実はこういうことだ。王さんは一番質が悪い奴だ。

(ibid. ：老舍《柳家大院》)

(35)我就是这么一个人：永远在心里头活着。

(35’)私はこういう人なんだ。永遠に自分の精神世界で生きている。

(ibid. ： 曹禺《日出》)

(30～35) は吕叔湘 (1985) では「前指」用法を説明するために、挙げられている例である。これらの共通点は指示詞が全て前文にある。また、指示詞“这”は「前指」用法があっても、実際に取りあげた例は全部“这么”の例である。 このことから、“这”の「前指」用法は主に “这么”が担っている可能性はほかの指示詞に比べ高いと推測し、第二部の「前指」の“这”と日本語の指示詞に対

応する表現では“这么”が「回指」用法として使用された確率を含めて考察する。

1.5 指示詞の日中対照研究について

指示詞の日中対照研究は 80 年代にはまだ本格的に進んでおらず、公開されている研究は主に木村（1983a，1983b,1986，1988a，1988b）、高麗雅（1986）、梁慧（1986）張瓊玲（1986）などがある。その中で木村（1982）は日本語と中国語の対応表現用例集であり、木村（1983b）は「コンナ」と「コノ」の文脈指示に焦点を当てて述べている。高麗雅（1986）と張瓊玲（1986）は指示詞の日中対照に関する研究であるが、日中で対応している理由と非対応になる原因などについては詳しく言及していない。

90 年代においても 80 年代と同様、指示詞研究の数が少ない。主な研究に徐维（1990）、木村（1992a）、路玉昌（1999）がある。その中でも引用率が高いのは木村（1992a）である。木村（1992a）は中国語指示詞の「遠近」対立の観点から、日中指示詞の現場指示を分析対象としている。

21 世紀に入ってから、指示詞の日中対照研究が急に増えている。主に、路玉昌（2000，2001，2006）、宋暁雨（2002）、芦英順（2004）、王亜新（2004，2007）、郭玉英（2010，2011a，2011b）、史隽（2011b，2012）、劉驫（2009，2012）などがある。指示詞を対象とする研究の多くは、手はじめに現場指示を考察している。例えば、郭玉英（2009）と劉驫（2011）は現場指示に着目しているが、郭玉英（2010，2011a，2011b）と劉驫（2012）は文脈指示に重点が変わってきたことがわかる。それは指示用法の源は現場指示だと考えられ、指示詞の研究をするなら、現場指示から始めるという思想があるからだろう。また、中国人学習者にとって現場指示よりも非現場指示のほうが明らかに習得が困難であるため[10]、非現場指示における文脈指示がよく研究される一因だと考えられる。その他の日中対照研究には加藤（2008）、王湘榕（2011）、史隽（2011a）、楊蕾（2011）、などがある。そして、第二言語の習得が盛んになるとともに、21 世紀以前にはない言語習得の立場から見た中国人の指示詞の誤用についての研究も数本発表された。

日中指示詞の対照研究は日本語の指示詞の研究と比較すれば、かなり遅れているし、また発表された論文数も少ないことがわかる。筆者の知る範囲では、まだ本格的な段階を迎えるに至っていないというのが現状である。以下本論と関係の深い主な日中指示詞の研究を取り上げる。

芦英順（2005a，2005b）の捉え方

芦英順（2005a，2005b）は日本語の指示詞の照応用法は短期記憶の「コ・ソ」と長期記憶[11]の「ア」を分けたうえで、日本語と中国語の指示詞の照応用法を比較している。その結果は以下のようにまとめている。

> 「コ」と“这”は対応しているのに対して「コ」と“那”は対応しない。「ソ」と“这”は短期記憶の中の情報を指し示しているから、対応している。「ソ」と“那”も対応しているが、空間的、時間的に話し手の指示の現場から離れている過去や未来という時間、あるいは場所である場合は中国語では“那”を使う。長期記憶である「ア」はおおよそ中国語の長期記憶の“那”と対応している。また日本語は長期記憶の「ア」から始まると最後まで「ア」を一貫して用いるのが原則として無標の選択であるのに対して、中国語は最初は長期記憶指示から始まっても、

次には容易に短期記憶に転換できるのが普通である。さらに、中国語は長期記憶内の情報から短期記憶内の情報にマークを変更できるが、日本語は長期記憶内の情報から短期記憶内の情報にマークを変更できないのである。

芦英順（2005a，2005b）では、「ア」系指示詞として連体詞系「あの」だけを検討しているが、場所系「あそこ」、程度系「あんな」、名詞系「あれ」、方向系「あちら」、副詞系「ああ」については書かれていない。したがって、「あそこ、あんな、あれ、あちら、ああ」の場合も同様であるのか疑問が残る。次に芦（2005a）の示している例文について考えてみる。

(36) 他的车，几年的血汗挣出来的那辆车，没了！自从一拉到营盘里就不见了！以前的一切辛苦困难都可一眨眼忘掉，可是他忘不了这辆车。

(36’) 車だ、**あの**何年もの血と汗の結晶である車が、消えてしまったのだ。兵営に着いたとたんきえてしまったのだ。これまでの苦労くらいならさっぱり忘れることもできる。だが、**あの**車だけはどうにも忘れることができなかった。

（芦英順 2005：20）

(37) 因为进城，姐弟俩细心照顾的那只小狗，不得不再次被遗弃，所以，他们始终无法忘记名叫鲁鲁的这只可爱的小狗。

(37’) 上京のため、姉と弟は細心の注意を払って世話をしてた**あの**子犬を再度捨てざるをえなかった。だから、彼らはいつまでも「魯魯」という**あの**かわいい子犬が忘れられなかった。

（ibid.）

例(36)と(37)はよく似ているが、ほかの「ア」系指示詞についてはまったく触れていない。また、芦英順（2004）も(36)と(37)を用いて、説明している。したがって、芦の結論では「中国語は最初に長期記憶指示から始まっても次では容易に短期記憶に転換できるのが普通である。」と述べているが、そのような解釈が適切かどうかにも疑問が残る。(36)と(37)のような例は特殊な文ではないかと検討すべきである。

(38) 从第一次见面，我就被他吸引了。他没有赵振环漂亮，可是他那一双眼睛使赵振环的一切美色都显得黯淡无光。他的眼睛可以教最愚钝的学生准确地理解“神采”这个词的意义。就是这双眼睛到处追随着我，象两团火，象两盏灯。我没法躲过它。《人啊》

(38’) はじめて出会ったときから、私は彼に引かれた。趙振環のような美男子ではなかったけれど、**あの**人の目は趙振環の美貌も色褪せてしまうほどのものがあった。その目は、どんなに鈍い学生にも「神采」ということばの意味を正確に分からせてくれるだろう。ほかならぬ**その**目が、私をどこまでも追いかけてきた。ふたつの火玉のように、ふたつのともし火のように。〔人間〕

また、例文（38）は芦英順（2005a，2005b）で示された「中国語では最初は長期記憶指示から始まっても次には容易に短期記憶に転換できる」、つまり最初は長期記憶指示“那”から次に短期記憶“这”に転化された例文であるが、訳文では「ア」系指示詞で一貫するのではなく、「アノ」

から「ソノ」に転換して訳されている。

路玉昌（2006）の捉え方

路玉昌は中国語指示詞“这/那”の文脈指示と日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞の対応について論じている。路玉昌（2006）の観察によると、“这”は日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞のすべてに対応するから、中国語話者は日本語習得の際、中国語指示詞“那”の影響も受けるが、“这”の影響を最も強く受けると示した。“这”は小説などの登場人物となる先行詞を指す場合、作者あるいは「私」が自問する表現の時「コ」と対応しているが、第一人称以外の登場人物の身体の一部を指す場合と指示対象がその場にないが先行詞は指示詞の直前、あるいは近い先行文にある場合、「ソ」と対応している。“那”は前出の過去の出来事などを指す場合、小説に描出済みの過去の出来事を回想として挿入した時は「ア」と対応するが、回想された過去の時点や未来の時点を指示する場合と指示対象が第一人称以外の登場人物の身体の一部を指す場合と作者あるいは登場人物が見たものは「ソ」に対応する。“那”の指示対象がその場にない場合、日本語の指示詞と対応せず、「～のように」あるいは「～みたいに」と訳される。また、時間を指し示す “这”は指示対象が過去の時点であっても、時の流れに従った叙述であれば、多くの場合「ソ」と対応し、「コ」と対応するケースは少ない。

路玉昌（2006）は中国語指示詞“这/那”の文脈指示と日本語の指示詞を比較しているが、“这/那”の指示用法を詳しく分類していない点で不十分なところがある。実際に吕叔湘（1985）は指示用法を「前指」「回指」などに分けており、杨玉玲(2010)では“这/那”の指示用法を「実指」と「虚指」に分けたうえで、「実指」を「外指」と「内指」に、「内指」をさらに「回指」と「予指」に分けている。よって、路玉昌（2006）のように中国語指示詞“这/那”の指示用法を文脈指示までしか分けないのでは、日中指示詞の対応関係を厳密に説明できないだろう。

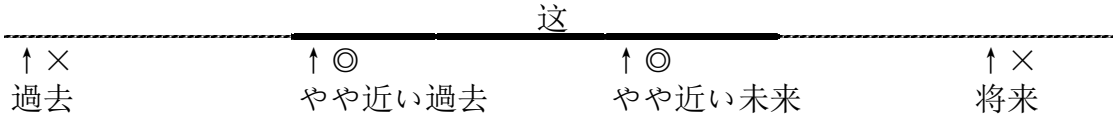
胡俊（2009）の捉え方

胡俊（2009）は人と時間を指し示す「コ」系指示詞と“这”を比較している。以下の表にまとめているように、中国語の“这”は時間を表す年、月、曜日、日と組み合わせて使用する場合、過去や未来を指すことができる。つまり“这天”“这年”は過去を指し示せるが、“这天”“这个月”“这星期”は現在のみを指し示す。しかし、中国語では“今天”“今年”があるので、“这天”“这年”は現在を指すことができない。“那”は時間を表す年、月、曜日、日と合わせて使用する場合、過去しか表せない。一方、日本語の指示詞「これまで・これから・このごろ・この間・このところ・この夏・ここ数年来・ここ 2、3 日」は堀口（1978）の絶対指示に当たる。そのような指示詞は発話時間とそれほど離れていない時間を指し示す。つまり、「コ・“这”＋時間を表す語(曜日・数年来・2、3 日など)」という形になる際に、発話時間からあまり離れていない時間を表すことができる。【表 1-4】は中国語の指示詞“这/那”が時間を示す名詞と共に用いられた際に、“这”と“那”がそれぞれ現在と過去を示す表現を比較する表である。

【表 1-4】現在と過去を示す“这/那”（※は使えないと意味する。）

現在		过去	
这	那	这	那
*(今天)	*	这天他病了。	那天他病了。
这星期我放假了。	*	*	那星期我放假了。
这个月他出差了。	*	*	那个月他出差了。
*(今年)	*	这年他上了大学。	那年他上了大学。

胡俊（2009）が述べている“这”が過去と未来を示すことができるが、その過去や未来の時間性を図で示すと【図 1-4】になる。



【図 1-3】過去、未来を示す“这”

史隽（2011b）の捉え方

史隽（2011b）は「日本語では『その』による先行詞との照応が必須かどうかによって『外延レベルでの照応』と『内包レベルでの照応』に分類される。」と述べている。前者は「その」による先行詞との照応が必須ではないが、後者は「その」による先行詞との照応が必須である。さらに「『内包レベルでの照応』の『その』が照応の仕方に基づき、『持ち込みの「その」』と『言い換えの「その」とに分かれる。』」とも述べ、中国語指示詞は「外延レベルでの照応」であるが、「内包レベルでの照応」ではないため、日本語指示詞「その」の照応用法と異なると論じている。

(39) 人間は、昔から犬を友としていた。**その犬**はいろいろな病気の伝染者でもある。
(39’) 人类从很久以前就把狗当成朋友。**这只狗***也是很多疾病的传播者。
(39”) 人类从很久以前就把狗当成朋友。**这个被人类当成朋友的狗**却也是很多疾病的传播者。
（史隽 2011b：71 による）

史隽（2011b）の解説によると例（39）の「その」は先行文脈で出てきた「友としていた犬」を示しているが、「その犬」は先行文脈で出てきた「犬」と同一物であることは、文脈からわかるため「その」は省略できる。（39）の「その」の用法は「外延レベルでの照応」である。また（39’）は不自然な文になる理由としては次のように述べている。

量詞を「犬」に対して通常用いる“只”（匹）ではなく広く事物一般を指す“个”に変え、
…「犬一般」を指しており、固体としての犬を指すわけではない。

無論史隽（2011b）の解説は正しいが、さらに一歩進めれば、（39）の「その犬」のような日

本語の指示詞は数量詞がなく、一般的な物と固体として指している物の両方を示すことができるが、中国語の指示詞にはそのような機能は備わっていない。これは日中指示詞の指示機能に相違点が存在している証だろう。日中間の相違を究明するために、第4・5章では「“这 /那”＋ NumCL＋…」の形の場合、日中指示詞はどのように対応しているかと検討を試みる。

劉驫（2010，2012）の捉え方

劉驫（2009）は東郷（1999，2000）を参考にして、指示対象が登録される領域は「共有知識領域」、「発話状況領域」、「言語文脈領域」と3つに分けている[12]。

(40) 肖凯只能拿**那**几句‘置死地而后生’，‘不入虎穴焉得虎子’ 来安慰自己。

（高芃 2007：123『我们都是陌生人』）

(40’) 肖凯はただ**あの**「乾坤一掷」や「虎穴に入らずんば虎子を得ず」のようなことばで自分を慰めるしかない。（ibid.）

劉驫（2009）は、高芃（2007）の例（40）の“那”に対して同定された指示対象「‘置死地而后生’，‘不入虎穴焉得虎子’」は後文にあるため、後方照応指示であるという主張に反論して、ここでの“那”は文脈指示の後方照応用法の“那”ではなく、観念指示用法の“那”であるという見解を示している。その理由は「聞き手の共有知識領域にすでに中国人であれば誰でも知っていることわざ（置死地而后生’，‘不入虎穴焉得虎子’）、即ち百科辞典的な知識が存在している。そして、話し手が聞き手の共有知識領域にもその知識が登録済みと想定」できるので、吕叔湘（1985）の「後方照応指示」[13]の場合に、“那”は用いられないとする説が正確だと解説している。

また、談話モデルにおける中国語と日本語の登録領域の違いを説明するために、以下の例を取り挙げている。

(41)［話し手と聞き手が一緒に歩いている。突然、聞き手が話し手の携帯を海に投げ込んだ。何秒間の（ママ）沈黙の後、話し手が聞き手にこのように話す。］

S：{**这**/**那**}是我手机。

(41’) S：{***これ**/***それ**/**あれ**}は僕の携帯だよ。

（劉驫 2009：315）

(42)［話し手と聞き手がある部屋にいる。急にある人が入ってきて、うろうろしていた後に出て行った。何秒間の（ママ）沈黙の後、話し手が聞き手にこのように話す。］

S：{**这**/**那**}人是谁啊?

H：不知道。

(42’) S：{***これ**/***それ**/**あれ**}人だれ？

H：知らない。

（ibid.315-316）

劉驫（2010）は上記の2例について「現場に存在している指示対象が姿を消した直後にそれを

指す場合、日本語話者は観念指示の『あ』系しか用いることができない。それに対して、中国語話者は観念指示の“那”を用いることもでき、文脈指示の“这”を用いることもできる」と解説している。しかしながら、（41）と（42）の共通点は事が起こる現場があることと、指示対象が現場にあった（居た）が話す数秒前に消えてしまうという設定である。この状況だと現場指示、文脈指示、観念指示の境界を明確に区切ることができない。実際に話し手と聞き手が同じ現場で発話があったのなら、（41）の“那是我手机”は話し手に遠いものに対して使われている現場指示だとも言える。また、（42）の“那是我手机”には前文がないが、「話し手と聞き手が一緒に歩いている。突然、聞き手が話し手の携帯を海に投げ込だ。何秒間の沈黙の後、話し手が聞き手にこのように話す。」という説明文があるので、前文の代わりに文脈を作っている。この説明文がない限り、“那是我手机”とだけ聞いても誰も状況を把握できないだろう。したがって、“这/那是我手机”の“这/那”は文脈指示の前方照応指示とも理解できる。理由は “这/那”は“我手机”を指し示すのではなく、説明文にある「聞き手が話し手の携帯を海に投げ込だ」携帯を指し示しているためである。つまり、「投げられた携帯は私の携帯だ。」と聞き手に伝えたいわけである。また現場から指示対象が消えているので、堀口（1990）が「ほかにその実態を示すことなく、自分の観念の中にある事物を指す用法である」と述べているから、（41）の“那”は観念指示とも解説できる。（42）も同様である。よって、日本語文（41’）と（42’）の「あれ」は現場指示あるいは観念指示と認識できることになる。他方中国語文（41）と（42）の“这/那”は現場指示と文脈指示の「回指」と理解できるだろう。

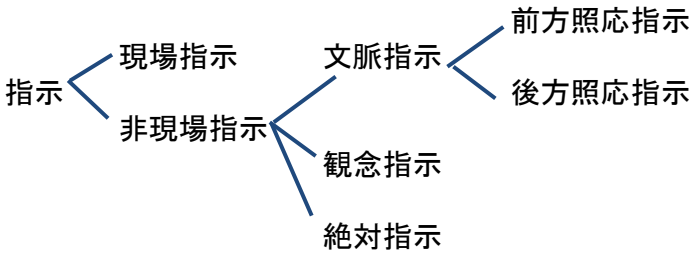
劉驫（2012）は劉驫（2010）に続き、指示対象を「共有知識領域」、「発話状況領域」、「言語文脈領域」とに分けて、物語における日本語と中国語の文脈指示を対照させている。さらに分析対象に選んだ物語を（ⅰ）「導入部」（ⅱ）「展開部」（ⅲ）「終始部」（ⅳ）「コメント部」[14]に分類し、（ⅰ）「導入部」では「話し手が全面的に保有している情報となる。この情報量の格差がもたらす結果として、日本語も中国語も話し手がこれを『近い』と捉え、一般にコと“这”で指すのが自然である」。（ⅱ）「展開部」では「話し手と聞き手に共通する言語文脈領域に登録されている談話指示子はもはや話し手の専有物ではなく、聞き手も自由にアクセスできる情報と見なされる…日本語ではソが圧倒的に多く用いられ、コの割合が低い。これに対して、中国語では“这”と“那”の割合がほとんど同じである」。（ⅲ）「終始部」では「すでに話し手と聞き手に共有されているこれまでの物語をまとめる包括的なトピックを指し示すため、コと“这”が用いられやすい」。（ⅳ）「コメント部」では「聞き手との共通の物語空間から独立した存在であり、作者である話し手による一種の『間接話法』と捉えることもできる。この場合は話し手は指示対象を『近い』と捉え、コと“这”は用いやすい」と述べている。

しかしながら、劉驫（2012）の例の訳は全て劉驫によるものであるため、日本語の原文と中国語の訳文、中国語の原文と日本語の訳文をそれぞれ対照させていないため、以上の（ⅰ）～（ⅳ）の4つの枠組みで日中指示詞はどう対応しているか解明していないと言える。例えば、（ⅰ）「導入部」では日本語の物語の原文なら「コ」系指示詞を用いるところを、その訳文では“这”に訳されるかどうかは言及していない。ほかの3つの枠組みも同様の問題が存在している。

1.6 本研究の立場

指示詞の使い方については上述したように日本語の先行研究にいくつかの分類法があるが、本研究は日本語教育に応用できる中国人の学習者への指導を前題とするため、現場指示用法と非現場指示用法この 2 つの大きな枠組みに分類する。目の前にある物を直接に指す場合は現場指示用法、そうでなければ非現場指示用法と定義する。さらに堀口（1990）の説を援用し、非現場指示用法に「自己の観念に存在する事物を他に明示することなく指示するものである」観念指示と指示の対象とするものが文脈の中に明示されてある文脈指示、「場所・時間に関するもので、常に特定の対象を絶対的に指示する」の絶対指示用法を定める。また、田中(1981)に沿って、文脈指示に先行詞と照応詞との位置関係によって、「文脈の中で先行詞が照応詞に先行する照応を前方照応(anaphora)」と、「先行詞が照応詞に後行する照応を後方照応(cataphora)」とに分類する。【表 1-5】は本研究における指示用法の分類を示したものである。

【表 1-5】本研究における「コ・ソ・ア」系指示詞の指示用法の分類



以下のように例を取り上げながら、【表 1-5】に示した指示用法を説明する。(32) は文脈指示用法、(33) は観念指示用法、(34) は絶対指示用法である。

【現場指示用法】

(43)A:「**これ**は何という花ですか。」

B:「**それ**は椿と言います。」

【非現場指示用法】

(44)甲：駅前に、新しいレストランがあったでしょう。

乙：ええ、ありましたね。

甲：こんど、**あそこ**へ行ってみましょう。

(45)木村さん、例の**あの**件、どうなっているの。

(46) 吾が岡のおかみに言ひて降らしめし雪のくだけし**彼所（ソコ）**に散りけむ

（堀口 1978：147）

上述したように、日本語の学習者が把握にくい非現場指示を本論文の研究対象とする。先行研

究の成果に基づき、日中対訳作品を例に対照研究を通して、非現場指示という枠で日中指示詞が対応しやすい、対応しにくい、対応できない条件を見出す。これに関連して指示詞の省略現象も視野に入れ、両言語の指示詞がどの環境で省略されるのかを比較する。また、中国語の指示詞は日本語の指示詞と同じく、陈玉洁(2010)の基準にそって発話の現場の事物などを指す現場指示（deixis）とそうでない非現場指示にわけ、吕叔湘(1985)の「回指」と「前指」用法を援用し、中国語指示詞“这 / 那”がそれぞれ日本語の指示詞に翻訳された例を比較する。そして、日本語の教科書を対象として用法別に指示詞の全数調査を行う。調査対象となった教科書の指示詞の導入、提示順、指示用法の提示率、練習問題の設定など、あらゆる面から指示詞の教科書における提示状況を把握する。本研究では日中指示詞の異同を明らかにしたうえで、教科書の調査の結果と統合し、日本語教育と結びつけ、教材作成に生かす。

注

第 1 章

1) 日本語記述文法研究会（2009：30）は言語文脈指示について以下のように定義している。

言語文脈指示とは、言語文脈が参照されて行われる指示のことであり、指示対象は、談話の中の言語化された部分、すなわち言語文脈の中から探し出すことができる。

2)「回指（anaphora)」とは文章に用いられる指示詞の指示用法であり、指示詞“这/那”は先行詞と照応関係を持つ。これは本研究で援用した吕叔湘(1985)の「回指」とは異なる。

3)「直指」とは談話に用いられる指示詞の用法であり、現場にあるものを指し示す。

4、5) 篇章直指（text deixis）と「 篇章回指（text anaphora)」とは中国語指示詞の指示用法であり、直指と回指の間に存在する。

6) 中国語の指示詞“这/那”が持つ意味合いは次第に虚化しており、他の言語に見られる定冠詞の働きと同じように見なすことができる。

7) 朱德熙(1995：49)は、「時間詞とは“在(…に)、到(…に、まで)到等(…まで待って、になって)”の目的語になり、且つ“这个时候(…このとき)那个时候(…あのとき)”を用いる指示することのできる体詞である。」と述べている。

例：今天(今日)、星期一(月曜日)、上星期(先週)

8) 陈玉洁(2010：21)では “指示存在于言谈场景中的对象。（会話のシチュエーションに存在する対象を指す）”用法は「deixis」と称しているが、日本語の指示用法と統一するため、本論文では現場指示と翻訳し、節のタイトルとして用いる。

9) 陈玉洁(2010)は照応指示用法を「anaphoric」と呼んでいる。「anaphoric」は前方照応指示にも翻訳することができるので、“回指（anaphora）”用法と区別するために、本節のタイトルは照応指示とする。

10) 学習者のアンケートについての詳細は邱麗君（2010）の共同研究〈外语中母语迁移现象的研究〉河南省社科联 、河南省经团联调研课题（SKL－2010-1432）と邱麗君（2011）〈第二语言习得中误用原因的调查研究〉《河南广播电视大学学报》第 1 期に詳しい。

11) 芦英順（2005a）では長期記憶は以下のように規定する。

照応（既知指示）においては、指示対象が具体的に実在するというより、頭の中に概念とし

て存在し、それを指し示される。頭の中に概念として存在するとは、世の中に関する知識として知っているということとおおよそ同じであり、この場合の知識は一時的なものではなく、長期にわたって保存されている知識で、頭の中にある知識や情報の貯蔵庫にずっと（忘れでもしないかぎり永久に）保存されていると見なされる。

12）東郷（2000）によると談話モデルの領域を指す指示詞は「共有知識領域」は「ア」、「発話状況領域」は「コ・ソ」、「言語文脈領域」は「コ・ソ・ア」と定義している。

13）劉驫（2009）では吕叔湘（1985）の「前指」用法を「後方照応指示」と呼んでいるが、吕叔湘（1985）の「前指」用法の日本語の訳語で、ここの「後方照応指示」と「前指」は同一概念である。

14）劉驫（2012）では（ⅰ）「導入部」（ⅱ）「展開部」（ⅲ）「終始部」（ⅳ）「コメント部」に関しては以下のように定義されている。

導入部とは、話し手によって新しい情報が談話に導入される部分である。この導入部では、登場する人物や出来事に関する情報が導入されるのみ、詳細な説明が行われない。次の展開部とは、導入された情報が詳しく展開されていく部分である。例えば、時間軸に沿って物語本体が展開される部分はこれに当たる。さらに、終結部とはこれまで展開された情報をまとめる部分である。導入部、展開部及び終結部は談話の内在的な部分である。最後のコメント部は、話し手の立場から情報に対してコメントをする部分であり、内在的な部分から独立した外在的な部分である。導入部、終結部及びコメント部は基本的には物語の時間の流れを持たないのに対して、展開部は時間の流れを持つ。

第2章　日中指示詞の非対応について

第1章に述べたように日本語の指示詞に関する研究は膨大な蓄積があり、急速に発展している。それに対して中国語の指示詞に対する研究が少ないため、質・量ともに日本語の指示詞に及ぶところではない。それが原因か今まで目に触れる日中指示詞の対照研究、特に「コ・ソ・ア」と“这”“那”が対応していない研究は、そのほとんどが日本語の指示詞に着目して中国語の指示詞と対応しているかどうかを論じている。逆に中国語の指示詞が日本語の指示詞と対応していない原因を探る研究は稀である。

従来、中国語の指示詞“这”は日本語の近称「コ」系指示詞、“那”は日本語の中称・遠称指示の「ソ・ア」系指示詞と対応することが多いと認識されていた。しかし、実際に調査[1)]すると“这”“那”は指示用法により、日本の指示詞と対応しない例はあまたあることがわかった。本章では、中国語の小説及びその訳文から抽出した中国語の指示詞と日本語の指示詞が対応していない例に焦点を当てて、中国語文で指示詞が用いられていても日本語の訳文には訳されず、中日で対応していないケースを中心に考察を行い、その対応しない原因を究明する。以下の用例に記した「*」は不自然な日本語か、あるいは間違っている日本語であることを示す。

2.1“这/那”の指示機能の虚化

吕叔湘（1982）によれば、“这”や“那”は前文に述べてあるか、あるいは述べていないが話し手と聞き手が共に知っている人物や出来事を指す場合と、“这”と“那”がそれぞれ近称・遠称の区別がはっきりしない場合は近称・遠称ではなく、中性指示詞と類似すると説明がなされている。

吕叔湘（1985：188，202）では、以下のように論じられている。

> “在这和那并不对举的时候，这的近指性和那的远指性都会弱化而近于中性。”“这和那不并举的时候，只是指示一个以别于其余，力量就比较差了点。要是完全没有区别的作用，就是弱化的这、那，跟有冠词的语言里的冠词相当。”
>
> 「“这”と“那”が語意的に対になっていない場合に（共に使用していても）、“这”の近称機能と“那”の遠称機能は弱化し、中性指示に近づく。」「“这”と“那”が語意的に対になっていない場合は（共に使用していても）、一つの対象を他から区別するだけで、指示機能はやや低下する。完全に区別の役割が働かなければ、弱化した“这”と“那”となり、その機能は定冠詞に相当する。」

さらに、吕叔湘（1990）は方言の指示詞の二分・三分法も指示詞の指示機能が弱くなっている証であると述べている。共通語と異なり3系列の指示詞を持っている方言には近称の“这”と遠称の“那”以外に中性指示詞が存在している。その中性指示詞は近称指示詞か遠称指示詞が虚化したものである。吕叔湘（1982，1985，1990）などの先行研究から現代の指示詞“这”・“那”の指示機能は本来の役割より弱くなり、「虚化」現象が出現していることを示唆している。

本論では吕叔湘の観点を支持し、指示詞の「虚化」を以下のように規定する。指示機能の虚化

とは指示詞“这/那”が非現場指示の文で指示機能が低下し、定冠詞と同等の役割を担ったり、指示以外の機能と共起したりする際に、指示機能が弱まることである。

指示機能が虚化した中国語指示詞は「コ・ソ・ア」系指示詞と対応しているかを検討し、さらに中国語指示詞の研究では用いない観念指示用法と絶対指示用法の概念における日本語指示詞と“这”・“那”との対応状況を観察したい。

2.2 接続機能の発達による非対応

“这/那”の接続機能が発達している文は主に2種類ある。a.前文に述べた事に対する評価の対象や根拠が来て、後文は前文についての判断と結論を示す文。すなわち、前文は後文の原因や理由になるので、前後文は因果関係を持っている。b.前文と後文は因果関係ではないが、前文の内容が後文の根拠になる文。その際に使用された“这/那”は指示詞だが、接続機能が発達しているため、指示機能をほとんど失っている。この“这/那”は日本語の指示詞と対応しにくいが、日本語にも接続機能をもっている指示表現があるため、対応している場合もある。用例を取り上げながら、分析を行う。

(1) 回来我跟小彬说起怀月儿还记得他给了她一块钱的事，小彬说“有这回事吗”，却怎么也想不起来了。…我说怀月儿家就住在芦根沟门上。“芦根沟？沟门上？”我说怀月儿的大就是张富贵。**这**下他才想起来。《插》

(1’) 北京に戻って、懐月児が一元もらったことをまだ覚えていると小彬に話すと、「そんなことあったかなあ」とどうしても思い出せないようだった。…懐月児の家は蘆根溝の入口にあると話すと「蘆根溝？入口のところ？」と訊く。懐月児の父親は張富貴だと言うと、彼はようやく思い出した。〔大地〕

(2) 可不，别人给他介绍了四五回对象，全是第一面就吹了。至于人家一听说是矿工，连面都不见的，**那**就没数啦。《丹》

(2’) まったくその通り、四、五回見合をしたこともあるが、いずれも一度会っただけでだめになってしまった。坑夫と聞いただけで相手が会おうとさえしない例は枚挙にいとまがないほどだ。

〔鳳〕

(1)の“这”は前文に書かれた“我说怀月儿的大就是张富贵（懐月児の父親は張富貴だと言う）”を指し、それが原因で小彬はようやく思い出したという結果を引出し、文と文の繋がり機能を果たしている。要するに“这”を用いることによって、前文と後文が緊密に繋げられ、(1)の“这”は指示機能より接続機能のほうがより働いている。日本語には「それが」・「それなのに」・「それだけに」・「それでなくても」などの指示詞を語基として含んでいる表現[2)]があるが、ほかの指示詞と関係がない「から」・「ので」・「しかし」など接続表現が数多くあるため、(1)の“这”のような用法は日本語の接続機能を持つ指示詞[3)]と一対一の関係で対応するとは限らないと予想される。

(2)の“那”は(1)の“这”と同じく接続機能が非常に強く、指示機能は虚化している。そのうえ、指示機能が不明瞭でも問題にならないので、訳文では日本語の指示詞は訳されていない。こ

こで注目しておきたいのは、“这”と“那”は接続機能が強いが、一方で指示機能も完全には失われておらず、それぞれ前文の内容を受けている。即ち、これらの“这”と“那”は接続機能を備えていながら本来の性質を残している。

(3) 辛师傅过去也是个老走窑的，少不了那份幽默劲儿，“**那**你说咋办吧我这就准备绳子，你指点着，相中哪一位了，后半响我给你捆一个回来……”《丹》

(3') この辛親方もずっと坑夫をやってきた男だ、彼ら特有のユーモアを忘れちゃいない。「俺にどうしろと言うんだ。縄をさがしてくるから、おまえの気に入った娘を選ぶがいい、あとでひっくくって連れてきてやるさ……」〔鳳〕

(4) “甭做鬼脸儿！**那**我也得揭发你！……”乔奶奶又转脸对孟蓓说……《丹》

(4') 「そんな顔をしたってむだだよ、どうしたってあんたのことを暴露してやるんだから」喬婆さま、今度は孟蓓の方を向いて言った。〔鳳〕

(3) の“那”は前文に書かれた「坑夫と聞いただけで相手が会おうとさえしない例は枚挙にいとまがないほどだ」と関連があり、そのようなことがあってこそ後文の「縄をさがしてくるから、おまえの気に入った娘を選ぶがいい、あとでひっくくって連れてきてやる」と発言したわけである。しかし、文中の“那”は具体的に何を指しているかは不明であり、後文と前文を繋ぐために用いられ、接続機能を果している。要するに (3) の“那”は指示機能が弱く、接続機能が強いと見える。 (4) も同様に前文の「そんな顔をしたってむだだよ」は、後文の「どうしたってあんたのことを暴露してやるんだから」と明確な因果関係ではないが、婆さんは相手がそのような顔をしていることで発話中“那”を用いたと考えられる。ここの“那”は、前文と後文を繋ぐための接続だと判断できる。このような指示機能が衰え、接続機能やほかの機能が発達している指示詞は日本語の指示詞と対応しにくい。 (3') と (4') では指示機能が虚化している“那”と対応する指示詞を訳出していない。

【表 2-1】　連接関係の類型と主な指示詞

	連接関係	接続機能を持つ「ソ」系指示詞	接続機能を持つ「コ・ア」系指示詞
1	順接型　①→② 前の内容から当然予想される結果を後に述べる。	それで・そこで・そのため・そういうわけで・その結果 それゆえに・それなら・それでは・そうしたら・それには	こうして
2	逆接型　①Z② 前の内容から予想されることに反する内容を後に述べる。	それなのに・そのくせ・それにもかかわらず・それが	
3	添加型　①+② 前の内容の同類や例挙を後に述べる。	そして・そうして・それで・それから・そのうえ・それに そればかりか・それも	
4	対比型　①⇔② 前の内容の対照や比較を後に述べる。	それに対して・そのかわり・それとも	
5	転換型　①↓② 前の内容から転じた別個の内容を後に述べる。	そもそも・それでは・それはさておき・それにしても それはそれとして・それはそうと	

(佐久間1990:19を参照)

本章で定義した接続機能を持つ指示詞は【表 2-1】に示したようにほぼ「それで、そこで、そ

れから」などのような2語以上の複合であり、即ち「それ＋…」、「そこ＋…」などからなり、「この・その」など一般的な指示詞と異なる。そして、「そこで」は因果関係を示す順接、「そうして」は列挙を示す添加など、それぞれの接続関係が明確になっている。一方、中国語の接続機能を持つ指示詞は語形からみると一般的な指示詞と変わらない、日本語ほど因果関係を持たず、前文は後文の根拠という程度の関係を表すに過ぎない用法もある。即ち、指示詞の語形からみると日本語の指示詞は中国語より、接続詞に近い。機能からみると中国の“这/那”の接続機能の発展は日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞より遅れていると見られる。よって、接続機能に関しては“那”の接続機能は「そこで」などの接続機能を持つ日本語の指示詞よりも弱いと言える。以下の式で表すことができる。

接続機能を持つ“那”＜「そこで」など接続機能を持つ日本語の指示詞

接続機能のずれが、日中の接続機能を持つ指示詞が一対一[4)]に対応できなくなった一因となっているのであろう。また、中国語文では「虚化」の“那”は指示機能を持つ“这”と共起する場合があり、“那”の指示機能がほぼなくなっているので日本語の指示詞と最も対応しにくい。

(5) 丈夫看见妻子没有准备晚餐
丈夫：“不会是为了昨天的事还在生气吧。”
妻子：“不是。”
丈夫：“**那这**是为了什么。”
(5’) 夫は妻が夕食を用意してくれなかったことに気づき
夫：「昨日のことでまだ怒っているんじゃないだろう」
妻：「ううん↗（いいえ）」
夫：「(それは・※これは・※あれは)じゃ、どうして」
（作例）

(6) 男子的条件中，有时还要对方具有经济生产的能力，这个问题就更大了。我知道有许多职业妇女，在结婚之前，总要百转千回的考虑。倘若她或不幸而被恋爱征服，同时又对事业不忍放弃，**那这**两股绳索就会把她绞死！ 《关》
(6’) 相手方が経済力をもっていることを男が条件にすると、問題は深刻になる。仕事を持っている女のひとのほとんどは、結婚前には考えすぎるほど考えこむが、不幸にも恋に落ち、しかも仕事をやめたくないときには、恋と仕事の両方から引っぱられた縄で首をしめられ、息が絶えることになりかねない。〔女〕

(5)では指示詞“那”＋“这”は対になって使用され、“那”の指示機能は低下し、接続機能が増大するが、“这”は非現場指示であり、恋と仕事を指す。一方、日本語の訳文では「ソ系＋コ系」の指示詞では訳されず、「ソ」系しか使用できない。即ち(5)の「それ」は“这”を訳したもので、“那”は訳されていない。本来日本語では、中国語のように指示詞「これ＋それ」ある

いは「それ＋これ」は使用できない[5]。このことから、「虚化」の“那”が“这”と共起する場合、この“那”は日本語の指示詞と対応できないと考えられる。(6)も(5)と同じ使い方だと理解できる。

また“这”も“那”と同じく接続機能があるが、“那”ほど発達していない。それは“这”はそもそも近称指示であり、近い事物を指し示す場合に明確な目標がないといけないので、「虚化」になりにくいからである。

(7)这里的环境是安谧的，空气是柔和的，这里没有斗争，没有喧嚣和呼喊，人们默默地读着书，谁都是互不相扰。于是，每每当他心情极端恶劣时，他就到这里埋头坐上几点钟，厚厚的线装书一翻就什么都忘掉了。而且如果能够在某一种书籍中，某一些章句中，找到了可供参考的有用材料，**那**他就更加欢喜更加得意地忘掉了一切烦恼。《歌》

(7”)ここの環境は静かで、空気はなごやかだった。ここには闘争がなく、喧噪もいい争う声も聞えず、人びとはただ黙々と読書をつづけ、互いに相手の邪魔をしなかった。だから気分がすぐれないときには、きまってここへ来て、数時間読書に熱中した。ぶ厚い和綴じ本のページをめくっていると、すべてを忘れることができた。おまけにどれかの書物、どこかの章に、参考になる有益な材料を発見したときなどは、嬉しさと得意で、なおさらすべての悩みを忘れてしまうのだった。〔歌〕

(7)の“那”は前文の内容を受け、後文の内容を引き出している。訳文では日本語の指示詞と対応できず、訳されていない。ここでは指示詞を使用せずとも全文の内容に差し支えないため、訳さていない。日本語の指示詞は語形から機能まで中国語の指示詞よりも接続詞に近いため、接続機能が発達して「虚化」になった中国語の指示詞“那”は日本語の指示詞と対応しにくく、訳される場合には、指示詞を省くか、ほかの言葉に言い換える。一方、日本語文では次のような例を取り上げられる。

(8)単にこればかりではない。贔負目は恐ろしいものだ。清はおれを以て将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。**その**癖勉強をする兄は色ばかり白くって、とても役には立たないと一人できめてしまった。〔坊〕

(8a)不单这些，偏心是可怕的。阿清一味认定我将来会成为了不起的大人物，而对用功读书的哥哥，则断定他只长着一副白净的面孔，到头来不会有多大的出息。　《哥①》

(8b)还不只是这样，所谓用偏心眼看人，那可是不得了的。清婆早就认定俺将来一定会大富大贵，成为一个大人物；相反，对于用功读书的俺哥，她却独自认为只不过是长得白嫩嫩的，决不会有什么出息。《哥②》

(8c)你拿她有什么办法呢！问题不仅如此，偏见实在可怕。阿清婆一心认定我将来会飞黄腾达，成为一个了不起的人物。相反，对于用功读书的哥哥，却断言只是皮肤长得白，其实并不中用。《哥③》

(8)の「その」と「くせ（癖）」は共に用いて、「単にこればかりではない。贔負目は恐ろし

いものだ。清はおれを以て将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。」という前述の事柄を受けて、それと相反する事柄を導く。三つの中国語の訳文ではどれも指示詞を使用していないが、(8a)は転折を表す“而”、(8b)と(8c) は転折を表す“相反”を用いている。ここでの「そのくせ」は日本語の指示詞「その」の指示機能よりも接続機能のほうが強く働き、中国語の指示詞“这”と“那”は接続機能が日本語の指示詞より弱いので、ここでは指示詞ではなく、接続詞“而”あるいは逆接を表す“相反”を用いたほうがいいと三人の訳者が各々判断したのだろう。

2.3 副詞的用法による非対応

日本語の指示詞では「こんな・そんな・あんな」で程度を表すが、中国語の指示詞では主に“这么(zhè me)”と“那么（nà me）”が程度を表す。吕叔湘(1982)は、“这么”を指示程度、指示方式、指示数量に大別している。また“这么/那么”と同じように程度などを指し示す指示詞に“这样(zhè yàng) /这么样(zhè me yàng)/这么着(zhè me zhe)”と“那样(nà yàng) /那么样 nà me yàng)/ 那么着(nà me zhe)”がある。

劉月華他 (1988) によると、中国語の指示詞“这么/这样/这么样、那么/那样/那么样”は性質、方式、程度を代称、限定しているという。ところが、実際にこのような指示詞は指示機能が既に低下し、程度などを表す副詞に近い現象が見られる。例文を示しながら分析していく。

(9) 卖饭的①也②就③**那么**几个姑娘，想买饭，又不想碰上哪一位，这是不可能的。何况辛小亮根本没想到孟蓓会成心治他。《丹》

(9') 食堂のカウンターはこれら幾つかの窓口があるだけで、そこで働く娘たちもほんの数人しかいないので、ご飯やおかずが買いたければ、あの娘と出くわさないわけにはいかなかった。 〔鳳〕

(9) では③“那么”は“几个”を修飾し、数がとても少ないという意味を強調し、主に何かを指すために用いるわけではないので、指示機能があるが副詞の機能にも見える。①“也”と②“就”は範囲副詞であり、“也”は“卖饭的”を限定し、“就”は範囲を“那么几个姑娘”に限定している。“也就”と“那么”はともに“卖饭的几个姑娘”を限定、修飾し、話し手の縄張りにある情報を述べる際に“那么”で“几个姑娘”を指し示している。よって、指示詞“那么”は二役を担っていて、日本語訳では主な役割である副詞機能のみに訳され、“那么”と対応する日本語の指示詞は使用されていない。

(10) “他吃了**那么**多的苦，你总不能否认吧？”我争辩，不是为奚流，而是为自己。《人》

(10') 「あの人がどれだけの苦しみをなめたか、あなただってそれは否定できないでしょう?」私は言い返した。奚流のためではなく、自分のために。 〔人〕

(11) 她的脸隔着铁栏离我**那么**近，我甚至能感到她说话时扑来的温馨气息（後省）。《梦》

(11') 彼女は柵にぎりぎりまで近づいて腰をかがめたので、その息づかいまで感じとれた。〔夢〕

(12) 看到我笑得**那么**开心，牛牛他们都莫名其妙地愣住了。《梦》

（12’）私が晴れ晴れと笑うのを見て、三人はビクっとした。私は急いで説明した。〔夢〕

(10)(11)(12)では指示詞“那么”を用いているが、日本語の訳文では訳されていない。(10)の“那么”は日本語の指示詞と対応しておらず、「どれだけ」に訳されている。(11)の“那么近(そんな近い)”は前に比較する事物―「私」があるため、完全に「虚化」になっておらず、指示機能がまだ残されている。(12)“那么开心(そんなうれしいい)”の“那么”は副詞に近く、程度を表す。三つの例の共通点としては “那么”は動詞、形容詞を修飾して、程度あるいは方式を表し、指示機能はほとんど果たさず、副詞の機能のほうが働いて、文中で副詞性修飾語、連用修飾語になっている。吕叔湘(1982)に述べているように「“那么”＋形容詞・形容動詞」の場合は「虚化」になる可能性が高い。「虚化」になっている“那么”は日本語に訳された場合、指示詞と対応しにくく、「なんと」のような感動詞や「どれ」のような感嘆詞、あるいは形容詞、副詞として訳されることが多い。また日本語では副詞や、擬音語、擬態語が中国語のそれより豊かで、それは程度などを表す場合によく使われている。よって、指示詞“那么”は(11’)(12’)では訳されず、日本語の擬音語や擬声語で訳されている。次の例は“这么/那么”の特別な用法で、「“有(象/像)…“这么/那么”＋形容詞・形容動詞」の構造である。この構造を用いた用例の“这么/那么”は日本語の指示詞と対応しているかを考察する。

(13) 那时我几岁？八岁吧？我不象父亲**那么**“迂”，没有对环环这么做。《人》

(13’) あのとき、おれはいくつだったろう。八つじゃなかったか。おれはおやじのように「時代遅れ」ではないから、環環にこんなまねはしなかった。〔人〕

(14) “不会行三拜九叩礼，你放心！当然喽，也不敢象你**那样**摆架子。”《人》

(14’)「三拝九拝したりするわけないじゃないの。心配するなよ。もちろん、君みたいにそっくり返るわけにもいかなかったがね」〔人〕

(15) 我已经忘却了怎样辞别他，回到自己的寓所。我知道他是不说谎话的；子君总不会再来的了，像去年**那样**。她虽是想在严威和冷眼中负着虚空的重担来走所谓人生的路，也已经不能。她的命运，已经决定她在我所给与的真实——无爱的人间死灭了！《彷》

(15’) どうやって彼のもとを辞し、どうやって自分の家に帰ったか、いまでは思い出せない。彼が嘘をつく人間ではないことは、僕も知っている。子君はもう、去年のように、再びやってくることはないのだ。厳しさと冷たい眼にさらされながら空虚の重荷を負うて、いわゆる人生の道を歩もうにも、もはやできないのだ。彼女の運命は、僕の与えた真実――愛なき人の間で死ぬことに決定づけられていたのだ！〔彷〕

(16) 天色愈阴暗了，下午竟下起雪来，雪花大的有梅花**那么**大，满天飞舞，夹着烟霭和忙碌的气色，将鲁镇乱成一团糟。《彷》

(16’) 空模様がだんだんあやしくなってきて、午後にはとうとう雪になった。雪は、大きいのは梅の花ほどもあて、空一面に舞いおどり、それが煙りのもやと、せわしげな気分と入りまじって、魯鎮をてんやわんやにさせていた。〔彷〕

(13)(14)(15)(16) では“那么”“那样”を使っているが、訳文では比喩、比況を表す「ように、みたい」で示されている。高芃（2006）では物事の様子を表現するときに用いる「X は Y の

ようだ」の表現は、中国語では「X 像 Y 那样」で表現すると述べている。中国語では“那么”“那样”を使わないと‘我不象父亲 “迂” ’と“也不敢象你摆架子”、“子君总不会再来的了，像去年”、“雪花大的有梅花大”となり、非文になる。即ち、“那么”“那样”は修飾語であると同時に指示の役割もある。それを省略すると何を指し示しているのか不明確になる。また（13）～(16）の指示詞“那样”は前文の情報を受けながら、前にある事物と比較する比喩[6)]機能も備えている。例えば（15)の“那样”を用いることによって、話し手は去年と同じようにという情報を伝える。去年の様子は話し手と聞き手の間で共用されている情報なので、「去年」を持ち出すことによって、話し手が持つ新しい情報は聞き手と共有されることになり、聞き手に新しい情報に対する共感意識を持たせる。

一方、日本語の指示詞には比喩などのような機能がないため、訳文では「…ような」で訳されている。また、日本語では副詞や、擬音語、擬態語が程度などを表す場合によく使われ、指示機能が低下した“那么”“那样”が表している意味を、日本語は「ように、みたい」だけで表現できない場合、副詞、擬音語、擬態語などを用いることで、あえて「こんな・そんな・あんな」を使わなくとも済む。これも中国語の指示詞“那么”“那样”と日本語の修飾を表す指示詞が対応できない原因の一つであろう。

また、（13）と（14）では“象…那么 / 那样”は“象…一样”と置き換えることができるが、前者のほうは程度を修飾する役割を担うが、後者では修飾する機能は見られない。よって、中国語の指示詞“这”と“那”の指示と代替の機能が弱化しつつあり、主として比喩表現に現れる“象…那么/那样”のフレーズでは間接的に指示と代替の働きをしながら、程度を表す副詞の役割を担っている。“这”系は近称なので常に特定、“那”系は遠称なので非特定的な指示対象を指示する。比喩、比況を表す間接的な指示対象は通常特定されにくいため、“这”より“那”系のほうが多く用いられると考えられる。次に取り上げた例は“这么/那么”を数量詞の前に置いて時間などを修飾する用法である。

（17）白流苏冷笑道：“三哥替我想得真周到！就可惜晚了一步，婚已经离了**这么**七八年了。依你说，当初那些法律手续都是糊鬼不成？我们可不能拿着法律闹着玩哪！”《倾》

（17’）白流蘇は冷やかに笑って、「あら三兄さん、ずいぶん気をつかってくれるのね。でも残念ながら手遅れだわ。離婚してからもう七、八年になるのよ。兄さんの言うとおりなら、あのときの法的な手続きはまったく意味がないってわけ?法律を玩具にするのはいけないわ!」

〔傾〕

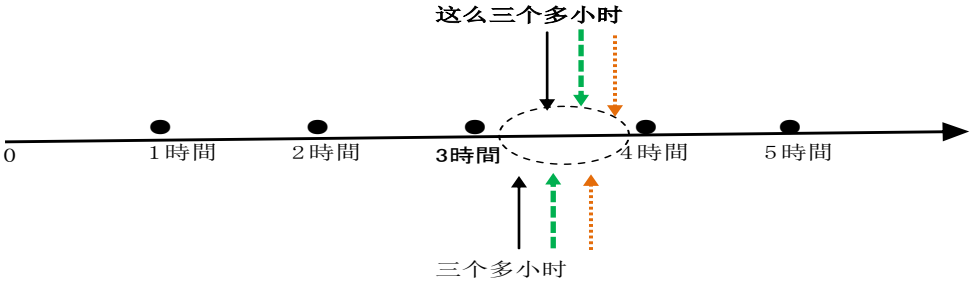
（17）の“这么”は七、八年を修飾し、主に時間が長いことを強調している。日本語の訳文では「もう七、八年」に訳され、副詞「もう」を使用することによって、現状は予想の基準時間を超えているという話し手の気持ちを表している。ここでの“这么”の指示機能は弱く、省いて“婚已经离了七八年了”としても非文にならない。よって、日本語の訳文では指示詞を使用せず、副詞のみが訳されている。さらに（17）の“这么”が日本語の指示詞と対応しない原因は、中国語文では“已经(もう)”と“这么”が共起して「副詞＋指示詞」の形で副詞と修飾を示す“这么”がそれぞれの指示対象を修飾しているが、日本語の訳文では指示詞か副詞かのどちらか１つ修飾

しか用いず、ともに用いることはできないためである。したがって、副詞「もう」のみに訳され、時間が経つのが早いという気持ちを表している。

(18) “这是个好办法。”不等倪藻开口，代表团的其他同志都认为这是可行的，纷纷表示赞成。倪藻虽然对见不到那位老太太颇觉遗憾，但想到有**这么**三个多小时可以放松一点，似乎也恰恰是他所需要的。《人形》

(18’)「それは名案だ」と本人より先に賛成したのは、代表団の他のメンバーである。老婦人に会えないことは非常に残念ではあるが、少々リラックスした三時間余をもつことは、今の自分にとって必要なことに思える。〔応報〕

(18) の“这么”は“三个多小时(三時間あまり)”を修飾し、登場人物にとって“三个多小时”は普通の三時間余りより長く感じることを強調している。三時間あまりという時間の長さは現実には変わらないが登場人物各人の感覚によって、長いと感じる場合もあるし、短いと感じる場合もある。ここでの“这么三个多小时”と“三个多小时”の区別を【図 2-1】で表すと以下のようになる。【図 2-1】で示しているように、同じ時間でも“这么三个多小时”は“三个多小时”より時間が長く感じる。日本語の程度を示す指示詞「こんな・そんな・あんな」はそういうニュアンスを表すことができないため、訳文(18’)では日本語の指示詞は用いられず、ただ「少々リラックスした三時間余」と訳されている。仮に(18’)に「こんな」などを加えると非文になる。



【図 2-1】“这么三个多小时”と“三个多小时”の区別

“这么”と“那么”は中国語文では (18) と (19) のように数量詞と合わせて名詞を修飾するケースがよく見られ、2 種類に分けられる。a. (18) のような時間の長さを強調する役割の“这么”と、b. 下記の (19) のような大体の数量を表すあるいは概数を示す役割の“这么”である。

(19) 由于没有工作，就打算和小王一块儿混**这么**两个月。两个月后的五月份好找工作。(史隽 2011：40)

(19’)仕事がないため、とりあえず王さんとこの二ヶ月ぐらいを無為に過ごそうかと考えている。(ibid.)

(19) の“这么两个月”は二ヶ月ぐらいを表し、史隽(2011)によると、強調を示す“才”“仅仅”

などを文に加えると非文になるため、ここでは強調の“这么”ではなく、概数を示す“这么”と見るべきである。概数を示す“这么”“那么”なら、日本語の訳文では長さや多さなどを強調する副詞に訳されず、指示詞に訳されることが多いと予測できる。

2.4 同格指示による非対応

同格指示とは“我这人(wǒ zhè rén)/他那人(tā nà rén)”、“王明这人(wáng míng zhè rén)/田亮那人(tián liàng nà rén)”のように指示詞が人称代名詞と共起し、一度人称代名詞や人名が指し示した人物を再度指示詞で指し示す表現である。その特徴は一度人称代名詞が指し示した人物などを再度指示詞で指し示す場合、並列関係や所属関係になり、指示詞を省略しても意味に差し支えないため、指示機能が弱くなっていると考えられる。

日本語の指示詞と中国語を対照させると、人を指示する“这”が日本語の指示詞と対応できない例文では、指示詞が「人称代名詞・人の名前」の後ろに付くというタイプが多い。つまり、「PP＋“这/那”」或いは「N1＋“这/那”」である。例文を示しながら説明する。

(20) 经他这一画，我倒发现我们**这**些每日在山上苦的人，却矫健异常，不禁赞叹起来。《棋》
(20') このスケッチを通じて、ぼくは毎日山のなかで働いているぼくらが、並はずれてたくましいことを発見し、おもわず嘆声をあげた。〔棋〕
(21) 孟蓓**这**姑娘可不是那么好惹的。《丹》
(21') 孟は人から軽んじられるような娘ではない。〔鳳〕

(20) と (21) の“我们这～人”と“孟蓓这姑娘”の“这”が、訳文では日本語の指示詞と対応せず訳されていない。上記の例文のように、人の名前と中国語の人称代名詞“你/我/他/她/我们/你们/他们”などの後ろにつく指示詞“这”を日本語に訳す場合は、ほとんど日本語の指示詞と対応していない。

徐丹 (1988) は中国語の指示詞と人称代名詞の関係を以下のように述べている。

> 汉语里的近指及远指指示代词都可以出现在三个人称的后面。三个人称与这/那并列时可具有两种关系：同位关系，所属关系。
> 中国語の近称指示と遠称指示は三つの人称代名詞の後ろに置くことができる。その三つの人称代名詞と“这/那”の関係には２種類がある。並列関係、所属関係である。
>
> (徐丹 1988：129)

楊蕾(2011:3)はこれを受けてさらに人称代名詞と指示詞の関係を詳細に規定した。“这”、“那”と人称代名詞の関係については、“这”は第一人称と第二人称代名詞とのみ使用することができ、同位関係になるが、第三人称代名詞は例外である。

我这个人(wǒ zhè gè rén)　　*我那个人(wǒ nà gè rén)
你这个人(nǐ zhè gè rén)　　*你那个人(nǐ nà gè rén)

他这个人(tā zhe gè rén)　　他那个人(tā nà gè rén)

(楊蕾 2011：3 を一部修正)

徐丹（1988)、楊蕾(2011)によると（17）の“我们”と“这～人”は所属関係、(18）の“孟蓓”と“这姑娘”は並列関係の同位関係だと考えられる。つまり、一度人称代名詞が指し示した人物をもう一度指示詞で指し示す場合、並列関係や所属関係になり、省略してもフレーズの意味に差し支えないため、指示機能が弱くなっていると考えられる。一方、上野（2002）によると、中国語では自身を指して“我这人”、第三者を指して“他那人”という使い方が見られる。“我这人”、“他那人”は日本語に訳すと、せいぜい「わたしという人」「あいつというやつ」ぐらいで、人称代名詞の“我”、“他” と指示詞“这”と“那”両方を日本語に訳すことは難しい。したがって、“我们这～人”、“孟蓓这姑娘”のような指示詞と人称代名詞は所属関係や並列関係になる場合、指示詞の機能が衰え、つまり指示用法は「虚化」するため、日本語の指示詞に訳すことは困難であり、ほとんどが日本語の指示詞と対応しなくなる。

一方、日本語の人称代名詞が指示詞「この・その・あの」と共起している事例も見えるが、中国の指示詞と人称代名詞の共起している場合の語順とは異なる。つまり、日本語の場合は「Dem＋PP」例えば、「この私・その彼・その彼女」のようであるが、中国語の場合は上述したように「PP＋Dem」例えば、“我这人”や “他那人”になる。金水・田窪（1990）は指示詞と代名詞の関係について「与えられた文脈から特定の要素を捜し出し、それを代名詞や指示詞の値、すなわち指示対象とする（中略）例えば、一人称代名詞は発話状況から『話し手』を捜し出し、それを値とする」と述べている。また、最初の佐久間（1936）が人称代名詞と指示詞の関係を論じてから、人称代名詞と指示詞が平行関係を持っている説が広く受け入られている。杉山（2010）はBCCWJ[7]の調査から第一人称と「コノ」、第三人称と「ソノ」との共起が非常に多いという結果を出している。

【表 2-2】人称代名詞と「コノ・ソノ・アノ」

	コノ	ソノ	アノ	合計
私・わたし	146	27	1	174
俺・おれ	74	3	0	77
僕・ぼく	27	3	0	30
第一人称の合計	247（87%）	33（12%）	11（0.4%）	281（100%）
あなた・おまえ	0	6	0	6
第二人称の合計	0	6（100%）	0	6（100%）
彼・かれ	5	140	0	145
彼女	1	29	0	30
第三人称の合計	6（3%）	169（97%）	0	175（100%）

(杉山 2010：67 を一部修正)

【表 2-2】が示しているように、日本語の人称代名詞は「コノ・ソノ・アノ」と共起することが多いが、中国語指示詞と人称代名詞の共起とは本質的に異なる。日本語の場合は「この私」の

ような「この」と「私」を分解できず、接合したまま指示人物を一回のみ指し示す。一方、中国語の場合は、“我这人”は“我”と“这人”が並列関係で、分解しても使えるし、“我”と“这人”はそれぞれ指示人物を指し、合わせて2回同一人物を指している。したがって、日本語には人称代名詞と指示詞の共起現象が存在しても、同格指示ではなく、中国語の指示詞と人称代名詞の共起現象と構造が一致しない。

2.5 同格指示の変形による非対応

同格指示の例と類似するが、指示詞が人称代名詞と共起して、事柄や場所などを指し示す用法も数多く見られる。このような例は本論では同格指示の変形と見なす。同格指示の変形とは名詞（人称代名詞を含む）や名詞文とそれに後接する物事や時間などが同格である場合、指示詞が物事や時間を指す形式である。同格指示の働きと同じく、名詞や名詞文と指示詞で指している事物は並列関係や所属関係になり、指示詞を省略しても意味が変わらないため、指示機能が弱くなっている。同格指示の変形の例文を取り上げ、物事、場所、時間、修飾に分けて分析していく。

PP/NP＋“这/那” ＋N1

(22) 徐太太道：“找事，都是假的，还是找个人是真的。”流苏道：“那怕不行。我①**这一辈子**早完了。”徐太太道：“这句话，只有有钱的人，不愁吃，不愁穿，才有资格说。没钱的人，要完也完不了哇！你就是剃了头发当姑子去，化个缘罢，也还是尘缘——离不了人！”流苏低头不语。徐太太道：“②你**这件事**，早两年托了我，又要好些。”《倾》

(22’)「仕事を探すのは仮のこと、やっぱり人を探すのが本当よ」「それは無理ですわ。①あたしの一生はとっくに終わってしまったんです」「そんなことは何不自由のないお金持ちだけに言う資格があるのよ。お金のない者は終わりにしようたってできないわ。たとえあなたが髪をおろして尼さんになっても、お布施をもらいに行けばやっぱり俗世の因縁は続く―人間から離れることはできないのよ」流蘇はうつむいたまま黙っている。徐夫人が言った。「②あなたのこと、もっと早くにわたしにまかせてくれたらよかったのにね」。〔傾〕

(22) の①と②の指示詞“这”は、それぞれ“我这一辈子”“你这件事”の中に存在し、両方とも「PP＋Dem＋NumCL＋N1」の形になるが、訳文ではそれぞれ①「あたしの一生」と②「あなたのこと」に訳され、指示詞は用いられていない。ここでの指示詞の用法は同格指示の変形である。「PP＋“这/那” 」或いは[N1＋“这/那”]の型で、人称代名詞や人名を示す名詞と指示詞で同じ人物や、事物を二度指示し、限定する。 ①“我这一辈子”と②“你这件事”の第一人称代名詞“我”と第二人称代名詞“你”はそれぞれ指示詞“这”と所属関係である。 (21) と同様、一度人称代名詞が指し示した物を再び指示詞で指し示す場合、指示機能が弱くなり、省略しても意味に差し支えないため、日本語の訳文では「あたしの一生」「あなたのこと」と訳されている。さらに、上野 (2002) によると、中国語の人称代名詞の“我/他”と指示詞“这”と“那”の両方を訳出することは難しいとされている。その場合、人称代名詞の“我” や“他”と指示詞“这”と“那”は、ともに“一辈子(一生)”と“事(こと)”を指し示す“我这一辈子” と“你这件事”も人称代名詞と指示詞の両方を訳出することは難しいだろうと判断できる。もし、強いて訳文に

指示詞を加えた場合、即ち直訳した場合には「あたしのこの一生」「あなたのそのこと」になるが、不自然な日本語である。

(23)抽屉上的**那把锁**好象移到了我心上。我突然感到，妈妈对我是陌生的。一切对我都是陌生的！《人啊》

(23')引き出しの鍵が私の心にかけられたみたい。急にお母さんが赤の他人になったように感じた。なにもかもが他人ごとみたいな感じ！〔人間〕

(24)又是他正在写的**那**本书里的问题。我不用考虑就可以回答：人就是动物，人类的生存竞争比一切动物都残酷，因为他可以定计划，有意识、有目的地去竞争，还可以把自己的低级欲望用漂亮的外衣掩盖起来。但是，我才不愿意研究这类问题，危险呀！《人啊》

(24')こんどは彼が執筆中の問題だ。おれなら考えるまでもなく答えられるさ。人間は動物だ。人類の生存競争はほかのどの動物よりも残酷だ。なぜなら、人類は計画を立て、意識的に、目的をもって競争できるからだ。おまけに、自分の低級な欲望をきれいな外皮でおおい隠す術も知っている。だが、そんな問題の研究は願い下げだ。危険だからな〔人間〕

(23)は(22)と異なり、“抽屉上的(引出につける)”という名詞句で“那把锁”を前から修飾している。いわゆる、一度“抽屉上”で鍵を修飾し、限定しているうえに、指示詞“那”で再び鍵を指している同格指示の変形用法である。ここで中国語文では“那把锁”の“那”の指示機能が強く働いていないため、わざわざ指示詞“那”を用いなくても、どの鍵なのかがわかり非文にならない。それに対して日本語の訳文では鍵を修飾する「引き出し」か、指し示す指示詞か、片方しか使用できないため、指示機能が弱くなっている指示詞を使用せず、「引き出しの鍵」と訳していると考えられる。

(24)の“那本书”は(23)と同じく、“那本书”の前に“他正在写的(彼が書いている)”が来て本を修飾している。その場合、中国語文では“他正在写的(彼が書いている)”で間接的に本を指し、また指示詞“那”を用い、再び本を指している。(24) と(23)のような名詞文で指示対象を修飾し、また指示詞で同じ指示対象を指し示す同格指示の変形の用法は中国語文でよく見られるが、日本語文ではほぼ使用しないため、日本語の訳文では指示詞を使用しなかったり、同じ物事を一回のみ指す形になったりする。

「コ・ソ・ア」＋PP/NP

(25)伊三郎はそれを籠に入れて、自転車に乗って、京都の南部、鳥羽、伏見、久世の村々へ卸していたのである。里子はよく**この**父の仕事場、松脂の煮える鍋に近よって叱られた。〔雁〕

(25')伊三郎把膏药装在框里、用自行车载着到京都南部、鸟羽、伏见、久世等乡村，委托别人代卖。里子常因进入父亲工作的房间，起近煮松脂的锅，而受到父亲的训斥。《雁》

中国語文と異なり、日本語文では(25)のように指示詞は人称代名詞や人を示す名詞の後ろに置く。つまり、一回のみ指示詞の後ろにある名詞を指す。また「この私・その彼・その彼女」のような言い方は中国語の指示詞と人称代名詞が共に指示対象を指す構文ほど頻繁に用いられない。

この2点は日中両言語では指示詞と人称代名詞の共起に関する表現のずれだと言える。(25)の「この」は父の仕事場を指し示すが、中国語訳では誰の仕事場であるかを説明する必要があるため、「お父さん」で限定したので、指示詞で示さなくてもわかる。そして、(25)で相手に伝えたいことは、お父さんに叱られた原因はお父さんの仕事場に入ったことであるので、指示詞を使用せず、お父さんの仕事場であることをはっきりさせれば文の理解に差し支えないだろう。したがって、中国語の訳文では指示詞は使用されていない。

PP/N1＋“那儿”

日本語では「PP＋“那儿”」及び「N1＋“那”＋N2」の場合、文脈によって中国語の指示詞“那儿”は、人称代名詞と所属か並列関係になる。例えば、“可以去她那里住。（彼女のところに泊まってもいいよ。(作例)）”の前文に“那里”が指している場所が現れるなら、“她”と“那里”は所属の関係であり、同格指示の変形の用法である。ここでは第一人称代名詞を第二人称代名詞と人を示す名詞に代えても文は成立するが、その場合は話し手と聞き手が同じ場所にいることが条件になる。具体例を取り上げながら説明する。

(26)(李さんと王さんは鈴木さんの家で遊んでから、家に帰る。途中で李さんは王さんと話している。)

李：明天还去鈴木**那儿**/他**那儿**玩儿吧?

(明日も{鈴木さんのうち ・*彼のあそこ ・*彼のあちら}に行こうか。)

王：你不是没有来过我家吗。明天去**我那儿**吧。

(私のうちに来たことがないでしょう。明日{私のうち・ *私のそちら ・*私のそこ}に来て。)

(作例)

“鈴木那儿”の“鈴木”と“那儿”、“他那儿”の“他”と“那儿”、“我那儿”の“我”と“那儿”などは所属関係であり、同格指示の変形用法である。中国語ではよく用いられるが日本語でそのまま訳すと、「彼のあそこに行こうか」あるいは「彼のあちらに行こうか」のような非文になる。したがって、場所を指し示す“那”を中国語の人称代名詞の後ろに置いて使用する場合、日本語の指示詞と対応せず、訳されていない。

N/NP +“那”+N3

(27) 他停下来，眼睛炯炯地看着余永泽，又转过去看看林道静，口气忽然变得很严肃。“老余，你们两个都是青年人，可不要失掉青年人的锐气！能活动，还是参加些外面的活动。南下**那阵子**，老余，你在北平不是也很激昂吗？” 《歌》

(27')そこまでいうと、目をきらきらかがやかせて、じっと余永沢を見つめ、その視線を林道静のほうに移して、うって変った口調で話しはじめた。「余君。きみたちは、ふたりとも若い。青年の鋭気を失ってはだめだ。活動できるのなら、やはり外部の活動に参加することだ。南下当時、きみだって北平で、とても激昂していたじゃないか」。〔歌〕

(28)在“五一”这个伟大的纪念日**那天**，她又被卢嘉川招呼着去参加了游行示威。开始，她和几个临时集合在一起的人隐藏在天桥附近的小胡同里(中略)剩下他们在小胡同里又串游了一会。　《歌》

(28')「メーデー」、この偉大な記念日の当日、かの女はまた芦嘉川に誘われて、デモ行進に参加したのだった。かの女と、ひとまずそこに集合した数名の男女とは、天橋附近の路地に身をひそめていた。(中略)残された者は、またしばらく、その路地をぶらついていた。〔歌〕

(29)“王伯申现在是县里数一数二的绅缙了，可是十多年前，他家还上不得台面；论根基，我们比他家好多了，不过王伯申的老子实在能干。”于是转脸向着老太太道：“妈还记得**那年**太公开丧，王老相第一次来我们家里，爸爸就识得他日后定能发迹？”《霜》

(29')「王伯申もいまでこそここで一、二の有力者だけど、あれで十五、六年前には、とても町のことに顔を出せるような身分じゃなかったものよ。家柄からいったって、うちの足もとにもよれないし。もっとも、あそこの先代はなかなかのやり手だったけれどもね」そしてお婆さまの方へ顔を向けた。「お母さま、覚えていらっしゃる？お祖父さまのお葬式のときのこと。あそこの先代がはじめてうちに来たでしょう。あの時、お父さまは一目見ただけで、あれはきっと出世するぞとおっしゃったわね」　〔霜〕

“那”が時間を指し示す場合、“那时/那天/那年”などのように時間を示す表現と共に使用することが多く、主に過去や未来のことを指し示す。(27)の“那阵子”、(28)の“那天”、(29)“那年”は全て時間を指し示しているが、訳文では各々「当時」「当日」「お葬式のとき」に訳され、指示詞を使用していない。(27)の“那阵子”は時間を表すことができる固有名詞“南下(南地方に行く)”とともに同じ時間を指し示す。いわゆる再度指示である。日本語の場合はすでに一度指し示したものは再び指さないため、指示詞で訳さず「当時」と訳されている。(28)の“那天”は(27) と類似するところがあるが、(27)より文の構成が複雑である。まず、“五一”は五月一日の省略語であり中国では「労働節」に指定されているので、当然日付も周知されている。(28) の“这个伟大的纪念日(この偉大な記念日)”は指示詞“这个”を使用し、「偉大な記念日」と共に“五一”を指している。最後に“那天”を用いて、再び“五一”を指し示している。したがって、日本語の訳文では指示詞を一回だけ用い、「この偉大な記念日」のようにして五月一日を指しているが、二回目の指示詞は省略され、「当日」に訳されている。(29)の前文“妈还记得那年太公开丧(お母さま、覚えている。お祖父さまのお葬式のときのこと。)”は主にお祖父さまのお葬式の年を説明するため、“妈还记得太公开丧的那年（お母さま、覚えている。お祖父さまのお葬式のときのこと。)”と言い換えている。ようするに、“太公开丧的年”と“那年”は同じ時間を重ねている。よって、日本語では指示詞を使用せず、「お葬式のとき」で時間を示している。

(30)近年来，她越来越感到家务劳动的负担沉重。文化革命那些年，傅家杰的实验室被造反的人们封闭了。他研究的专题也被取消了。他变成了”八九二三部队”的成员。《中年》

(30')この数年、彼女は次第に家事労働が身にこたえるようになった。文化革命の時代には、傅家傑の実験室は造反革命の連中に閉塞され、彼の研究課題も取り消された。彼はいつの間にか、「八九三二部隊」要注意分子の構成員になっていた。〔女医〕

(30”)ここ数年、彼女には家事労働がますます負担に感じられていた。文革中、夫の傅家傑の実験室は造反にあって封鎖され、彼の研究テーマも否定されてしまった。そして彼も「８９２３部隊」。〔中年〕

(30) は (27) 、(28) と同様に“那些年(その年)”の“那”の前に名詞句が置いてある。つまり、“文化革命(文化革命)”はすでに時代を限定しているうえに、再び“那些年”で文化革命の時代を指すという典型的な同格指示の変形である。

徐丹 (1988) は、中国語の近称指示と遠称指示を“你/我/他 (她) ”3 類の人称代名詞の後ろに置くと、その 3 類の人称代名詞と“这/那”の関係は並列関係や所属関係になると述べている。このことを考慮すると (30) は「NP＋“那”＋N3」の構造になっているとわかる。NP が指す期間と“那”が指す期間が一致しているので、“文化革命(文化革命)”と“那些年(その年)”は並列関係か所属関係になる。全文の内容からみると、話し手が指している年は文化革命を最初から、最後までの全ての期間を指しているため、ここでの“文化革命(文化革命)”と“那些年(その年)”の関係は並列関係に当たる。すなわち、一度固有名詞が指し示した時間をもう一度指示詞で指し示す場合、並列関係や所属関係になり、省略しても意味に影響を及ぼさないため、指示詞の指示機能が弱くなっていると理解できる。したがって、(30’) (30”) のように日本語の訳文では「虚化」の指示詞は訳さないことがしばしば見られる。また、この二つの訳文にはどちらも指示詞を使用していないことから例文にある指示詞“那”の指示機能は弱く、話題の焦点はNP (“文化革命”) に移動していると考えられる。

(31) 可是想不到**那**一天结账的时候，他欺负我是外地人，扣了我八十元工钱。钱我倒不在乎，但受不了这口气。我和他争了起来。他动手打我，我也还了手。二百斤重的石头不知背过多少块，还怕打不过他吗？我把他的胳膊扭伤了。《人》

(31’) ところが、労賃を支払う段になって、彼がぼくをよそ者とあなどり、八十元上前をはねたのだ。金はとにかく、ぼくはそのもの言いが腹に据えかね、彼にくってかかった。彼はなぐりかかってきた。そこで、ぼくもやりかえした。百キロの石をいくらもかついできたぼくだ、かなわないことがあるものか。結局ぼくは、彼の腕をねじあげ、怪我をきせてしまった。〔人〕

(31) の“那一天”は“结账的时候” と同定し、並列関係と言える。中国語文では“那一天”は“结账的时候”を指しているが、並列関係なので、指示詞が省略されても意味が通じる。したがって、(31) の時間を指し示す“那”は前の 2 例と同様に指示機能が虚化しているため、訳文では日本語の指示詞を使用せず、“结账的时候”だけが訳され、「労賃を支払う段になって」になってしまう。

修士論文 (邱麗君 2008　未刊行) の調査によると中国語では“那一天，我碰上了他”(あの日、私は彼と出会った) のような単独で時間を表す指示詞を使用する文であるなら、日本語の指示詞と対応する確率が高いが、“那”が前文と所属関係にあるなら対応できない場合が多い。それは一度名詞 (名詞句) が修飾した、あるいは示した時間をもう一度指示詞で指し示す場合、並列関

係や所属関係になり、指示詞の指示機能が弱く、「虚化」している場合は日中指示詞が対応しにくいことと関連があると言える。

2.6 観念指示による非対応

観念指示については、日本は70年代に非現場指示用法には文脈指示用法以外に、観念指示用法も存在していると唱える研究が現れ、その後観念指示の研究はさらに深められている。一方、中国では観念指示用法は正式に認められず、日中指示詞を対照する際に、便宜を図るために、観念指示という分類を行う。中国語の指示詞“这/那”を研究する場合に、観念指示用法を取り上げた文献は管見にして知らない。その理由として考えられるのは“这/那”は話し手の観念に存在している物事を指示する時にも、観念にあるかどうかと関係なく、別の標準で選択されるため、観念指示用法は中国語の指示用法として広まらないのだろう。本節では中国語文の“这/那”が話し手の観念にある事物を指す例を採集し、観念指示用法で用いた「コ・ソ・ア」系指示詞と対応しているかを観察してみる。

(32) 去吧，环环！等爸爸到了**那**一天，你才－－”一滴泪水顺着眼角往下流，我连忙把脸贴紧枕头。《人》

(32') 「もう行きなさい。環環、それはパパが死んでからに――」。涙が一滴、目尻からこぼれた。おれはあわてて顔を枕にうずめた。 〔人〕

(32)の“那一天”は(31)の“那一天”と異なり、具体的な時間を指し示すのではなく、まだ生きているお父さんが将来やってくる死の日を指している。言い換えば、お父さんの頭の中の死ぬ時間を指し、日本語の観念指示用法に当て嵌まる。しかし、中国語文では死ぬ日がいつなのかは聞き手が判断できるものではなく、話し手さえ具体的な日がわからないので、“那一天”の“那”は杨玉玲(2010)が主張している指示用法「汎指」であり、本論の虚化の“那”に当たる。日本語には死者が行くとされる世界、死後の世界を示す「あの世」がある。「あの世」を翻訳すれば、完全に観念指示になる。しかし、「あの世」は場所を指しているが「あの日」は時間を指すため、指示対象が変わり、意味を汲みとった訳文になる。また、「あの世」と“那一天”は「ア」系指示詞と“那”が対応しているように見えるが、【表 2-3】に示されているように、「あの世」は中国語の“来世”と対応している。「あの世」は本来指示詞「アノ+世」から構成されっているが、辞書[8)]によると完全に一語の名詞として現代日本語では定着している。 それに対して“那一天”は指示詞「“那”+“一天”」の用法である。そこで、訳文に「あの世」が使用されていても“那一天”と対応しないと言える。

【表 2-3】「Dem＋世」に相当する中国語の表現

日本語	中国語	日本語	中国語
この世	这世*	今世*	今世
その世	那世*	来世	来世
あの世	那世*		来世

※「その世」は「この世」「あの世」のように一語ではないが、日本語文では使用できる。

また、（31）と（32）が違う“这一天/那一天”の用法が見える。“这一天/那一天”は、通常の時間を指すことができるだけでなく、特別な一日を指すこともできる。その特別な日は話し手自身の観念に存在し、その日どんなことが起きたかを話し手の記憶に蓄えている。しかし、相手に何かを伝わる際に、具体的な日にちを伝えるよりも、どんなことがあったかを伝えることを優先するため、具体的な時間を指さない、「虚化」した“这/那”を用いる。日本語の「ある日」と同じ意味である。次の例文はこういうタイプの例である。

（33） 李老师每天都认真的教课，大家都很尊敬他。这一天，班里来了个不认识的人…

（33’）李先生は毎日まじめに授業を行い、みんなに尊敬されている。

ある日、クラスに知らない人が来た…

（作例）

（33）のように中国語では指示詞「“这/那”＋“一天”」は具体的な日を指すのではなく、不特定のある日のことを指しているので、“这/那”の指示機能が衰えていると見える。具体的な日にちを指していないため、日本語の指示詞と対応しにくい。

2.7 絶対指示による非対応

堀口（1978a, 1978b）では、現場指示や文脈指示などとは異なる用法である絶対指示に着目した。絶対指示には主に手紙など特定な場面に用いられた近称は自分側、中称は自分側に対する相手側を指す「コチラ」、「話し手の存在する時間的位置、つまり現在時を絶対的に指す用法」時間を表す「コノ春・コノ頃」などがある。正保(1981)は堀口(1978a, 1978b)の考えを受け、より具体的に絶対指示用法を定義した。手紙に書かれた「こちらは相変わらず…」の「コチラ」は現場指示と思われがちだが、指で指すわけにはいかないことと、「実際に話し手の居る場所とは関係なく、常に特定の対象を指す」ことから絶対指示として捉えるべきだと主張している。

中国語の指示詞の指示用法には日本語の絶対指示用法と類似している用法はあるが、日本語の絶対指示と対応しない現象が目立つ。堀口（1978a, 1978b）が挙げた絶対指示の「これまで・これから・このごろ・この間・このところ・この夏・ここ数年来・ここ 2、3 日」は、中国語に訳された場合、指示詞“这/那”は用いられない場合が多い。

胡俊（2009）は、中国の時を表す指示詞について考察している。その結果としては、中国語の指示詞“那”は年、月、曜日、日と併用する際、過去や未来を示す。一方、“那”＋天/年”は過去を指し示すのに対して、“这个＋星期/月”は現在を指し示す。また、中国語では“今天”“今年”があるので、“这天”“这年”は現在を指すことができない。“那＋年/月/曜日/日”は発話時間からそんなに離れていない過去の時間を指し示す。それをまとめると【表 2-4】のようになる。

【表 2-4】中国語の指示詞以外の時間を示す表現

過去			現在・未来			未来	
（日本語）	（中国語訳）		（日本語）	（中国語訳）		（日本語	（中国語訳）
昨日	昨天zuó tiān	→	今日	今天jīn tīan	→	明日	明天míng tīan
先週	上周shàng zhōu	→	今週	这周zhè zhōu	→	来週	下周xià zhōu
先月	上月shàng yuē	→	今月	这月zhè yuè	→	来月	下月xià yuē
去年	去年qù nián	→	今年	今年jīn nián	→	来年	去年qù nián

【表 2-4】にある時間を示す表現は田口（2011）では、これをカレンダー用法と名づけている。田口（2011）によると、カレンダー用法とは、日本語の指示詞以外に時間を示す表現である。「日本語の場合、英語の近称指示詞 this が現れる部分を漢語接辞（今こん）が占めており、それが『去』『来』といった接辞と共にカレンダー単位上の順序を表すシステムを形成している」。上述した「今日・今週」など時間を表す表現のように、発話時が含まれる時間単位「日・週・月・年・朝・夜」などを表す際に「この＋N」は出現しないが、「今＋N」は this の機能を担い語彙化させている。詳細は【表 2-5】に示している。

【表 2-5】日本語のカレンダー用法

今朝	*この朝
今夜	*この夜
今日	*この日
今週	*この週
今月	*この月
今年	*この年

（田口 2011 を参照）

このような時間を表す表現では、田口（2011）が唱えたカレンダー用法の「今週」と「今月」は中国語に訳すと中国語の指示詞に訳され、“这周（zhè zhōu）”・“这月（zhè yuē）”になる。

次の例文は、中国語の時間を表す指示詞“这”が、日本語の指示詞と対応しない例である。

(34) “是该休息休息。这个星期天带孩子到北海玩一趟吧！十多年没有去过北海了！”《人》

(34’)「休まなくちゃいけないわね。次の日曜、子どもたちを連れて北海に遊びに行きましょう！もう十何年も北海へ行ってないわね」〔人①〕

(34”)「ほんとに少し休息が必要だわ。今度の日曜日に子供たちを連れて北海公園へ遊びに行きましょうよ。もう十年振りね」〔人②〕

原文では“这”を使っているが、二つの訳文はどちらも指示詞を用いなかった。ここで「この日曜日」或いは「その日曜日」に訳されると非文になるわけである。（34）の場合、中国語では“这个星期天”と“下个星期天”は使えるが、“那个星期天”は使い難い。それに対して日本語の場合、（35）のようにカレンダーを見て実際の日にちを指しながら話す時など限られた場面でのみ使われる。

(35) 話し手と聞き手はカレンダーを指しながら話している。

A:19 日がだめなら、**この**日曜日はどうですか。

B:26 日なら、大丈夫。

(作例)

(35) のように限られた場面でしか「コノ日曜日・ソノ日曜日」は使えないので、(34) の“这个星期天”は、2 つの訳文でそれぞれ「次」と「今度」に訳されている。また原文の“这个星期天”は、現在や近い未来のことを指し、話し手の頭の中にカレンダーがあり今の時間を基準にし、今週の日曜日か来週の日曜日かによって、前者は“这个星期天”、後者は“下个星期天”と使い分ける。一方、日本語では田口 (2011) が主張する時間を表すカレンダー用法で、この問題を解説できる。漢語 (今・去・来) が接辞になり、時間を表す表現とともにカレンダー単位上の順序を表すシステムを形成しているため、カレンダー単位上の順序を表す際、「次の日曜日」や「今度の日曜日」などのように指示詞を用いない。したがって、(34) の話し手は記憶にあるカレンダーを再生しながら、現在の時間とその記憶貯蔵庫にあるカレンダーの時間を比較して発話したため、指示詞は用いられず、「漢字語＋日曜日」に訳されている。

2.8 標識と不定標識から見た非対応

「“这/那”＋ NumCL＋NP」の構造における中国語の指示詞は数・量詞の前に置かれる。劉月華他 (1988) は、「“这”＋数詞＋量詞＋名詞」あるいは「“那”＋数詞＋量詞＋名詞」は、人や事物を代称するか限定すると述べている。この説明は表面的な現象を解釈したのみである。実は指示詞を数・量詞と合わせて使用する場合、標識と不定標識の 2 種に分けられる。中国語の数量詞は数量を示す機能だけではなく、指示機能も持っている。そのため、数量詞の前に置かれた指示詞は「助指」[9]になりやすい。「助指」で用いられた中国語の指示詞「“这/那”＋ NumCL＋NP」は不定標識になり、日本語の訳文では指示詞を用いていない。つまり「助指」で用いられた中国語の指示詞は日本語の指示詞には訳されない。本論では「助指」も指示詞の指示機能「虚化」の一部だと見なしている。

単数指示：“这/那”
単数指示＋単数の量詞：“这/那＋个(gè)/根(gēn) ”
単数指示＋複数の量詞：“这/那＋些(xiē) ”
単数指示＋種類を表す量詞：“这/那＋种(zhǒng) 类(lèi) ”

(36)　明天去公园的**那三位**学生。

(36’) *明日公園に行くその三名の学生。

(36”) 明日公園に行く三名の学生。

(作例)

中国語文は指示詞“那”で三名の学生を指示しているが、“那”は“明天去公园”と共に使用

しないと意味がないため、助指であり、“那”の指示機能の「虚化」だとわかる。日本語で訳すと（36’）のように指示詞を用いた場合、不自然な文になる。（36”）のような訳文が一般的である。

(37) 明天去公园的**那个**学生。
(37’) 明日公園に行く{その・あの}学生。

（作例）

(37) の“那个学生”の“那个”は学生を指示し、標識機能が働いている。“那个”を省いた場合、単数か複数かはっきりしないため、元の意味と相違するので省略できない。また、张伯江・方梅(1995)は北京方言における指示詞“这/那”の指示機能の虚化現象について、以下のように2つに分類にしている。

①“这/那”＋名詞 → ある文脈の中の１つ或いはいくつかの個体を指す
→ 特定指示（individual）
②“这/那”＋名詞 → ある種の人或いは事物を指す → 総称的な指示（generic）。

(36) の“那”は指示対象と同定する必要がないが、(37) の“那”は学生と同定している。つまり、(36) の指示詞“那”における指示の機能は弱くなり、総称的なマーカーに虚化されている。指示詞“那”を用いることによって、話題の焦点を“那”の後にくるN（“三位学生”）に移転させている。また、奥田（1982）によれば、

> 我们可以说数量词组“（一）个”在这个句子里的作用主要并不是表示数量，而是把它后面的成分加以特指化。（中略）这个地位上的数量词组“（一）个”实际上是一种特指化记号。
> 数量詞“（一）个”はこの文における主な役割は数量を表すことがではなく、後に来る言葉を特定指示するためだと言える。(中略) ここの数量詞“（一）个”は特定指示の記号である。
>
> 奥田（1982：60）

上記のように「“这”＋NumCL＋NP」と用いられる際に、“（一）个”のような「数詞“一”＋量詞」の“一”は省略する場合が多い。ここでは“一”を省略しても、その特定指示する機能が変わらない。例を挙げてみる。

(38) **那**是{一}个极其庞大的，有着巨大杀伤力的怪兽。
(38’) **それ**はやたらに大きく、巨大な殺傷力をもった怪獣である。

（作例）

(38) の“一”はあっても、なくても、その意味は変わらない。なぜなら、一匹を示す量詞“个”は特定指示の機能を担っている。ここで“那”が指している動物は普通の動物ではなく、巨大な殺傷力をもったやたらに大きい怪獣を強調するため、“个”を用いていることがわかる。また（37）の

分析に戻るが、(37) の“那个学生”の“那”は指示機能を持っており、“个”は量詞であるが、“(一)个”は奥田 (1982) が主張している特定指示に当たる。したがって、中国語で特定指示として使用されている“这/那+个…”は標識になり、訳文では日本語の指示詞と対応しているが、総称的な指示として使用されている“这/那＋些/种/类”は不定標識に属し、訳文では省略されることがある。

(39) “张大爷，您别着急，我已经查过预约本了，这回该轮到您了。**这**两天，只要有材料，就马上给您做手术，行吧？”《中年》

(39') 「張爺さん、落ち着いてよく聞いてね、私、とっくに予約を取ってあります。この次があなたの番です。二、三日の内に材料さえそろえば、きっと手術をしてあげますからね。いいですか?」 〔①女医〕

(39”) 「ちょっと待って下さい。私、予約ノートを調べてみたんですが、もうすぐあなたの番ですよ。角膜が入手出来れば、一両日中に手術してあげます。それならいいでしょう？」 〔②中年〕

(39) の“这两天”の“这”は、数量詞“两天”と共に時間を指しているが、具体的にどの日を指しているのかを明確にしていないため、指示詞の指示機能の「虚化」である。(39') と (39”) では、どちらも指示詞を使用せず、それぞれ「二、三日」「一両日」と訳されている。“这两天”は、“这天”のような時間を指す指示詞と異なり不定標識なので、指示詞“这”と指示対象は同定していない。よって訳す場合、日本語の指示詞を必ずしも使用するとは限らない。指示詞を訳さず、数量詞のみ訳されているケースが多く見られる。また、中川正之・李浚哲 (1997) も指示詞と数量詞の関係について論じている。その用法を取り上げながら、検討する。

(40) 私の家に猫がいますが、**その**猫が病気になりました。

(40') 我家有一只猫，(**那只**) 猫病了。

(中川正之・李浚哲1997:98、下線は邱)

中川正之・李浚哲 (1997) は (40) について次のように分析している。「日本語では『男・女』など人間を指す名詞を例外として照応的に用いられる場合、普通『その』が必要であるが、中国語では必須ではない。つまり、中国語の名詞は、ごく普通に定的 (definite) であり得る。」一方、中国語文では「指示詞＋量詞」－“那只”を加えても使えるが、日本語の訳文では「その一匹」と訳された場合、不自然な文になる。数詞の機能は不定標識、数量情報、数値、描写など、さまざまな面から認識されている。しかし、「数量詞は基本的な機能が数量の表示であり、他の機能が存在しても、数量表示機能は消え失せない。数量表示機能は他の機能と共存している。重要なのは数字表示機能にもともと指示用法がある」と論じている点である。例を示しながら見ていく。

(41) 老王有三个儿子，(*那) 三个儿子都在外地工作。

(41') 王さんには息子が三人いる。(*その) 三人はいずれも外地で働いている。

(中川正之・李浚哲1997：106)

(41)に示したように、中国語文では指示詞“那”を使用できず、日本語の訳文でも指示詞「その」は用いられない。原文の“三个儿子”は照応的用法で、わざわざ指示詞を使用しなく済むわけである。次の例は(41)と異なり、原文の「三人」は指示機能を持たないため、「その」を使用しなければならないわけである。

(42) この秋の配置転換でK大卒が三人になった。その三人はなにかという結託し、S大卒の私をいじめた。(中川正之・李浚哲1997：106，107)
(42') 由于今年秋天的人事调整，K大学毕业的变成了三个人。(①三个人/②他们) 结成团伙，欺负S大学毕业的我。(訳語は邱)

訳語 (42') を見ると、原文との差異が見られ、指示詞を持たなくても意味が通じ、不自然な表現にならない。ここで、わかっているのは中国語文の“①三个人”と“②他们”は指示詞の機能—照応機能を備えているため、指示詞を使用しなくても、前文の内容を照応できる。この結果から日本語の原文では指示詞を使用しているが、中国語の訳文では指示詞は省略され、数量詞のみ訳される原因だと解釈できる。数量詞のみ訳されているのは偶然ではなく、数字の一機能として指示用法があるからこそ、数量詞の前に置いてある指示詞の指示詞機能が虚化している場合、数量詞のみで指示機能を担うことができる。

2.9 アスペクト・テンスによる非対応

中国語で時間を指示する場合、人や物を指すのとは異なり、時間は文脈や場面がないと指示が難しい。「現場指示」の場合は発話時間を基準にし、指示詞の“这会儿”“这个时候”も使えるが、“现在 (xiàn zāi)”“昨天 (zúo tiān)”“一小时前 (yī gè xiǎo shī qían)”などの名詞や短文で表すことも多い。一方、時間を示す指示詞“这时/那时”は、一般的に現場指示で用いられず、文脈指示の「回指」用法のみで使用され、前文で起きた事件の時間や前文で語った具体的な時間を指す。また、本来場所を指し示す指示詞“这儿 (zhè er)”“那儿 (zhè er)”は、文脈によって時間を指すこともできる。

张伯江，方梅(1996)は指示詞の進展変化に関して、「“这儿 (zhè er)”“那儿 (zhè er)”は、本来場所を示す指示詞であるが、時間を表すこともある。」と述べている。(43) はこのような例である。

(43) 我们这儿开会呢。
(43') 私たちは会を開いているところですよ。
(作例)

(43)の“这儿”は場所を示す指示詞から時間を示す指示詞に変わり、その意味は「…しているところ」と同じである。日本語では指示詞に訳出されない。中国語の指示詞“这儿”の根本的な用法は場所を指す働きをするのだが、そこから時間を指す用法へ変化してきている。つまり、実

在する物を指すことから時間のような目に見えない物を指すように徐々に変わってきている認知変化過程である。特にこの場合、アスペクトと関わるので、日本語の指示詞に訳されにくく、対応できないと思われる。

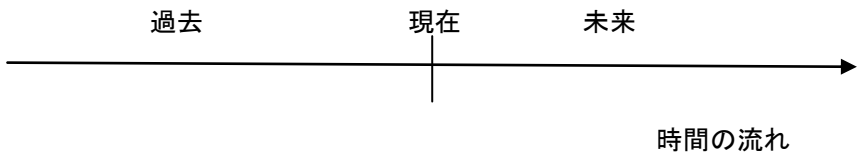
张莹，徐杰（2011）では、“这儿”“那儿”の意味を3つに分けている。①場所、②時間、③アスペクトである。①の意味は、“这儿”“那儿”の一般的な意味として認識されている。②と③の意味は、全て時間を示すと受け取れるが、②の「時間」は、张伯江，方梅(1996)が論じた時間とは異なり、アスペクトと関係しないのである。例を挙げると（44）と（45）になる。

（44 ）从**这儿**开始，气氛就活跃多了。（张莹，徐杰 2011）
（44’）**あれ**から、雰囲気が明るくなった。（訳語は邱）
（45）打**那儿**起，我们搞研究的积极性更高了。（张莹，徐杰 2011）
（45’）**あれ**から、われわれは研究する意欲がますます高くになった。（訳語は邱）

（44）の“这儿”と（45）“那儿”はそれぞれ日本語の指示詞「あれ」に翻訳されていることから、中国語の指示詞“这儿”と “那儿”は、アスペクトと関係のない時間を表す場合に、日本語の指示詞と対応できると言える。

（46）我和刘丽找到她，告诉她整个社会不改好，个人想独善其身是不可能的。从**这儿**，她靠近了我们。（后略）《青》
（46’）わたしと劉麗がかの女に会いにいき、この社会ぜんたいが変らないかぎり、個人の幸福だけを願っても、それは不可能なことを話してあげました。**それ**がきっかけとなって、かの女はわたしたちに、近づいてきてくれました。（略）」〔春〕
（47）当然了，冯寡妇骂儿子，三分骂，七分夸，是骂给街坊邻居听的。也难怪，３０几岁上守寡，拉扯大一儿一女，容易吗？可您就听她这话音儿，是省油的灯吗？是见庙就磕头的主儿？告诉您吧，冯寡妇的“敢情”接到了谁的话茬儿后面，差不多就能暗示出此人在小院里举足轻重的地位。要说说这辘轳把儿胡同９号的事，能不给您打**这儿**说起吗？ 《辘轳》
（47’）もちろん、未亡人が息子を叱るのは、文句が三分に自慢が七分で、隣近所に聞かせるためだ。無理もない。なんていったって三十代で後家になり、女手ひとりで一男一女を育てあげたのだから。この叱りっぷりを聞いても、「油を節約したランプ」のような控えめな、あるいは「寺を見れば脆く」といった、一筋縄でいくような御仁でないことは推察できよう。馮未亡人の「敢情!」が、誰のことばにつけ加えられるかによって、彼女らの住む「院子」におけるその人間のランクがわかろうというものだ。轆轤把胡同九号のことを語るには、どうしたって**ここ**から始めねばなるまい。 〔轆轤〕

（46）と（47）の“这儿”は（44、45）の“这儿”と同じく、出来事と発話時の時間関係は過去、現在、未来を表す文法カテゴリーであり、庵（2012）によると【図 2-2】のようになる。このような用法は日中両言語の指示詞が対応することが多い。



（庵 2012：144）

【図 2-2】「過去・現在・未来」の流れ

次に③のアスペクトに関する“这儿/那儿”の用法であるが、张伯江，方梅(1996)が時間を表す“这儿”と“那儿”と見なした用例と一致する。例を挙げながら説明する。

(48) “我们**这儿**研究工作呢。别净把我们往坏处想。”
“是是，没说你们干别的，就知道你们是在工作。”
（张伯江，方梅 1996：182）

(48') 「私たちは仕事について相談している。変な方向にばかり考えないで」
「はい、はい、ほかのことをやっているなんて言ってないよ。仕事をしているのは分かってる。」
（訳語は邱）

(48) のように発話現在で述語が表す出来事が終わっておらず進行中の動作を表す場合や、出来事を時間軸上ではなく動作の側面から捉えた文法範疇は、中国語では“这儿”で示すことができるが、日本語では指示詞に訳されず、「テイル」型に訳される。調査した日中対訳作品の例群からアスペクトに関わる場合、中国語は指示詞が使えるが、日本語はほとんど指示詞を使用せず、「テイル」に訳されているとわかる。ここから時間を表す指示詞では中日の両語にずれが存在していると言える。

2.10 まとめ

本章では日中対訳作品に現れた指示詞が、訳文では指示詞に翻訳されず日中で対応していない例を中心に考察した。その結果、中国語の指示詞“这/那”は指示機能が弱く、「虚化」する場合に、日本語の指示詞に訳されず、両言語の指示詞において機能上、意味上のずれが生じ、日中の指示詞は対応していないと明らかになった。下記の 5 点で指示詞“这/那”が「虚指」の際に、「コ・ソ・ア」系指示詞と対応しにくいことが判明した。そして、日中指示詞が対応していない原因を、日本語の観念指示用法、絶対指示用法、アスペクトの 3 つの側面から考察した。まず“这/那”の「虚指」による日中指示詞が対応していない原因を述べる。

ア．中国語の指示詞“这/那”が、指示機能を持ちながら接続機能も働いている場合、その指示機能は低下し、接続機能のほうが強く働く現象がある。一方、日本語の指示詞に「それで」「そのため」など接続機能を持つ指示詞が存在しているが、中国語の接続機能を持つ指示詞は語形からみると一般的な指示詞“这/那”と変わらないうえに、日本語ほど因果関係を持たず、前文は後文の根拠という

程度の関係を示すに過ぎない。また、日本語には逆接を示す「それが」「それにもかかわらず」のような指示詞の用法があるが、中国語の逆接を示す“这/那”はそれほど逆接機能が働いていない。つまり、「虚化」の “这/那”の接続機能は「そのため」など接続機能を持つ日本語の指示詞より弱いとみなせる。よって、日中の接続機能を持つ指示詞は一対一で対応できない。

イ．中国語の程度を示す指示詞“这么/那么” など「X“像”Y“那样”」の形で使用される場合、訳文では比喩、比況を表す「ように、みたい」で「X は Y のようだ・みたいだ」の形で翻訳されている。中国語文「X 像 Y 那样」では“那么/那样”は修飾を表すと同時に指示の役割も担っているので、用いないと非文になる。一方、日本語文では指示詞を使用せず、「X は Y のようだ・みたいだ」の形で示している。その結果は吕叔湘(1982)が論じた「『“那么”＋形容詞・形容動詞』の場合は、『虚化』になる可能性が高い」と合致している。いわゆる、“那么”は動詞、形容詞を修飾して程度あるいは方式を表し、指示機能より副詞の機能のほうが働き、文中で副詞性修飾語、連用修飾語になっている。よって、日本語に訳された場合、指示詞と対応し難く、「なんと」のような感動詞や「どれ」のような感嘆詞、あるいは形容詞、副詞として訳出されることが多い。

また、中国語文では“这么/那么”が副詞と共起して「Adv＋Dem」の形で程度を示す場合に、副詞と指示詞はそれぞれ指示対象を修飾することができるので、“这么”の指示機能が弱く、省いても非文にならない。一方、日本語の訳文では指示詞か副詞かのどちらか 1 つ修飾しか用いず、双方に用いることができないため、たびたび指示詞を使用せず、副詞のみと翻訳されている。

ウ．中国語文では“我这人/他那人”のような指示詞が人称代名詞と共起し、一度人称代名詞や人名が指し示した人物を再度指示詞で指し示す同格指示がある。その同格指示用法では人称代名詞と指示詞は並列関係や所属関係になり、指示詞を省略してもフレーズの意味に差し支えないため、指示機能が弱くなっている。一方、日本語の人称代名詞は指示詞「コノ・ソノ・アノ」と共に使用することができるが、中国の指示詞と人称代名詞が共起している場合の語順と異なり、「コノ私・ソノ彼・ソノ彼女」のような「Dem＋PP」の形になり、「コノ」は「私」、「ソノ」は「彼・彼女」を指しているが中国語文の同格指示ではない。日本語文では中国語文の同格指示のような一度人称代名詞や人名が指した人物を再度指示詞で指すことができないため、同格指示の「PP＋“这/那” 」或いは「N1＋“这/那”」の形は、ほぼ日本語の指示詞と対応できない。

エ．名詞（人称代名詞を含む）や名詞文とそれに後接する物事や時間などが同格である場合、指示詞が物事や時間を指す形式で、指示詞が名詞（人称代名詞を含む）と共起して、事柄や場所などを指し示す同格指示用法と類似している同格指示の変形用法がある。その同格指示の変形用法は同格指示用法の働きと同じで、名詞や名詞文と指示詞で指している事物は並列関係や所属関係になり、指示詞を省略しても意味が変わらないため、指示機能が弱くなっている。そのような用法で用いられた指示詞は物事、場所、時間を指し示す場合、「PP＋“这/那”＋N 」或いは[N＋“这/那”＋N]の型を作る。まず人称代名詞や名詞などが指示対象を指示、限定する。つぎに、指示詞“这/那”がもう一度指示対象を指す。他方、日本語文では人称代名詞や指示対象を示す名詞か、指示詞か、片方しか使用できないため、指示機能が弱くになった指示詞を使用せず、指示対象を示す名詞しか訳されていない。

オ．「“这/那”＋ NumCL＋NP」のような中国語の指示詞と数・量詞を合わせて使用する場合、単数か複数で標識か不定標識かが決定する。つまり、中国語文では数量詞も指示機能を担ってい

るため、ある文脈の中の１つ或いはいくつかの個体を指す場合は特定指示（individual）で、ある種の人或いは事物を指す場合は総称的な指示（generic）である。中国語で「特定指示」として使用されている“这/那+个…”は標識になり、訳文では日本語の指示詞と対応しているが、「総称的な指示」として使用されている“这/那＋些/种/类”は不定標識となり、指示詞の指示機能が低下しているため、訳文では指示詞が訳出されないことが多い。

以上は“这/那”の指示機能の「虚化」と関わる日中指示詞の非対応をまとめている。

以下は日本語の観念指示用法、絶対指示用法、アスペクトとの関わり、この 3 つの面から日中指示詞の非対応について述べる。

ア. 聞き手にはいつのことを指しているのかわからないが、話し手の観念に存在している日を“那一天”で指し示す用法は堀口（1990）が唱えた観念指示用法に当て嵌る。中国語文では話し手は自分の死ぬ日を指す場合、“那一天”を用いることができるが、その“那一天”はいつのことを指しているのか聞き手は判断できないだけでなく、話し手自身さえ具体的な日にちがわからないので、この場合“那一天”の“那”の指示機能が相当弱くなっていると見える。“那一天”は日本語に翻訳せば「あの日」になるが、中国語の“那一天”のように死ぬ日を指す意味では日常生活に定着していない。日本語では「あの世」という指示詞を用いた表現があり、死後の世界を指している。しかし、“那一天”は時間を指しているが、「あの世」は場所を指している。このように中国語の指示詞“这/那”の指示機能が低下している場合、話し手の観念に存在している事物を指しても、日本語の観念指示用法と対応しにくい。

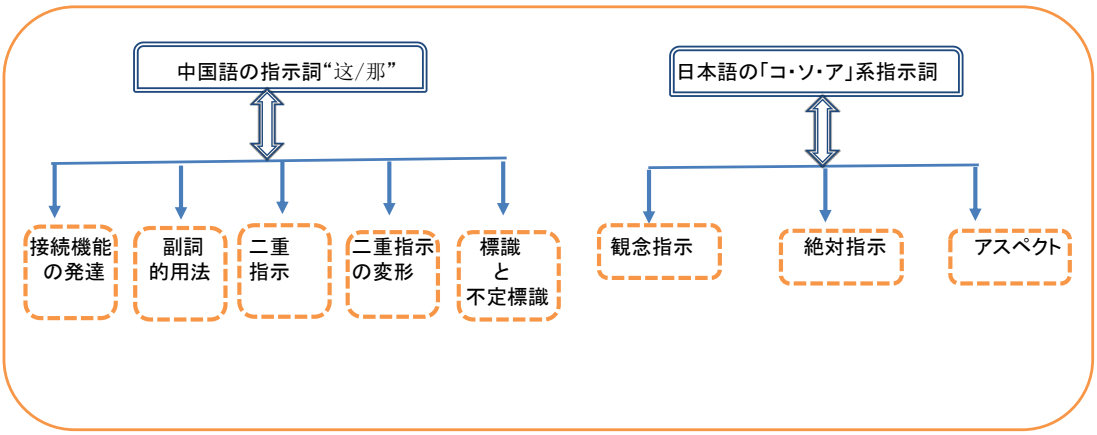
イ. 中国語の指示詞“这/那”は堀口(1978)が命名した絶対指示用法と類似している用法で用いられているが、日本語の絶対指示と対応できない現象が際立っている。中国語では“今天”、“今年”があるので、“这天”、“这年”は現在を指すことができない。それに対して、日本語の「来週」と「来月」は中国語ではそれぞれ“这周”と“这月”で表す。つまり、日本語の「Dem+年/月/曜日/日」の形で時間を指し示す用法は中国語の「Dem+年/月/曜日/日」とずれが生じているため、対応していないところが見える。

また絶対指示用法の一部である時間を表すカレンダー用法（田口 2011）では、漢語（今・去・来）が接辞になり、時間を表す表現とともにカレンダー単位上の順序を表すシステムを形成しているため、カレンダー単位上の順序を表す際に、「コノ+朝・夜・日・週・月」を用いない。一方、中国語では“这个星期天”と“下个星期天”は使えるが“那个星期天”は使い難い。よって、絶対指示である日本語の指示詞のカレンダー用法と中国語の指示詞のカレンダー用法もずれが存在している。

ウ. 中国語文では時間を示す際に、出来事と発話時の時間関係は過去、現在、未来を表す文法カテゴリーであり、時間軸に沿った出来事を述べる場合、用いられた指示詞が、日本語の訳文では指示詞に訳され、対応することが多い。一方、進行中の動作を表す場合や、出来事を時間軸上ではなく、動作の側面から捉える文法範疇は中国語では“这…”で示すことができるが、日本語では、指示詞に訳されず、「テイル」型に訳される。また、発話現在で述語が表す出来事が終わっていない場合、日本語で時間を示すなら、指示詞を使用するより、アスペクトのほうがより多く用いられる。よって、アスペクトに関わる時間を表す表現では、中日言語の指示詞を使用するか

どうかに関してはずれが見られる。

本章では日中指示詞の非対応について考察した。【図 2-3】に示しているように、日中指示詞が対応できない原因を主に中国語の指示詞“这/那”と日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞から見出した。



【図 2-3】日中指示詞の非対応の原因

【図 2-3】に示しているように、日中両言語の指示詞が対応していない原因は接続機能の発達、副詞的用法、同格指示、同格指示の変形、標識と不定標識、観念指示、絶対指示、アスペクトとの関わりという 8 つの側面が考えられる。

注

第 2 章

1) 調査の詳細は邱麗君(2008)「文脈指示を中心とした日中指示詞の対照」早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文を参照。
2) 佐久間（1990）では接続詞や接続表現と呼んでいる。馬場（2006）は指示詞系接続詞と名付けている。
3) 「それが」・「それだけに」などの表現は指示機能と接続機能の両方があるので、判断が難しく、厳密には境界線を引くことができない場合もある。しかし、こういう指示詞は前文に述べられた具体的なことを指したり、直前の文章の内容を受けたりしている。つまり、指示詞の最も根本的な指示機能を持ちながら、接続機能もあるため、指示詞と呼ぶべきである。
4) 同じような逆接機能を持つ指示詞は日中両言語にあるが、接続機能の強さが異なるため、日中の指示詞が一対一に対応できない場合もある。
5) 日本語には「あれこれ」「あちこち」「あれもこれも」など「コ・ソ・ア」の形式の中のいくつかのものは、互いに対を成す表現が存在するが、事柄や状況を一まとめにして指し示すときに用いられるものが多い。例えば、「あれこれ考えた」は「いろいろ考えた」の意味であ

る。中国の指示詞のような接続機能を持つ「“那”＋指示機能を持つ“这”」という表現ではない。

6) 比喩には直喩、隠喩、換喩、提喩などが含まれているが、本章で取り扱つかっている比喩は直喩に限る。

7) 杉山（2010）は『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）モニター公開データ』(2009 年度版）から第一人称代名詞、第二人称代名詞、第三人称代名詞と指示詞「コノ・ソノ・アノ」が共起している事例を調べている。

8) 山田忠雄・柴田武（1992 初版）三省堂（2012）新明解国語辞典第七版では「あのよ（彼〈の〉世）」は 1 つの言葉として解説し、死後に行くといわれる世界だ。「来世」とも言う。と説明している。

9) “助指”に関しては吕叔湘(1982)では下述のように述べている。
“助指是说指称词要伴同其他加语才能产生指定的作用。”比如“我说的这个人你也认识。”
(助指というのは、指示詞と他の言葉と一緒に使わないと指定の役割をしない。例えば、「私が言った（この）人はあなたも知っている」)

第 3 章　日中指示詞の省略について

日本語学習者の指示詞の誤用問題は周知の通りで、その関連研究としては、迫田（1997a，1998）孫愛維（2008a,2008b）張麟声（2001）などがあるが、指示詞「コ・ソ・ア」要素以外にも、指示詞の省略や指示対象の繰り返しなどに原因があると阪上（2010）は指摘している。日中両国の指示詞はそれぞれに省略表現があるので、日中で対応関係にない指示詞の省略表現は中国人の日本語学習者が誤用を起こしやすい表現だと推察できる。

日本語文では指示詞が用いられていても中国語の訳文で省略されたり、あるいは中国語文で指示詞を使用していながら日本語訳では省略されているなど、日中の指示詞では対応できない例がよく見られる。

本章ではまず日本語の指示詞の省略と中国語の指示詞の省略を各々説明し、つぎに対訳がある作品を選び、原作では指示詞を用いているが訳文ではそれを省略しているものを提示し分析していく。終章ではその結果を踏まえながら、指示詞の誤用が起こる原因を改めて考える。そして日本語教育と結びつけ、教材の作り方や教授法の改善など教育現場で生かせる工夫を提案する。

3.1 日本語文に現れる指示詞の省略表現

文と文の間には指示詞、接続詞など様々な言語形式によって意味的繋がりが保障されている。佐久間（1990）は反復と省略の表現を採り上げ、「ある語句の反復を避けたり、言わなくてもわかることを表現せずにすませたりして、文中の要素のいずれかが欠落している表現を『省略表現』」と述べている。また久野（1978）は、省略の基本的な原則についてa.省略された要素は言語的文脈や非言語的文脈復元の可能性を備えなければならない。b.省略は指示、反復と同じように前文や後文の内容を受け止め、前後の内容に照らし合わせる、と分析している。

日本語の指示詞の省略表現に関する研究は市川(1978)、 佐久間（1992)、庵（1996a，2007）、馬場（2006)、長澤（2008)、阪上（2010）などがある。市川(1978)、 佐久間（1992)、馬場（2006）は接続表現の省略可能性についての調査を行い、接続表現の省略率の違いによって省略の可能性に影響する文脈的要因を論じている[1)]。以下の【表 3-1】は馬場（2006）がまとめている。「そのため」「そのかわり」など、指示詞を語基にして成り立っているものも含まれている。

【表 3-1】に示しているように 1 の「**そのため**」、5 の「**それ**なのに」、7 の「**そ**して[2)]」10 の「**その**うえ」、13 の「**その**かわり」、14 の「**それ**とも」はいずれも指示詞を語基として含んでいる表現であり、馬場（2006）は接続表現と呼んでいる。しかしこのような表現は指示機能と接続機能の両方を持つので、どちらに分類されるかに関しては判断が難しく、厳密には境界線を引くことができない場合があるが、具体的に前文に述べられたことを指したり、直前の文章の内容を受けたりしている指示機能を持っているので指示詞に属していると考える。つまり、指示詞の最も根本的な指示機能を持ちながら、そこから接続機能に拡張したものは、指示詞と関係がない「から」「ので」のような接続詞ではないので指示詞と呼ぶべきであると本論で主張している。

【表 3-1】連接関係の類型と省略率（馬場 2006：103 を一部修正）

	接続表現	連接類型	市川調査		佐久間調査		馬場調査	
1	そのため	順接型	14	45（平均）	28	50	41	58（平均）
2	すると		58		57		59	
3	かくて		64		64		74	
4	しかし	逆接型	13	14（平均）	7	8	41	23（平均）
5	それなのに		25		12		21	
6	ところが		5		5		6	
7	そして	添加型	71	61（平均）	55	58	71	69（平均）
8	また		100		95		82	
9	次に		60		64		24	
10	そのうえ		14		18		97	
11	まして	対比型	75	67（平均）	75	71	65	66（平均）
12	一方		95		100		41	
13	そのかわり		14		16		68	
14	それとも		82		93		91	
15	ところで	転換型	43	24（平均）	55	37	76	29（平均）
16	さて		22		50		6	
17	ともあれ		6		7		6	
18	すなわち	同列型	92	57（平均）	81	73	97	78（平均）
19	とりわけ		22		61		41	
20	要するに		58		78		97	
21	なお	補足型	81	54（平均）	96	65	82	71（平均）
22	ただし		40		47		82	
23	なぜなら		40		53		50	

※単位は「%」で示す。

市川、佐久間と馬場は同じ接続表現に関する調査を行っている。市川調査では、「そのため」の省略率は 14%、「それなのに」は 25%、「そのうえ」は 14%、「そのかわりに」は 14%である。佐久間調査ではそれぞれ 28%、12%、18%、16%であり、馬場調査の結果は 41%、21%、97%、68%となっている。それぞれ得られた結果は異なっているが、いずれにしても日本語文では指示詞を省略できることが一目瞭然である。

また佐久間（1992）は、同じく「ソ」系指示詞から成っている接続表現「そのため、そのうえ、そのかわり」は省略率が比較的低いが、「それなのに」は相対的に高いため、それらの表現は指示機能との関係の度合いが強いか弱いかなどの分析をする必要があると指摘している。例文を示しながら分析する。

(1)弁護士会は報酬基準を定めてはいるものの、その内容はきわめて複雑で、しかも実際の報酬は経験や名声により大きな差がある。**そのため**税務調査のむずかしさは政治家並みだともいわれる。（馬場 2006：105）

(2)わが国の政府開発援助(ODA)は年間 1 兆円規模にまで伸びており、さらに新年度から 7 カ年で倍増する計画も決まっている。**それなのに**、経済協力の実態は「外交上の配慮」を理由に

厚いベールに包まれてきた。（ibid.）

(1)と(2)は馬場(2006)が調査を行うために採り上げた例文である。前者は順接の因果関係、後者は逆接を表している。この調査では、(1)の「そのため」の省略率は 41%であり、（2）の「それなのに」の省略率は 21%となっている。この結果は佐久間(1992)と違うが、同じ「そのため」「それなのに」を使用しても、指示内容と指示対象が異なっているなら、前文と後文の繋がりが変わるので、省略率の変化が生じると推測できる。

庵（1996a）では接続詞「それが」は「ソレ」を含め「ソノ NP が」と密接な関係があるため、「ソノ NP が」と同様にテキスト的意味を与えられ、義務的なテキスト的意味を付与することの帰結として予測の裏切り性を持っていると述べている。それらも本論では接続機能を持つ指示詞に当たる。「ソレ＋助詞」の形の表現では「それが・それを」は助詞「が・を」が具体的な意味を持たないため、先行文脈から予測される内容を裏切る内容が述べられているということを先触れる機能を持っている。

また、庵（1996b、2007）はテキスト言語学の立場から「コノ・ソノ・ゼロ代名詞」を考察し、省略に関しては以下のように論じている。庵（1996b）では英語の定冠詞にあたる語が日本語ではゼロ代名詞が用いられ、トピックとの関連性が低く、指示対象が顕著でない場合、「コノ・ソノ」は用いられない。（3）の例をあげ、この文で「ポスト」はテキストのトピックの形成に顕著さが低いため、「コノ・ソノ」を使用することは不適切だと述べている。

(3) 昨夜乗用車が国道 176 号線沿いのポストに接触しガードレールに衝突しましたこの事故で乗用車に乗っていた二人は即死し、Φポストは根元から折れました。

（庵 1996b：77）

長澤（2008）は指示詞を省略すると非文になる場合と指示詞を省略しても非文にならない場合を分けて考察している。

(4) 国内炭の引き取り先は、すでに電力会社だけ。(**その**電力業界は)発電コスト重視を強め、高い国内炭の価格引き下げを求めている。

（長澤 2008：113、二重下線は邱）

(5) 財政赤字で世界の 2 大超大国である日本とイタリア。(**その**イタリアは)予想以上にいま財政革命のあらしの渦中にあった。　（ibid.）

(4)の「電力業界」と「電力会社」は下位上位の関係で、(5)の「イタリア」と前文にある「イタリア」は同位関係である。(4)と(5)の「そのNは」先行文脈に設定された対象を指し示す照応用法で、ここで括弧にある指示部分は省略しても非文にならない。

(6) 証券不正疑惑に巻き込まれいったんは辞任するが、ラオ首相が引き戻した。(**その**ラオ首相

が)、タミルナド州で汚職の悪評の高かったジャヤラリッタ州首相と総選挙協力を発表すると、敢然と国民会議派離脱を宣言。

（ibid.：111、二重下線は邱）

(7) ジバンシーを引き継いだ気鋭のデザイナー、アレクサンダー・マツクイーンも、1月のパリ・メンズで「最も尊敬するカワクボのために」とショーのゲストモデルを買って出たほど。(その川久保玲は)、今回、ひたすら洗練さを求める西欧流仕立てを逆転する発想で、服の原型に迫った。（ibid.：108、二重下線は邱）

(6) の「ラオ首相」と前文の「ラオ首相」、(7) の「川久保玲」と前文にある「カワクボ」はいずれも同位関係である。括弧にある指示詞は先行詞「ラオ首相」「カワクボ」と名詞句の間での異なるカテゴリー付けを行うものではなく、限定的な指示であるため、「その N」は後文に未知の情報を知らせる機能を持っている。ここで指示詞を省略すれば非文になる。日本語で指示詞を省略しやすい場合は、主に指示対象の顕著さが低い場合と指示対象が同定しやすい場合である。と長澤（2008）は論じている。

長澤（2008）の調査により指示詞省略傾向は以下の通りである。

〈このNは型〉〔指示詞省略：○〕88例＜〔指示詞省略：×〕130例
〈このNが型〉〔指示詞省略：○〕19例＜〔指示詞省略：×〕 35例
〈そのNは型〉〔指示詞省略：○〕24例＞〔指示詞省略：×〕 19例
〈そのNが型〉〔指示詞省略：○〕11例＜〔指示詞省略：×〕 37例

（長澤2008：104、二重下線は邱）

長澤（2008）の調査結果からみると、「このNは」「このNが」「そのNは」「そのNが」の四種では「そのNは」のみ指示詞を省略しても非文にならない例が、非文になる例より多い。他の三種はいずれも非文になる例のほうが多い。具体的に見てみると、「このNは」の例文は218例、その中で省略できるのは88例で40.4%を占め、「このNが」は全部の54例で、その中に省略できるのは19例、約35.2%になる。一方、「ソ」系指示詞「そのNは」は43例で、省略できるのは24例、55.8%を上回っている。「そのNが」は48例で、省略できるのは11例、約22.9%である。以上の結果は長澤（2008）の統計から得られたもので、この結果から日本語文では指示詞の省略は稀ではなく、かなりの頻度で見られることを検証している。

また、小川（2008）は「そんな…ない」と「あんまり…ない」における程度の基準から指示詞の有無を論じている。

(8a) {**そんなに**・あんまり}美しくない。
(8b) {**そんなに**・??あんまり}美しくないけど、そこそこ美しい。

（小川2008、下線は邱）

小川（2008）によれば、「そんな」と「あんまり」は共に否定を伴い、それほど強くない状態や程度を表す表現であるが、それらの区別に関しては「『あんまり…ない』は発話者自身の主観的な基準を参照しているのに対し、『そんなに…ない』は先行文脈や世間一般の基準といった非主観的な基準を参照している。この違いは「そんなに」が指示詞を含んでいることによると考えられる。」とある。しかし、（8a）と（8b）の「そんなに」の「従来指示性を喪失」して、「先行文脈ではなく、世間一般の期待・評価を基準として参照する拡張例が見られる」。（8a）は一つの評価に対して「そんなに」と「あんまり」を用いることはいずれも適切であるが、（8b）は主節と従属節はそれぞれ基準が異なるため、「そんなに」のみ用いられ、「あんまり」を用いると不自然な文になる。その研究により、本来程度を示す指示詞「こんなに」「そんなに」「あんなに」であるが、それが否定表現を伴う場合には指示機能を失い、省略され意味が近い副詞に代替されることもあるとわかる。

3.2 中国語文に現れる指示詞の省略表現

中国語では指示詞の省略は常に用いられ、話し言葉と書き言葉のどちらにもよく見られる。马建忠(1989)は省略表現に関し、省略の原因は①会話をするため、②命令を下すため、③前文の内容を受け止めること、④同じ名前を重ねるのを避けるため、と 4 つの要因にまとめている。王力の《中国现代语法》は普通の文が成り立つための要素より少ない場合は省略だと定義し、省略はほぼ前文の内容を照応し、受け止めるために使用される特別な表現形式だとしている。現代中国語では習慣的に省略することも少なくない。例えば、代替用法の習慣的省略、数量詞の習慣的省略など、指示詞の主な機能は指示と代替 2 つの機能であるため、これらは直接的に指示詞の省略と関わる。

朱德熙(1982)は「省略とは、構造上不可欠な要素が一定の文法的な条件のもとで現れていない場合のことを言う。(中略)原則的には省略された要素は復元可能なものでなければならない」と述べている。

また、吕叔湘（1980）、 邵敬敏（1991）、付艳丽（2007）は省略することができる条件を検討している。付艳丽（2007）は次のようにまとめている。

a. 这种语言现象是由上下文或语境条件制约而造成的。
(a'. この言語現象は前文と後文の関係や文脈によって形成されたものである。)
b. 由于上下文或语境的提示，所省略的成分是确定的必补的。
(b'. 前文と後文の関係で、省略された内容は必ず補われなければならない 。)
c. 补出省略成分，句子意义不变。
(c'. 省略した部分を補った後でも、全文の意味が変わらない。)

（付艳丽 2007：2）

例文を示しながら考察する。

(8)周朴园:你不知道这间房子底下人不准随便进来么?
鲁侍萍:(①　　)不知道(②　　)，老爷。

周朴园:你是新来的下人?

鲁侍萍:(③　　)不是(④　　)的，我找我的女儿来的。

（付艳丽 2007：12、曹禺 1933 《雷雨》）

(8')周朴園:知らないの，この部屋は誰も気軽に入ってはいけません。

魯侍萍:(①　　)、知りません。(②　　)、旦那様。

周朴園:きみは新しい召使いだろう。

魯侍萍:(③　　)違います。(④　　)、私は娘を探しに来ました。

(訳文は邱)

魯侍萍はもともと主人周朴園の妻だったが、子供を産んでから彼に追い出されて 20 年が経った。今は生計のために自分の娘を女中として働かせているが、まさか雇っている主人が周朴園であるとは思いもよらなかった。また、娘を探しに周朴園の家に来たが、周朴園は年を取っている魯侍萍のことがわからなかった。(8) は周朴園と娘を探してきた魯侍萍の会話である。①は「“我”(私)」②は「“这间房子底下人不准随便进来”（この部屋は誰でも気軽に入ってはいけません)」③は「“我”（私)」④は「“新来的”（新しく来た)」を各々省略している。(8)は話し言葉なので、短い文であるにも関わらず省略されている内容が多い。それに対して、書き言葉であればそれほど省略はしない。(8)の省略によって「わからない」「違う」など主な情報だけが相手に伝わり、文中の要素を際立たせて焦点を当てる機能を担う。「わからない」内容と何が「違う」のかを示さないことによって、婉曲的な効果が表れる。

(9)(B 因为被班里的同学误解而和同学大打出手，被学校警告处分。A 安慰 B)

A：你不在为**那**事而烦心了吧。

B：｛①Ø　　｝都过去了，｛②Ø　｝不再想了。

A：那就好。

(9')(B はクラスメートに誤解され、そのクラスメートと殴り合ったので、学校側から警告処分を受けた。以下は A が B を慰める会話である。)

A：君はもうあのことで怒っていないだろう。

B：｛①Ø　　｝もう終わり、｛②Ø　｝もう考えたくない。

A：それでいい。

(作例)

(9)の“那事”は「クラスメートに誤解され、そのクラスメートと殴り合ったので、学校側から警告処分を受けた」ことを指し示す。過去のことなので、指示詞“那”を用いるわけである。①と②は“那事（あのこと）”を省略している。①と②の省略部分は前脈の“那事”と同位関係に属している。Bの発話で“那事（あのこと）”を省略することによって、そのことについて全く触れたくない気持ちを表し、軽く答えているわけである。一方、Bの発話に“那事（あのこと）”を書き加えた場合、事件を思い出したくない気持ちは変わらないが、原文のような全く触れたくないという強い気持ちは表現されない。つまり指示詞“那事”を省略することによって意味的に

大きな違いは生じないが、多少ニュアンスは異なる。また、(9)の①と②はどちらも片方にだけ指示詞を使用することが可能であるが、両方には用いられない。即ち“那事都过去了，不再想了。(あのことはもう終わり、もう考えたくない。)”あるいは、“都过去了，那事不再想了。(もう終わり、あのことをもう考えたくない。)”になる。前文と後文に両方指示詞を使用すると、“那事都过去了，那事不再想了。(あのことはもう終わり、あのことをもう考えたくない。)”という文になり不自然である。

3.3 訳文に現れる指示詞の省略現象

日本語の作品では指示詞を用いるが、訳文では中国語の指示詞“这/那”が省略されている文が数多く見られる。一方、中国語の作品では指示詞が使用されているが、日本語の訳文では「コ・ソ・ア」系指示詞に訳されず、省略している現象もよく見受けられる。本節ではこれらの原文で用いられた指示詞が訳文では省略されている用例に焦点をあてる。指示対象によって分類したうえで、各指示詞の指示用法、指示機能、指示詞を含む文の構造から、省略されている現象を検討し、両言語の指示詞の有無による類似性と相違性を同一の枠組みで整理する。

3.3.1 中国語の訳文中の指示詞の省略

今回中国語訳がある日本語の作品 15 篇[3)]を選び、まずその中で用いられている指示詞を抽出する。次に原文では指示詞が用いられているが訳文では省略されている例を選び分析する[4)]。また、2003 年 1 月から 2011 年 12 月まで、8 年間の《日语知识》[5)]に掲載されている日本の短篇小説に現れている指示詞とその中国語の訳文を対照し、指示詞が省略されている例に焦点をあてて考察する。

物事を指す「コレ・ソレ・アレ」

(10)隣家の与兵衛夫婦はもちろんのことであるが、竹神の部落の十六戸の家の連中は、喜助の家へ突如として入りこんできた玉枝を奇異な眼でみないわけにゆかなかった。玉枝は喜助の嫁にしては、美しすぎたせいもある。それに、喜助よりも七つ八つ年上にみえたことも気になった。喜助がどこで見つけてきたものか。まず、**それ**が詮索の中心になっている。〔越〕

(10')邻居家的与兵卫夫妇俩当然是无须赘言的，就是全竹神村的十六户人家，也都无一例外地在用诧异的眼光打量着突然间闯入喜助家中来的玉枝。因为作为喜助的媳妇，玉枝是长得过分漂亮了。再则，大家也注意到玉枝比喜助大七八岁呢。大家首先想要弄明白一点，{Ø}就是喜助在哪儿把玉枝物色来的。《越》

(11)大池で釣る資格のある者は、大池の水路を持つ組の者に限るという条件にして置いた。これでは水利組合の今まで通りの条件だが、重松たちは誰に遠慮もなく釣ることが出来さえすれば問題でない。庄吉さんの云う通り、ほんの少しでも自分で資本を掛けた魚を自分で釣ると、**これ**は遊びでなくて仕事または事業をしていることになる。〔黒〕

(11')许可证上附加了一个条件：保有钓鱼资格的，只限于属于与大池塘水源有关的人。这是水利工会过去订立的条件。可是，在重松他们来说，只要能随便钓鱼就行。正如庄吉所说，哪怕

钓得再少，只要是自己钓自己投了资的鱼，｛ø｝就不能说是消遣，而是在干工作、办事业。
《黑》

(10)の「それ」は前文の「玉枝は喜助の嫁にしては、美しすぎたせいもある。それに、喜助よりも七つ八つ年上にみえたことも気になった。喜助がどこで見つけてきたものか。」を指し示す文脈指示の前方照応指示である。訳文では指示詞「それ」は、中国語の“这”にも“那”にも訳されず省略されている。中国語の訳文に指示詞“这”や “那”を加えれば“那就是喜助在哪儿把玉枝物色来的”になり、自然な中国語文である。ただし、“这/那”が指している指示対象は後文になるので、原文(10)の指示対象は前文にあることと異なってくる。つまり、前方照応指示から後方照応指示に変わることになる。

（10）と（11）の□で囲んだ短文の文型は同じで、「“就(jiù)”＋“是(shì)”…/“就(jiù)”…“是(shì)”…」である。吕叔湘（1980）によれば、“就”は副詞である。その用法は以下の4点にまとめられる。a. 短い時間で起こったことを示す。b. 遥かに過去のことを強調する。ｃ．一つのことが終わったらすぐ次のことが起こる。d. 肯定を強調するために用いる。

ここでの「“就”＋“是”…」は話す内容を強調する役割として働いている。(10)の「“就”＋“是”」は“喜助在哪儿把玉枝物色来的（喜助がどこで玉枝を見つけてきたものか）”を強調している。(11)の「“就”…“是”」は“哪怕钓得再少，只要是自己钓自己投了资的鱼（ほんの少しでも自分で資本を掛けた魚を自分で釣る）ということは遊びではなく、仕事だと強調している。一般的には、「“这/那”＋“就”＋“是”」もよく使用されるが、例（10）（11）の「“就”＋“是”」がなければ、指示詞“这/那”は省略ができない。つまり、“喜助在哪儿把玉枝物色来的”と“不能说消遣，而是在干工作、办事业。”だけでは前文と繋がりにくく、何を述べたいのか明確ではない。陈玉洁(2010：38)では“汉语中的指示词有指示和话语标示的双重功能。(中国語の指示詞は指示とマーカー（焦点化)する機能がある)”と述べ、そして陈玉洁(2010：42-43)によると、“‘这’和‘就’一起出现，既可以有指示功能，也可以是一个话语标记。“这”和“那”类似，同样有两类语用功能：指示功能和话语标记。”(“这”と“就”ともに用いる場合、指示機能もあり、マーカー（焦点化）する機能もある。“这（…）就…”と“那（…）就…”も同様に、指示機能とマーカー2種類の機能を持っている。）したがって、訳文では“这/那”を省略しても、“就…是…”があるため、取り立てる効果は変わらない。

他方、日本語の原文(10)では指示詞を省略すると「まず、詮索の中心になっている。」となる。そうすると主語がないので、何が詮索の中心になっているのかが不明瞭である。そのため(10)では指示詞「それ」を省略することができない。（11）の「これ」は前文の「庄吉さんの云う通り、ほんの少しでも自分で資本を掛けた魚を自分で釣る」ということを指し示している。「これ」を省略すると何が遊びで、何が仕事または事業なのかが判断できなくなり、聞き手は話し手の意図を理解するのが困難になる。それに対して、訳文では指示詞“这”あるいは“那”を書き加えた場合、“‘这/那’就不能说是消遣，而是在干工作、办事业。”になる。指示詞を追加しても追加前と文意は変わらない。このように日中指示詞は文脈における省略の可否に関してずれが見える。

属性を示す「コンナ・ソンナ・アンナ」

(12)「待ってみて、もし音沙汰がなければの話やがの。旅に出たのじゃ、きっと。わしらでも時に、そんな気持のすることがあるが……何やかや寺の財政やら、ごたごたしたきりもりに頭を悩ませておると、嫌になってしまうことがある。のう、そうかも知れんのう」〔雁〕

(12')“别急，你听我说。如果真的毫无音信，说他出去旅行，这很有可能，连我们有时也有过想到外边去的{Ø}念头呢。也就是呀……，寺院里出现了财政问题啦，还有其他乱七八糟的事呀，这样的时候，也实在叫人烦恼，有时简直烦死人了。那么，那种念头就冒出来了。”《雁》

(13)「こんな深夜の運転は怖いでしょ？」

(《日语知识》2003 第 3 期「個人タクシー」P46)

(13')“{Ø}深更半夜开车不害怕吗？”

(ibid.《私人出租车》P47)

(12)の「そんな」は「気持ち」を修飾して、前文に書かれている「旅に出る」ことを指し示している。訳文では指示詞が省略され、“连我们有时也有过想到外边去的念头（私たちもたまに旅に立つ気持ちがある。）” になる。その文に指示詞を加え、“连我们有时也有过想到外边去的这念头”としても非文ではないが、指示詞“这”の前に修飾句の名詞文“想到外边去”を置いているので、指示詞“这”を省略しても，全文の意味に差し支えない。これは第 2 章で述べているように、中国語の指示詞の前に指示対象を修飾する要素を置くことができる。その要素は指示詞とともに指示対象を修飾したり、限定したりする役割を果たしている。場合によっては、指示詞のみあるいは修飾する要素のみに用いる。一方、日本語では修飾語がついていない指示詞の「そんな」を省略した場合、どんな気持ちを表現したいのかがわからなくなる。

(13)は原文では指示詞が使用されているが、訳文では用いられていない。(13)の「こんな」は「深夜」を修飾し、夜中に運転することは怖くないことを際立たせている。中国語文では指示詞を使用せず、“深更半夜”に訳されているが、“深更半夜”の意味は「真夜中」で、ただの夜中より夜が更けているという意味が加わり、日本語の指示詞「こんな」と同じ役割があると考えられる。したがって、原文で指示詞が使用されていても、訳文ではわざわざ修飾語としての “这样/那样”を用いる必要はない。訳文に“这样/那样”を入れて、“这样/那样深更半夜”とすることもできるが、“深更半夜”をさらに取り立て焦点化させるので、そんな夜中に出かけるのは危ない、よくない、など様々な暗示されている情報を伝えたい場合によく用いられる。だが、原文(13)では省略できない。その理由としては「深夜の運転は怖いでしょ？」と「こんな深夜の運転は怖いでしょ？」は指す夜が異なり、前者は一般的な深夜を指しているが、後者は限定された深夜を指している。

要するに、日本語文(13)の指示詞「こんな」は、指示対象を取り立てることができるのに対して、中国語の訳文(13')は指示詞がなくても“深更半夜”を使用することによって、指示対象の取り立てを実現している。

様態を示す「コウ・ソウ・アア」

(14) よく先生が品切れにならない。余っ程辛防強い朴念仁がなるんだろう。おれには到底やり切

れない。それを思うと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊い。今まではあんなに世話になって別段難有いとも思わなかったが、こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。〔坊〕

(14ａ) 但做教师的仍是绵绵不绝。这些都是忍耐力极强的胡涂虫吧。无论如何我是做不到的。想到这里，觉得阿清这样的人值得尊重。她虽然是个没有教养、没有地位的老婆婆，但作为一个人是很高贵的。从前受到她的照料并未觉得有什么难得，{Ø} 如今只身来到异乡，才理解她的一片热诚。《哥①》

(14ｂ) 真奇怪，当老师的，居然没有缺货，恐怕都是变成耐心极强的木头疙瘩了吧。这对俺来说，可绝对受不了。想到这点，清婆这个人可算是个好样的喽。她虽是个没受过教育、身份低微的老太婆，但从做人来说，却非常高贵。过去俺受了她那样无微不至的照顾，那时并未觉得应该怎样感谢她，但是，{Ø} 俺一个人孤单单地来到这辽远的地方，才第一次懂得了她的好心肠。《哥②》

(14ｃ) 可愿当教员的还挺多，大概都是些有耐性的庸人吧！我可实在干不了。想到这里，不由得感到阿清婆实可敬佩，虽说她是个既没有受过教育，又没有身分的老太太，但为人却颇值得尊敬。以往，她那样照顾我，也没有想到要特别去感谢她。{Ø} 如今一个人来到这老远的地方，才体会到了那种亲情的宝贵。《哥③》

(14) では「こうして」を使用しているが、(14ａ) と (14b) と (14ｃ) では中国語の指示詞を使用せず、指示内容まで省略されている。(14) の「こうして」は後文に述べている「一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる」を指し示している文脈指示の後方照応指示である。原文では自分の現在のことを指しているので、中国語の指示詞を使用するなら「前指」の“这样”を用いることができると思われる。しかし、“这样”は文法的に後ろの文を指し、後ろの内容を導く作用があるが、それは後文の内容によるものである。「回指」用法として用いられた指示詞が指し示す内容が少なく、文も短い場合、指示詞が省略される可能性が高い。(14) の訳文のような場合に、省略されることが多い。例を示しながら説明する。

(15) 这是一个真实的故事：…(丁启阵 2003：31)

(15’) これは本当の話：…（訳語は邱）

(16) 关于性意识与少女杂志的关系,一项调查显示了这样一种倾向,即越是经常阅读少女杂志的少女越是对卖淫无所谓。(丁启阵 2003：31)

(16’) セックスの意識と少女雑誌との関係について、ある調査はこういう傾向の結果が出た。つまり少女雑誌を読む者ほど、売春を気にしない。（訳語は邱）

(15) の“这”は後文の「話」を指し、そのお話を導く。(15’) の「これ」は文脈指示の後方照応指示である。(16) の“这样”は“一种倾向（ある傾向）”を修飾し、後文の内容を指し示す。(16’) の「こういう」と (15’) の「これ」は同様に指示詞は先行詞より前に来たので、後方照応指示である。(15) と (16) は使用されている指示詞の語形が異なるが、両方とも後文に説明が必要な部分を導く役割を担っている。(15) と (16) の後文と (14) の後文の内容を比べてみるとわかるよ

うに、(15)や(16)ほど(14)の後文の内容は説明する必要がなく、文もそれほど長くない。したがって、(14)にとって指示詞を用いる必要性は(15)と(16)より当然低いだろう。よって、(15)と(16)の訳文では指示詞を省略することができないが、(14)の訳文では指示詞を省略しても構わない。

名詞修飾する「コノ・ソノ・アノ」

(17) 山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君**あの**赤シャツが芸者に馴染のある事を知ってるかと聞くから、知ってるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云ったら、そうだ僕はこの頃漸く勘づいたのに、君は中々敏捷だと大にほめた。〔坊〕

(17ａ)豪猪一边大嚼着牛肉，一边对我说：“｛Ø｝红衬衫有相好的艺妓，你知道吗？”我说：“当然知道，上次为老秧君开送别会时，来的那个不就是吗？”“是啊，我最近才看出来，你倒挺敏感呀。”他大大表扬我一番。 《哥①》

(17ｂ) “豪猪”一边大嚼着牛肉，一边问俺：“你知道｛Ø｝‘红衬衫’在艺妓里有个相好的吗？”俺说：“当然知道，不就是前些天给‘老秧’君开欢送会的时候，来的那些艺妓当中的那个吗？”他大加夸赞俺说：“对啦，我最近才发觉，可你倒是满机灵哪。”《哥②》

(17ｃ) 野猪一边贪婪地吃着牛肉，一边问我：“老弟，你知道｛Ø｝红衬衫在艺妓中有相好的事吗？”我说：“当然知道，就是前不久为冬瓜脸君开欢送会时，前来陪客的艺妓当中的一个呗！”“对啦，我可是最近才看出来的，没想到你倒非常敏感。”他对我大加赞扬。 《哥③》

(17)の指示詞「あの」は堀口（1990）が唱える観念指示用法で、話し手と聞き手の双方が知っている人物なので使用されているが、三種類の訳文では全て指示詞を訳さず省略されている。訳文に書かれている“红衬衫”は本来人の綽名を示す固有名詞なので、その人の特徴を十分に表しているため中国語の文法からみると、再び指示詞を使わなくても意味的に差し支えない。中国語の指示詞と人称代名詞や人を示す固有名詞の関係は、沈家煊(2002)によれば“这”は第一人称と第二人称代名詞にのみ使用することができ、同位関係になるが、第三人称代名詞は例外である。例えば“我这个人(wǒ zhè gè rén)”、“你这个人(nǐ zhè gè rén)”、“他这个人（tā zhè gè rén)”、“他那个人(tā nà gè rén)”のようにたびたび使用される。

杨蕾(2011)によると、中国語文では【人称代名詞＋“这/那”＋量詞＋名詞】の形で人称代名詞と“这/那”が共起して用いられる。一方、日本語の指示詞と人称代名詞や人を示す固有名詞の関係は、杉山（2010）によって「日本語では『この・その・あの』などの指示詞が『私』などの人称詞と組み合わせることがある。日本語においては一人称、二人称、三人称が用いられる際には、必ず特定の値が与えられるという特徴がある。代名詞を用いるだけでも特定の値は与えられるため、そこに同定の手段である指示詞を組み合わせることは余剰であるように思われる。」と述べられている。

以上の先行研究からわかるのは、日中の指示詞と人称代名詞とは共起することができるが、それぞれ語順が異なる。日本語の場合は連体修飾を示す指示詞「この・その・あの」は人称代名詞の前に置く。それに対して、中国語の場合は人称代名詞が指示詞の前に置かれる。つまり、中国語文では「PP/N1 ＋Dem」、日本語文では「Dem ＋PP/N1」 の形がよく用いられる。

(17)の「あの」は、杉山（2010）が述べているように指示詞「あの」は “红衬衫”（＝人称

代名詞）の前に置くと、特定の値が与えられる。また話し手と聞き手の共有知識なので、観念指示の「あの」を省略した場合、どの「赤シャツ」か分からなくなる。中国語の訳文で訳された“红衬衫”は談話で言及した人物であり、固有名詞である。日本語記述文法研究会（2009）では、名詞による指示は談話で言及された人やものを、同じ名詞で繰り返し指したり、ほかの名詞で指したりすることがあると解説されている。[6]よって、日本語の「赤シャツ」と中国語の“红衬衫”は全く指示詞を用いなくても誰を示しているかは聞き手にわかるはずである。しかし、日本語文では「あの」を用いて「赤シャツ」を修飾しているが、中国語の３つの訳文ではどれも指示詞を用いず、裸の固有名詞で同一人物を指し示している点で日中の表現が違う結果になっている。中国語訳文では“那”を使用することができるが、その場合は話し手は“红衬衫”という人を聞き手が知っているかどうか疑問があり、わざと“那”で指し示して聞き手に思い出させるという意味的なニュアンスが出てくる。しかし原文の文脈から見ると、話し手と聞き手双方とも“红衬衫”と親しいので、訳文では指示詞を省略したほうが良いと三書の翻訳者は判断したのであろう。一方、原文の「赤シャツ」の前に「あの」を使用することによって、話し手と聞き手が双方とも知っている人物であることを示している。ここで、同じ意味を表す固有名詞は日本語と中国語の文によって、人物を指し示す力に差異があることがわかる。

(18)隣家の葡萄棚、打捨てて手を入れようともせぬ庭の雑草の中に美人草の美しく交って咲いているのも今更に目につく。時雄はさる画家の描いた朝顔の幅を選んで床に懸け、懸花瓶には後れ咲の薔薇の花を挿した。午頃に荷物が着いて、大きな支那鞄、柳行李、信玄袋、本箱、机、夜具、これを二階に運ぶのには中々骨が折れる。時雄はこの手伝いに一日社を休むべく余儀なくされたのである。〔布〕

(18’)邻居家的葡萄架，还有院子里那无人薅整的杂草里，混开着美丽的丽春花，显得更加醒目。时雄选出一幅已故画家画的牵牛花，挂在壁龛里，又在花瓶里插上迟开的蔷薇花。下午，行李运来了，有皮箱、藤箱、旅行袋、书箱、桌子、卧具等，费了很大的工夫，才把这些东西搬到了楼上。时雄为了｛Ø｝帮忙，不得不向公司请了一天假。《棉》

(18)の「この」は「手伝い」を修飾して、前文に書かれている「画家の描いた朝顔の幅を選んで床に懸け、…骨が折れる。」を指している前方照応指示であるが、訳文では指示詞を訳さず省略している。(18’)では指示詞“这”を動詞“帮忙（手伝う）”[7]の前に加えると、不自然になる。ここで“帮”と“忙”の間に“这”を入れた場合は自然な中国語文になる。なぜならば、そのようにすると“这”は動詞を修飾するのではなく、名詞を修飾することになるからである。

(19)「もう、止むを得んです」と時雄は言葉を続いで（ママ）、「僕はこの恋に関係することが出来ません。いや、もう厭です。芳子を父親の監督に移したです。」〔布〕

(19’)“这是万不得已。”时雄继续说，“我无法干预你们的｛Ø｝恋爱，不，我已经不愿过问这事了。我把芳子交给她父亲看管去了。”《棉》

(19)の「この」は「恋」を修飾しているが、(19’)の中国語では“你们的(あなたたちの)”

で「恋」を修飾し、限定している。(19’)では人称代名詞を使用せず、“这恋爱”のように指示詞で「恋」を修飾することもできる。しかしながら、中国語では第二人称代名詞で「恋」を限定するほうが、指示詞“这/那”に比べてよりわかりやすい。他方、日本語では人称代名詞より指示詞のほうがよく使用され、特に第二人称代名詞「あなた」の場合、中国語の第二人称代名詞“你（あなた）”ほど頻繁に使用しない。したがって、日本語文では指示詞を用いるが、中国語文では指示詞が省略されている。

(20) この外いたずらは大分やった。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人参畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取ったら、人参がみんな踏みつぶされてしまった。〔坊〕

(20a) 此外，我还干了不少调皮的事。一次，我领着木匠家的兼公和饭馆的阿角，踩坏了茂作的胡萝卜地。胡萝卜芽儿尚未出齐的地方，苫着一层稻草。我们三个在｛Ø｝上面摔跤，玩了老半天。一片胡萝卜全给报销了。(《哥①》括弧内は邱)

(20b) 另外，俺还干了一大堆淘气的事儿。有一次，俺领着木匠家的徒弟“兼公”和鱼铺子的“角公”，将茂作大叔家的胡萝卜地给踩坏了。在胡萝卜秧出得不齐的地方，盖有一大片稻草。俺们三个人就在这上边摔了大半天的跤，胡萝卜整个被踩得稀巴烂啦。(《哥②》)

(20c) 此外，还干了不少淘气的事。有一次，我领着木匠兼公和鱼店的阿角，把茂作家的胡萝卜地给毁了。胡萝卜秧还没有出齐，地上铺满了稻草，我们三个人在｛Ø｝上面玩了半天摔跤。这么一来，胡萝卜就全给糟蹋了。(《哥③》括弧内は邱)

(20)の「そのうえ」は「人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあった」場所を指し、文脈指示用法であるが、三書のうち二書が省略し、残りの一書は“这”に訳されている。訳文(20a)と(20c)では指示詞を使用せず、省略されても文の意味は変わらない。ここでの指示詞という要素は中国語の訳文(20a)と(20c)では顕現性が低いと言える。一方、日本語の原文では「そのうえ」を省略した場合、非文になる。

3.3.2 日本語の訳文中の指示詞の省略

前節に述べたように、日本語の作品で「コ・ソ・ア」系指示詞を用いても中国語の訳文では指示詞を省略する事例がある。一方、中国の作品で指示詞“这/那”が用いられている時に、日本語の訳文では指示詞を用いずほかの表現に置き換えるか、あるいは指示詞を訳さず指示内容を省略することがある。指示詞を省略するかは訳者の個人差によるところもあるが、以下で示すように個人差とは関係なく決定されるパターンもある。

3.3.2.1 “这”の省略

本節では日中対照作品から中国語の原文で用いられた指示詞“这”は日本語の訳文では指示詞に訳されず、省略された用例を抽出し、分析する。“这”の指示対象によって大きく「人・事物」「場所・方向」「時間」「修飾」の四つの枠組みに分け、それぞれ“这 1”，“这 2”，“这 3”，“这 4”で示す。指示詞“那”も“这”と同じように分類し、“那 1”，“那 2”，“那 3”，“那 4”で

示す。

“这 1”＋（NumCL）+N/NP

(21) ①**这话**不假。辛小亮平常对女同志耍横犯嘎，真到了②**这节骨眼儿**上，什么招儿也没啦。赵涛看着费劲儿，倒比小亮还急三分，“咱矿工搞对象，是‘集体’搞啊！找着一个有眼力的姑娘，不易！”《丹》

(21’)①趙涛の言う{Ø}通りだ。辛小亮は常日頃、女性の同志をいびるくせに、②{Ø}肝心なときにどうしようもないんだから。趙涛は見ていてじれったかった。本人よりもいっそう焦っていた。「俺たち坑夫が結婚相手をさがすときは結束してやらなきゃな。人を見る眼のある娘をみつけるのは容易なことじゃないからね」。〔鳳〕

(21) の①の指示詞“这＋N”の構造である“这话”は前文にある趙涛の話を指している。訳文では「趙涛の言う通りだ」に訳され、中国語の指示詞“这话”は訳されていない。また、②の“这节骨眼儿”の“这”も指示詞であり、時間を指し示している。しかし、訳文では②の「肝心なとき」に訳され、指示詞は用いられていない。前者の“这话不假”は訳文では「そのとおり」と訳しても非文にはならず、(21’)のように「趙涛」に言い換えても意味的には変化がない。したがって、指示詞は省略しているが代替の表現が使われ、等価の効果がある。②の“这节骨眼儿”は訳文では「肝心なとき」に訳され、指示詞を用いていない。原文の①と②の指示詞“这”は省略できない。①と②の“这”を省略するとそれぞれの指示する対象が不鮮明となり、理解に支障が生じる。

(22) 他突然笑了起来道：“其实我用不着什么借口呀！我爱玩——我有**这个钱**，有**这个时间**，还得去找别的理由？”《倾》

(22’) そう言ったとたん、とつぜん笑い出して、「本当は口実などいらないんです。僕は遊び好きで—{Ø}金があって、{Ø}時間がある。そう、たしかにそれだけで十分です」〔傾〕

(22) では“这个钱”と“这个时间”の“这”は遊びに必要なお金と時間を指す。訳文は指示詞が省略され「金があって、時間がある」とだけ訳されている。訳文(22’)は「金があって、時間がある」の前に指示詞を使って、どんなお金、何時間かを限定してもいいが、指示詞を省略しても意味は通じるので省略したと考えられる。中国語文でも指示詞“这”を省くことができる。そうすると“我有钱，有时间(私はお金があり、時間もある)”になる。しかしながら、指示詞を使用することによって、指示対象を明確化させ、遊びのために使うお金と時間があることを強調しているが、指示詞を省略した文ではただお金と時間があるという情報だけが相手に伝わることになる。

“这 2”＋（NumCL）+N/NP

(23)同行的几个人都说，命运其实不公平。在太行山当过兵的那个说，他家请了个小保姆，从安徽农村来，十七岁。有一回他在**这屋**里写东西，偶尔到**那屋**去找一本书，见那小保姆正在穿衣镜

前作一个舞蹈姿式，显然是从电视里学的，学得确实很到家。　　《插》

(23')同行の仲間が異口同音に運命は不公平だと言う。太行山に駐屯したことがある友人がこういう話をした。彼のところで若いお手伝いを雇った。安徽省の農村出身で、年は十七歳である。ある時彼が{Ø}部屋で書きものをしていて、ふと本を探しに別の{Ø}部屋に入ると、彼女が姿見の前で踊りのポーズをしていた。あきらかにテレビのまねだが、実に堂に入ったものだった。　〔大地〕

(23)の“这屋（この部屋）”と“那屋（その部屋）”は場所を指しているが、実際に話し手が発話現場の状況を参照して指示しているではなく、話し手は第三者の視点から登場する人物の出来事を語っているため、非現場指示である。また、ここでの“这屋”と“那屋”は実在する特定の部屋を指しているのではなく、対象させるための二つの部屋を指しているだけである。杨玉玲(2010)では、このような指示用法を「汎指」と呼ぶ。「汎指」は具体的に会話や文章にある特定対象を指し示すのではなく、対象が同定されていないことを指す。訳文では「部屋」と「別の部屋」に訳されている。原文の指示詞“这”と“那”の指示機能が弱化し、具体的な部屋を指し示していないため、訳者は日本語の指示詞を使用せず、「部屋」と「別の部屋」で区別している。この語句に指示詞を加えて「こっちの部屋」と「そっちの部屋」とすることも可能である。

(24)“有一本，叫……《雷雨》，写什么打雷下雨天儿，一家子搞破鞋！当哥哥的，还把妹妹给糟蹋了。这叫什么事儿！我把他们训一个溜够：你们**这儿**啊，破鞋满天飞！嘿，还不服气哪。您说，咱工人不去管管，了得？！”　　《辘轳》

(24')その中に、何ていったっけ……そう、そう、『雷雨』というのがある。なんでも嵐の晩、家中がふしだらをする話が書いてあるとか。兄が妹を辱めるなんて。なんていうことだ!おまえらの{Ø}ところはふしだらなことも野放しかと、徹底的にとっちめてやったよ。それでも反省の色さえないのだから、われわれ労働者が、監督しなけりゃどうなるかわかったもんじゃないよ」　〔轆轤〕

(24)の“这儿”は人称代名詞“你们（あなたたち）”とともに使用され、“你们”で場所“这儿”を限定している。訳文では「おまえらのところ」と訳されている。原文(24)では“这儿”は前文に書かれていることが起きた場所を指している前方照応指示であり、指示詞を省略することができない。“这儿”を使用しない場合、“这里”や“这地方”など「“这”…」を入れ替えなければいけない。日本語の訳文(24')の「おまえらのところ」は指示詞「ここ」に入れ替えることもできるが、中国語のように、人称代名詞で指示詞を修飾することはできない。

“这3”＋“时”

(25)监工拄着藤条原地不动，罗汉大爷搬着石头，胆战心惊地从他眼前走过。监工在罗汉大爷脖子上抽了一藤条。大爷一个前爬，抱着石头不管不顾，跪倒在地上。石头砸破了他的双手，他的下巴在石头上碰得血肉模糊。大爷被打得六神无主，像孩子一样胡胡涂涂地哭起来。**这时**，一股紫红色的火苗，也在他空白的脑子里缓缓地亮起来。《红》

(25')監督はまだもとのところに立っている。羅漢大爺が石をかかえて、おそるおそるその前を通りかかると、監督は羅漢大爺の頸を鞭うった。大爺は石を抱いたまま、前のめりに跪いた。両手が石の下敷きになり、下顎は石にぶつかって血まみれになる。大爺はもうなにがなにやらわからなくなって、ただ幼児のように泣きだした。{Ø}空っぽになってしまった頭のなかで、赤紫の熔がゆっくりと燃えあがった。　　〔高粱〕

(25) の“这时”は、大爺が殴られ泣き出した時を指し、前文の内容を後文に持ち込み二つの文を繋げている。ここでの指示詞“这时”は省略できない。一方、訳文(25')では指示詞を使用せず、指示内容まで省略されているが、「その時、あの時」を使用して、指示詞を復元することができる。

(26)一九八五年夏天，笔者在一个海滨疗养地碰见了老友倪藻。他已经五十多岁了，身体健康。**这两年**，似乎混得相当有情况儿。他约我一起去游泳。他游蛙式、侧泳和仰泳，游得缓慢，平稳，自如。开始时我在前，他在后，为了与他一道游，我时时要放慢速度等他。　《人形》

(26')療養地で旧友の倪藻に出会った。彼もすでに五十余を数えるが健康そうであった。今では{Ø}、彼の境遇もなかなか、けしてオジャンに非ずと拝察した。彼は私を水泳に誘った。平泳ぎ、横泳ぎ、背泳を彼はゆっくりと安定して自在にこなしている。初めは私が先、彼は遅れていたから、一緒に泳ごうと私は何度も速度を落として彼を待った。〔応報〕

(26) の“这两年”は指示詞「“这”＋NumCL」の形で時間を指している。前文の“一九八五年夏天（“一九八五年夏)”がない限り、近頃の１年間か２年間のあいだの時間を指していることが多い。原文 (26) は過去のことを述べ、一九八三年から一九八五年までの間の時間を指している。訳文では指示詞に訳さず、現在の視点から出来事を述べているように「今では」に訳されている。ここで「今では」は「その時・あの時」と置き換えることもできる。しかし、指示詞の有無によって語り手の視点が変わってくる。

“这 4”（＋ NumCL）

(27)确实是**这样**，胶平公路修筑到我们这里时，遍野的高粱只长到齐人腰高。长七十里宽六十里的低洼平原上，除了点缀着几十个村庄，纵横着两条河流，曲折着几十条乡间土路外，绿浪般招展着的全是高粱。《红》

(27')確かに{Ø}、膠平公路の工事がわたしたちのところへきたとき、あたり一面の高粱の丈はまだ腰の高さまでしかなかった。長さ七〇里（一華里は〇・五キロメートル）幅六〇里の低湿な平原には点在する数十の村落と縦横に流れる二筋の河、曲がりくねった数十本の田舎道のほかは、緑の波のようにうねる高粱で埋めつくされていた。〔高粱〕

(27) の“这样”は前文に書かれている内容を指している前方照応指示である。訳文では「確かに」に訳されているが、「確かにその通り」あるいは「その通り」と訳してもよい。「その通り」は指示詞であるが、指示機能より、接続機能のほうが発達しているので、主に前文の内容を受け、

後文の内容に繋がる。他方、「確かに」は本来相手が言う話や、前脈に書かれている内容に関しては、明白で間違いのない、確実であるさまを伝えたい場合に用いる。したがって、ここで「確かに」を使用し、指示詞を省略しても前文の内容を繋ぐことができるため、指示詞は用いられない。

(28) 你伸一只手，我伸一只手，在老羊皮袄底下互相摸指头，名之曰“掐码”。陕北人做买卖都这样。你出三个指头，意思是你认为这事得给三块钱；我少出一个，意思是，这么几步路两块钱足够了。《插》

(28')相手が片手を差し出し、こちらも片手を差し出してぶ厚い羊皮の上着の下で指を探り合う。“握り合い”と呼ばれるやり方で、陝西省北部の人はみなこうして売り買いを行う。相手が三本の指を出せばこの仕事は三元だという意味であり、こちらが一本少なくすればこれっぽっちの{Ø}距離なら二元で十分だという意味である。〔遥か〕

(28) の“这么”は歩く距離の短さを強調し、程度を表す副詞“就/仅(ただ)”などと共起できるが、ここでは“就/仅”が用いられていない。日本語訳は指示詞を訳さず、(28')の量や度合いの少ないことを示す「これっぽっち…」になっている。(28')で「そんな」を用いて距離を修飾しても、文法的には間違いではないが、「これっぽっち…」のほうがより厳密に程度を示している。中国語文では副詞で指示対象を修飾してから、再び指示詞で指示対象を修飾することができる。しかし、(28')では「これっぽっち」と「そんな」を一緒に使用すると非文になる。中国語文で指示詞“这么”を省略して、副詞“已经(もう)”などだけを使用することもできる。それに対して日本語文では副詞と指示詞の両方を同時に使用できず、片方しか用いられない。

3.3.2.2“那”の省略

曹秀铃(2000)、杨玉玲(2011ｂ)によると、中国語の指示詞“这”と“那”を使用率から見れば、“这”は“那”より遥かに多いことが分かる。しかし吕叔湘(1985)は、“那”の指示機能が虚化し、「虚指」するケースが“这”より多いと解釈している。指示機能が虚化することによって、訳文では指示詞に訳されず、他の言葉に代替したり、省略されたりする現象が見える。

前節で中国語の指示詞“这”は訳文では訳されず、省略例を中心として分析したが、本節では指示詞“那”と日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞の省略について考察する。

“那 1”＋ (NumCL) ＋N/NP

(29) 乔奶奶笑了，“近还不说。那姑娘真不赖呢。听说在食堂得算顶漂亮的。双眼皮儿，细皮嫩肉……” 《丹》

(29')喬婆さまは笑って言った。「近いよりも何よりも、{Ø 娘、なかなかいい} なかなかいい娘なの。食堂の娘さんたちの中じゃ一番の別嬪だって二重まぶたで、きめの細かい肌をして……〔鳳〕

(30) 听到这儿，我忍不住插嘴：“老掉牙的故事了，还不是后来遇了荒年，大家没饭吃，媳妇把每日攒下的米拿出来，不但自家有了，还分给穷人？”他很惊奇地坐直了，看着我说：“你知道这个故事？可那米没有分给别人，五奶没有说分给别人。” 《棋》

(30')ここまで聞いて、ぼくは口をいれた。「なんだその話か。その後、飢饉になり、みんなが食うものがなくなったとき、嫁が毎日蓄えておいた米を取り出して、家の者が食いのばすことができただけでなく、貧乏人にまで分けてやったというんじゃないかね」彼は目をまるくして座りなおした。「知ってたのか。でも、{Ø}米を人に分けてやりはしなかったんだぜ。ばあさんはそうは言わなかったぜ」　　〔棋〕

(29)と(30)のように“那姑娘”と“那米”は全て「“那”+N」の型になる。“那姑娘”は前の文で言い出した“孟沛”を指し、中国語では省略できない。“那姑娘”の“那”を省略した場合、どこの娘でだれなのか分からなくなり非文になる。“那米”の“那”は前文の物語で話した米のことを指している。(29)と同様中国語原文は指示詞を省略できない。(29')と(30')では指示詞は訳されていないが、指示詞を加えても不自然な日本語にならない。ただし、(29')の訳語の語順を変えなければいけない。即ち、「なかなかいい娘」から「あの娘がなかなかいい」に直す。

(31)才零乱了的队伍，经卢嘉川这么一鼓动又组织起来了。八人一排，臂膀挽着臂膀，怀里揣着石块，高呼着口号一直向北大红楼前的大门冲过去。那个北大的女学生，成了道静这一小队的队长，她不慌不忙地指挥着人们向外走着，道静紧挨着她，也昂然地迈着大步。《歌》

(31')いましがた、乱れかかった隊列は、芦嘉川のアジテーションで、またもや整然と組織された。八列縦隊になり、スクラムをくみ、石ころをひろって、たかだかとシュプレヒコールを叫びながら、まっしぐらに、北大の紅楼前の正門をめざして突撃した。{Ø}例の北大の女子学生は、道静の小隊の隊長になった。かの女はおちつき払って隊伍を指揮して、外へと向かった。道静はしっかりとかの女について、みなと同じように昂然として、大またで行進した。〔歌〕

(32)“你的意见对。那批美棉和印棉有消息没有？”《上海》

(32')「きみの考えのとおりだ。ところで、{Ø}例の米綿と印綿は情報がはいったか？」〔上海〕

(33)“那几批货色怎么样？”《上海》

(33')「{Ø}例の荷の具合はどうだな？」〔上海〕

(31)の“那个”(32)の“那批”(33)の“那几批”は中国語の指示詞“那”を用いて、前文で話している内容を指し示す。日本語では全て習慣的な言い方「例の…」に訳されている。今まで行われたことや、あるものの性質や傾向が同一であると認めている場合に「例の+N」が使用される。それを使って、話し手と聞き手双方ともわかる事物を示す。中国語の場合はそういう用法がないため、それと同じ意味を表す「指示詞+N」を用いる。(31')(32')(33')の場合は、「例の…」の代わりに指示詞を使用することができる。入れ替えるとそれぞれ「あの北大の女子学生」「あの米綿と印綿」「あの荷」になる。ここで注目しておきたいのは、全ての訳文の置き換えに指示詞「あの」が使われていること。訳文の指示詞は全て観念指示用法で、「ア」系指示詞を選ぶわけである。そして、指示詞の後についているのは名詞あるいは名詞文であるため、名詞を修飾する「あの」が選択される。(31)(32)(33)では観念指示の「あの」を使用するよりも、「例の…」を使ったほうが聞き手にとって戸惑わずにすむ。

“那 2”＋ (NumCL) +N/NP

(34) “不。”他晃晃大帽子，“我们那圪崂没有火车，只有森林和大草甸子。《梦》

(34’)「いや」大きな帽子がゆらゆら揺れた。「おれんち{Ø}の方には汽車はない。森と広い原っぱだけだ」 〔夢〕

(34) の“那圪崂”の“那”は指示詞で、“圪崂 (gēláo) ”は「ところ」という意味の北方方言である。“那圪崂”は人称代名詞“我们”とともに場所を指し示す。日本語の訳文では「おれんちの方」に訳され、指示詞を使用していない。(34’) で指示詞の「こちら」に訳すと、原文の非現場指示用法は訳文で現場指示用法になる。また、中国語文のように「PP+“这/那”+N/NP」の形で使用できないため、「PP+N/NP」か、「Dem+ N/NP」かのどちらかに訳すことになる。

(35) “一直挨到现在，趁着年假的闲空，我才得回南给他来迁葬。”他又喝干一杯酒，看说窗外，说，“这在①**那边**那里能如此呢？积雪里会有花，雪地下会不冻。就在前天，我在城里买了一口小棺材，——因为我豫料②**那**地下的应该早已朽烂了，——带着棉絮和被褥，雇了四个土工，下乡迁葬去。《彷》

(35’)「それがいまになってやっと、冬の休暇を使って、改葬のため南に戻ってこられたんだ」彼はまた酒を一杯飲みほして、窓の外を眺めやりながら言った。「①{Ø}北方では、まずありえないんじゃないかな。雪のなかに花が咲いて、雪の下の地面が凍らないなんて。ところで、おとといのことだ。城内で小さな棺を買って——というのは、②{Ø}墓地に埋めたやつはとっくに腐っているにちがいないと思ったからだ——綿や布団などを持って、人夫を四人雇って、郷里に改葬に行った。 〔彷〕

(35) は (34) と同様、会話文である。①の“那边”は話し手と聞き手双方がよく知っている場所であり、共通の記憶の中に知識として存在している。前文には「南に戻ってこられた」とあるので、ここで「北方」に訳すと対比的な効果が出せる。また、ここでは現場指示の「そちら」も使えるし、観念指示の「あちら」も使用できる。[8]②の“那地下”は前文に書かれている“迁葬 (改葬) ”のことと関わって、非現場指示である。訳文では「墓地」に訳され、「あそこ」のような指示詞を使用していない。②の“那”は“地下”とともに彼が埋められている墓地を指しているため、日本語の訳文では場所を指し示す指示詞を使用せず、「墓地」を直訳している。原文の①と②の指示詞“那”は省略することができない。一方、訳文では「北方」と「墓地」の代わりに指示詞に入れ替えることができる。

“那 3”＋ (NumCL) + N/NP

(36) 这一学年没有完毕，我已经到了东京了，因为从那一回以后，我便觉得医学并非一件紧要事，凡是愚弱的国民，即使体格如何健全，如何茁壮，也只能做毫无意义的示众的材料和看客，病死多少是不必以为不幸的。所以我们的第一要著，是在改变他们的精神，而善于改变精神的是，我**那时**以为当然要推文艺，于是想提倡文艺运动了。《呐》

(36’) この学年が終わらぬうちに、私は東京に出ていた。あのことがあってから、私は、医学という

ものがけっしてそれほど大切ではない、と悟ったからだ。愚弱な国民であるかぎり、体格がいくらりっぱでも、いくら頑健でも、せいぜい無意味な見せしめの材料とその見物人になるだけのことで、病気になろうと死のうと、それだけでは必ずしも不幸だとはいえないのだ。私たちが最初にやらねばならぬことは、彼らの精神の改造にある。そして、精神の改造に役立つものといえば、私の考えでは、むろん{Ø}文芸が第一だった。そこで文芸運動を提唱しようと考えた。　〔吶〕

(36)の“那时”は前文に書かれている魯迅が東京に出てから、中国人の精神を改造しようとする時期を指す。語り手は文芸運動が第一だと思っているのは当時だけを取立てて述べたいために“那时”を用いて強調している。したがって、中国語文では“那时”を省略しても文脈からいつの考えなのかが分かる。他方、日本語文では「むろん文芸が第一」に訳され、指示詞を使用していないが、「その時・そのごろ」など指示詞と時間を示す名詞が合わさった形を加えてもよい。ここで強調するための指示詞は、中国語文や日本語文もどちらも省略してもよい場合があることがわかる。

3.4 まとめ

以上、対訳がある作品で、原文にある指示詞が訳文では省略されている例を考察した。指示詞が省略される原因としては以下の７つが考えられる。

ア．訳文における指示詞の主な役割は指示機能ではない。指示機能よりも標識機能の方が強く、指示対象を取り立てる働きをする。その場合、指示詞の代わりに副詞などを使用して、取り立てたい対象を焦点化する。その結果、訳文では指示詞を省略しても意味的に変化がなく、指示詞を復元しても非文にならない。

イ．日本語の属性を示す指示詞「こんな・そんな・あんな」は一般的に、裸の状態で使用される。つまり、「こんな・そんな・あんな」の前に修飾する文成分を置かない。一方、中国語文では修飾を示す“这样/那样”“这么样/那么样”“这么/那么”の前に修飾する文成分がよく用いられ、指示詞は裸の状態ではない。つまり、指示対象を指示詞と指示詞を修飾する文成分で同格に修飾する。このような同格修飾の文では指示詞の前に置かれた指示詞を修飾する文成分は指示対象の属性を明確にした場合、指示詞が省略される。

また、「こんな・そんな・あんな」は属性を示しているので、指示対象は中国語に訳される場合、訳者の理解によって「こんな・そんな・あんな」の表す程度が変わってくる。そのため、指示詞を使用せず、副詞や形容詞などで程度を示す。しかし指示詞で修飾しても構わないケースも見られる。

ウ．様態を示す「こう」が後方照応として用いられた場合、後文にある照応内容は説明する必要性の有無、説明内容の多少によって、指示詞の省略の可否が決まる。「こう…」が指している内容が多ければ多いほど、訳文では指示詞を使用する確率が高くなる。それに対して、「こう…」が指している内容がそれほど多くなく、文も長くない場合、訳文では指示詞が省略される可能性が高い。

エ．「この・その・あの」のような名詞を修飾する指示詞は修飾される名詞によって、訳文で

指示詞が省略されるかどうかの区別が生じる。話し手と聞き手に共通知識、共通体験がある場合、中国語文では指示対象の特徴を示す固有名詞のみで話し手と聞き手の記憶に蓄えている指示対象を指すことができるが、日本語ではその固有名詞の前に「ア」系指示詞を用いなければいけない。このことから、同じ意味を表す固有名詞でも日本語と中国語の文によって、人物を指し示す力が異なり、日本語では指示詞の力を借りる必要があるが、中国語文では指示詞を省略しても意味的な変化が生じない。

また、本来「この・その・あの」は名詞を修飾するので、後につく品詞は名詞でなければいけない。しかし、「この・その・あの」の後に置かれた名詞は、訳文では動詞などの品詞で訳される現象がある。そのため、訳文は指示詞を使用することができなくなる。この理由から使用されていない指示詞は後につく品詞が名詞に変わることによって、復元することができるのが特徴である。

中国語では人称代名詞で指示詞の代わりに名詞を修飾することが多いが、日本語記述文法研究会（2009）によれば、「人称代名詞は通常、談話の中ですでに言及された人物を後で再度指示する場合などに用いられる。日本語では、人称代名詞による指示は物語文ではよく用いられるが、それ以外ではほかの指示の仕方ほど一般的でない」ということである。よって、文中の指示詞は人称代名詞と入れ替えても意味的に差し支えがなければ、中国語文で指示詞の代わりに人称代名詞を使用することもある。この場合の指示詞は使用できるので、復元できることを意味している。したがって、本論ではこのようなケースも大きな範囲での省略表現とする。

オ．訳者は訳文全体の構造や指示詞の重複などを考慮して、人称代名詞や人を表す固有名詞が指示詞の代わりに使用したと思われる表現がよく見られる。さらに、人称代名詞のみではなく、ほかの置き換え表現、例えば指示詞と等価の効果がある名詞文がある場合、指示詞は省略できる。

カ．原文で指示詞を用いても、省略してもよい場合は、訳文もそれと対応して指示詞を省略することが多い。（これを本章では指示詞の省略表現として扱っているが、広義的には日中の指示詞が対応していると言える。）また、訳文と原文の語順が変わることで、本来指示詞が使えるところが、訳文で指示詞の前後の品詞が変わるために、使用できなくなる。原文の語順に従って、訳せば指示詞の復元ができる。

キ．中国語の指示詞“这/那”の指示機能が弱化し、実際的に何かを指すのではなく、指示用法の「汎指」に当たる場合、日本語では指示詞が省略されることがよくある。

注

第3章

1)馬場（2006）では市川（1978）で行われている接続表現の省略可能性の調査結果（調査Aは被調査者65名、調査Bは被調査者53名）と、佐久間（1992）の調査結果（調査Aは被調査74名、調査Bは被調査者72名）の比較を検討している（市川と佐久間が調査を行う場合、同じ例文を用いている）。

2）山田忠雄・柴田武（1992 初版）『新明解国語辞典（第七版）』（三省堂，P861）にはこのように述べている。「そして」は「そうして」の口頭語的表現で、前の表現を受けて、そのままそれに付

け加えて述べようとする。話し手の意図を表す。

したがって、「そして」は前に述べて事柄に付け加えて述べる意味を表す場合、「そうして」「そうする」などと同様に指示詞「そう」を語基として用いられている表現だと理解できる。

3) 選んだ15篇の作品の一覧表は以下の通りである。

原文	省略	訳文	省略	著者	訳者
『あした来る人』	〔あした〕	《情系明天》	《明日》	井上　靖	林少华
『越前竹人形』	〔越〕	《越前竹偶》	《越》	水上　勉	何平
『黒い雨』	〔黒〕	《黑雨》	《黑》	井伏鱒二	宋再新
『砂の女』	〔砂〕	《砂女》	《砂》	安部公房	叶谓渠
『ノルウェイの森』	〔森〕	《挪威的森林》	《森》	村上春樹	林少华
『坊ちゃん』	〔坊〕	《哥儿》	《哥》	夏目漱石	刘振赢
『布団』	〔布〕	《棉被》	《棉》	田山花袋	胡毓文
『雁の寺』	〔雁〕	《雁寺》	《雁》	水上　勉	何平
『高野聖』	〔高〕	《高野圣僧》	《高野》	泉鏡花	文洁若
『野火』	〔野〕	《野火》	《野火》	大岡昇平	王杞元
『青春の蹉跌』	〔青春〕	《青春的蹉跌》	《青春》	石川達三	金中
『死者の奢リ』	〔死者〕	《死者的奢华》	《死者》	大江健三郎	李庆国
『斜陽』	〔斜陽〕	《斜阳》	《斜阳》	太宰治	张家林
『痴人の愛』	〔痴人〕	《痴人之爱》	《痴人》	谷崎潤一郎	郭来舜
『雪国』	〔雪国〕	《雪国》	《雪国》	川端康成	叶谓渠

4) 本章で述べている指示詞の省略は訳文でただ指示詞が訳されなかっただけではなく、訳されても非文にならない例を検討している。

5) 《日语知识》は1983年に大連外国語大学が創刊した中国唯一日本語の総合月刊誌。現在、東北地方で最大の日本語教育と研究を中心に編集している雑誌で、海外で二十数カ国・地域の専門家と学者たちの関心を集めて、日本語学習者にも注目されている。内容は日中対照、日本文学、言葉コーナー、訳文コーナーなどである。本論で使用した例文は主に訳文コーナーから選択したものである。

6) 日本語記述文法研究会が編集された『現代日本語文法7』第12部談話、第13部待遇表現(2009)では名詞による指示に関しては、主に同じ固有名詞と別の普通名詞を2類に分けられている。

A：「田中さんは?」
B：「田中さんなら、さっき出かけました。」（同じ固有名詞）
A：「鈴木さんは?」
B：「課長なら、さっき出かけたよ。」(別の普通名詞)

（日本語記述文法研究会 2009：19）

7) 手伝いは日本語では名詞であるが、中国語に訳された“帮忙”は文脈によって、名詞にも動詞にもなれる。

8) 邱 麗君（2012a：139-140）では次のように述べている。絶対指示は現場指示用法を凝して生まれたが、話し手のいる具体的な場所とは直接関係がないため、現場指示とは言えない。また、手紙など話し手に会わない状況において話し手が聞き手のいる場所を同定することは観念指示の用法に近い。つまり、観念指示は現場指示と絶対指示に似ている特徴である。

【第二部】日本語の指示詞と中国語の指示詞が対応する表現

第二部は第 4 章日本語の指示詞とそれに対応する中国語の表現と第 5 章中国語の指示詞とそれに対応する日本語の表現からなっている。第二部では日本語の原文に用いられた指示詞が中国語の訳文で“这/那”に翻訳された例と、中国語の原文に用いられた指示詞が日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳された用例を抽出し、非現場指示の日本語の前方照応指示用法と後方照応指示用法および、中国語の「回指」用法と「前指」用法に焦点を当て、それぞれの対応する状況を分析する。

第 4 章　日本語の指示詞に対応する中国語の表現

日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」の三系列を有するのに対して、中国語の指示詞は近称の“这”と遠称の“那”の二系列しか存在しないため、「コ」系指示詞のほとんどが“这”、「ソ・ア」系が“那”と対応すると考えられる。この説が正しければ、中国人にとって、日本語の指示詞の習得は困難ではないはずだが、邱麗君（2010，2011a）による中国人の日本語学習者アンケート調査の結果は意外なものだった。初級、中上級に関わらず中国人日本語学習者には非現場指示用法の間違えがよく見られ、正解率は 50%にも達していなかった。この結果から、中国人の学習者にとって、日本語の指示詞の非現場指示用法は習得が難しく、「コ」系指示詞のほとんどが“这”、「ソ、ア」系が“那”に対応するというような一般論では説明のつかない問題があると推測できる。つまり、一般に「コ」系指示詞は“这”に訳され、「ソ・ア」系指示詞は“那”に訳されるが、完全に対応していると言えるかの問題である。本論で主張している対応関係というのは、単に日本語原文では指示詞を用いて、中国語の訳文では指示詞に訳されているだけではなく、指示用法の対応が最も重要である。また、原文の「コ」系指示詞は“这”にも、“那”にも訳せるケースがある。これは「コ」系指示詞が“这”と“那”の双方に対応していることを意味する。これも本章で検討する。修士論文（邱麗君 2008　未刊行）では日中指示詞の文脈指示用法の対照研究をこころみたが、文脈指示用法を細分して考察できなかった。そこで、博士論文では、非現場指示を文脈指示と観念指示、絶対指示に分け、さらに文脈指示を「前方照応指示」と「後方照応指示」に細分し、多くの例文を用いながら、分析する。

4.1 前方照応指示と中国語指示詞“这”の対応表現

前方照応指示に関する研究は木村（1983b），庵（1995c），岡崎(2010)などがある。その照応指示の定義はほぼ田中(1981)によっている。田中（1981）は照応とは、「一般に文の中の、あるいは一貫性のある文連続の中の二つの言語形式が同一の対象を指示している場合のその二つの言語形式の関係を意味する。」と規定し、さらに、照応の種類に関しては、先行詞と照応詞との間の位置関係により分類され、「文脈の中で先行詞が照応詞に先行する照応を前方照応」と定めている。本論も田中(1981)の定義に従い、前方照応指示と後方照応指示として使用されている「コ・ソ・ア」系指示詞を考察する。

4.1.1 前方照応指示の「コ」と“这”の対応表現

前方照応指示の「コ」系指示詞は日本語記述文法研究会 (2009 : 21) によって、「もの (コレ)」、「名詞修飾 (コノ)」、「場所 (ココ)」、「方向 (コチラ・コッチ)」、「属性 (コンナ)」、「様態 (コウ)」の６つに分類されているが、本論は「もの (コレ)」よりも包括範囲が広い「事、物 (コレ)」に入れ替え、ほかの５つはそのまま援用する。以上の６種の分類に従い、分析していく。相当する用例がない場合には、その分類を省略する。

事、物を示す「コレ」

(1)「セーターは、形をととのえて、お日さまのあたらないところにほすんだよ。**これ**を『陰干し』というんだ。」〔洗い方〕

(1')“毛衣整好形后，要放在太阳照射不到的地方晾晒。**这**叫‘阴干’。”《洗涤方法》

(1) の「これ」と先行する文脈で述べている「セーターは、形をととのえて、お日さまのあたらないところにほすんだよ」との関係は「照応 (anaphora)」である。ここでの「これ」はものを指すのではなく、セーターの干し方ということを指し示している。(1') では“这”に訳され、中国語指示詞の「回指」用法である。ゆえに (1) の「これ」と (1') の“这”はともに同じ近称指示であるとともに指示用法まで対応していると理解できる。前方照応指示の「コレ」の例はほかの指示詞より少ないことがあきらかになった。しかし、日本語の教科書[1)]では「コレ」のような使用頻度が高くない語彙が最優先に提示されているのが現実である (詳細は第 6, 7 章を参照)。本来は実際に使用頻度が高い指示詞の提示を優先しなければいけないが、現状では使用頻度の低い語彙が先に提示されている。これは教科書における指示詞の提示順番に改善の必要性があることを示唆している。

名詞修飾の「コノ」

(2) 何度も危機に襲われ、飢えと疲れで倒れそうな体を引きずって、奴隷制廃止論の白人たちに助けられながら、ついにカナダに到着し、しかもそこで思いもかけず、ジュリリィは母に再会する。①**この**ように②**この**物語はハッピエンドで終わるのだが、社会制度の悪と悪としてはっきり、人間の心にひそむ悪と悪としてはっきり描き出しており、そのような中で人はいかに生きるべきかという問題をも提起している。　〔ゆり〕

(2') 她们多次受到艰难险阻，强拖着由于饥饿和疲惫就要倒下的身躯，在主张废除奴隶制的白人们帮助下，终于到达了加拿大。并且，朱里莉在那儿意外地和母亲重逢了。就①**这样**，②**这个**故事以大团圆而结束。作者把社会制度的险恶，把潜藏在人们心底的丑恶，都毫无掩饰淋漓尽致地描写出来。并提出了在这样的世间，人们应该怎样生存的问题。　《百合》

(2) の①「この」は「ように」と共に前文の内容を指し示している。②の「この」は「物語」を直接修飾している。①には言語的なコンテクストがあり、「このように」は「何度も危機に襲われ、飢えと疲れで倒れそうな体を引きずって、奴隷制廃止論の白人たちに助けられながら、ついにカナダに到着し、しかもそこで思いもかけず、ジュリリィは母に再会する。」と照応している。

②「この物語」は①の「このように」の用法と異なり、聞き手がある種の意味論的な知識を持っていることを前提とする。読み手は「何度も危機に襲われ、…ジュリリィは母に再会する。」が物語の内容だと知っていることを前提として、「この物語」が何を指しているか理解可能である。訳文ではそれぞれ前文の内容を指し示す“这样”と“这个故事”に訳され、日本語原文の「この」と対応している。

(3) ほとんどの日本の家庭では、お金の管理は妻の仕事である。妻が働いていてもいなくても、夫は必要な金を妻からもらっている。財布のひもをにぎっている外国人の男から見ると、なぜこのような重要な権利を放棄するのか、理解できないだろう。実際、日本の男である私にも、よくわからないのだ。この習慣は最近始まったことではない。〔夫〕

(3’) 在绝大多数日本家庭里，管账是妻子的职责，不管妻子是否有工作，丈夫都从妻子那里领取必要的费用。在手握财政大权的外国男人看来，放弃如此重要的权力，恐怕是一件不可理解的事情。事实上，作为日本男人的我也不明白。这习惯并非始于最近。《男人》

(3) の「コノ」は名詞「習慣」を修飾して、「この習慣」は「ほとんどの日本の家庭では、お金の管理は妻の仕事である。妻が働いていてもいなくても、夫は必要な金を妻からもらっている。」という習慣を指している。(2) の①と同じく、照応指示の代表的な用法である。訳文 (3’) では“这习惯”に訳され、原文と同様に前文の内容と照応している。よって、(3’) の“这”と (3) の「コノ」は対応している。迫田 (1998：79) が述べた「日本語の単純照応用法のコ系は、中国語でも这系で用いられる」の「単純照応用法」は (3) で示している例のように照応用法の典型的な例を指している。迫田 (1998) を踏まえ、前方照応指示の例を考察し、(3) のような典型的な前方指示用法は“这”と対応している可能性が高いという結果を出している。

属性を示す「コンナ」

(4) かつて時間はもっとゆっくり動いていたような感じがする。誰にでもある経験だろうが、私も若いころ何時間でもぼんやり海を眺めたり、野原を散歩したりしたものだ。夜を徹して話し合ったりしたものだ。いまそんな時間はどこにあったのだろうか。こんな風に思うのは、私だけなのだろうか。〔生きる〕

(4’) 我觉得时光曾迈着更悠闲的脚步。大概谁都会有这种体验吧。年轻的时候，我经常连着数小时或呆呆地眺望大海，或漫步在原野。也经常彻夜不眠地与人交谈。如今，那样的时光都去了何处呢。有这种想法的人，仅仅是我一个吗。《生活》

(4) の「こんな風に思う」は「かつて時間はもっとゆっくり動いていたような感じがする。…いまそんな時間はどこにあったのだろうか」と照応し、主に「いまそんな時間はどこにあったのだろう」を指し示している。「こんな」のような非現場指示用法は主に文章の中で用いるが、会話の中で、ひとりが特定の主題について話が進む時でも用いられる。(4) は特定の主題について話が進む場合である。また「コ」系指示詞を使用することによって、聞き手の注意を引き、「目の前に生き生きと提示するような効果が出る」(金水・田窪・木村 1989c：44)。訳文では“这种想

法”に訳され、「こんな」が“这”と対応している。中国語訳文の「こんな」が“那”と訳されない理由は、中国語で指示詞を用いる場合は、聞き手の立場で、指示詞を選択することはなく、話し手の視点から指示詞を決定するためである。よって、話し手にとって身近なこと、関心が高いことなら“这”を用い、逆に話し手から物理的に、心理的に遠い時は“那”で指し示す。このことは修士論文(邱麗君 2008 未刊行)で述べているように指示詞の決定権に関しては「日本語は【他者依存型】、中国語は【自己依存型】」であると一致している。

(5) 彼女一通の白い封筒を差し出した。中には便箋が一枚入っている。彼はその内容に、ざっと目を通した。『一心配しなくても、僕たちが結ばれることは、前世から決まっていたことなんだ。君は忘れているんだね。でも、大丈夫。僕の愛の力で、思い出させてあげるよ。そして、僕の両親に会いに行こうー』　こんな調子の文章が、便箋の表裏に細かいもじで延々と続いていた。〔ストーカー〕

(5') 女子拿出一个白色信封。里头有一张便笺上的内容。‘——不用担心，我们的结合是前世注定的。你给忘了吧。不过没关系。用我的爱的力量会让你想起来。并且去见我的父母吧——’这种感觉的文章在便笺的正反面密密麻麻地写着。《跟踪狂》

(5) の「こんな」は「調子」と結びついて「文章」を説明している。つまり、前文の手紙の内容「一心配しなくても、僕たちが結ばれることは、前世から決まっていたことなんだ。…僕の両親に会いに行こうー」を指し示している。(5') では“这种感觉的文章”に訳され、「こんな」は“这种”と対応している。(5) と (6) は会話と文章という文体の違いによって、日本語文では「コ」系指示詞が選択される理由は異なるが、中国語文で“这”に訳される理由は同様である。

様態を示す「コウ」

(6)「ちょっと待ってくれよ。①こうなったらやっぱり権力に、いや腕力も捨てがたいし超能力も…。うーむ…。②こうなったら悪魔くん、君がもっともよさそうな力を選んで私に与えてくれ」〔力〕

(6') “请让我再想想好吗……如果是①这样，还是选权力，不，臂力也挺合意，超能力也…嗯…②这样吧，魔鬼老兄，还是由你选一个你认为最好的能力给我吧。”《能力》

(6) は悪魔と取引する男（話し手）の発話である。その男はお金を払って悪魔から能力を買おうとしているが、権利、腕力、超能力などいろいろな能力から 1 つしかもらえないと悪魔から言われている。男はどれにするか戸惑って、(6) の発話をしたわけである。(6) の①「こうなったら」は今まで悪魔と交渉した内容と照応している。②の「こうなったら」は前文に書かれている「やっぱり権力に、いや腕力も捨てがたいし超能力も…。うーむ…」と照応し、決断できないことを指している。訳文では①と②はそれぞれ“这样”に訳されているが、①の“这样”は原文の指示用法と同じく、前文の内容と照応しているが、②の“这样”は原文の指示用法と異なり、後文の内容を指し示している。いわゆる後方照応指示用法である。①の「こうなったら」と②の「こうなったら」はどちらも“这样”に訳されているが、①の「こう」は訳文の“这样”と対応

していると言える。一方、②の「こうなったら」は“这样”と同じ近称指示だが、指示用法は対応していない。ここで（6’）の②は原文の「こうなったら」と用法を揃えて、前方照応指示に訳されても通じる。しかし、邱麗君（2011b）で述べているのと同じように、依頼の表現でも、日本人と中国人のコミュニケーション方式は異なり、日本人は聞き手や登場人物、話す場などを考慮し、前置き、言いさしなど、婉曲な表現を好んで用い、コミュニケーションの円滑化をはかる。一方、中国人は自己の主張や意見、考え方をはっきり伝えてコミュニケーションを取ることが多い。このような差異が存在するため、(6) の②「こうなったら」は前文の内容を指し、自分では決められないことを聞き手に伝え、聞き手に判断を委ねる（依頼する）理由を述べている表現である。訳文（6’）では“这样吧”を使い直接後文の内容を指し、聞き手への配慮があまり見られない。依頼の理由を語らず、話し手が直接依頼内容を述べる表現に置き換えられた。

4.1.2 前方照応指示の「ソ」と“这”の対応表現

前節では前方照応指示の「コ」と“这”の対応表現を分析したが、前方照応指示として用いられた「コ」系指示詞は主に名詞を修飾する「この」、属性を示す「こんな」が多い。前方照応指示用法として使用されている日本語の指示詞では、「ソ」系指示詞が最も多く見られる。そして、「ソ」系指示詞は「コ・ア」系指示詞に比べ、遥かに高い確率で“这”に訳される。本章では前方照応指示の「ソ」系指示詞と“这”に翻訳された例を考察し、分析を行う。

「ソレ」

(7) 医者の所へ男がやってきて言う。「先生は睡眠の分野についてお詳しいそうで、ご相談に伺いました」男はこれ以上考えられないほどやせ細り、顔色も血の気がなく幽霊と見まがうほぢの青白さ。「さよう、**それ**が専門です。夢遊病からイビキまで数多くの症状を扱っております。すべて治してきましたが…」〔眠〕

(7’) 一个男子来到医生这说：“听说您对睡眠这方面很有研究，我是来和您商量的。”男子瘦的超出人的想象，脸色看起来简直像幽灵一般，毫无血色。“是么，睡眠**这**方面是我的专业。从梦游症到打鼾，许多症状我都能治。所有的患者也都已好了……”《睡觉》

(7) の「それ」は先行詞である「睡眠の分野」を指し示しており、同一の内容である。日本語の会話文では相手が話した物事や人物などを指す場合、「ソ」系指示詞が多用される。一方、中国語の訳文では“这方面”に訳され、男の話にある“睡眠这方面”と照応している。ここで注目しておきたいのは、中国語の訳文では原文の「睡眠の分野」が“睡眠这方面”に訳され、指示詞“这”を使用している。また、原文の「それ」も“睡眠这方面”に訳されている。この２つの訳文とも“睡眠”を“这方面”の前に置いて限定している。日本語の場合は「それが」の前に「睡眠の分野」を置くと冗長な文になるが、中国語では“睡眠”を“这方面”の前に置くとより自然な文になる。なぜ中国語は日本語のように指示詞のみで指示対象を指し示さないのかについては、前に修飾や限定の表現が置かれないと、はっきりと物事を指すことができないことと、訳者の個人差によるもの、この２つの原因が考えられる。

(8) 日本の男たちは、給料を銀行に振り込む制度が悪いと考えているが、**それ**は誤りである。〔夫〕

(8') 日本的男人们认为，是通过银行发工资的这种制度惹的祸，可**这**种想法是错误的。《男人》

(8) の「それ」は「日本の男たちは、給料を銀行に振り込む制度が悪い」を指し、中国語文では“这种想法（この考え方）”に訳されているが、“那种想法（その考え方）”も使える。しかし、“那种想法”を使用したなら、話し手の物事に対する関心度は明らかに“这种想法”より低くなる。ここで訳者は話し手が日本の社会や制度などに関心度が高いと判断して、“这种想法”と訳したのだろう。(8) の前方照応指示用法の「それ」は中国語「回指」用法の“这”と対応していると言える。

(9) 理屈から言えば、二人は全く同じ人間のはずである。したがって、判別は不可能なはず。逆に言うと、もし、判別できたとすれば、肉体や記憶などではない、何かが違っていることになる。**それ**こそが、これまで霊とか魂と呼ばれていたものである。〔魂〕

(9') 从道理上讲，这两个人是完全相同的。因此不可能被识别。反过来说，如果可以识别的话，不是因为肉体和记忆不同，而是哪儿不一样。**这**才是所谓被称为灵或魂的东西。《灵魂》

(9) の「それ」の文は、(7) (8) の「それ」の文の構造と多少異なり、「それ+こそ」は連語になって、「こそ」は「それ」を強調している。例 (9) の「それ」は“这”に訳され、「こそ」は副詞“才”に訳されている。「それ」は「理屈から言えば、二人は全く同じ人間のはずである。したがって、判別は不可能なはず。逆に言うと、もし、判別できたとすれば、肉体や記憶などではない、何かが違っていることになる。」この文と照応している。“这”も同じく前文「从道理上讲，这两个人是完全相同的。…不是因为肉体和记忆不同，而是哪儿不一样。」を指し、日本語文と中国語文において、指示詞の指す内容は同一である。よって、(9) の「それ」は (9') の“这”と対応していると認められる。(9') の“这”は“那”に入れ替えることができない。なぜなら、(9) は1つの概念について述べ、相手を納得させるために語っているからである。即ち、述べている事に対して非常に高い関心があり、心理的に自分に近い領域だと認識しているためである。この二点により、“那”を使用せず、“这”が使われている。

「ソノ」

(10) ドイツの降伏後三か月めに、ソビエトは日本に宣戦を布告するとりきめができていた。その期日は8月8日だ。**その前**にこの悪魔の爆弾をお見舞いして、日本を降伏させようというのがアメリカの考えである。〔爆弾〕

(10') 德国投降后第三个月，苏联承诺对日宣战，时间定为8月8日。美国的设想是，在**这**之前把这个魔鬼奉送给日本，使他投降。《原子弹》

（10）の「その前」は8月8日までを指し示している。8月8日までのいつかは決められていない。中国語文では“这之前”に訳され、前文の「8月8日」と照応し、「その」と“这”を対応させている。本来過去の事なので、“那”も使用できるはずだが、訳者は現時点では原子爆弾が爆発する前という視点から発話し、当時の出来事を読者の目の前に生き生きと再現するために、過去を示す“那”よりも、現在を示す“这”のほうがもっと相応しいと判断したのだろう。（10）のような過去の事を語っているが、現在という視点から述べた時、文学的な効果が得られる場合、ほぼ“这”に訳されている。

（11）と、黒い煙が中心から立ちのぼり、火の玉は白い雲となってぐんぐん空にのび、巨大なキノコが生え出るようなかたちになった。**その**後の広島市には、なに一つなかった。〔爆弾〕
（11’）紧接着，从中心冒出一股黑烟，火球变成白云迅速上升，那形状像是长出了一个巨大的蘑菇。**这**之后的广岛市已经一无所有。《原子弹》
（12）体を起こす。**その**時ようやく、金石は自分が船に乗っていることに気がついた。〔プロ〕
（12’）金石爬了起来。**这时**他好容易觉察到自己坐在船上。《专业》
（13）いや、それから15年たっても、**その**時原爆をうけた人は死んでいっている。〔爆弾〕
（13’）不，过了15年之后，**那**时受到原子弹轰炸的人仍然在死掉。《原子弹》

（11）の「その」は「後」と共に「黒い煙が中心から立ちのぼり、火の玉は白い雲となってぐんぐん空にのび、巨大なキノコが生え出るようなかたちになった」の後を指し示している。（11）では「この後」や「あの後」を「その後」と入れ替えることはできない。一方、中国語の訳文では“这之后”に訳されているが、“那之后”に訳されても、中国語として不自然な表現にはならない。しかしながら、訳者はこの作品を過去の出来事という形ではとらえておらず、生放送かのようなあるいは事件が起きた直後という視点から翻訳している。これによって読者の心を掴もうとしている。そのために、遠称指示“那”の使用を避け、近称指示“这”で訳した。（12）と（11）はそれぞれ二つの文から選んだ例で、(12)は(11)のように明らかに過去の事を語っていないが、その場面を生き生きと再現するため、訳語では“这”を選び、話している時間と動作が実行された時間を統一させ、臨場感を読者に伝えている。（13）のような「15年たって」というように明らかに過去のことを示している場合は、現在の視点から15年前の出来事を述べる必要があるため、必ず過去を示す“那”を使用する。

（14）吉をどのような人間に仕立てるかということについて、吉の家では晩餐後毎夜のように論議せられた。また**その**話が始った。〔子〕
（14’）到底把阿吉培养成什么样的人，是阿吉家中几乎每天晚餐后必定要讨论的话题。现在**这**一话题又开始了。《男孩》
（15）「待ってくれ。戻してくれ。俺は帰る」「申し訳ありませんが、**その**ご要望はお取り扱いできかねます。」「プロ」
（15’）“等一下。给我划回去。我要回去”“对不起，你的**这**个要求我们难以做到。”《专业》
（16）「婚約者なんです。わたしと彼は、前世から、結ばれることが決まっているんです。だか

ら、他の人が割り込む余地なんてありません。彼はいま、**そのこと**を忘れているみたいなんですが、わたしの愛の力で、必ず思い出させてみせます。そして、二人でわたしの両親にー」 「ストーカー」

(16') "是未婚夫。我和他，前世注定要结合的。因此，其他人没法挤进来。他现在似乎忘了**这**件事。我要用爱的力量一定让他想起来。而且，两个人一起去见我的父母——" 《跟踪狂》

(14) (15) (16) の「その」は各々物事を示す名詞の前に置き、前文に述べた内容を指し示している。(14) の「その話」は「吉をどのような人間に仕立てるか」、(15) の「そのご要望」は「待ってくれ。戻してくれ」、(16) の「そのこと」は「婚約者なんです。わたしと彼は、前世から、結ばれることが決まっているんです。だから、他の人が割り込む余地なんてありません」と照応している。中国語の訳文では全部"这…"に訳されている。訳文から見ると 3 つの例の共通点は現在の時点で事を行っているように述べている。(14) は読み手に語りたいのは吉の家では毎晩同じ話題をすることである。その話題は毎日話しているため、主人公にとって身近なことなので、"这…"で指す。(15) は話し手と聞き手が存在している会話なので、同じ場で話した内容を指す場合、話したばかりの内容に関しては"这…"を用いる。例外もあるが、指示内容を隠したい、堂々と口外できない場合、"这…"より"那…"のほうが多く使用される。また、話し手は自分の領域をはっきり示したい場合、相手の事を"那…"で示す。近称、遠称指示詞の使用上の規則に基づくと、本来相手のことなら"那…"、自分の事は"这…"と区別して使用するが、現代の中国語ではそれに加えて指示詞を使用する際に、物理的な距離と心理的な距離も考慮に入れる必要がある。話し手にとって自分に関係のあること、自分が関心を持っていることなら、相手のことでも"你这事（この事)"と言え、関わりたくないことなら、"你那事（そのこと)"と言える。(16) は典型的な話し手が対象に高い関心を示している例である。そのため、(16) は"这件事"と訳されている。

「ソコ」

(17) 給料は安く、休みが少なかったため職員の不満はもともと大きい会社だった。**そこ**に目をつけた社長が、百人ほどの社員全員に、毎朝出社時に不満電池を配付し、退社時に回収した。〔電池（上)〕

(17') 这是个由于工资低，休息少，员工们非常不满的公司。看到了**这**一点的社长，给百十号员工在早晨上班时配发不满电池，下班时收回来。《电池（上)》

(17) の「そこ」は「給料は安く、休みが少なかったため職員の不満」と照応して、"这一点"に訳されている。"这一点"は前文に書かれている"由于工资低，休息少，员工们非常不满（給料は安く、休みが少なかった)"を指して、(17) の「そこ」と対応している。ここでの"那一点"は"这一点"と置き換えることができない。

「ソンナ」

(18) そこへかすかに飛行機の爆音がきこえてきた。もう毎日の空襲なれっこの市民は、**そん**

な音ぐらいにびくともしなかった。〔爆弾〕

(18') 这时，人们听到飞机的轰鸣。天天空袭早已是家常便饭，这点声音谁也不当一回事。

《原子弹》

(18) の「そんな」は音を修飾し、前文に書かれている「そこへかすかに飛行機の爆音がきこえてきた」の「飛行機の爆音」を指し、"这点声音"に訳されている。(18') の文頭に"这时（この時)"が置かれ、今という時間を明確に表し、そこに飛行機の爆音が響きながら、"这时，…这点声音谁也不当一回事"という台詞が続く、まるで映画のワンシーンを見ているような効果を持たせている。そのため、聞き手が未だに耳にしている爆音は近称指示"这"で指し示す。

「ソウ」

(19)「遅いぞ、たかが廃棄処理にいつまでかかってる」そう言いながら、店長がくわえ煙草で従業員控室に飛び込んできた。「コンビニ」

(19')"太慢了，就这个销毁处理，还没完没了了。"店长叼着烟卷这么说着进了员工休息室。《店》

(20) 彼女には息子が一人いた。とても気のやさしい、人の好い男なんだが、そういう人間の常として、思ったことをなかなか口にできない性質だった。〔対話〕

(20') 她有一个儿子是独生子，心地非常善良，人也很好，这样的人一般来讲往往不怎么善于表达自身的情感。《对话》

(19) の「そう」は話しの内容を指し、「遅いぞ、たかが廃棄処理にいつまでかかってる」と照応している。訳文では"这么"に訳され、前文に書かれている店長の話を指し示している。そのため、(19) の「そう」は (19') の"这么"と対応している。(20) の「そう」は「とても気のやさしい、人の好い男」を指している。(20') では"这样"に訳され、前文に書かれている"心地非常善良，人也很好（とても気のやさしい、人の好い男なんだ)"を指しているため、(20) の「そう」は (20') の"这样"と対応している。

4.1.3 前方照応指示の「ア」と"这"の対応表現

前方照応指示として用いられた「ア」系指示詞は中国語の指示詞"这…"に翻訳された用例は"那…"に訳された例より多い。その中に主に名詞を修飾する指示詞（「アノ」)、属性を示す指示詞（「アンナ」）が多い現象は前方照応指示用法の「コ」系指示詞と同じである。また、前方照応指示用法には「ア」系指示詞を用いることができないという説があるが、本論では堀口（1990）の説を援用し、話し手の観念に存在している事物は前の文脈に現れたら、文脈指示に属すると規定する。以下の用例はすべて文脈指示用法の前方照応指示である。

「アノ」

(21) 赤シャツは時々帝国文学とか云う真赤な雑誌を学校へ持って来て難有そうに読んでいる。山嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。〔坊〕

(21') 红衬衫时常拿着一本名叫什么《帝国文学》的红封皮的杂志到学校里来，津津有味地阅读。我问豪猪才知道红衬衫那些用正楷字母写的人名都出自**这**本杂志。看来《帝国文学》也是罪恶多端。　《哥①》

(21″) “红衬衫”经常把大红封面的《帝国文学》杂志拿到学校来，兴味津津地读着。俺问过“豪猪”，据他说“红衬衫”的片假名词汇都是从**那**个杂志上贩来的。《帝国文学》也真是个造孽不浅的杂志哩。《哥②》

(21'″) 红衬衫经常把红封面的《帝国文学》杂志带到学校里来，津津有味地读着。问了问野猪，他说红衬衫说的人名，全是从**那**本杂志学来的。《帝国文学》也真是造孽的杂志！《哥③》

「ア」系指示詞の照応指示用法は観念指示用法と似ているところがあるが、邱麗君（2012c：140）に書かれているように「観念の中にある事物を指したうえにその実態を文脈に表すのは文脈指示、そうでなければ、観念指示である。（堀口 1990）つまり、観念の中にある事物を指したうえでその実態を文脈に表すのは照応指示用法、そうでなければ、観念指示であると定義できる。」（21）の「あの雑誌」は先行詞「帝国文学」を指し、前方照応指示である。(21')では“这本杂志”と「《帝国文学》」に訳されている。一方、(21")と(21'")では同じく前文に書かれている「《帝国文学》」を指しているが、“那本杂志”と訳されている。ここからわかるように、(21)の前方照応指示の「あの」は中国語指示詞の“这”と“那”2系列とも対応できる。

(22)「和尚さん、西安寺の和尚さん、よかったら、今晩慈念はんの小さいときのことをきかしてくれはらしまへんやろか。あたしら、それ聞いとかんと、あかしまへん。**あの**子も大きゅうなってくると、困るときがありますさかい」〔雁〕

(22') “和尚，西安寺和尚，如果没什么不方便的话，今晚上，就请你讲讲慈念小时候的情况，好吗？我听了，不会说出去的。**这**孩子已经长大了，要是出了什么事，可就难办了。”
《雁》

(22)の「あの子」は「慈念」と同一人物であり、「あの」が指し示す対象は前文の文脈にあるため、「あの」は前方照応指示である。訳文では“这孩子”に訳され、「あの」と対応している。(22')の「前指」用法として使用されている“这”は“那”に入れ換えても、非文にならないが、その場合、話し手はあの子(慈念)に対する関心度が低くなる。文の内容からみて話し手は「慈念」のことに非常に関心を持っているため、“那”より“这”のほうが適切だと訳者が判断したのだろう。

(23) 慈海はその夜、珍しく躯をほしがらずにすぐ寝ついた。だが里子は眠れなかった。慈念の生い立ちについての事どもが、脳裡からはなれないのだった。慈念について考えていたことが、音をたてて変るような気がした。慈念の大きな頭、ひっこんだ眼、白眼をむいた①**あの**眼つき。誰にも好かれないような②**あの**風貌が、いま、里子に、哀れをともない、殊更いとおしかった。里子は慈海の床から、しずかに起きあがると、隠寮を出た。
〔雁〕

(23’) 慈海这天晚上例外，躺下就睡着了。但是，里子却睡不着。慈念幼时的经历，一直离不开脑际。想起慈念，就感到要发出声音，对他看法起了变化。慈念那大脑袋瓜、凹陷的眼眶、吊起眼角①的眼神。谁也不喜欢的②这副脸相，如今，对里子来说，感到心痛，更感到可怜。里子从慈海的床上离开，悄悄起来，走出房间。《雁》

(23) の①「あの目つき」は文脈に先行詞がないため、記憶の中にあることを思い出す観念指示である。②の「あの風貌」は「大きな頭、ひっこんだ眼、白眼をむいたあの眼つき」と照応している前方照応指示である。①の「あの目つき」は訳文では訳されず、指示詞が省略されているが、②の「あの風貌」は“这副脸相”に訳されている。 (21) は (22) と同様に文脈に先行詞が存在し、指示対象は長期記憶の一部であり、記憶文脈指示とも呼ばれている（日本語記述文法研究会 2009：35）。 (23’) と (22’) で“这”を用いた原因は、「里子」は「慈念」のことが頭から離れないくらい非常に重要で、関心度が極めて高いためである。このように “这”を用いたほうが主人公「里子」の気持ちにより近い表現となる。

「アンナ」

(24) どうしてあんな訳のわからない女に気を使わねばならないのだ。〔女〕

(24’) 为什么非得为这个莫名其妙的女子伤脑筋呢？《女人》

(24) の「あんなわけのわからない女」は、小説の冒頭に登場する急に「私」の家に飛び込んできた見ず知らずの女を指している。その女は人に追われていると言いながら、急に私の家に入って、飲み物がほしいと言ったので、「私」はお茶を出すか、お水を出すか迷っていた。その時の「私」の考えを表しているのが (24) の一文である。つまり、(24) は独話文である。先行詞が直前にないので、観念指示だと思われやすいが、発話の時点は女が入ってきてからまもないので、記憶に保存されている女のイメージを取り出すと言うよりは、前文に書かれている女を指している前方照応指示と言うべきだろう。中国語の訳文では“这”に訳され、ここでは“那”と入れ替えることができない。「私」は「どうしてあんな訳のわからない女に気を使わねばならないのだ。」と考えている時、女はまだ目の前にいるので、(24) では“那”を使いにくいと考えられる。よって、中国語訳の“这”は照応指示ではなく、現場指示である。(24) の「あんな」は中国語の指示詞“这”に訳されているが、指示用法が対応していないため、広義的な対応としか言えない。

「アイツ」

(25) 然し教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰って、あいつの申し条を考えてみると一応尤もの様でもある。判然とした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云うのらしい。〔坊〕

(25’) 然而到底是教务主任，谈吐要比小丑深奥多了。回去后，我把这家伙的一番话想了一遍，觉得有些道理。他的话若明若暗，叫人摸不着头脑。不过他好象暗示：“豪猪不是好东西，你要当心。”《哥①》

(25″) 但是他毕竟不愧是教务主任，比起“蹩脚帮”来，说出的话很令人琢磨不透，回到家来，

仔细回味一下**这家伙**所说的，好象也很有道理。虽然由于他不肯明说，俺还琢磨不透，不过他好象是说：“豪猪”是个坏家伙，要俺多加提防。《哥②》

(25'') 不过，到底是个教务主任，说的话要比帮腔佬深奥些。回到住处，又把**那家伙**的话想了想，觉得似乎有理。因为他没有把话说明白，所以难以捉摸，但话里似乎在说，野猪终归不是好东西，要提防着他。《哥③》

全体からみると前方照応指示の指示用法では「ア」系指示詞が“这”に訳された例は「コ」「ソ」系より少ない。(25) の「あいつ」は人物を指し、前文にある「教頭」を指している。この部分を 2 つの訳文は“这家伙”とし、1 つの訳文は“那家伙”に訳した。人物を指し示す“这家伙”と“那家伙”は両方ともくだけた言い方であり、対象人物を軽蔑するイメージが含まれたり、あるいは親しみの気持ちを込めて指したりすることができる。(25) の「あいつ」も丁寧な言い方ではなく、“这家伙”“那家伙”と同じレベルである。ここで (25) の「あいつ」は訳文の“这家伙”と“那家伙”はそれぞれ対応していると言える。

4.2 前方照応指示と中国語指示詞“那”の対応表現

日本語の前方照応指示用法は中国語の「回指」用法と類似している。両方とも文脈指示の 1 種であり、後文にある指示詞は前文にある指示対象を指している。中国語文では“这”と“那”はともに「回指」用法があるが、“那”より“这”のほうが多用されている。このことから前方照応指示として用いられた「コ・ソ・ア」系指示詞は中国語の「回指」の“那”に翻訳された例は“这”より少ないのではないかと予測できる。

4.2.1 前方照応指示の「コ」と“那”の対応表現

序章に掲示している日中対訳資料を調べた結果、前方照応指示の「コ」系指示詞が“那”に訳された例は極少なく、2003 年 1 月～2011 年 12 月までの 8 年間の≪日语知识≫に掲載されている日本の短篇小説に現れている指示詞とその中国語の訳文を対照した結果は 0 例だった。日中コーパスの 15 篇の小説を調べた結果、わずかに 4 例しかなかった。さらに、その 4 例は全て“这”、“那”のどちらに訳されても不自然にならない文であった。ゆえに、前方照応指示の「コ」系指示詞はほぼ“那”と対応していないと言えるだろう。具体例を見ていく。

「コノ」

(26) 世間がこんなものなら、おれも負けない気で、世間並にしなくちゃ、遣り切れない訳になる。巾着切りの上前をはねなければ三度の御膳が戴けないと、事が極まれば**こう**して、生きてるのも考え物だ。〔坊〕

(26') 世界要是这个样子，我也不甘示弱。我必须效法一般的世人，否则就无法生存。如果说不做拦路抢劫的恶人就混不饱饭吃，**那么**有没有必要活着倒是很值得考虑。《哥①》

(26'') 如果人世上真是这样，那么俺也必须毫不示弱，按照世间流行的作法去做，否则就受不了。难道不去将扒手扒来的钱，再去打个抽头，三顿饭就无法到口？如果情况竟是**这样**，**那么**活着这件事，也大值得考虑了。《哥②》

(26’″) 假如世道就是这样，我也不能示弱。如不随波逐流，便不能生存下去。不从小偷身上捞一把，那会连三顿饭都吃不上。**那么**，要不要活在世上也值得考虑。《哥③》

(26) の「こうして」は前文に述べられている生き方を指す前方照応指示用法である。(26’) と (26’″) では“那么”に訳されているが、(26″) では“这样”に訳されている。(26’) と (26’″) の“那么”は前文の内容を指し示す役割および、後文と繋がる逆接の役割の 2 つの役目を果たしている。しかし、前文の内容を指し示す指示機能よりも、前文と後文を繋げる接続機能のほうが発達している。(26″) の場合“这样”は (26) の「こうして」と同じく、前文の内容を指している。つまり、中国語指示詞の「回指」用法である。ここでの「こうして」と“这样”は狭義的な対応であると判断できる。(26’) と (26’″) の“那么”は原文 (26) の「こうして」の指示用法と異なるため、広義的には対応しているが、狭義的な対応ではない。

(27) 会場へ這入ると、回向院の相撲か本門寺の御会式の様に幾旒となく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗を悉く借りて来た位、縄から縄、綱から綱へ渡しかけて、大きな空が、いつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞台を設けて、**ここ**で所謂高知の何とか踴りをやるんだそうだ。　〔坊〕

(27’) 走进会场，到处插满了无数面长条旗，象回向院的摔跤仪式，又象东京本门寺的法会，仿佛把世界各国的国旗都借来了，纵横交错地系在绳子上，场面热闹非凡。东边角上是一座连夜搭成的舞台，听说在**这里**将要表演高知的什么舞蹈。　《哥①》

(27″) 进入会场一看，好象和回向院里的摔跤比赛，或者和本门寺举行的法会一样，四处树着无数面的长旗，空中四处扯满了绳子、铁丝，上面挂满了万国旗，就象把全世界的国旗都借来了一般。整个空中，一下子变得热闹非凡。在东边的角落上，搭了一个临时凑合起来的舞台，据说就在**这上边**，要表演所谓高知的什么舞蹈。《哥②》

(27’″) 走进会场，里面的布置不知象回向院的摔跤场还是本门寺的法会，无数面长长的旌旗，树立在会场的四周，而且象把世界各国的国旗全都借来了似的，横七竖八地挂在绳索上，把天空装点得热闹异常。在东边角上，临时架设了一个舞台，据说就在**那上面**表演什么高知舞。《哥③》

(27) の「ここ」が指し示す対象は「舞台」であり、前文の「舞台」と照応している。(27’) では“这里”に訳され、前文に書かれている“东边角上是一座连夜搭成的舞台（東の隅に一夜作りの舞台）”の“舞台”を指し示している。(27″) では“这上边”に訳され、“这”は“舞台”を指している。(27’″) の“那上面”は前文の“临时架设了一个舞台（臨時的に作った舞台）”の“舞台”を指している。よって、訳文 (27’) (27″) (27’″) の指示詞“这”と“那”はそれぞれ先行詞の“舞台”と照応し、(27) の「ここ」と指示用法が対応していると言える。また、同じ原文に対して訳文 (27’) (27″) は「ここ」を“这…”に訳しているが、(27’″) は“那…”に訳している。よって (27) の訳の場合、中国語の指示詞“这”と“那”の両方とも用いられている。しかし、(27) の「ここ」のような指示用法は、金水· 田窪· 木村 (1989c：41) が述べた「文章の中では、すでに現れた物事を再び指し示すのに、ソまたはコの指示詞を用いる。特に、会話

や独り言や個人的な回想を除いた部分ではアの指示詞はほとんど用いない」。で説明できる。つまり、(27) の「ここ」は「そこ」と入れ換えることができる。よって、(27) 日本語の指示詞の「前方照応指示用法」はその訳文の指示詞の「回指」用法と対応し、近称指示と遠称指示の両方とも使用できる現状が見える。

(28) 船頭はゆっくりゆっくり漕いでいるが熟練は恐しいもので、見返えると、浜が小さく見える位もう出ている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針の様に尖がってる。向側を見ると青嶋が浮いている。**これ**は人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ばかりだ。成程石と松ばかりじゃ住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望していい景色だと云ってる。野だは絶景でげすと云ってる。絶景だか何だか知らないが、いい心持には相違ない。

〔坊〕

(28') 船夫缓缓地打着浆，他的技术却熟练得惊人。海滨的景物显得越来越小了。高柏寺的五重塔直立在树林的上头，象针一样又尖又细。向前看，青岛飘浮在水面。听说**这**是个无人居住的海岛。仔细一看，上面只有石头和松树。是啊，净是石头和松树怎么居住？红衬衫不停地眺望着，说真是一派好景色，小丑也说简直是奇观。奇观不奇观我不知道，但心情确乎舒畅。 《哥①》

(28″) 船老大慢慢地划着。熟练这东西可真不得了。回头一看，船已经划出老远老远，海岸看去已经很小了。高柏寺的五重塔露在树梢上，象个针尖似的。向前方看，一座绿色的小岛浮在海上。据说**这**是个无人的荒岛，仔细看去，只有岩石和松树。不错，只有石头和松树是无法住人的。“红衬衫”不断眺望着，说：“景色真美啊。”“蹩脚帮”立刻迎合说：“简直是绝景咧。”俺虽然不了解到底是不是绝景，不过毕竟很愉快。《哥②》

(28'″) 船夫慢慢地划着船，显得特别老练。回头一看，船已经离岸很远了，海岸显得很小了。高柏寺的五重塔从森林中象针尖一样耸出。再往前面看，青岛已在眼前，据说**那**是无人居住的岛，细一看，尽是石头和青松。的确，光是石头和青松怎么住人呢？红衬衫望着远处，不停地说：“好景色！”帮腔佬也说：“真是绝景！”我虽不知道是不是绝景，反正心里挺舒畅。

《哥③》

(28) の文の構造は語り手の視点が (27) と類似し、「これ」はそのすぐ前の文にある「青嶋」を指している。「青嶋」が先行詞であり、「これ」と照応関係を成している。訳文(28')では“这”に訳され、前文の“向前看，青岛飘浮在水面（前を見ると青島が浮いている）”の“青岛（青島）”を指す「回指」用法である。(28″) でも“这”に訳され、“向前方看，一座绿色的小岛浮在海上。（前を見ると緑色の島が海に浮いている）”の“一座绿色的小岛（1 つ緑色の島）”を指し示している。他方、(28'″) では“那”に訳され、前文の“再往前面看，青岛已在眼前（前を見ると青島が目の前にある）”の“青岛”を指している。(28') (28″) (28'″) の共通する特徴としては、3 例とも指示詞は前文の内容を指し、「回指」用法であり、(28) の「これ」は (28') と (28″) の“这”、(28'″) の“那”とそれぞれ対応している。ここで考察を進める手がかりとして、(27)

と（28）の訳文に注目したい。(27) の 3 つの訳文《哥①》《哥②》は“这”と訳しているが、《哥③》では“那”と訳されている。一方、（28）の訳文では（27）の訳文と同様に、《哥①》《哥②》は“这”、《哥③》では“那”が用いられている。すなわち、同じ原文（27）(28)にもかかわらず、訳者によって指示詞の選択が異なる。そして、（27）と（28）の指示詞「ここ」と「これ」は「ソ」系指示詞に入れ替えることができる。このことから（27）(28)の「コ・ソ」系指示詞のような「前方照応指示」は中国語の“这”と“那”の「回指」用法と対応できる。

4.2.2 前方照応指示の「ソ」と“那”の対応表現

全体から見ると前方照応指示として用いられた日本語の指示詞が“那”に訳された例は“这”より少ないが、そのうち「ソ」系指示詞が“那”に訳される例は、「コ」系、「ア」系指示詞より著しく多いことがわかる。特に「その」と「そんな」の例が最も多い。名詞を修飾する「その」と、属性を示す「そんな」は名詞と共に、「それ」「そこ」「そちら」などのかわりに人・物事や場所などを指し示すことができるため、日本語文ではよく見られる表現である。そして前方照応指示として使用されている「その」と「そんな」も多い。

「ソレ」

(29)「え？あ、あれ？言われてみれば、名前も住所も家族の顔も、みんな思い出せる」「そうでしょう？**それ**は、さっきの治療がきいたのですよ。」〔医者〕

(29’)“唉？啊，我的病？被你这么一提醒，自己的名字、住所以及家里人的面容全都想起来了！”“对了吧？**那**就是刚才的治疗有了效果呀！”《医生》

（29）の「それ」は前文に書かれている「名前も住所も家族の顔も、みんな思い出せる」を指し示し、先行詞ではなく、前文の内容と照応しているため、前方照応指示用法だと見なせる。(29’)では“那”に訳され、“自己的名字、住所以及家里人的面容全都想起来了（名前も住所も家族の顔も、みんな思い出せる)”を指す「回指」用法である。原文の「それ」は訳文の“那”と対応していると判断できる。一方、訳文（29’）の“那”は“这”に入れ替えても、差し支えないため、原文の「それ」は “这”とも対応できると推測される。

(30) 子供ができたんじゃないか、と思い付いたのは、会社を出て、帰りの電車に乗ってからのことだった。**それ**なら、私がわからなくても不思議はない。〔今日〕

(30’) 是不是怀孕了？我离开公司乘上电车后这样想的。要是**那样**，我不知道也没什么奇怪的。《今天》

(31)「で、いろを予約して、あとは毛糸屋を予約したら、おしまいだねえ。**それ**なら、並木通りにいいところがある。〔洗い方〕

(31’)“那么，选定好了颜色，再预约了毛线店，就完事了吧。**那样**的话，我们林荫道就有合适的地方。”《洗涤方法》

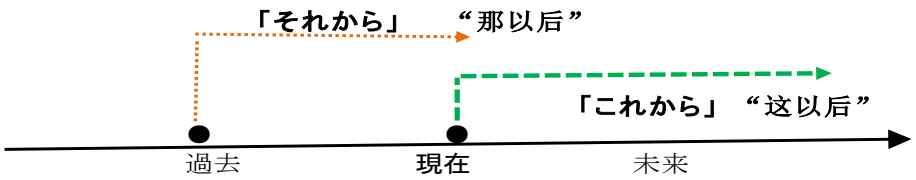
（30）の「それ」は「なら」と共起し、（29）の「それ」とは異なる。「それなら」は辞典 [2)]や

先行研究[3)]では接続詞と呼ばれているが、本論では接続機能を持つ指示詞と見なしている。一方、中国語では接続機能を持つ指示詞は語形上では一般的な指示詞と変わらないが、接続機能は日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞より弱い。接続機能を持つ指示詞が日中で対応する例は少ないと第2章で判明した。しかしながら、「それなら」はほかの日中接続機能を持つ指示詞「それで」「そのうえ」などとは異なる。(30)の「それなら」は佐久間(1990：19)で分類した①順接型、②逆接型、③添加型、④対比型、⑤添加型という5種の接続関係における①順接型に当てる。順接型の場合は、主に前文の内容を受け入れ、後文を引き出す役割があるため、前方照応指示の特徴(前文の内容を指し示し、照応する。)と一致するため、①順接型はほかの4つの型より、中国語の指示詞に訳される機会は多少多くなるだろう。(30)の「それ」は「子供ができたんじゃないか」を指し示している。訳文では“那样”に訳され、「それ」と“那样”が対応している。(31)の「それ」と照応する先行詞はないが、前文に述べている「いろを予約して、あとは毛糸屋を予約したら、おしまいだ」という内容と照応している。訳文では(30)と同じく“那样”に訳されている。(30)と(31)の「それなら」は接続機能を持つ指示詞であるが、主たる接続機能は前文の内容を受け入れ、前後の意味関係、順接関係を明示する。それによって、「それ」の前方照応指示の用法と重なるので、中国語の指示詞と対応すると考えられる。

(32) そして最後の授業の日、男は突然彼女に声をかけ、食事を誘ったのだそうだ。彼女はきっぱりと断ったのだが、なにをどう勘違いしたのか、男は**それ**以来彼女につきまとうようになったらしい。〔ストーカー〕

(32') 而且，听说上最后一次课的那一天，男子突然向女子打招呼，邀请一起吃饭。女子干脆地拒绝了。可不知什么地方出现了误解，男子好像自**那**以后就缠上了女子。《跟踪狂》

(32)の「それ」は前文の「最後の授業の日、男は突然彼女に声をかけ、食事を誘ったのだそうだ。彼女はきっぱりと断ったのだが、なにをどう勘違いした」を指し、前方照応指示であるが、(29)(30)(31)と違って、「以来」と共に時間を表す。ここでの「それ」は「これ」に替えることができない。「これ以来」は今の時点からを意味するが、「それ以来」は過去のことが起きた時間からを示す。訳文では“那以后”に訳され、「それ」と“那”が対応している。訳文(32')の“那”は“这”に入れ替えることができない。もし入れ替えて“这以后”とした場合は現在起きたことを基準にして、未来のことを指し示す。それでは原文の意味から遠くなる。【図 4 - 1】で示しているように、「それから」と“那以后”は過去を起点にして現在までに起きたことを指している。それに対して、「これから」と“这以后”は現在を起点にして発生したことを指す。よって、前方照応指示の「それから」と“那以后”、「これから」と“这以后”は対応すると言える。



【図 4-1】「これから・それから」と“这以后/那以后”の関係

「ソノ」

(33)「おい、皆聞け。俺が昨夜他家の軒下で寝ていると、白い着物を着た人が来て、俺について来いと云った。おれは何でもこれは福の神に違いないと思って従いて行って見ると、この街の真中の四辻に来て神様は、地面の上を指してそのまま消えてしまった。見るとそこには金剛石を鏤めた金の指輪が…」とまだ話してしまわない中に、横に居った跛乞食が、持っていた松葉杖で、若い男の頭をコツンと打ちますと、若い男はウーンと云って引っくりかえりました。乞食共は驚くまい事か、どうしたのかと聞きますと、跛はフンフン憤りながら、「何、その指輪は俺が或る金持ちから貰ったのを落としたのだ。こんな畜生は泥棒だ。俺は指輪を取り返さなくちゃならない」〔夢〕

(33')“喂，大伙听我说，昨天晚上我在一户人家屋檐下睡觉的时候，一个穿着白色衣服的人出现了，他对我说：‘跟我来。’我想他一定是幸运之神，于是跟着他去了，来到这条街的正中间的十字路口处，他指了指地面就消失了，我看了一下，在那里居然有着镶着钻石的金戒指……。”话音未落，旁边一瘸子乞丐用手里的拐杖朝他的头敲来，年轻乞丐一不留神“啊”地一声就倒在了地上。乞丐们惊讶地问瘸子乞丐：怎么了，那小子得罪你了吗？”瘸子乞丐气冲冲地说道：“怎么了？那戒指是我从一个有钱人那里讨来的，但是弄丢了。这个畜生就是小偷，他偷了我的戒指，我得找回我的戒指。”《梦》

会話文である（33）の「その指輪」は若い乞食の話に出てきた「そこには金剛石を鏤めた金の指輪」を指し、「そこには金剛石を鏤めた金の指輪」の「指輪」は文脈の先行詞になっている。訳文では“那”に訳され、原文と同様に若い乞食の話にある“戒指（指輪）”を指し示している。この訳文の“那”は“这”と入れ替えることができない。若い乞食の夢に出てきた物に対しては近称指示の“这”は使えない。中国語の指示詞を用いる場合、現在や過去、未来という時間の順番と距離の遠近に基づいて、“这”と“那”を使いわける。したがって、夢の中に出てきた指輪は距離的に遠いと考えられるため、“这”は使用できない。原文の「その指輪」の「ソ」系指示詞は「コ」系指示詞と入れ替えられない。（33）の「その」と（33'）の“那”は狭義的に対応していると言える。

(34) 苦労して苦労してやっと高校に入れたと思ったら、どう見てもまともじゃない男の子供を孕んで、結婚するという。その男は、結婚費用に必要だから、金をくれというが何に使うかわかったもんじゃない。〔父と娘〕

(34')辛辛苦苦辛辛苦苦，终于把这孩子拉扯到了高中，却怀上了怎么看都是不正经家伙的孩子，说要结婚。那家伙说结婚需要费用，要给钱，但到底把钱用到哪儿了谁都不知道。《故事》

（34）の「その男」は前文に書かれている「どう見てもまともじゃない男」を指し、“那家伙”に訳されている。（34）の「その」は典型的な前方照応指示用法である。日本語記述文法研究会（2009：31）では「言語文脈指示には指定指示と代行指示がある…指定指示では『この』『その』と名詞が合わさった全体で、既出の指示対象を指示する。…代行指示では指示表現の部分だけが既出の指示対象に対応する。…指定指示では指示表現として、『この』『その』のどちらかが現

れるが、代行指示では『その』しか用いられない。」と述べている。（34）の「その」は上述した指定指示に当て嵌まる。指定指示の場合「コ」系「ソ」系は両方とも使用できる（文脈によって、コ系、ソ系のどちらか一方のみ用いる）。訳文の“那家伙”は“这家伙”と入れ替えることができる。“这家伙”に訳されても、“那家伙”と同様に前文の“不正经家伙（まともじゃない男）”の“家伙”を指し、「回指」用法である。（34’）では“这家伙”ではなく、“那家伙”を用いた原因は前文に語り手の子供も登場したので、“这孩子”は語り手の子供を指し、嫌いな子供の彼氏は“那家伙”で区別して指していると考えられる。また、吕叔湘（1982：188）の指示詞“这/那”についての概論をまとめると、“这”と“那”が語意的に対になっていない場合に（共に使用していても）、“这”の近称機能と“那”の遠称機能は弱化し、中性指示に近づく、となる。つまり、指示詞“这”と“那”は（34）のように、対になって使用される場合、指示機能が発達している。よって、語り手にとって自分の娘が彼より心理的に近いため、“这”を用い、彼のほうは娘よりも心理的に遠いため、「回指」用法の“那”を用いる。原文（34）の「その男」は前方照応指示用法で、訳文（34’）の“那家伙”は「回指」用法であるため、（34）の「その男」と（34’）の“那家伙”は狭義的な対応関係を持っている。

「ソコ」

（35）猛烈な衝撃が、轟音と共にタクシーを揺らす。信号を無視したライトバンが一台、タクシーの側部に突っ込んできたのだ。折れ曲がったドアが、金石の脇腹をえぐった。目の前が真っ赤になる。金石の意識は**そこ**で途切れた。〔プロ〕

（35’）猛烈的冲击伴随着轰隆声摇晃着出租车。一辆没看信号的客货两用车撞到了出租车的一侧，撞变形的门剜进了金石的侧腹。眼前一片赤红。金石从**那时**就失去了意识。《专业》

（35）の「そこ」は本来場所を示す指示詞だが、例文では時間を指している。「そこ」は直前の「目の前が真っ赤になる」瞬間を指し示している。訳文では“那时”に訳され、“撞变形的门剜进了金石的侧腹。眼前一片赤红（折れ曲がったドアが、金石の脇腹をえぐって、目の前が真っ赤になる。）”という瞬間を指している。「そこ」と“那时”はそれぞれ対応する先行詞がないが、前文の内容を指し示しているため、前方照応指示と「回指」指示用法として理解できる。ここでの「そこ」と“那时”は対応している。一方、「そこ」は “这时”に訳されても、不自然な文にはならない。“这时”を使用することによって、語り手は現在の視点から述べていることを表わし、“那时”を用いると事件がすでに終わった過去という視点から述べることになる。

（36）俊夫は大あくびをすると、ジョンの小屋に歩み寄った。こいつでも散歩に連れ出して、気晴らしにするとしょう。だが、犬小屋の前まで来たとき、俊夫は驚愕のあまり立ちすくんでしまった。**そこ**には確かにジョンが寝ていた。〔恩〕

（36’）俊夫打了个大哈欠，向琼的窝走去，领着这家伙散散步，解解闷吧。可是，当他来到狗窝前时，一下子惊愕地站着动不了了。琼正在**那里**睡着。《报恩》

（36）の「そこ」は「犬小屋」を指し、「犬小屋」は「そこ」と同一の対象である。（36’）では

指示詞“那里”に訳され、前文に述べている“狗窝（犬小屋)”を指し示している。(36）の文体からみると、「歩み寄った」「来た」「立ちすくんでしまった」「寝ていた」など全ての動作は過去型で述べているとわかる。すなわち、現在のことを述べていない。一方、訳文では日本語の原文のように過去という時制を明確にしていない。訳文では“那里”を使用せず、“这里”を用いると、現場指示に変わる。

「ソンナ」

(37）夜を徹して話し合ったりもしたものだ。今**そんな**時間はどこに行ったのだろうか。
〔生きる〕

(37'）也经常彻夜不眠地与人交谈。如今，**那样**的时光都去了何处呢。《生活》

(37）の「そんな」は時間を修飾して、「夜を徹して話し合ったり」のような昔ののんびりしている時間を指している。過去の時間を指しているため、訳文では“那”系指示詞に訳されている。(37）の「そんな」は（37'）“那样”と狭義的に対応している。

(38）「家売ったお金は、ちゃんと半分渡すから、心配するな」「お金はいらないよ。お兄さんが全部取ってよ。子ども二人もいるんだもの」研一は**そんな**わけにはいかんない、と言ったが、美奈は強情に断った。〔財布〕

(38'）“卖房子的钱肯定分你一半，不用担心。”“我不要钱，哥哥就全要了吧。哥哥还有两个孩子呢。”虽然研一说“不能**那么**办”，但美奈坚决的拒绝了。《钱包》

(39）「いえ、私はただ、こんな膨大な量の食べ物をポイポイ捨ててしまうのは、何だかいけないことをしているような気がして、せめて半額にでもして、もう一度店頭に出せないかと。」しかし私の話は、店長の『だめだ！』という大声によって中断させられた。「**そんな**ことをしたら、オーナーにどんな処分をされるかわからない、俺の身にもなってくれ！」〔コンビニ〕

(39'）“不是，我总觉得把这么多食品都扔掉是不是应该的。至少是减半价后再摆到店里。”可是，我的话被店长“不行!”的一声大喝打断了。“**那样**做的话，不知业主会怎么收拾我呢。你也替我想想!”《店》

(38）(39）の「そんな」は同様の指示用法である。(38）の「そんなわけにはいかん」は「お金はいらないよ。お兄さんが全部取って」という内容と照応し、話し手（兄）が家を売ったお金を全部自分のものにするわけにはいかないことを表している。前文に先行詞はないが、指示する内容は前文と関連し、照応しているため、前方照応指示だと見なせる。(38）の会話は全て実現しておらず、仮定の内容を指しているため「こんな」は使用できない。訳文では「そんな」が“那么”と訳され、前文の内容を指示している「回指」用法なので、ここでの中称指示の「そんな」と遠称指示の“那么”と対応している。(39）の「そんな」は「こと」を修飾して、前文の「ただ、こんな膨大な量の食べ物をポイポイ捨ててしまうのは、何だかいけないことをしているような気がして、せめて半額にでもして、もう一度店頭に出せないか。」と照応している。(39）の「そん

な」は「こんな」に入れ替えることができない。「こんな」を用いたら、現在話し手がすでに食べ物を手にして半額に値引きしていることを指すため、例文の意味が変わってしまう。訳文では“那样”に訳され、(39)の「そんな」と（39’）の“那样”が狭義的に対応している。

4.2.3 前方照応指示の「ア」と“那”の対応表現

対訳作品の資料を調べた結果からみると、前方照応指示の「ア」系指示詞は中国語の“那…”に翻訳されている用例が“这…”に訳されている用例よりも多いことがわかる。4.1.3 節では前方照応指示の「ア」系指示詞と“这…”との対応する例と同様に堀口（1990）の説をもとに、文脈に指示対象がある場合、話し手の観念に存在する事物を指しても、文脈指示に入れる。以下はそのような「ア」系指示詞は中国語の指示詞“那…”に訳された例を中心に分析する。

「アレ」

(40)「材料って、鳥の事か」「そうだ。①**あれ**が無くなれば、ウチハもう終わりだ」「どこかに買いに行けばいい話だろう。珍しいもんじゃあるまいし」「いや、②**あれ**は特別なんだよ。ほかじゃ手に入らないんだ」〔焼き鳥屋〕

(40’)“材料？是‘鸟’吗？” “是。要是①材料没了，我的店也完了。”“到哪里去买不就得了吗？又不是什么少见的东西。”“不是呀，②**那**是特殊的东西。在别处买不到的。”

《烤鸡肉店》

（40）は会話文であり、その中に「あれ」を 2 つ用いて、材料を指している。（40）の内容から見ると、聞き手は焼き鳥の材料（鳥）が足りないということを知っているが、その鳥が特別な鳥だとは知らない。「あれ」を用いた話し手は「材料」が普通の鳥ではないことを強調したいがために、「鳥」や「材料」という言葉を使用せず、「あれ」を用いて一般的な材料（鳥）と区別しようとしていると考えられる。このように聞き手が指示対象を完全に理解していなくても、「ア系は話し手の自己に関わり強いとする対象で遥かな存在だと捉えるものを強烈に指示するもの」（堀口 1992：75）であるので、話し手の思いが強い場合は、強烈指示の遠称「ア」系指示詞を使用する。訳文では①の「あれ」は“材料”に訳され、②の「あれ」は“那”に訳されている。中国語の指示詞“这/那”には日本語の「ア」系指示詞のように聞き手と話し手が共有する知識を指す用法はない。したがって、①の場合、指示詞だけでは聞き手が不明なため、“材料(材料)”に訳されている。②の場合は、①があるし、また“到哪里去买不就得了吗？又不是什么少见的东西。(どこかに買いに行けばいい話だろう。珍しいもんじゃあるまいし。)”という発話があるため、聞き手が「材料（鳥)」が足りないことを知っていたことは一目瞭然である。そこで、“那”で指し示しても混乱することはない。

(41)「さっきのが治療？毒を射たれて、殺されたかと思ってたけど」「**あれ**はただの麻酔です。あなたに、本気で死を感じてもらうための演技だったんです。」〔医者〕

(41’)“刚才那是治疗？我以为是给我注射了毒药，被你们杀了呢!”“**那**只是麻醉，是为了让你真

实地感觉到死亡而演的一场戏。”《医生》

（41）の「あれ」は前文の「治療」を指している。話し手と聞き手がともに知っていることなので、話し手と聞き手に共有する知識や体験を表す「ア」系指示詞が用いられている。訳文では“那”に訳され、原文と同じように「治療」を指している。よって、原文の前方照応指示用法として使用されている「あれ」は、訳文の「回指」用法として使用され、同じ遠称指示の“那”と狭義的に対応している。

「アノ」

（42）その夜、納戸で父親と母親とは寝ながら相談した。「吉を下駄屋にさそう。」最初にそう父親が言い出した。母親はただ黙ってきていた。「道路に向いた小屋の壁をとって、そこで店を出さそう、それに村には下駄屋が一軒もないし。」ここまで父親が言うと、今まで心配そうに黙っていた母親は、「それが好い。**あの**子は身体が弱いから遠くへやりたくない。」といった。〔子〕

（42’）那一晚上，父亲和母亲躺在卧室里商量。“让阿吉做木屐匠吧。”父亲先说了出来，而母亲只是默默地听着。“把朝街小屋的墙打掉，在那儿开个店，而且村子里还没有一家木屐点、店呢。”听到父亲这样说，一直不安地听着的母亲说道：“这样好。**那**孩子身体太弱，不想让他去太远的地方。”《男孩》

（42）も会話文であり、最初父親は「吉」という名前を言い出し、それを受けて母親の発話に「あの子」で「吉」を指し示している。子供が吉だけではないが、両親は吉を巡って会話しているため、「あの子」と言っても、聞き手（父親）は指示対象がわかるはずである。そう確信している母親は「あの」を使用していると考えられる。第１章で述べているように観念指示は文脈指示と似ているところがあるため、境界がはっきりしていない部分がある。堀口（1992）は文脈指示も観念にあるものを指し、観念指示か、文脈指示かを定める基準はその実態が文脈に明示されているかどうかであると唱えている。（42）は観念の中にある事物を指して、指示対象は先行文脈にも存在しているため、文脈指示の前方照応指示と判断できる。仮に、父親の発言「吉を下駄屋にさそう。」を「あの子を下駄屋にさそう」に言い換えたら、「あの」は観念指示である。（42）の「あの子」は“那孩子”に訳され、“那孩子”は「吉」を指しているため、日中の指示用法が対応しており、（42）の「あの子」と（42’）の“那孩子”は狭義的な対応であると言える。

（43）或る夜更け。帰る客を送って、店の外まで出た彼女は、道向こう側を歩いている二人連れの一人に、目を奪われた。それは、**あの**青年に間違いなかった。**あの**夜、また会おうと約束したのに、結局彼から電話はかからなかった。〔値段〕

（43’）某天深夜，为了送客人，景子出了店门。她的目光一下子被马路对面结伴而行的两个人中的一人吸引了过去。他就是**那个**青年。**那天**夜里还约好再见面的，结果他却没有打来任何电话。《价格》

(43) の「あの青年」は景子と映画館で知り合って、景子は「あの青年」に誘われ、ご飯を食べたり、ホテルに行ったり、また会う約束もしていたが、その後人間蒸発した。その日普段 2、3 万円の時計をしている景子は友達から借りた 80 万の腕時計をつけていたが、「あの青年」と知り合ってから時計がなくなった。このような背景があるため、「あの青年」「あの夜」は景子にとって、特別な記憶であり、忘れられない経験である。深く脳裏に刻まれているため、強烈指示の「ア」系指示詞を使うのである。訳文では「あの青年」は“那个青年”、「あの夜」は“那天夜里” に訳され、それぞれ遠称指示の「あの」と“那”を対応させている。訳文の“那个青年”と“那天夜里”の“那”は“这”に言い換えることができない。明確に過去のこととして述べているため、中国語文では“这”を用いにくい。(43) の「あの」は (43') の“那”と狭義的に対応している。

「アソコ」

(44)「この先に、赤い橋があるでしょ？①**あそこ**出るんだってね」「白い服の女ですか…」「え？ ああ、なんだ。知ってるのか」「わたしは、そんなものより、生きている人間の方が怖いですよ。その赤い橋で、運転手が売上を奪われた上、殺されたという事件もあったでしょ？」「そういえば、一年ほど前、そんな事件があった。」「ああ、覚えてる。たかが二、三万の為に殺されただったよな。むごいことをするんもんだと思ったよ」「三途の川ってのがあるでしょ？②**あそこ**を渡る時、タクシードライバーはどうやって渡るかご存知ですか」「いや、聞いたことがない」「宝船の表示灯のついたタクシーで渡るんですよ」〔タクシー〕

(44') “前面有座红桥，知道吧？说①**那儿**常有鬼怪出没。”“是个穿白色衣服的女人吧？……”“嗯？啊，原来你知道啊。”“鬼怪没什么，我倒是怕活人。在那红桥上，有个司机被抢了钱之后又被杀了，你知道吗？”“可不是吗，那大约是一年前的事情了。”“啊，我记的。不就是为了两、三万日元而被杀了，对吧。我觉得够残忍的。”“有句话叫冥河，对吧？过②**那**座红桥时，出租车司机们怎么过？你知道吗？”“不知道，没听说过。”“要开安装着宝船形指示灯的出租车过。” （《出租车》□は邱）

(44) の①「あそこ」は「赤い橋」を指している。話し手は相手が赤い橋のことを知っているかどうかを把握していないが、「赤い橋」のことは話し手の長期記憶に蓄えられており、その長期記憶を参照して指示しているため、「ア」系指示詞を用いている。②「あそこ」も「赤い橋」を指し示している。①と②の「あそこ」は同一人物の発話から来ているため、①と同じ理由で使用されていると考えられる。□で囲っている箇所は同じ人物の話で、その人物を A とする。A と会話している人物を B とする。ここで注目しておきたいのは、A の話は「赤い橋」を「あそこ」で指し示しているのに、B の話では「赤い橋」を「その赤い橋」で示している点である。話の内容から見ると、A は「赤い橋」に非常に恐怖心を持っている。A にとって「赤い橋」は幽霊が出る所として記憶に刻まれている。また、幽霊や他界に関わる指示詞は「ア」系が多い。「あの世」のように生きている人間の「この世」と区別している。遠称指示「ア」で指し示すことにより、「あそこ」は「赤い橋」だけではなく、全ての幽霊が出る場所であることを指す。

(44') では①は“那儿”に②は“那座红桥”に訳され、“那儿”と“那座红桥”はともに前に書かれている“红桥”を指して、「回指」用法であるため、(44) の①と②の「あそこ」と狭義的

に対応している。

「アンナ」

(45) とにかく友人は、優秀なライバルたちをけおとし、先週本社へ栄転。部長職というかたがきをひっさげてである。男はくやしかった。ただ、くやしかった。なぜ、**あんな**奴が。どうして、同期の俺が負けたんだ…。〔不幸〕

(45') 总之，那友人排挤掉优秀的竞争对手，上周荣升到总部当了部长。这男子非常窝心，一个劲儿地气愤不已。为什么是**那家伙**当部长，为什么一起毕业的我败下阵来……。《不幸》

(45) の「あんな」は「奴」を修飾し、人物を指し示している。語り手にとって嫌いな相手だし、本来語り手が部長を狙っていたのに、「あんな奴」に負けてしまったことは語り手にとって強烈な衝撃である。これは独話と同じく、話し手の思い入れが特に強いため、読み手は「あんな奴」は誰なのかを知っているかどうかと関係なく、話し手の長期記憶にある「あんな奴」が指し示している人物が優先的に人間の言語意識に読み込まれる。それは「あんな人と二度と会いたくない」「あんなひどい目にされたら、辞めるしかない」とか、よく耳にする言い方と同じ用法である。中国語の訳文では「回指」用法の“那家伙”に訳され、「あんな」は“那”、「奴」は “家伙”と各々対応している。(45) の「あんな」と (45') の“那”は狭義的な対応関係を持っている。

4.3 後方照応指示と中国語指示詞“这”の対応表現

本論で用いた日中対訳資料では後方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞は前方照応指示より遥かに用例が少ないとわかる。また、後方照応指示と類似している中国語の指示詞の「前指」用法は“那”を用いず、“这”のみである。[4]そのため、日本語の後方照応指示は「前指」の“这”と対応している例は少ないと予想できる。

4.3.1 後方照応指示の「コ」と“这”の対応表現

後方照応指示の「コ」系指示詞は“这”に訳されるが、その用法は「前指」に限らず、「回指」指示の例もある。高革萍 (2002ｃ) はその現象について指示詞と指示対象の間にほかの言葉を入れたから確認されたと解説した。しかし、高革萍 (2002ｃ) が取り上げた非文は適切な発話の背景を与えば、自然な文になるため、この説の妥当性を再検討する必要がある。本節では指示内容を直接引用と非直接引用にわけて、後方照応指示の「コ」系指示詞が「前指」の“这”に翻訳された用例を分析し、高革萍 (2002ｃ) の説を験証する。

「コレ」

(46) **これ**は張さんから聞いたんだけど、李先生に三つ子が生まれたって、本当？

(46') 听小张说，李老师生了三胞胎。**这**是真的吗。

(高革萍2002ｃ：100)

(47) **これ**は秘密だけと、大川さんは昨日会社を休んでコンサートへ行ったらしいです。

(47') **这件事**不要告诉别人，大川好像请假去听音乐会了。

（≪中日交流標準日本語中級上≫：29）

(48) **これ**はわたしの個人的な意見ですが、佐藤さんの考え方は間違っていると思います。

(48') **这**是我个人的意见，我认为佐藤的想法是错误的。

（ibid：88）

(46)の「これ」は後文の内容と照応し、張の話を指している。この例は高革萍（2002ｃ）では後方照応指示として取り上げている。訳文（46'）では“这”に訳されているが、原文のように指示対象は指示詞の前に現れず、指示詞の後に現れている。つまり、原文では後方照応指示であるが、訳文では前方照応指示になっている。よって、(46)の「これ」と（46'）の“这”はともに近称指示であるが、指示用法は対応していないと言える。(47)（48)と（46）を比べてみれば、「コレは…」と3つの文の構造が類似しているとわかる。(47）の「これ」は後文の「大川さんは昨日会社を休んでコンサートへ行ったらしい」を指している。訳文（47'）では「これ」は“这件事”に訳され、“这件事”は後文に書かれている“大川好像请假去听音乐会了（大川さんは昨日会社を休んでコンサートへ行ったらしい)”を指し示している。したがって、(47）の「これ」と（47'）の「“这”＋N」の指示用法は対応している。(48）の「これ」は後文の「佐藤さんの考え方は間違っていると思います」を指している。「これ」は“这”に訳され、後文の“我认为佐藤的想法是错误的（佐藤さんの考え方は間違っていると思います)”を指している。よって、(48）は（47）と同じく日中の指示詞が狭義的に対応している。(46）(47）(48）は同じ「これ」を用いる後方照応指示にもかかわらず、中国語の訳語では異なる指示用法が使用された。ここで再び例（46）を検討してみたい。(46）の訳語は以下のように訳されても、自然な中国語文だが、(46'）の前方照応指示とは逆に、後方照応指示に訳すこともできる。あるいは、指示詞を訳さずに省略することもできる。

(46”）**这**是从小张那儿听说的，李老师生了三胞胎。真的吗。(訳は邱)

(46'”）{Ø} 从小张那儿听说的，李老师生了三胞胎。真的吗。(訳は邱)

（46”）のように指示詞“这”は指示対象“李老师生了三胞胎（李先生に三つ子が生まれた)”の前文に用いられても、非文にならない。これは高革萍（2002ｃ)の見解と異なる。(46'”）では指示詞を訳さず省略されているが、意味的に差し支えないし、原文の構造も変わらない。よって、（46）を取り上げて、「“这”と指示対象との間、余計な表現が表れず、ストレートな指示のしかたによって“这”の指示性が明確にされる。指示詞と指示対象との間に婉曲表現などの言葉が入ると、一つの『隔たり』が生じ、“这”の後方照応性が失われ、前方照応指示性が表れる」（高革萍2002ｃ)。という説明が適切ではないだろう。後方照応指示を用いる例は「コンナ」と「コウ」が多い。そしてこれらの例は（51～56）のような直接引用が最も多く見られる。このような例と直接引用ではない例を分けて分析してみたい。

「コノ」

(49) ②**この**ことは秘密にしておいてほしいんですが。①実は結婚したことがあるんです。

(49') **这**件事情你一定要保密，我其实是结过婚的。

（外山1994：14　　と下線は邱、以下同様）

(50) ②この話だれにも言わないでね。①高校の時、私は担当の先生に片思いをしていたの。
(50') 高中的时候，我爱上了班主任老师。你可别把这事儿告诉别人。
(50") 告诉你一件事儿，你可别把这事儿告诉别人。高中的时候，我爱上了班主任老师。
（高革萍2002ｃ：93）
(50a) 这事儿你谁也不要告诉呀。其实高中的时候，我爱上了班主任老师。（訳は邱）
(50b) 告诉你一件事儿，谁也别说啊。其实高中的时候，我爱上了班主任老师。（訳は邱）

(49) の「この」は「こと」と共に、「実は結婚したことがある」を指している。訳文では“这件事情”に訳され、後文の内容“我其实是结过婚的（実は結婚したことがある）”と照応し、「この」と“这”が対応していると言える。(50) の「この」は (49) と同じく「話」と共に「高校の時、私は担当の先生に片思いをしていた」を指し示している。訳文 (50') では“这事儿”に訳され、指している対象“高中的时候，我爱上了班主任老师（高校の時、私は担当の先生に片思いをしていた)”は前文にある。それと異なって、訳文 (50") では訳された“这事儿”は前文の内容“一件事” を指す。つまり、同一の原文にもかかわらず、2つの訳文では指す対象が変わっている。高革萍(2002ｃ)は (50) (50') (50") の例を取り上げ、「“这”と指示対象との間、余計な表現が表れず、ストレートな指示のしかたによって“这”の指示性が明確にされる。指示詞と指示対象との間に婉曲表現などの言葉が入ると、一つの『隔たり』が生じ、“这”の後方照応性が失われ、前方照応指示性が表れる」という論点を説明している。しかし、(49) の例と (50) 例が類似しているが、前者のほうは前方照応指示に訳され、後者は後方照応指示のみ訳されることに検討の余地があるだろう。(50a) のように指示詞“这”は文の前にきて、指示対象を後文に置くことも可能である。そのため、(50) は後方照応指示にしか訳されないという結果は不適切だとわかる。(50) の文体は話し言葉であるうえに、友達と話しているため、砕けた表現である。特に文末の「の」がポイントである。原文の「の」はどうしても秘密しておきたいことを説明するために用いているが、訳文 (50a) の“其实”は「の」と同じ働きで、原因や理由を説明するために使用されている。仮に (50a) の“其实”を使用しなければ、確かに高革萍(2002ｃ)が述べる結果になる可能性が高い。要するに、後方照応指示に訳された文は唐突で理解し難く、前方照応指示で後方照応指示を代替するほうが自然な中国語になる。本来後方照応指示はその結果を先に言い、後文でそれについての経緯を説明するため、中国語文では説明するための語彙が必要である。そして話し手が強調したいものを前に置くのは極自然な流れなので、前文に書かれている内容を強調する“呀” “啊”などが使用されている。それによって、話の内容は伝わりやすくなる。また、(50') のように発話の背景がなければ不自然な文も、必要な背景（文脈）を補うことで自然な文になることもある。(50') と (50") を比較すれば、(50") のほうが自然だが、(50') の発話の前に、「学生時代、何か秘密がありますか？」と質問されたら、(50') のほうが (50") より自然な答えだろう。

「コンナ」

(51) フロル星人たちは宇宙船を着陸させ、ひと通りの調査をしてから、**こんな**意味の言葉を話し合った。「どうやら、私たちのやってくるのが早すぎたようですね。この星にはまだ、文明らしいものはありません。最も知能のある生物と言ったら、サルぐらいなものです。もっと進化したものが現れるには、しばらく年月がかかります。」〔お土産〕

(51') 外星人的宇宙飞船着陆后，大制作了一番调查，然后讲了**这样**一段话。“看来我们是来得太早了呀。在这个星球上还没有什么像样的文明。如果说最具智慧的生物的话，也不过是猴子而已。至于出现更加进化的生物，恐怕还要花费些时日。”《礼物》

(52) そこで、**こんな**なぞなぞがあります。「日本でいちばん高い駅はどこでしょう。」

(52') 于是，有这样一则谜语：“日本最高的车站在哪里？”

（≪中日交流標準日本語中級上≫：29）

(53) **こんな**話があるのを知っていますか。100 年後、日本の人口は今の約半分になるという予測が発表されたのです。

(53') 知道有**这样**的说法吗？有预测说 100 年后，日本人口将减少到大约现在的一半。

（ibid：88）

(51) の「こんな」は「言葉」を修飾して、後文の「どうやら、私たちのやってくるのが早すぎたようですね。この星にはまだ、文明らしいものはありません。最も知能のある生物と言ったら、サルぐらいなものです。もっと進化したものが現れるには、しばらく年月がかかります。」を指し示している。訳文では“这样一段话（こんな話）”に訳され、後文の “看来我们是来得太早了呀。(中略) 恐怕还要花费些时日。(どうやら、私たちのやってくるのが早すぎたようですね。(中略) しばらく年月がかかります。)”を指している。原文と訳文はともに近称指示で、指示用法も対応している。(52) の「こんな」は「なぞなぞ」を修飾し、後文の「日本でいちばん高い駅はどこでしょう。」を指している。訳文 (52) では“这样一则谜语”に訳され、後文の具体的なぞなぞの内容と照応している。また、(53) は (52) (51) と同じく、「こんな」は“这样”に訳され、原文と訳文の指示用法も対応している。(51) (52) (53) の 3 つの例に共通しているのは、指示する内容が誰かの話しの直接引用である。このような日本語の後方照応指示は中国語の指示詞と語形だけではなく、指示用法も対応している狭義的な対応である。

「コウ」

(54) ①彼は**こう**嘆いていた。②「電力不足は解消されましたが、地球の温暖化に拍車がかかってしまっています」〔電池（下)〕

(54') 那个评论家**这样**叹道：“虽然解决了电力不足的问题，但却加速了地球的温室效应。”

《电池（下)》

(55) ①そして、最後は**こう**結ばれてあった。②「今日は、私の独立記念日です。」

〔今日〕

(55') 最后是**这样**结尾的：“今天是我的独立纪念日。” 《今天》

(56) ① 彼は、本当は**こう**言ったのだ。②「ええ、私は故人ですから…」と。〔タクシー〕

(56') 他的确是**这样**说的：“是的，因为我是死人……”《出租车》

(57) ①わたしは酒についてこう考えています。②酒は百薬の長であると。

(57') 我是这样看待酒的—酒是百药之王。

(≪中日交流標準日本語中級下≫: 286)

例 (54) ～ (57) は全て直接引用の型である。①の文と②の文は倒置されず、まず①→②の順番で、②は①の内容を説明し、補う役割を果たしている。一方、①は②の内容についてまとめて、前置きの働きを担っている。①が前にこないと、②は唐突であり、一体何のために話しているか不明瞭である。②を後に置かないと、①の文は不完全である。(54) のどのように嘆いたか、(55) の如何に結ばれているか、(56) のどのように話していたか、(57) のどんな考えがあるのかが不明であると、①の文の存在価値がなくなる。(49) と (50) ②→①の順番であるが、誰にも言わないで秘密してという内容が話し手にとって、秘密にしておきたいものの説明よりも関心を寄せている。そのため、本来話をしてから言わないでと約束するが、(49) と (50) は秘密することが話しをする前提条件であるため、②→①の順番になる。よって、(49) と (50) は前方照応指示と後方照応指示の両方に訳すことができる。(54) ～ (57) のような直接引用の型は前方照応指示で訳せないことはないが、訳者はやはり話し手の本来のニュアンスと最も近い後方照応指示を選んでいるのだろう。

4.4 後方照応指示と中国語指示詞“那”の対応表現

日本語の指示詞の後方照応指示用法は中国語の指示詞の「前指」用法と類似し、指示対象は指示詞の後に現れる。前方照応指示と比較すると、後方照応指示の例は著しく少ない。調査した例群では後方照応指示で指示詞“那”に訳されている例は僅かである。それらの例は“那”に訳されても、指示用法が対応していないことがほとんどである。

一般的に「中国の指示詞“那”は『前指』用法がない」と理解されている(吕叔湘 1985：205 など)。最近の研究で“那”が「前指」用法として使用される例を取り上げた論文もあるが (杨玉玲 2010：112)、やはり特殊な例[5]であり、“那”は「前指」としてあまり使われていないことは事実である。それは今回調査した例群で後方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞が「前指」の “那”に訳されている用例がほとんどないという結果と一致している。典型的な後方照応指示と「回指」“那”が対応している例がほとんどないため、特殊な後方照応指示の例も拾って考察する。そして、ほかの研究資料から後方照応指示の例を引用し、分析する。

(58) 日本政府は驚いた。新型爆弾だ、白いものを着ておればよい、屋外防空壕に入れ、地下生活をせよなどと、つまらぬ注意を発表したその日、8 月 9 日午前 11 時、長崎の上空で第二の原爆、プルトニウム爆弾が破裂した。〔爆弾〕

(58') 日本政府惊慌失措，公布了一些毫无用处的布告。什么应当穿白色衣服，什么要进入室外的防空洞，什么应当过地下生活之类。就在政府公布这些布告的那一天，8 月 9 日上午 11 时长崎上空爆炸了第二颗原子弹——钚原子弹。《原子弹》

例 (58) の「その日」は前文に書かれている「新型爆弾だ、白いものを着ておればよい、屋外

防空壕に入れ、地下生活をせよなどと、つまらぬ注意を発表した」日を指し、後文の「8 月 9 日午前 11 時、長崎の上空で第二の原爆、プルトニウム爆弾が破裂した」をも指している。前方照応指示か後方照応指示かはっきりと線引きするのは難しい。(58) の「その日」は (58') の“那一天”に訳され、前文の“日本政府惊慌失措，公布了一些毫无用处的布告。…(日本政府は慌てて、つまらない注意を発表した)”という内容を照応しながら、後文の“8 月 9 日”を指し示している。指示機能から見ると (58) の「その日」は (58')“那一天”と同じだと考えられる。よって、(58) の「その日」は (58')“那一天”と互いに対応していると言える。

(59) いつも**そう**じゃないんだけど、今日はちょっと飲まずにいられない気持ちだ。
(日本語記述文法研究会　2009：31)
(59') 平时并不是{**这样/? 那样**}，今天有点不喝不行的感觉。(訳は邱)

日本語記述文法研究会 (2009：30) は「指示表現よりも指示対象があとにある後方照応も、まれに用いられることがあり、次の例のように、思考や話の内容を指すことが多い。後方照応ではコ系が選ばれることが多く、ソ系はまれである」と叙述しているが、その中の「次の例」は (59) (60) を指している。日本語記述文法研究会 (2009) が述べているように、「ソ」系指示詞の後方照応指示はまれで、調査した例群では見つからなかったため、そこから引用している。(59) の「そう」は「今日はちょっと飲まずにいられない気持ち」を指し示している。訳文では“这样”に訳されるが、“那样”には訳されない。(59') の指示対象“今天有点不喝不行的感觉 (今日はちょっと飲まずにいられない気持ち)”の“今天 (今日)”は現在という時間を表しているため、中国語文では現在を指し示す場合、“那”ではなく、“这”を用いる。

(60) **これ**は有名な話だが、アインシュタインは学校の成績はまるでだめだった。(ibid.：31)
(60') {**这/? 那**} 是个有名的故事。爱因思坦在学校时的成绩特别差。(訳は邱)

(61) アインシュタインは学校の成績はまるでだめだった。**これ**は有名な話だ。(ibid.：30)
(61') 爱因思坦在学校时的成绩特别差。{**这/那**} 是个有名的故事。(訳は邱)

(60) と (61) も日本語記述文法研究会 (2009) で取り上げられた照応指示用法の例である。この 2 例は同じ内容について述べているが、前者は前方照応指示の例で、後者は後方照応指示の例である。(60) と (61) は中国語の指示詞と対応している状況と比較しながら、後方照応指示の指示詞が中国語指示詞“那”に対応していない原因を探る。

(60) の「これ」の指示対象は前文にある。訳文では“这”に訳されるが、“那”を用いることができない。仮に“那”を使用するなら、必ず“那”の前の文脈に指示対象が存在している必要がある。“那”の前に指示対象を置かずに、後文の内容を指し示すことは難しい。(61) の「これ」は「アインシュタインは学校の成績はまるでだめだった」という話を指している。訳文では“这”と“那”両方とも用いられている。話し手は“这”を使用する時、前文で述べたばかりのことを指し示すのに対して、“那”を選んだ場合、「アインシュタイン」の物語は現在から溯っ

て100年前の話なので、話し手と聞き手にとって遠い存在であるという、視点が加味される。

(62) 竹神の竹人形が相当量の生産を見て、広瀬の村の馬車をたのんで荷出しをするようになったのは、**この**年、大正十三年の夏からである。京で好評を博した竹人形は大阪にもきこえた。ついで、名古屋にもきこえた。大阪にも名古屋にも、人形問屋はある。〔人形〕

(62') 从**那一年**，也就是从大正十三年的夏天开始，竹神村的竹偶生产量已相当可观，便依靠广濑村的马车把竹偶装载出去。竹偶在京都博得好评的消息传到了大阪，接着传到了名古屋。大阪和名古屋都有玩偶批发店。《竹偶》

(62) の「この年」は「大正十三年」を指し、訳文 (62') では“那一年”に訳され、後文の“大正十三年”を指している。よって、(62) の「この年」と訳文 (62') の“那一年”の指示用法は等しく、後方照応指示用法で、対応している。

(63) 赤シャツに逢って用事を聞いてみると、大将例の琥珀のパイプで、きな臭い烟草をふかしながら、**こんな**事を云った。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績がよくあがって、校長も大にいい人を得たと喜んでいるので――どうか学校でも信頼しているのだから、その積りで勉強していただきたい」　〔坊〕

(63') 我见到红衬衫，问他有什么事，这小子照例用琥珀烟斗抽着难闻的烟叶，开了口：“你来之后，比前任干得更有成绩，校长得到你这样一个好人才，甚感高兴。怎么样？学校这样信赖你，希望继续努力啊。”《哥①》

(63″) 俺见到“红衬衫”问他有什么事，这位老兄，用他那一贯使用的琥珀烟嘴，抽着臭烘烘的烟卷，说了｛**这/？那**｝番话：“自从你来了，比起前任教员任课的时候，成绩大有起色，校长也为大得其人而高兴。由于学校是很器重你的，所以请你在这种情况下努力工作。《哥②》

(63'″) 和红衬衫见面之后，问他什么事，那家伙照例叼着那个琥珀烟嘴儿，抽着焦臭味的烟，说出了｛**这么/？那么**｝件事：“你来了之后，与上任教员那个时候相比，学生成绩大有提高，校长也为聘到了好教员而非常高兴――学校方面很信任你，所以希望你继续努力往下干！”《哥③》

(63) の「こんな」は「事」を修飾し、後文に書かれている「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績がよくあがって、校長も大にいい人を得たと喜んでいるので――どうか学校でも信頼しているのだから、その積りで勉強していただきたい」を指し示している。いわゆる、後方照応指示用法の直接引用の型である。前述しているように、直接引用の場合は、日中の指示詞の指示用法は対応しやすく、原文の後方照応指示は、訳文で前方照応指示に訳されることはほとんどない。そして、「こんな」については3例中1例は無訳で、2例は“这”に訳された。この3つの訳文は全て指示詞“那”を使用することができない。

(64) 「これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。**こんな**士百姓とは

生れからして違うんだ。智慧もない、どうしていいか分らない。困るものんだ。」

（作例）

(64') “我家原是旗本出身，旗本的祖先是清和源氏，多田之满仲的后裔，生下来就和｛**这些/那些**｝土百姓不同，缺乏智慧，遇事束手无策，使人困惑。”

(64″) “你可别小瞧俺，俺祖上还是旗本哪。旗本的祖先是清河源氏，是多田满仲的后代，和｛**这些/那些**｝土包子压根儿就不一样嘛。不够聪明，想不出好主意，使人感到为难。”

(64'″) “我家原属旗本，旗本的祖先是清和源氏、多田满仲的后裔，生来就与｛**这些/那些**｝乡下佬有着根本的区别。缺少智谋，遇事不知该怎么办。的确令人发愁。”

(64) の「こんな」は「土百民」を修飾し、後文の「智慧のない、どうしていいか分らない、困るものんだ」と照応している。「こんな」は3つの訳文では全て“这些”に訳せるが、“那些”を用いることもできる。本来指示詞“那”は「前指」用法として用いられないと吕叔湘(1985)に論述されている。(64) は一般的な「前指」用法と異なって、特殊なパターンと言える。修士論文（邱麗君 2008　未刊行）では中国語の指示詞は人物を指す場合、話し手にとって好ましくない人物や、その場で距離を置きたい人物に対しては、“那”で指し示すと述べている。それは実際の話し手と指示対象との距離に関係なく、話し手が一方的に判断する。1 文の中で、話し手の指示対象に対する心理的な距離感が遠から近に変わることもある。また、逆に、話し手の指示対象に対する心理的な距離感が近から遠に変わることもある。この場合、１文の中で話し手は同一の指示対象に対して、“那”を用いたり、“这”を用いたりすることができる。(64) の話し手が指示対象の「土百姓」に対してマイナスイメージを持ち、軽蔑していることは後文の「こんな土百姓とは生れからして違うんだ。智慧もない、どうしていいか分らない。困るものんだ」から容易にわかる。話し手は指示対象の「土百姓」と比較して、自分のほうがより優れていることをアピールしている。そのため、“这”に訳されても通じるが、“那”を用いるほうが話し手の指示対象である「土百姓」に対する心理的距離が遠いことをより正確に表わせる。

4.5 まとめ

日本語の指示詞の前方照応指示用法と後方照応指示用法を中国の指示詞の「回指」用法と「前指」用法と対照させた結果を「A1、A2、A3、B1、B2」のようにまとめた。「A」は前方照応指示と、「B」は後方照応指示との対照結果で、数字の「1」は「コ」系指示詞と、「2」は「ソ」系指示詞と、「3」は「ア」系指示詞との結果を示している。

A1. 今回調査した例群の結果は「日本語の単純照応用法のコ系は、中国語でも这系で用いられる（迫田 1998)」と合致し、迫田（1998：79）で述べた「単純照応用法」のように典型的な照応用法の「コ」系は“这”系と対応している確率が高いという結果を出している。

原文では前方照応指示として使用されている日本語の「コ」系指示詞は中国語の訳文では“这…”と訳されているが、場合によっては原文の指示用法の前方照応指示が後方照応指示に訳されている。このような日本語文の指示詞は中国語文では指示詞に訳さているが、指示用法が対応していない例が少なくない。これらの例では指示詞と照応する内容は依頼などに関する表現が多く、前方照応指示に訳しても通じるが、話し手が相手のことを配慮し、婉曲的な前置きをしてから依

頼内容を伝える。それは、邱麗君（2011ｂ）で述べているように同じ依頼に関する表現でも、日本人と中国人のコミュニケーション方式が異なり、日本人は聞き手や登場人物、話す場などを考慮して、前置きや、言いさしなど、婉曲的な表現を用いて、コミュニケーションの円滑化をはかる。一方、中国人は自己の主張や意見、考え方をはっきり言うほうがコミュニケーションをとりやすいと考えており、日本人のように聞き手に対する配慮ではなく、簡潔明瞭に直接依頼内容を述べることが多いからである。

前方照応指示の「コ」系指示詞は“那”に訳される例が極めて少なく、2003 年 1 月～2011 年 12 月までの 8 年間の≪日语知识≫に掲載されている日本の短篇小説に現れている指示詞とその中国語の訳文を対照した結果は 0 例だった。日中コーパスの 15 篇の小説を調べた結果わずかに 4 例しかなかった。さらに、その 4 例は全て“这”、“那”のどちらに訳されても不自然にならない文であった。ゆえに、前方照応指示の「コ」系指示詞はほぼ“那”と対応していないと言える。次のように示すことができる。

【表 4-1】前方照応指示の「コ」と“这/那”の対応関係

前方照応指示の「コ」
- ↔「回指」の“这”（ほぼ対応している）
- ↔「回指」の“那”
  - “那”しか訳されない　0 例
  - “这”“那”訳される　4 例

A2. 日本語の指示詞の 3 系列で、前方照応指示用法として使用されているのは、「ソ」系指示詞が最も多い。そして、「ソ」系指示詞が“那”に訳されている頻度は「コ」系、「ア」系指示詞に比べ著しく高いことが判明した。そのうち「その」と「そんな」が最もよく使用される。「その・そんな」は名詞を修飾して、「それ」「そこ」「そちら」などに代わり人・物事や場所などを指し示すことができるため、「その」と「そんな」が「それ」「そこ」「そちら」より多く選択された原因だと推測できる。

また、前方照応指示用法の「ソ」系指示詞が中国語「回指」用法の“这”と対応する用例では、「ソ」系指示詞は中国語の訳文では“这…”と“那…”の両方に訳されることがある。しかし、“那…”を使用すると、話し手の物事に対する関心度が明らかに“这…”より低くなる。訳者は話し手が物事に対して関心度が高いと判断した場合、“这…”に訳される。このことについては修士論文（邱麗君　2008 未刊行）によると、指示詞の決定権に関しては「日本語は【他者依存型】、中国語は【自己依存型】で、中国語は指示詞を選択する場合、相手への配慮などは問題にされず、自分自身のことを基準にして指示詞を決定する。話し手にとって身近なこと、関心が高いことなら、“这”、その逆なら“那”で指し示す要因はここにある。

A3. 前方照応指示の指示用法では「ア」系指示詞が“这”に訳された例は「コ」系、「ソ」系より少ない。

中国語の指示詞“这/那”を用いる場合は話し手と聞き手に共通している出来事や経験、共有知識に基づいて選択せず、ア 2. に述べている規則に沿って、“这/那”を使用する。一方、日本

語では、話し手と聞き手が共有知識を持ち、あるいは、共通している出来事を指す場合は「ア」系しか使用できない。これは日本語指示詞と中国語指示詞の指示用法のずれであり、前方照応指示の「ア」系指示詞と中国語の「回指」用法の“这”と“那”の両方と対応できるからである。また、話し手の長期記憶に蓄えられ、記憶に刻み込まれている場合、その長期記憶を指し示す時は「ア」系指示詞を用いる。

【表 4-2】前方照応指示の「ア」と“这/那”の対応関係

① 前方照応指示の「ア」(共有知識) ⇔ 「回指」の“这”
「回指」の“那”

② 前方照応指示の「ア」(話し手の長期記憶にあるものを指す) ⟷ 「回指」の“那”

今回調査した例群では「コ」系「ソ」系指示詞、どちらでも用いられる「前方照応指示」中国語の「回指」用法の“这”と“那”系に対応できる。つまり、原文の「これ」が「それ」と入れ替えられる場合、訳文では“这…”とも、“那…”とも訳される。

「前方照応指示」用法の「コ・ソ」⇔「回指」用法の“这/那”

B1. 今回調査した例文では後方照応指示の例は前方照応指示より極めて少ない。後方照応指示の例では主に「コ」系指示詞が使用されている。

日本語の原文では後方照応指示として使用されている「コ」系指示詞が、中国語の訳文では前方照応指示の“这”に訳されている。このような例は指示詞に訳されているが、指示用法が対応していない例がある。高革萍（2002ｃ）ではそれらの例と訳文の特徴を「“这”と指示対象との間、余計な表現が表れず、ストレートな指示のしかたによって“这”の指示性が明確にされる。指示詞と指示対象との間に婉曲表現などの言葉が入ると、一つの『隔たり』が生じ、“这”の後方照応性が失われ、前方照応指示性が表れる」とまとめている。しかし、高革萍（2002ｃ）で取り上げた指示詞は「回指」指示用法として訳されても、不自然な日本語にはならない。これは高革萍（2002ｃ）の上記のまとめと異なる。また、調査した例群では高革萍（2002ｃ）が挙げた例と類似している例も中国語の「回指」に訳されたり、「前指」に訳されたりすることが明確になった。そのような例は訳文では内容を強調する“呀”“啊”、説明する“其实”などを用いると、高革萍（2002ｃ）は述べたが、後方照応指示に訳すことができない「コ」は中国語文では後方照応指示の“这”に訳されることが明らかになった。そして、高革萍（2002ｃ）が提示した不自然な中国語の訳文も、文脈の前後関係がはっきりすれば、自然な文になることもある。よって、高革萍（2002ｃ）がまとめていた「“这”と指示対象との間、余計な表現が表れず、ストレートな指示のしかたによって“这”の指示性が明確にされる。… “这”の後方照応性が失われ、前方照応指示性が表れる」という表現には不適切なところがある。

「コ」系指示詞で後方照応指示に用いられている例では「こんな」と「こう」が多く、ほとんどが指示詞と指示内容を直接引用するというパターンである。後方照応指示の例の前文は①、

後文は②で示すと、直接引用するパターンは①→②の順番で、②は①の内容を説明し、補う役割を果たしている。①は②の内容についてまとめて、前置きという働きを担っている。①が前に来ないと、②は唐突であり、一体何について話しているのか不明瞭である。②を後に置かないと、①の文は不完全である。したがって、このような日本語の後方照応指示の例は中国語の指示詞に訳されるだけではなく、指示用法も対応している。

今回調査した例文では後方照応指示用法の日本語指示詞は指示詞“那”に訳されている例は僅かである。それは「中国の指示詞“那”は『前指』指示用法がない」と解釈している吕叔湘(1985：205)と合致している。また“那”に訳されている例には前文内容を指しつつ、後文の内容とも関連して、前方照応指示か後方照応指示かはっきりと線引きするのが難しい例もある。だから、中国語指示詞“那”に訳されている僅かな例に上述した前方照応指示か後方照応指示かはっきりと判断できない例を除外すると、“那”に訳されている例はさらに少なく、後方照応指示の「コ・ソ・ア」と中国語指示詞“那”がほとんど対応していないと言える。

B2. 調査した例文に「ソ」系指示詞の後方照応指示用法がなかったことについては、日本語記述文法研究会（2009：30）の「指示表現よりも指示対象があとにある後方照応も、まれに用いられることがあり、次の例のように、思考や話の内容を指すことが多い。後方照応ではコ系が選ばれることが多く、ソ系はまれである」という解説と一致している。

「中国の指示詞“那”は『前指』指示用法がない」と吕叔湘(1985)が述べているが、本論の分析した例文では一般的な「前指」用法と異なる特殊なパターンがあることを発見した。その稀な例は特別な場面を必要とし、話し手の指示対象に対する印象が次第に変わり、その変化を表すために用いられた後方照応指示用法の指示詞は「前指」の“那”に翻訳される。中国語の指示詞は人物・事物などを指す場合、話し手にとって好ましくない人物・事物や、その場で距離を置きたい人物に対しては、“那”で指し示す。それは実際の話し手と指示対象との距離に関係なく、話し手が一方的に判断する。1 文の中で、話し手の指示対象に対する心理的な距離感が遠から近に変わることもある。また、逆に、話し手の指示対象に対する心理的な距離感が近から遠に変わることもある。この場合、１文の中で話し手は同一の指示対象に対して、“那”を用いたり、“这”を用いたりすることができる。よって、後方照応指示用法の指示詞は「前指」の“那”に翻訳される例のように、話し手の指示人物に対する心理的な距離感が遠いと強調する場合に「前指」の“这”ではなく、「前指」の“那”を用いる。

注

第４章

1) 日本語の教科書とは以下の４類を指す。

a.《新编日语Ⅰ》上海外語教育出版社（2009）
《新编日语Ⅱ》上海外語教育出版社（2007）
《新编日语Ⅲ》上海外語教育出版社（2008）
《新编日语Ⅳ》上海外語教育出版社（2008）

b.《中日交流标准日本语初级上》人民教育出版社（2005）

《中日交流标准日本语初级下》人民教育出版社（2005）
《中日交流标准日本语中级上》人民教育出版社（2008）
《中日交流标准日本语中级下》人民教育出版社（2008）

c. 『みんなの日本語』初級ⅠⅡ スリーエーネットワーク（1998）

d. 『日本語』 第1冊　凡人社（1994）
『日本語』 第2冊　凡人社（1994）
『日本語』 第3冊　凡人社（1998）

2）以下の2種の辞典を調べた。

a.『新明解国語辞典』第六版 p. 874（2005年、（第一版 1972年））山田忠雄他　三省堂
「それなら」は接続詞で、そういうわけなら。

b. 『日本国語大辞典』第二版 p. 533（2001年、（第一版 1972））第八巻　日本国語大辞典第二版編集委員会　小学館
「それなら」：接続詞　①仮定の事柄、または、ほぼ確実な判断に基づいて、後の事柄を述べる。そういうわけなら。それでは。それならば。②事柄を説き起こしたり、説き終わったりする時の切れ目を示す。それでは。それじゃあ。「それならこれでおわりにします」

3）ひけひろし（1986）などは「そして」「それから」を接続詞に分類している。

4）“那”も「前指」があると唱える説がある（杨玉玲 2010 など）が、それは特殊な例のみで、本論文では吕叔湘(1985)の“那”は「前指」がない説を援用する。）

5）杨玉玲（2010）で論じている“那样”は後の文の内容を指し、指示詞は前文に予め現れる「予指」用法はすでに吕叔湘（1985）で唱えられている「回指」用法と同じ指示用法である。
杨玉玲（2010： 112）は“那样”の「予指」用法は2類ある。

a.「“如/象（ような、みたい)”＋ 某人（ある人）＋陈述性动词（述叙動詞）＋的（の）＋那样，P 」

(65) 像中央领导同志所要求的**那样**立足于眼睛向内，自立更生解决问题。
杨玉玲（2010： 112）

(65’) 中央政府の幹部が要求しているように、内部に目を向けて問題を自力で解決する。
（訳は邱）

(66) 其实，如此年轻的干部在华润岂止是凤毛麟角，正如华润领导多次无不自豪地宣称**那样**：我们干部的平均年龄不到 28 岁，年轻的企业聚集着一批优秀的年轻人。(ibid.)

(66’) 実は、このような若い幹部は華潤では極めて得難い人材であるだけでなく、華潤の責任者がいつも誇りを持て話しているように、我々の幹部たちの平均年齢は 28 歳以下で、新しい企業には優れている若者が集まっている。(訳は邱)

b. “像/如 X 那样 P「(まるで) X ような・みたいな P」”

(67) 太太是对已婚女人最通俗最中性的称呼，不像“老婆”、“ 媳妇”“夫人”**那样**带有一定的感情色彩和地位象征。杨玉玲（2010： 113）

(67’) 奥さんは結婚している女性に対する最も一般的な個人的な感情を込めていない呼び方である。「女房」「家内」「夫人」のような感情的なものを込めたり、地位を表し

たりしない。(訳は邱)

(68) 教育是国家首要的公共发展事业，有公益性，服务性和多样化的功能，如政治功能，文化功能，促进人的全面发展功能等不能像市场经济**那样**不受政府直接干预而仅通过财政税收、价格、金融等来调节，教育中许多基本因素如方针、目的、内容等都由国家和政府直接干预，…（ibid.）

(68') 教育は国にとって最も重要な公衆発展事業で、公益、サービスなどさまざまな部門と関わる。例えば、政治、文化、人などを全面的に発展させ、市場経済のような政府の意思と関係なく、税金、価額、金融などで調整する。教育中の数多の基本的なもの、例えば、方針、目的、内容などは国と政府が直接手を加えている。

(訳は邱)

杨玉玲（2010）では述べている「予指」の例（65）(66)（67）(68）は特別的な例で、特に“像/如Ｘ那样Ｐ「(まるで) Ｘような・みたいなＰ」”の形は本論では第５章に書かれているように、指示機能が「虚化」している。そのような例は一般的な後方照応指示用法と異なると考えている。

第5章　中国語の指示詞に対応する日本語の表現

第4章では、日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞の「前方照応指示」と「後方照応指示」用法は中国語の指示詞“这”と“那”に翻訳された場合、指示用法の対応、指示機能の等価性、指示詞の形式における対応などから日中指示詞の対応関係を対照した。

本章では中日指示詞の対照という角度から中国語の指示詞“这/那”が日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳された例を抽出し、中国語の指示用法の「回指」、「前指」用法に重点を置き、両言語の指示詞の類似点と相違点を検討する。

また、“这”と“那”の指し示す対象によって大きく①「人・事物」②「場所」③「時間」④「修飾」の四つの枠組みに分け、それぞれ“这1/那1”、“这2/那2”、“这3/那3”、“这4/那4”で示す。それらが日本語の指示詞と対応する場合、どの環境で対応しているかを観察し、日中指示詞の共通点を検討していく。文の構造・指示機能・意味の3つの側面から観察する。

5.1「回指」の“这”と日本語の指示詞の対応表現

王亜新（2004）では「日本語のこ系指示詞は、基本的に中国語の“这”と対応し、そ系指示詞は“这”と“那”の二つに振り分けられる」と纏めている。王湘榕（2011：35）では「中国語の“这”は、日本語の『こ』と形式的に対応するが、有標志性[1)]という面では、日本語の『こ』と異なる。これはテキストレベルの翻訳において、“这”が『こ』に全部は訳されない理由となる。言い換えれば、テキストレベルの翻訳において、“这”をすべて『こ』に翻訳すれば、『こ』の有標性が失われるため、かえって不自然な文章になる。」と述べている。

本節では中国語の指示詞“这”は日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞を対照する。

5.1.1“这”と「コ」系指示詞の対応表現

本研究で用いられた日中対訳資料を調査した結果から人物や事物を指し示す指示詞“这”の例は場所、時間を指し示す指示詞と修飾する指示詞より遥かに多いことがわかる。以下は人物と事物を指す“这”が日本語の指示詞に翻訳された例群から採集した代表的なものである。主に2種がある。「裸の“这1”[2)]」と「“这1”＋　(NumCL) ＋N1/NP」と分けられる。

裸の“这1”

(1) 他没日没夜地写着，写在中学里没用完的练习本上，写了有几厚本了。他大娘要给他说媳妇，他也拒绝了。先著书，后成家，**这**也是他的座右铭，记在了心里。《鲍》

(1’) 彼は昼夜の別なく書き続けた。中学時代に使い残したノートに書きためて、もう何冊にもなった。親が嫁をとる話をもち出しても、彼は耳を貸さなかった。身を固めるのは、本を書きあげてから。**これ**も座右の銘として、心に刻んでいることだった。〔鮑〕

(2) 我也是鬼迷心窍。我本来可以成为一个很不错的心理学专家的，我是心理学专业的高材生。可是就是因为他，我丢掉了业务。（中略）我成为职位不高但十分引人注目的人物。奉承奚流的人，都要奉承我。害怕奚流的人，也害怕我。我自我陶醉了。英雄难过美人关，**这**在心理学上该怎么解释？《人啊》

(2’) 魔がさしたとしか言いようがない。私は本来、立派な心理学者になるはずだった。心理学科の秀才だったのだ。それなのに、彼のせいで専門を捨ててしまった。（中略）おかげで、地位は高くなかったけれど人に注目される人間になった。奚流を持ち上げる人は私も持ち上げ、奚流を恐れる人は私も恐れた。私は自分で自分に陶酔した。英雄も美人の関は越えられぬ、これは心理学的にはどう解釈すべきかしら。 〔人間〕

(1) と (2) のような“这”は裸で指示対象を指す例において、その指示対象はほぼ事物である。(1) の“这”は“先著书，后成家（本を出版してから結婚する)” を指し、典型的な「回指」用法で、訳文では「これ」に訳され、前文の「身を固めるのは、本を書きあげてから」を指している。(2) の“这”は (1) と指示用法が類似し、「回指」用法で、前にある“英雄难过美人关（英雄も美人の関は越えられない)”というような一文を指している。訳文では「これ」に訳され、前方照応指示として用いられている。ここで注目しておきたいのは、(1) と (2) の“这”は全部「これ」に訳されているところである。これは (1) と (2) の“这”は 1 つの文を指していることと、裸の“这”は事物や場所を指すことが多く、主語になるため、「こんな」「この」より「これ」「ここ」「こちら」など単独で指示対象を指すことができる指示詞に訳されることが多いと推測できる。

“这 1”＋ (NumCL) ＋N1/NP

(3) 我偷偷转过眼去看看他，只见他的脸红不是红，白不是白，亮亮的，象汗又象油。他心里大概不知道是什么滋味，所以脸上也不知是什么颜色。我想，语文老师讲的无动于衷而形于外，就是这个意思。《人啊》

(3’) 横目で盗み見ると、許の顔は赤くなってもいないし、青くなってもいない。ただ、てらてらと光っている。汗のように、また油のように。きっとなんとも言えない気持ちなんだわ。それでなんとも言えない顔つきなのね。国語の先生が言った、衷に動いて外に形わるって、このことだと思うわ。〔人間〕

(4) 他有点傻气，有点呆气，姜亚芬就说他是“书呆子”。可是，这个书呆子会念诗，而且念得那么好！《中年》

(4’) 世俗にうとく多少ぼんやりしたところがあり、姜亜芬は彼のそんなところを「学者ボケ」と言うが、この「学者ボケ」は詩を読むし、どうして、どうして大したものだ！〔①女医〕

(4”) ボケッと浮世離れしたところのある彼を姜亜芬は「専門バカさん」と呼んでいた。このぶきっちょな専門バカさんが何と詩を朗読するのだ、それも大変上手に！〔②中年〕

(3) の“这个意思”は前文に書かれている“只见他的脸红不是红，白不是白，亮亮的，象汗又象油（許の顔は赤くなってもいないし、青くなってもいない。ただ、てらてらと光っている。汗のように、また油のように）”を指し、“无动于衷而形于外（衷に動いて外に形る）”の意味を解説している「回指」用法である。訳文では前方照応指示の「このこと」に訳されているが、直訳すれば「この意味」でも通じる。ここで “这”は「この」と対応していると判断できる。(4) の“这”は名詞“书呆子”と共に「“这”＋ NumCL＋ N」の構造で前文に書かれている“书呆子（学者ボケ）”を指している。訳文①では「この学者ボケ」、訳文②では「このぶきっちょな専門バガさ

ん」に訳され、「コノ＋N/NP」になる。中国語文で用いられている量詞は2つの訳文においてはすべて訳出されていない。吕叔湘（1985：199，200）では中国語の数量詞“一”と“个”の関係について、「中国語の“(一) 个”は不定冠詞の働きを持ち、使用範囲は不定冠詞より広い。“一个”はよく “一”を省略して“个”を残す。このような“(一) 个”は中国の元の時代以後一般化してきた」と述べている。つまり、訳文（1’）、（ 2’）の指示詞「この」の役割は中国語の指示詞「“这”＋ “(一) 个”」と同様なので、日本語文では量詞が訳されていないと考えられる。

“这2＋里/边/儿”

(5) 祥子不能走。就是让他去看守北海的白塔去，他也乐意；就是不能下乡！上别的都市？他想不出比北平再好的地方。他不能走，他愿死在这儿。《骆驼》

(5’) 祥子にはできなかった。北海公園の白塔の番人をやせられても、彼は嬉々としてつとめたにちがいない。だが、田舎へゆけと言われたら、彼は断わっただろう。では、ほかの町ならどうか。彼にとって、北平以上によいところは考えられなかったのだ。彼はどこにもゆきたくなかった。この町に骨を埋めたかったのだ。〔駱駝〕

(6) 真了不起，江西人民为祖国的解放事业贡献出多少英雄儿女啊！光是有名有姓的就有二十五万。二十五万啊！维嘉感慨着。这里的泥土浸透了烈士们的鲜血，它是被鲜血染红的。《梦》

(6’) 大したものだ。江西省の人民は祖国の解放にどれほど多くの英雄男女を捧げたか。名前のわかる人だけで二十五万人もいるのだ。二十五万！ここには烈士たちの赤い血が染みこんでいる。 〔夢〕

朱德熙（1982）、劉月華他（1988）では「“这里/这儿”“那里/那儿”は場所を指し、“这”と“那”はフレーズまたは文の代わりをすることができ、特に“这”は前を受けて指す範囲が広い」と述べている。 (5) の“这儿”は前文の “北平（中国の地名）”を指し、「回指」用法である。訳文では「この町」に訳され、「この＋N2」の形になる。(6) の“这里”は前文にの “江西（中国の地名）”を指し、訳文では場所を指し示す「ここ」に訳されているので、“这里”と「ここ」が対応している。 (5) の“这儿”は場所を指し示す指示詞に訳されず、「この＋N2」の形に訳されている。「この＋N」の場合、N は場所を示す名詞なら、中国語の場所を示す“这里/这边/这儿”などと対応しているように、N の品詞によって対応できる対象が変わる。よって、中国語の場所を指し示す“这里/这边/这儿”は日本語の場所を指す「ここ」と対応するばかりではなく、(5) の“这儿”は「この…」と対応しているように、「この＋N2」とも対応できるとわかる。公式で示す
と以下のようになる。

“这里/这儿”⇔「ここ」・「この＋N2 」

“这2”＋N2

(7) 那年我住在医院里，有人给我介绍了个偏方：穿肠骨，焙干研碎了吃。穿肠骨就是狼粪中没有消化的碎骨头。我写信到陕北去。白老汉拦牛时漫山遍里地找，找到一小把，托仲伟给我捎了来。这地方的狼不多，他一定费了大力气…《插》

(7’）その年私は病院に入院したが、ある人が穿腸骨を焙って乾かし、すりつぶして飲むという民間療法を紹介してくれた。穿腸骨とは狼の糞の中に未消化のまま残る骨のかけらのことである。私は陝北へ手紙を出した。白じいさんは牛の放牧のとき野山を歩きまわって探してくれて、ほんのひとつかみ集めると仲偉にことづけてよこした。**この**地は狼が少ないのでじいさんはきっと大変な苦労をしたと思う…〔大地〕

(8) 巴黎的春天，相当阴冷，我们又都喜欢炉火，晚饭后常在Ｒ小姐的书房里，向火抽烟，闲谈。**这**书房是全房子里最大的一间，满墙都是书架，书架上满是文学书。壁炉架上，摆着几件东方古董。《女人》

(8’）パリの冬は陰気な寒さが続く。二人とも暖炉が好きで、夕食のあとはいつもマトモワゼル・Ｒの書斎で火に当たりながら、たばこを吸い、世間話をした。**この**書斎は家中でいちばん大きな部屋で、壁は本棚で埋まり、そこには文学書がぎっしり詰まっている。暖炉の上の棚には東洋の美術品が飾ってある。〔女〕

(9) 小鲍庄的童养媳是最好做的了，方圆几百里都知晓，**这**庄的人最仁义，可惜是太穷了。《鲍》

(9’）童養娘にやるなら小鮑荘がいいという評判は、**この**あたりに知れわたっていた。この村の人は仁義に厚かった。だが惜しむらくはあまりにも貧しかった。〔鮑〕

(7) の“这地方”、(8) の“这书房”、(9) の“这庄”はそれぞれ「“这”＋N2」の形になり、場所を指し示している。“这地方”は前文の “陕北”を指し、“这书房”は“Ｒ小姐的书房里”、“这庄”は“小鲍庄”を指し示している。3 例とも「回指」用法である。日本語の訳文では「この＋N」の形で、おのおの「この地」「この書斎」「このあたり」に訳され、前方照応指示である。よって、(7)，(8)，(9) の指示詞“这”は訳文の（7’），（8’），（9’）の「この」と指示用法から構成（指示詞の後に付く品詞）まで全て対応している狭義的な対応だと言える。

“这 3＋会儿/时候/时”

(10) 有时候扇了半天杳无信息，但还有一丝轻烟在拔火罐上升腾缭绕，好象一个病人奄奄一息，好象一个病人只剩了一丝游魂。**这时**姜赵氏救火心切，她可以伏下身子，她可以一条腿跪地，她可以两条腿跪地，把嘴凑近煤球炉的肚脐眼，噗、噗、噗，连吹三口气。《人形》

(10’） 懸命に扇ぎつづけてもおこる気配はなく、微かな煙が立ち昇るだけのこともある。虫の息の病人さながら、この世の名残に宙をさ迷う亡霊さながらに……。**こんな**時、老母は火をおこそうと躍起になり口をコンロの口にあてがってフー、フーと吹きたてる。ゆらゆらとたち昇っていた薄煙が俄かに濃煙となり、目や鼻を刺激し、咳こんでしまう。だが火はおこった。〔応報〕

中国語の時間を指す指示詞では、“这会儿/这时候/这时”と“那会儿/那时候/那时”がある。朱德熙（1995：109）も時間を指す指示詞を説明するために、“这会儿（zhè huǐ er）”、“那会儿（nà huǐ er）を代表的な例として取り上げている。「“这会儿”は発話時を指し、また叙述中に言及した過去の一時点を指すこともできるが、未来を指すことはできない。“那会儿”は過去あるいは未来の一時点を指し、発話時を指すことはできない。」と述べている。(10) の“这时”は前

文に書いてある火が弱くなって、消えそうになっているところを指している。ここで“这时”は“那时”と取り換えることが不可能である。語り手はビデオを再生しているように読み手に出来事を語っており、“那时”を使用すれば、焦点がずれてしまい、その生き生きとした場面が再現できない。日本語の訳文では「こんな時」に訳され、著者と訳者が同じ視点から出来事を述べ、本当の出来事の時制を気にせず、生き生きとした表現をするため、文脈指示用法の近称の「コ」系指示詞を用いている。

“这 3”＋N3

(11) 什么事啊？就是到矿上食堂吃晚饭－孟蓓在四号窗口卖饭哪。吃完了晚饭，心神不定地在山谷里转悠了好久，１０点多钟，又进食堂吃了一顿夜宵，－也就是说，这一天，他吃了四顿饭。《丹》

(11’) 何の用かって？炭鉱の食堂で夕飯を食べることだ―孟蓓が四番窓口に出ているのだ。夕飯をすましたあともなんだか心が落ち着かず、丘や谷を長い時間かけてぶらつき、十時過ぎにまた食堂に戻って夜食を食べた。つまり、この日、彼は一日に四回食事をしたのである

〔鳳〕

(11) の“这一天”は前文に先行詞がないが、前文をカットするといつのことを指しているかが不明である。よって、“这一天”は前文に書かれている出来事の時間を指し示している。本来「“这”＋N3（“一天”）」は現在あるいは、発話の時間を指すことが多いが、(11) の“这一天”は (10) の“这时”と類似して、前文の内容を指し示し、過去や現在を表すより聞き手に臨場感を感じさせ、近称指示の“这”を選んでいるとわかる。訳文では同じく近称指示の「コ」系指示詞に訳されている。また、指示詞の構成からみると、(11) の“这一天”は「“这”＋N3（“一天”）」であり、(11’) の「この日」は「コノ＋ N3（日）」になっているため、両方とも「Dem＋N3」の形になり、指示詞の形式から指示用法まで対応している狭義的な対応だと言える。

“这 4＋么/样/么样”＋V

(12) 就连二臭，一时节都成了辘轳把儿胡同的人物啦。(中略)不知打哪儿买一条说劳动布又不像劳动布的裤子，还有个洋名儿，愣说这叫“利瓦伊式５０１双Ｘ型牛仔裤”，刚下水，流着汤儿就穿上了，还说就得这么穿着缩水，才能缩出线条儿…《辘轳》

(12’) 今やこの二臭までが一躍、轆轤把胡同の名士というわけだ。(中略)どこから手に入れたのか、労働布製の、しかし労働とは縁のないデニムのズボンを、いったん水につけて、まだ雫の乾かぬうちに着用に及び、こうやって穿くと縮みじわができてナウいんだとのたもうと…

〔轆轤〕

(12) の“这么”は動詞“穿着（穿いている）”を修飾して、前文に書いている“刚下水，流着汤儿就穿上了（洗ったばかりでしずくが垂れたまますぐ穿いてしまった）”という動作を指す「回指」である。日本語の訳文では“这么”は前方照応指示の「こう」に訳されている。「こう・そう・あう」[3]は通常動詞や副詞の直前に置かれ、前の動作を受けたり、ある方法やプロセスを指示す

る。ここでは前文に書かれている「いったん水につけて、まだ雫の乾かぬうちに着用」という動作を受けて、このような穿き方で綺麗なラインが保つからと述べている。また、中国語の原文では「“这么” ＋V」の形だが、日本語の訳文では同じく「こう＋V」の構造なので、(13)の指示詞“这么”と「こう」は狭義的に対応していると言える。

“这 4＋么/样/么样”＋Adj

(13) 卖熟鸡的老头儿提个匣子，点一盏小油灯，昏暗的灯光下是一面油污的玻璃，透过玻璃隐约可见四只鸡安稳地躺着。老头儿从来没做过**这么**大笔的买卖，高兴得胡子发抖，说随便再给他添几毛，四只鸡就全是我们的（後略）《插》

(13’）鶏を売る老人は箱を提げ、小さなランプを点していた。ほの暗い明かりの下に油染みたガラスがあり、ガラス越しに四羽の鶏がおとなしく横たわっているのがぼんやり見える。老人は**これ**ほどの大商いをしたことがないので髭を震わして喜び、あと数角出してくれたら四羽全部持っていっていいという。（後略）〔大地〕

(14) 魏石头呢，一句话：“在这次事故中，魏石头同志也不幸以身殉职。”这算不错啦。开追悼会以前，我听见主管安全的副矿长说：“唉，这个魏石头啊，死一个凌凯还不够，还自己送上去了。瞧瞧，活着窝囊，死也死得**这么**窝囊……”《盖》

(14’）で、魏石頭の方は？こちらはただ一言でおしまい。「魏石頭同志も不幸にして殉職いたしました」これでもいいとしなければ……。なぜなら追悼会の前に、主として炭坑の安全対策を担当している副炭鉱長が、こうぼやいているのを聞いたので。「魏石頭ときたら、凌凱が死んだだけではもの足りないのか自分まで一緒にあの世に行っちまうなんて。生きているとき気がきかないだけでなく、死ぬときまで**こんな**に気がきかぬとは……」〔棺〕

“这么”は動詞を修飾する場合、何を指示しているかが一目瞭然であるが、(13) の“这么大笔的买卖（こんな大きな商売）”のようにまず“这么”は“大笔的”を修飾し、それから、“这么大笔的”が“买卖”を修飾する方式はやや複雑である。(13) の“大笔的”の“大”は形容詞だが、“笔”は量詞であるので、品詞が何かは戸惑うところがある。しかし、“大笔”の後ろに“的”が付いて「Adj＋“的”＋N」の形になるため、“大笔的”は形容詞に当たると判断できる。“这么”は“大笔的”と共に、「商売」を修飾し、前文に書いてある四羽の鶏を全部売り出せるという事を指し示す「回指」用法である。(13’）では前方照応指示の「これほどの大商い」に訳されている。「これほど＋の＋N」の形になるため、(13) の“这么”は「これほど」と対応していると認識できる。

(14) の“这么窝囊”は「“这么”＋ Adj（“窝囊”）」形で、前文に述べている“这个魏石头啊，死一个凌凯还不够，还自己送上去了（魏石頭ときたら、凌凱が死んだだけではもの足りないのか自分まで一緒にあの世に行っちまうなんて。）”という行動を指し示している。(14’）では「こんなに気がきかぬ」に訳され、(13’）と同様に前方照応指示である。(14) の“这么”は指していることが既に過去のことであり、本来過去を示す“那么”を使用するべきであるが、“这么”を用いることによって、その場にいる臨場感を重視して聞き手に強い関心を持たせおり、訳者も同じ視点で「コ」系指示詞を選び、「こんな」に訳していると推測できる。よって、“这么”

が「こんな」と対応している。

“这样”＋ NumCL

(15) 那个“心里有坎面上平”的秦恺，不十分热心，顾全关系，也勉强地来了。连地主歪嘴子，都不声不响地跟在后边拣砖头。诸如此类，来了一群。就是**这样**一群人，组成了队伍，一齐动手，帮着村长拆墙。《金》

(15’) 何事も顔に出さないたちの秦愷も、気は進まないながらも、あとさきのことを思ってしぶしぶやって来ていた。地主の「口まがり」までが、みんなの一あとについて黙々とレンガを集めていた。こういった連中が一団となった。ほかならぬ**この一団**が隊伍をくみ、一斉に手を下して村長の塀こわしを手伝っているのである。〔道〕

(15) の“这样”は“一群人”を修飾し、「“这样”+ NumCL（“一群人”）」になり、前文に書いてある“诸如此类，来了一群。（こういった連中が一団となった。）”を指し、典型的な「回指」用法である。“诸如此类，来了一群。”の前文“那个心里有坎面上平的秦恺，不十分热心，顾全关系，也勉强地来了。连地主歪嘴子，都不声不响地跟在后边拣砖头。(何事も顔に出さないたちの秦愷も、気は進まないながらも、あとさきのことを思ってしぶしぶやって来ていた。地主の「口まがり」までが、みんなのあとについて黙々とレンガを集めていた。）”はどのような団体、どのような人たちが来たかを説明している。（15’）では「この一団」に訳され、前文に書かれている一団を指している前方照応指示である。（15）の“这样”は「Dem+ NumCL+N」の形で、（15’）の「この一団」は「Dem +N」だが、“一群人”と「一団」の意味が同じなので、（15）の“这样”と（15’）の「この」と狭義的に対応していると認識できる。

5.1.2“这”と「ソ」系指示詞の対応表現

先行研究では「ソ」系指示詞を“这”に訳された例を考察したものがある。「回指」用法の“这”と「ソ」系指示詞との対応関係を考察したものは稀である。本節では「回指」用法の“这”を指す対象を分けたうえに、「ソ」系指示詞に訳された例を抽出し、指示詞“这”と「ソ」系指示詞は文中に意味、指示機能、語形から対照してみる。

“这 1”＋ (NumCL) ＋N1

(16) 捞渣也想读书。庄上有学校的孩子，脖子上都有一条红围脖，①**这**就叫他羡慕。他虽然还不知晓 ② **这**红围脖是啥意思，可他知道是叫人学好的。《鲍》

(16’) 撈渣も勉強したかった。村で学校に行っている子供たちは、みな首に赤いネッカチーフしていたが、①**それ**が彼には羨ましかった。②**その**赤いネッカチーフがどういう意味なのか、彼は知らなかったけれど、それがみんなの勉強の目標となっていることはわかった。〔道〕

(17) 梅佐贤本来并不是办纱厂的，是开饭馆出身的商人。他的表哥裘学良是沪江纱厂的厂长，就凭**这**个亲戚关系到厂里来的，起先是担任事务主任的工作，最近升了副厂长（後略）。《上海》

（17’）梅佐賢は、紡績工場がはじめの仕事というわけではなく、料理屋上がりの商人であった。かれの従兄の裘学良が滬江紡績工場の工場長なので、**その**縁故をたよって工場へはいり、はじめは事務主任の仕事をうけもっていたが、最近になって、副工場長に昇進したのだった。（後略）〔上海〕

蒋华(2005：102)では「“从指代方式上来看，“这”上指时，其方式可以是外显的，也可以是隐晦的；而“这”下指时，其指代方式只能是外显示的。”（指示する方式から見ると、“这”は「上指」指示として使用されている場合、指示する内容は前文に明確に示しているものもあるし、明確していないものもある。それに対して、“这”は「下指」指示として用いられている場合、指示する内容は必ず明確しなければいけない。）[4]」とある。地の文である（16）の①“这”は“脖子上都有一条红围脖（みな首に赤いネッカチーフしている。）”を指し、指示する内容が前文にはっきりと書いてある。②“这”は“红围脖”と共に、前文の“红围脖”を指している。①と②両方とも「回指」用法である。訳文ではそれぞれ「ソ」系指示詞に訳されている。日本語では「コ」系指示詞も前文の内容を受けたり、指したりすることができるが、指すものや先行詞など指示詞の直前の場合、「ソ」系指示詞が多く用いられる。また、指示詞が指しているものは前文の名詞句全体ではなく、その一部のみ指す場合、「コレ・コノ」を使用せず、「ソレ・ソノ」を用いる。よって（16’）では「それ」と「その」に訳されている。（17）の“这个亲戚关系（その親戚関係）”はその直前の“他的表哥裘学良是沪江纱厂的厂长（彼の従兄裘学良が滬江紡績工場の工場長）”を指し、「回指」指示用法で、蒋华(2005)が述べている「指す内容が明確している」ケースである。訳文では前方照応指示の「その縁故」に訳されている。（17’）の「その＋N」と（17）の“这＋N”は同じ構成「Dem＋N」で、指示用法も対応している。

（18）我按自己的意思理解他的话：一个当领导的，手下一定要有一帮子人，平时当手足，“战时”当保镖。做为领导者的妻子，则应成为**这**一帮人的粘合剂。奚流对我寄托期望了，这说明他毕竟把我当做最亲近的人。《人啊》

（18’）私の解釈では、彼の話はこう理解できる。指導者たるもの、配下にいつも一団の人間を確保しておかなければならない。平時には手足、「戦時」には用心棒として。ならば、指導者の妻たるもの、**その**一団の接着剤になってしかるべきだと。奚流が私に期待を寄せている。やはり私をいちばん親しい人間とみなしているのだ。〔人間〕

（18）は（16）（17）と異なって、人を指し示している。（18）の“这一帮人（その一団）”は前文の“手下一定要有一帮子人（配下にいつも一団の人間を確保しておかなければならない）”の“这一帮人”を指しているので、「回指」指示用法である。（18’）では「その一団」に訳され、前文に先行詞（一団）があるので、前方照応指示に当て嵌まる。（18）の語り手は登場人物「奚流」と愛人関係であったが、語り手は「奚流」に利用された気持ちがある。よって「奚流」の話の意味を説明するときに、「奚流」の立場になって語るならば近称指示を使用するが、「奚流」と距離を置いて語る場合、遠称指示を用いる。（18）は“这”を選び、文末の“奚流对我寄托期望了，这说明他毕竟把我当做最亲近的人。（奚流が私に期待を寄せている。やはり私をいちばん親し

い人間とみなしている）”と意味上一貫性を持つ。ここで（18）の“这”と（18’）の「その」と対応している。

“这2＋里/边/儿”

（19）奶奶的花轿行走到蛤蟆坑被劫的事，在我的家族的传说中占有一个显要的位置。蛤蟆坑是大洼子里的大洼子，土壤尤其肥沃，水份尤其充足，高粱尤其茂密。奶奶的花轿行到**这里**，东北天空抖着一个血红的闪电，一道残缺的杏黄色阳光，从浓云中，嘶叫着射向道路。《红》

（19’）祖母の嫁入り輿が蛤蟆坑で追いはぎに襲われたことは、わが家族の言い伝えのなかでも重要な位置を占める。蛤蟆坑はとびきり広い平地であり、土壌はとくに肥え、水にも恵まれ、高粱がよく育った。祖母の輿が**そこ**にさしかかったとき、東北の空にまっ赤な稲妻が走り、オレンジ色の欠けた日の光が一筋、濃い雲のなかからうなりをあげて道へ射してきた。

〔高粱〕

日中対訳作品を調査した例では場所を指し示す“这”は「ソ」系指示詞と対応する例が極めて少なく、全部地の文である。例のほとんどが（19）の“这里”のような決められた名詞“这里/这边/这儿”で場所を指し示す例と（18）のような「“这”＋N」の形になっている。（19）の登場人物の孫は語り手として語っている。過去のことであるが、前文の描写“土壤尤其肥沃，水份尤其充足，高粱尤其茂密(土壌はとくに肥え、水にも恵まれ、高粱がよく育つ)”から見ると、語り手はビデオで再生するように生き生きと場面を再現している。それと合わせるため、指示詞“这里”を用いていると考えられる。ここでは“那里”と入れ替えられない。他方、（19’）のテンスが全て過去形であることからみると、訳者は目の前で事件が起きているように語っておらず、ただ過去のことを述べるだけとわかる。よって、訳文では「コ」系指示詞ではなく、「そこ」に訳されている。(19)の“这里”は“蛤蟆坑”を指し示し、「回指」用法に当て嵌まる。訳文(19’)では「そこ」に訳され、前方照応指示として用いられているため、原文と訳文の両方とも文脈指示であり、対応していると判断できる。

“这2”＋（NumCL）＋N2

（20）同时他又想，让这个女人住在客厅里，不仅侮辱了**这**个尊严的地方，而且会在公馆里散布淫乱的毒气，败坏高家的家风。《家》

（20’）彼はこの女が客間にとどまるということは、**その**尊厳の場所を傷つけるのみならず、淫らな毒気をこの邸内にふりまいて、高家の家風を破ることになると考えた。〔家〕

（20）と（19）は同じ場所を指し示す指示詞だが、構成が異なっており、前者は“这”で成った1語で、後者は「“这”＋N」の形である。（20）の“这个尊严的地方”は前文に書かれている“客厅”を指し示し、「その尊厳の場所」に訳されている。ここで（19）と同じく、原文は今出来事が起きているように述べているので、“这”を選び、訳文には過去形は文末があるので、訳者は過去のこととして述べている気持ちが一目瞭然である。（20）の作者と（20’）の訳者の語る視点が異なるが、（20）の“这”と（20’）の「その」は指示詞の形、指示用法が対応してい

ると言える。

“这 3”＋（NumCL）＋N3

(21)“我家里的她娘家，有个疯子，疯得蹊跷，好得也蹊跷。”鲍彦山说，“不知怎么就疯了，疯了有十几年，爬树上梁的。后来，他奶奶死了，棺材一落地，他这边立马就好了。醒过来了哩，就好比做了一场梦。问他是怎么啦！他什么也不知道，这十多年就像是睡过来似的。”《鲍》

(21’）「うちの女房の実家にもひとり気狂いがおったが、気のふれ方も妙な具合なら、治ったのも妙なきっかけだった」鮑彦山が口をはさんだ。「どうして気がふれたかはともかく、十数年来いつも首を吊ろうとした。そのうち婆さんが死んで、棺桶を埋めたとたん、こいつが正気をとり戻したんだ。気がついてみれば、長い夢を見てたようなもんさ。どうしたんだと訊いても、当人は何も覚えとらん。その十数年間、ずっと眠っていたみたいだとさ」〔鮑〕

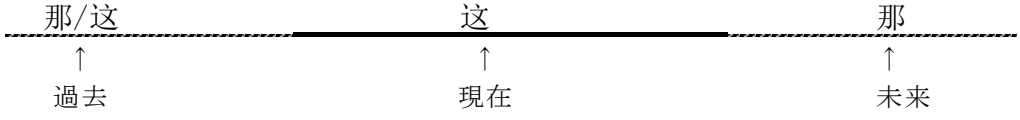
(22) 觉民弟兄午后到学校去。学校里已经上课了，但是教员中请假的却有几个，学生也比平时少了三分之一。他们这天没有课，在学校里停留一些时候，便回家了。《家》

(22’）覚民兄弟は午後学校へ行ってみたが、もう授業ははじまっていた。しかし休暇をとっている教師たちもかなりあったし、学生はいつもの三分の一だった。彼らはその日は授業がなかったので、学校にしばらくいて帰ってきた。〔家〕

(21)の“这十多年”は前文の “疯了有十几年”を指し示し、訳文では「その十数年」に訳されている。(22)の“这天”は「“这”＋N3」の構成で“这日/这月/这年”と同じく、時間を指し示す。全文では先行詞がないが、前文の意味から一日のことだということがわかり、文脈には一貫性があるため、蒋华(2005)が述べた指示する内容は前文に明確していない“这”の「回指」用法に当て嵌まる。訳文では「その日」に訳され、「ソノ＋N3」の形になる。

朱德熙（1995：109）は「“这会儿”・“那会儿”は時間詞であり、代替機能を有している。“这会儿”は発話時を指し、また叙述中に言及した過去の一時点を指すこともできるが、未来を指すことはできない。“那会儿”は過去あるいは未来の一時点を指し、発話時を指すことはできない」と述べている。杨玉玲（2010：157）によると、中国語の時間を示す指示詞“这时（zhè shí）”と“那时（nà shí）”は両方とも前文に現れた過去の時間を指すことができる。しかし、“这时”は「回指」として過去や現在など通常の時間を指し示すが、“那时”は指し示さない。それに対して“那时”は「回指」として将来の時間を指すが“这时”は指さないと論述している。

朱德熙（1995）、杨玉玲（2010）では述べている時間を表す中国語の指示詞の用法は意味の範疇に合致している。つまり「“这”＋時間表現」は指示と代替機能があり、現在と過去の時間を指すことができる。「“那”＋時間表現」も同じく指示と代替機能を備え、過去と未来を指すことができる。【図 5-1】で表すと下記の通りである。



【図 5-1】“这”と“那”の時間を表す軸

中国語の指示詞「“这”＋時間表現」と「“那”＋時間表現」は両方とも過去を表すことができるので、本来(21)の“这十多年”は“那十多年”と、(22)の “这天”は “那天”と入れ替えることができる。しかし、(21)、(22)の話し手が過去に戻り、時間より臨場感を表すことに重視し、「“这”＋時間表現」のほうが、過去の時間に重点を置く「“那”＋時間表現」より生き生きとしている場面を表現できると判断し、作者が“这”を選らんだのだろう。一方、訳文(21’)、(22’)の文中の過去形から見ると、記憶に貯蔵している情報を引き出すという形で語っているとわかる。そのため、過去の時間を重んじ、中称指示の「ソ」系指示詞に翻訳されていると見える。これは時間を指し示す場合、“这”と日本語の「コ」系指示詞は対応しておらず、「ソ」系指示詞と対応している原因だろう。

(23) 一盆炭火，围着四个贫农老人，八只被绳索和木器磨得皮肤粗糙、指头弯扭的大手，象观赏，象比较似的，一齐伸在火苗上。（中略）集合到这里的五个老人，共计三百多岁，三百年是十万多个日日夜夜；这十万多个日夜里，封建地主的皮鞭声，帝国主义的枪炮声，死者的鲜血，幸存者的眼泪（後略）《金》

(23’) 一つの火鉢を四人の貧農の老人が囲み、あら縄や木製農具でガサガサになり指のまがった八本の大きな手を、観賞するように、比べあうように火にかざしていた。（中略）ここに集まった五人の老人の年齢はあわせて三百歳余りになる。三百年と言えば十万をこす昼夜の交替だ。その十万をこす日夜、封建地主の鞭の音、帝閏主義の砲声、死者の鮮血、生き残った者の涙などなどから（後略）〔道〕

(23)の“这十万多个日夜（その十万をこす日夜）”は（22）の“这天”より文が長いが、文の構成が類似しており、(23)は「“这”＋ NP」、（22）は「“这”＋ N」で、時間を指している。(23)の前文に先行詞“十万多个日日夜夜”があり、指示詞“这”と照応している。訳文では（23’）と（22’）同じ理由で、「ソ」系指示詞を用い、「その十万をこす日夜」に訳され、“这”は「その」と対応している。

“这 3”＋“以后（yǐhòu）/之后（zhīhòu）/开始（kāishǐ）”

(24) 冯少怀买了大骡子，迈出了他那“东山再起”的第一步。这以后，他看到一些人对他流露出一种若隐若现的气愤神色，也受到一些人明来暗往的非难。《金》

(24’) 馮少懐はラバを買うことで、その「東山に再起する」第一歩を踏み出した。それ以来、かれは一部の人がかれに何となく怒ったような表情を向けるのに気づいていたし、陰に陽に非難する声も聞いた。〔道〕

(24)の“这以后”は“这”が指し示す時間から何かが起こることを示す表現である。具体的には“冯少怀买了大骡子,迈出了他那“东山再起”的第一步”（馮少懐はラバを買うことで、その「東山に再起する」第一歩を踏み出した。）からの時間を指し示している。（24’）の「それ以来」に訳され、「“这”＋N」と同じく「それ＋N」の形だし、前文の内容を指しているため、「“这以后”」

と対応していると言える。

“这 4＋么/样/么样”＋ Adj

(25) 朱铁汉说：“没新节目，她们烦了。你没给她们报告好消息吗？一说剧本写出来了，保管她们高兴得发疯，不找也得挤上来。”吕春河说：“头晌周丽平在二林屋里帮着文庆抄剧本，还用我报告？她那会儿抄到半节儿，放下笔就走了，刚才露面，开口就请假。你还说她们高兴得发疯了，哪有这么高兴的。”《金》

(25’) 「新しい出しものがなかったんで、あきちまったんだろ。おめえ、彼女らにこんないい知らせを伝えなかったのか？台本ができたって言ってみろ、連中きっとバカみてえに喜んで、呼ばなくたって集まってくらあ」「昼前に周麗平は二林の部屋で文慶の台本の清書を手伝ってたんだから、別に知らせなくたっていいだろ？そんとき、半分ぐらい清書したら筆放って行っちまったんだ。それでさっき顔を出したと思ったら、休ませてもらいますときたもんだ。そんでも連中はバカみてえになって喜んでんのかね、そんな喜びかたなんてあるもんか」〔道〕

(25)の“这么”は形容詞“高兴（嬉しい)”を修飾して、そんなに喜んでいないと語っている。一方、前文に書かれている“你还说她们高兴得发疯了（嬉しくてたまらないと言ったのに)”と“保管她们高兴得发疯（連中きっとバカみたいに喜んで、)”という状態とは真逆である。“哪有这么高兴的（そんな喜びかたなんてあるもんか)”は“她那会儿抄到半节儿，放下笔就走了，刚才露面，开口就请假。(そのとき、半分ぐらい清書したら筆放って行っちまったんだ。それでさっき顔を出したと思ったら、休ませてもらいますときたもんだ。)”という行動を指している。“这么高兴”の“这”は「回指」用法に当てはまる。訳語では「そんな喜び」に訳され、前文の先行詞「喜び」と照応し、「前方照応指示」である。(25)の“这么”は形容詞を修飾しているが、訳文の「そんな」は名詞を修飾するようになっている。双方の指示詞用法は一致しているため、広義的な対応をしていると言える。

“这 4＋么/样/么样”＋V

(26) 现在祖父在他的眼前显得非常衰弱，身子软弱无力地躺在那里，从微微张开的嘴里断续地流出口水来，把颔下的衣服打湿了一团。“爷爷不见得生来就是古板不近人情的罢。”他心里这样想。《金》

(26’) 今の祖父は彼の眼の前にいて、きわめて衰えているようにみえた。ぐったりとねそべって、ちっとも元気がなく、かすかに開いた口からは涎が流れ、顎の下の衣服がひとところ濡れていた。「爺爺はそんなに親しめない人とも思えないんだがなあ」彼は心の中でそう思った。〔家〕

(26) の“这样想”の“这样”は動詞“想（思う)”の前に置いて“想”という動作の状態を説明する。また、“这样想”は前文の“爷爷不见得生来就是古板不近人情的罢。(爺さんはそんなに親しめない人とも思えないんだがなあ)”という内容を指し示し、「回指」用法である。指示詞“那

样”也「回指」の用法があるが、語り手がはっきり過去の動作を示したいのであれば“那样”を使用する。(26) のように文頭に“现在（现在)”で時間を明確にしたので、“那样想”より“这样想”のほうが文の一貫性を保つだろう。訳文では日本語の前方照応指示の「そう思った」に訳されている。日本語の指示詞「こう・そう」は照応指示として使用されている場合、庵他（2001：12）では指すものが後から出てくる場合、通常「コ」系が使わると述べてある。つまり、「後方照応指示」は「こう」がよく使用され、「前方照応指示」は「こう」より「そう」のほうがよく使用されている。ゆえに、(26) のような前文の内容を指す「回指」用法は日本語の「前方照応指示」で翻訳する場合、「そう」に訳されることが多いとわかる。

“这 4＋么/样/么样”＋ N

(27) 维嘉见我难过的样子，连忙望着我真诚地说：“方丹，别这么愁眉苦脸的，从前你可不是这样。(後略）”《梦》

(27’) 維嘉は私の表情を見てあわてた。「方丹、そんなに暗い顔するなよ、前はそんなじゃなかったぜ。(後略）」 〔夢〕

(27) の“这么愁眉苦脸（こんなに暗い顔している)”は「“这么”＋ N(“愁眉苦脸”)」となり、“愁眉苦脸”の状態を示す。前文には先行詞がないが、“难过的样子（悲しい顔をしている)”と照応している。訳文では前方照応指示の「そんな」に訳され、「そんな＋N（暗い顔)」になっているので、原文と同じく「Dem＋N」になって、指示詞の構成から指示用法まで対応していると言える。

5.1.3 “这”と「ア」系指示詞の対応表現

「回指」用法の“这”は「ア」系指示詞に翻訳された例は調査した日中対訳作品では「コ」系、「ソ」系に比べれば、最も少ないことがわかる。そのうち、「回指」用法として用いた“这”の会話文は地の文より多い。また指示対象で分けた“这 1”が「ア」系指示詞に翻訳された例がほかの 3 種より遥かに多く、１位であり、“这 4”の例が 2 位、“这 2”の例が 3 位、“这 3”の例が 4 位になっている。つまり、指示詞“这”は「ア」系指示詞に訳された例は全体からみると極めて少なく、その中では場所と時間を指す例はほぼない。大体が人と物事を指し示す例である。

“这 1”＋ (NumCL) ＋N1/NP

(28)“妈妈，请你原谅我。我再也不说这些话了。今天不知道怎么，我心里又烦又乱，只想发火。”《鲍》

(28’)「お母さん、ごめんなさい。二度とあんなこと言わない。きょうはどうしてか分からないけど、いらいらして、すぐかっとなってしまうの」〔鮑〕

(28) の“这些话（こんな話）”は「“这”＋ NumCL＋N」の形で、話し手が母親に話したことを指し、(28) の指示詞“这”と不定数量詞“些”と共に使用して、二つ以上の人物・事物など複数を示している。例 (28) では話し手が母親にさきほど話した話しと類似している言葉もこれか

ら一切しないと表している。訳文では「あんなこと」に訳され、数量詞を訳さず、単数か複数かを示していない。ここで注目しておきたいのは、“这”が「ア」系指示詞に訳された例においては（28）のように会話文が地の文より多いことである。庵他（2001：5）に書かれているように「文章における文脈指示ではアは使われない」とあるが、これは今回調べた結果とほぼ合致している。聞き手と話し手が存在する会話なら、聞き手と話し手が共有している情報、話し手の特定的な体験などは「ア」系指示詞を用いるからである。（28’）の「あんなこと」は話し手と聞き手（母親）が共有していることであるため、「ア」系指示詞に訳されており、さきほど娘が母親に対して話した内容を指しているため、（28）の“这些话”と（28’）の「あんなこと」と対応している。（28）の場合“那些话”も使用できるが、話したばかりの内容に関しては“这”のほうがよく用いられる。ここで日本語と中国語指示詞のずれが見られる。中国語では指示詞を使用する場合、距離と時制を優先するが、日本語の場合、遠近や過去、未来、現在を配慮しながら、話し手と聞き手の領域を重視している。（28）のような話し手と聞き手双方の領域に共存する知識なら、必ず「ア」系指示詞を用いる。

（29）“陶阿毛怎么样？这个人机灵，能干，勇敢，就是喜欢喝这么两杯，给他两瓶酒，要他做啥就做啥。”《上海》

（29’）「陶阿毛はいかがでしょう？あの男は、すばしっこくて、やり手で、度胸があって、二三杯ひっかけるほうは目がありませんから、酒の二三本もやれば、こちらでやれということは、なんでもやります」〔上海〕

（29）の“这个人”は「陶阿毛」を指し、（28）と同じく「“这”＋ NumCL＋N」の形だが、“这个人”の“个”は単数を示す数量詞なので、指示対象を立てる効果がある。訳文では「あの男」に訳され、数量詞は省略されている。

（29）の前文“陶阿毛怎么样？（陶阿毛はいかがでしょう？）”という発話から、聞き手も「陶阿毛」を知っている情報だと確定できる。中国語では「回指」用法の指示詞“这”を用いるが、日本語の訳文では原文と同じように前文の「陶阿毛」を指している前方照応指示の「あの」を用いている。話し手と聞き手の共通情報ならば、日本語では特に会話文なら「ア」系指示詞が用いられる。仮に、前の文を“陶阿毛你认识吗（陶阿毛は知っている？）” に変えると、訳文では「あの男」ではなく、「その男」に訳されるだろう。このように基本的に、会話では聞き手の知らない場合、「ソ」系指示詞を使用する。[5]それは金水他（1989：38）と高革萍（2002b：133）が述べている例と合致している[6]。

“这 2＋里/边/儿”

（30）“我知道你说的这块桑地在哪里，”良材尖利地截断了老苏的话，“怎么你们自出主意就拿它圈进来了？**这里**有我的一块桑地（後略）”《霜》

（30’）「わかったよ、おまえがどこのクワ畑のことをいいたいのか」彼は蘇世栄のことばを、するどく断ちきった。「おまえたちは、どうしておれに断りもせずに、あそこを中にとりこんでしまったのだ。**あそこ**にはうちのクワ畑がある。（後略）」〔霜〕

場所を指し示している“这”は「ア」系指示詞と対応する例が非常に少なく、9 例しか見つからなかった。そのうち会話文に 6 例、地の文に 3 例である。(30) の“这里”は蘇世栄が言い出した桑畑があるところを指している。日本語の訳文では前文にある「クワ畑」を指しているにも関わらず、話し手と聞き手の両方とも知っている情報であるため、「ア」系指示詞を用いて、「あそこ」に訳されている。これにより中国語文は近称指示の“这”を用いるのに対し、日本語の訳文では遠称指示の「ア」系指示詞に訳された理由がわかる。 “这里”を使用する際に、物理的・心理的な距離や時間の流れを優先するが、日本語の指示詞を選ぶ際に、遠近や過去、未来、現在より話し手と聞き手の領域を重視し、話し手と聞き手の領域に共存する知識や経験なら、必ず「ア」系指示詞を用いる。 (30) の“这里”と (30’) の「あそこ」と対応しているのはまさにこの例である。また、人や事物を指し示す “这”は「ア」系指示詞と対応する理由とも同じである。

“这 2”＋ (NumCL) ＋N2/NP

(31) “我忘记告诉你一件事，”婉小姐一边检东西，一边说，“前天朱竞新来说起县西街①**那家**祥茂发杂货店，上一节做的太坏了，几个股东彼此都有闲话，闹的不大好看。我们还有千把块钱存在②**这铺子**里呢，还是趁早设法提了出来罢，明天你就去。”《霜》

(31’) 「忘れるところだったわ」彼女は化粧品を択びながらいった。「おとつい朱競新さんから聞いたんだけど、西通りの祥茂発ね、①**あそこ**がこの前の決算でだいぶ赤字を出したんですって。出資者たちが大騒ぎらしいわ。それで、うちでも②**あそこ**にまだ千いくらか貸しが残っていたでしょう、早いとこ引きあげた方がいいようだから、あした行ってきてくださらない」〔霜〕

(32) “哦，原来祥茂发**这一家**老店也靠不住了，”和光不胜感慨地说，“只是找谁好呢?” 《霜》

(32’) 「へえ、**あんな**老舗までがねえ」和光は感慨深げにいった。「で、誰のところに行ったらいいの」〔霜〕

(31) と (32) の話し手と聞き手は同じ人物であり、二人とも現場にいて同じ話題をめぐって会話しているため、話の内容が繋がっている。話し手が言い出した「西通りの祥茂発」は聞き手も知っている店である。よって、 (31’) の①、②と (32’) では「ア」系指示詞を用い、それぞれ「あそこ」と「あんな」に訳されている。ここで (31) の①の指示対象は話し手の直前の発話にあるが、 (32) の指示対象は相手の発話にあることに注目すべきである。 (31) で話し手が初めて「西通りの祥茂発」を言及する場合、指示詞“那”を用いて①“那家祥茂发杂货店” と表している。二回目に「西通りの祥茂発」言及する場合、指示詞“这”を用いて②“这铺子” で表している。これに対して、日本語の訳文ではすべて「あそこ」に訳されている。 (31) の内容からみると、話し手は最初に記憶に蓄えている情報“那家祥茂发杂货店”を思い出したが、まだ自分と関わりがないため、心理的な距離が遠いわけである。そのため遠称指示の“那”で示す。しかし、会話が進むにつれて、話し手は自分が「西通りの祥茂発」でお金を預かっていることを表明し、本来関係がない場所（西通りの祥茂発）は利益と結びついている所として登場する。そのため二回目の登場は話し手にとって、心理的に距離が近くなり、近称指示の“这”で指し示す。日本語の訳文 (31’) では中国語文 (31) のような心理的な変化に伴う、遠称指示詞から近称指

示詞への移行はなく、文の始めから終わりまで、話し手と聞き手が両方とも知っている情報なら、「ア」系指示詞という基準で指示詞を用いる。(32) の“这一家”も同じく、訳文「あんな老舗」は、訳者が偶然に「ア」系指示詞を使用しているのではなく、中日指示詞の選択標準が異なるとわかる。

“这 3”＋ (NumCL) ＋N3/NP

(33) 河里泛上来的蓝蓝的凉气和高粱地里弥散开来的红红的暖气在河堤上交锋汇合，化合成轻清透明的薄雾。父亲想起凌晨出征时那场像胶皮一样富有弹性的大雾，**这一天**过得像十年那么长，又像一眨么眼皮那么短。《红》

(33’) 河から湧いてくる青い冷気と高梁畑から広がってくる赤い暖気とが土手でぶつかりあって、すきとおった薄い霧になった。父は朝早く出発したときの、あのゴムのようにふかふかした濃霧を思い出した。**あれ**から十年もたったような気がする。いや、ほんの一瞬だったのかもしれない。〔高梁〕

日中対訳作品を調べた結果は、時間を指す“这”は「ア」系指示詞と対応する例はほかの 3 種中最も少なく、3 例のみで、その全てが会話文で表れる。

(33) の“这一天”は文に登場した人物（父）の出発する日、すなわち、前文の“凌晨出征”を指している「回指」用法である。過去のことを描写しているが、読み手に臨場感を与えるため、その場で起きているように“这”で時間を示している。日本語の訳文では「アレ」に訳されている。「ア」系指示詞は話し手と聞き手の共通の体験に関する事柄を述べる場合のほかに、独話文や話し手の特定の体験について尋ねられているとき、聞き手が知らない出来事でも、話し手の経験であれば、「あのとき」など「ア」系指示詞で時間を指すことができる。例 (33) で語った十年前の「朝早く出発した」とは父にとって忘れられないことであり、特別な体験に当たるので、「あれ」で前文に書かれている出来事を指している。(33) の“这一天”と (33’) の「あれ」はともに指示対象が前文にあり、指示用法は対応しているが、指示詞の語形と指示対象が異なるため、広義的な対応になる。

“这 4＋么/样/么样”+V

(34) 隔了几天，徐太太又来到白公馆。四奶奶早就预言过：“我们六姑奶奶**这样**的胡闹，眼见得七丫头的事是吹了。徐太太岂有不恼的？徐太太怪了六姑奶奶，还肯替她介绍人么？这就叫偷鸡不着蚀把米。”《倾》

(34’) 何日かして、徐夫人がふたたび白家を訪れた。四奥様が早々と予言したところでは、「六妹が**あんな**ばかなことをしたんだもの、七妹のことはきっとだめね。だって徐夫人が怒らないはずないでしょ。徐夫人が六妹の悪いのを知ったうえで、それでもまだあの女の仲人なんてすると思う?それこそ、あぶはち取らずってもんよ」〔傾〕

(34) の“这样的胡闹”は「あんなばがなことをする」に訳され、“这样”は動詞“胡闹”を修飾し、“胡闹”の方式を指し示している。(34) の話し手と聞き手は双方とも六妹が仕出かしたことを

知っており、そのことについて、すでに“胡闹”と理解したので、“这样的胡闹”と言えば、何を指しているかがわかる。一方、日本語の訳文では話し手と聞き手が知っていることなら、「ア」系で指し示すため、「あんなばがなこと」に訳し、二人が共有している情報であるとわかる。また、中国語原文では“这样”は“那样”と入れ替えても意味的な違いが生じないが、(34) では「こんな」と「そんな」が「あんな」と入れ替わると、話し手と聞き手双方とも知っている旧情報から一方にとっての新情報に変化する。

“这4+么/样/么样”＋ Adj

(35) “我父亲死去之后，因为夺我屋子，要我在笔据上画花押，我大哭着的时候，他们也是这样热心地围着使劲来劝我……。”他两眼向上凝视，仿佛要在空中寻出那时的情景来。《彷》

(35’)「おやじが死んでからというもの、ぼくの家を取りあげるため、ぼくに証文に判をつかせたいばかりに、ぼくが泣いたときでも、あんなふうにとりまいて、熱心に慰めただけさ……」彼は両眼を、じっと宙に向けて、そのときの情景を思いえがこうとしているふうであった。　〔彷〕

(35) の“这样热心”の“这样”は形容詞“热心”を修飾して、父親が死んだ時、起きた出来事を思い出し、その出来事を指し示している。今の出来事と父親がなくなったときの出来事と比べ、類似点をまとめることによって、2 つの事件が発生した時間的な距離が縮められ、近称指示の“这样”が使える。また、この出来事（家を取りあげるため、証文に判をつかせたいばかりに、熱心に慰めた）は話し手にとって一生忘れられないことだと小説の内容からわかる。つまり、話し手に対して、関心度が高いことであり、自分自身に関連性も強いことでもあるので、指示詞“那”より、“这”のほうが適切だとわかる。一方、話し手の特定の経験に対して、「ア」系指示詞が使用され、日本語の訳文では「あんな」に訳されている。(35) の「回指」として用いられた“这样”は (35’) の「あんな」と対応している。

5.2 「前指」の“这”と日本語の指示詞の対応表現

中国語の指示詞の「前指」用法については、吕叔湘 (1985：205) が“这字间或用来指示下文即将说明的事物，这可以称为前指；那字没有这种用法。(“这”は後文に現れる事物、これから説明する内容を指し示す。この用法を「前指」と称する。“那”はこの用法を持たない。)”と定義している。つまり、中国語の指示詞“那”は「前指」用法がなく、“这”のみにその用法がある。本節では「前指」として用いられた“这”が日本語の後方照応指示に翻訳された例に着目し、中国語の「前指」用法と日本語の後方照応指示の対応関係を考察する。

5.2.1 “这”と「コ」系指示詞の対応表現

日中対訳資料を調査した結果から「前指」用法が「回指」用法より遥かに少ないことがわかる。また、“这”が翻訳された例では「コ」系指示詞を「ソ」系指示詞や「ア」系指示詞よりも多用される。そして、「前指」用法のうち“这么/这样/这么样”は時間、場所、人物などを指す“这”よりも例文が遙かに多い。

“这 1”＋ (NumCL) ＋N

(36) 西边这个呢，以组织名义送的花圈只有一个 —工会送的。《盖》

(36’) こちら西側の棺桶には組織の名で贈られた花輪がたった一つ。〔棺〕

(36) の“这个”は“花圈”を指し示し、“这个花圈”の省略型と見られる。ここで “花圈”を省略している原因は後文の“以组织名义送的花圈只有一个”に“花圈”があり、冗長な文になることを避けるためである。(36) “以组织名义送的花圈只有一个ー工会送的”は前文の“这个”に関する説明であり、ここでの“这个”は中国語指示詞による「前指」用法である。中国語指示詞の「前指」用法と日本語指示詞の「後方照応指示」は両方とも文脈指示用法であり、指示機能も類似していると認識されている。しかし、(36’) では (36) の“这个”を「こちら」に訳し、原文は文脈指示用法で、訳文の現場指示用法と異なる。つまり、原文と訳文の日中指示詞は広義的に対応しているが、指示用法が対応していない。原文はビデオカメラで先ず撮影して、それから読者に見せるように第三者の立場から述べている。訳文では原文と同じ事実を述べているが、話し手は読者と共にステージに立っているように、目の前に置いてある“花圈”を見ながら語りかけている。要するに日中の表現は焦点が異なっている。

(37) 公元一千九百八十二年十二月十二日，其中薛家正举行婚礼的这个位于北京钟鼓楼附近的小院，便是一个虽经一定程度毁损，有所变形，然而仍堪称典型的一个四合院。《钟》

(37’) 紀元一九八二年十二月十二日、薛家が婚礼をあげている最中の、この鼓楼近くの小さな四合院は、若干破損し、変形しながらも、いちおうは典型的な四合院といえるところである。 〔鐘〕

(37) は典型的な「回指」用法の例ではない。指示用法は (36) と類似し、指示詞“这个…”という短文で指している事物を後文で説明している。(37) の“这个…小院（この…四合院)”はどういうような四合院であったかを後文で「若干破損し、変形しながらも、いちおうは典型的な四合院といえるところ」と説明している。訳文では“这个…”は「この」に訳されているが、助詞「は」を使用することによって、「この鼓楼近くの小さな四合院」は主題になる。「主題というのはその文で述べたいことの範囲（対象）を限定し、主題の後にはその主題について叙述した解説が続く（庵他 2001：12)」ので、指示詞「この」の指示機能を受け、後文が前文に説明するのではない。よって、(37) の“这个…”と (37’) の「この」は、広義的に対応しているが、指示用法は対応していない。

“这 2”＋ (NumCL) ＋N/NP

(38) 大约下午一点多种的时候，澹台智珠出现在这条大街的最北头——也就是钟鼓脚下。她两眼充满一种怨怒、焦急、惶乱、迷惘交织的神情。《钟》

(38’) 午後一時すぎ、澹台智珠がこの大通りのいちばん北、つまり鐘鼓楼のところに現われた。その目には怨みとも焦りとも、あるいは憂慮とも困惑ともつかぬ色が複雑に入りまじっていた。〔鐘〕

(38) の“这”は「Dem (“这”) + NumCL (“条”) + NP (“大街的最北头”) という構文を作っている。後文の“也就是钟鼓脚下(つまり鐘鼓楼のところ)”は“这条大街的最北头 (この通りの一番北)”に加えた説明である。訳文で“这”は「この」に訳されているが、(38’) の「この」は後方照応指示用法ではない。後方照応指示に関する主たる研究である林(1972, 1983)、田中(1981)、木村 (1983b)、庵功雄 (1995c) では (39’) のような用法について述べられていない。(38) の“这”は「この」に翻訳されているが、指示用法が異なるため、広義的に対応している。

(39) 于是吃我残饭的便只有油鸡们。这是我积久才看出来的，但同时也如赫胥黎的论定“人类在宇宙间的位置”一般，自觉了我在**这里**的位置：不过是叭儿狗和油鸡之间。《彷》

(39’) かくて僕の残飯を食うのはチャボだけになった。これは僕が長いことかかってやっと発見したことだが、同時にハックスリーが「宇宙における人類の位置」を論じたように、僕の**ここ**での位置が、狆とチャボの中間にすぎぬということを自覚した。〔彷〕

(39) の“这里的位置 (ここの位置)”については“叭儿狗和油鸡之间 (狆とちゃぼの間にいる)”で説明を加えている。(39) の「前指」用法は (38) よりも吕叔湘 (1985) が解釈した「前指」に近い。(39) の前文に表れている“我在这里的位置”は後文の説明がなければ、不明瞭である。しかし、(38) の“这条大街的最北头”は後の説明文“也就是钟鼓脚下 (つまり鐘鼓楼のところ)”と同定関係であり、前文が述べた内容に、後文がさらに説明を加えている。訳文 (39’) では“这里”が「ここ」に訳されているが、(38’) と同じく「ここ」は後方照応指示ではない。場所を指し示す“这”の「前指」用法は少ないうえに、日本語の訳文では「コ」系指示詞と対応しても、「後方照応指示」に翻訳されていないことが多いと明らかになった。

“这 3”＋(NumCL)＋N

(40) “特别是**这个**辰光，”梅佐贤看了看表，说，“五点钟光景，下午来白相的人差不多快回去了，晚上要来白相的人还不到时候。”《上海》

(40’) 「とく**にこの**時刻はそうなんだ」、梅佐賢は時計に目をやって言った、「五時ごろは、午後遊びにきたものはほとんどもう帰るころだし、晩に遊びにこようというものはまだその時間じゃないからね」〔上海〕

筆者が調べた日中対訳作品においては時間を指し示す「前指」の用法は極少なかった。(40) の“这个辰光 (この時間)”は後文の“五点钟光景。(五時ごろ)”を指し、“五点钟光景”は“这个辰光”を説明している。訳文では「この時刻」に訳されているが、「そうなんだ」が存在しているため、「後方照応指示」にならない。高革萍 (2002ｃ：95) では中国語から日本語に訳す日中後方照応指示詞の対応関係を考察して、次の結果をまとめている。「“这”はコ系後方照応指示詞に訳すことができることがわかる。したがって、日本語から中国語に訳す場合、日中後方照応指示詞は完全に対応させることができないが、中→日で見た場合、“这”とコが対応している」。しかしながら、今までの調査した日中対訳作品からみると後方照応指示の“这”は「コ」系指示詞に訳されても、完全に対応しているとは言いきれない。以上挙げた例文からわかるように指示

用法が対応していないケースが少なくない。

“这4＋么/样/么样”＋（NumCL）＋N/NP

(41)有一篇外国小说中写过**这么**一件事：一个负责计划生育的官员，到贫民地区调查情况，兼而作一次“少生儿女可以使生活富裕起来”的宣传。那儿的人告诉她：“到了晚上，有钱人去看戏了，去跳舞了，去听音乐会了，我们上哪儿？上床。于是一个接一个的孩子就出世了。《插》

(41’）ある外国の小説の中に**こんな**話がある。家族計画を担当する役人が貧民地区へ実態調査に行き、ついでに「少数出産は暮らしを豊かにする」という宣伝を行ったところ、そこの人間がこう言ったという。「夜になると金がある人は芝居やダンスや音楽会へ出かけるけど、あたしらはどこへ行けばいいのさ。ベッドに入るしかない。だから次から次へと子どもが生まれるのよ」〔大地〕

(42)张局长，我来找您，实在是为了**这么**件事——我从外文期刊的广告上看到，今年美国新出版了一本比托夫勒《第三次浪潮》更轰动的书，我问过了几个图书馆，他们都还没有进这本书。《钟》

(42’)局長、今日ここへ来たのは、じつは**こういう**ことなんです。外国の雑誌の広告でみたんですが、今年、アメリカで、トフラーの『第三の波』以上に大きな反響をまき起こした本が出だそうです。いくつかの図書館に問い合わせましたが、どこもまだ入手していません。〔鐘〕

（41）と（42）の“这么”はそれぞれ数量詞と共に名詞“事”を修飾し、後文では指示詞が指している事を説明している。このような例は典型的な「前指」用法であり、「前指」に関する先行研究で挙げられているのはほぼこのようなタイプの例である。一方、（41）の“这么一件事” は訳文（41’）では「こんな話がある」に訳され、後文でどんな話かについて詳しく説明している。（41’）の「こんな」は「後方照応指示」の代表的な例と言える。よって、（41）の“这么”と（41’）の「こんな」は指示詞の指示機能や指示詞の構造などが全て対応している狭義的な対応だとわかる。

（42）の“这么件事”は本来（41）と同じく、“这么一件事”のように「“这么”＋ NumCL＋N」の形だが、現在数詞“一”を省略して、「“这么”＋量詞＋N」に変形している。（42’）の訳文では「こういうこと」に訳され、後に「外国の雑誌の広告でみたんですが、…いくつかの図書館に問い合わせましたが、どこもまだ入手していません。」という文でどんなことかを説明している。これも代表的な「後方照応指示」である。よって、（41’）と同様に（42’）の「こう」は（42）の“这么”と指示詞の語形や指示機能が対応し、狭義的に対応していると言える。

また、「回指」と同じく中国語文では「前指」として用いられている「“这么”＋ NumCL＋N」の場合、日本語の訳文では数量詞が省略され、「Dem＋N」の形になる。

“这4＋么/样/么样”＋V

(43)书上**这么**介绍我们那儿：地表破碎，梁峁起伏，沟壑纵横。黄河沿岸地带，山梁狭窄，坡陡沟深，基岩裸露，形成峡谷峭壁……《插》

(43’）書物では私たちのいた地をこう紹介している。地表は細かく切断され、尾根や丘陵が起伏し、渓谷が縦横に走っている。黄河沿岸地帯は山稜が狭く、傾斜が急で谷が深い。岩盤が露出し、峡谷や断崖を形成する……〔大地〕

(43) の“这么”は動詞を修飾し、「“这么”＋V」の形になる。後文の「地表破碎…形成峡谷峭壁（地表は細かく切断され…峡谷や断崖を形成する)」は地形がどのようになっているかを紹介している説明文である。訳文（43’）では原文と同じく「Dem＋V」の形で、「こう紹介している」に訳されている。また、後の文では具体的に説明を加えており、後方照応指示だと判断できる。そのため、(43) の“这么”は（43’）の「こう」と対応していると言える。(41)～(43) の“这么”は全てほかの品詞と共起する例であるが、次の例はやや変わった形で裸の“这样”が「前指」用法として用いられている。

裸の“这样”

(44) 倪萍就是这样，她同情每一个人，关心每一个人，为每一个人操心，为每一个人揪心。她曾经不止一次地问她亲爱的姥姥，姥姥，您还能活多久？您什么时候死？有时候姥姥犯困打盹，刚睡着就被倪萍推醒了。姥姥呀，您突然不说话了，我跟您说话您也听不见了，您的嘴也没闭上，流着几滴口水，可把我吓坏了，我以为您死了呢。《辘轳》

(44’）倪萍はこうして誰にでも同情し、心配し、誰のためにも胸を痛め気を柔み、婆ちやまは何時まで生きられるの？何時死んじゃうの？としきりに訊ねるので、せっかくウトウトしはじめた婆ちやまを揺り起こしてしまう。ネエ婆ちゃま、急に黙らして、ウチの話きいておへんの、口開いたまんまヨダレなんぞ出して、怖いよ。急に死んじもたか思うぞね。　〔轆轤〕

(44)の“这样”は裸で後文の “她同情每一个人，关心每一个人，为每一个人操心…（誰にでも同情し、心配し、誰のためにも胸を痛め気を柔み)”を指し示す。同時に後文の“她同情每一个人，关心每一个人，为每一个人操心…”も“这样”を説明している。“这样”は（44’）の「こうして」に訳されているが、「こうして」は「このように」と同じ役割で直接後文の「誰にでも同情し、心配し…」を修飾している。そうすると原文の構造と異なってしまう。仮に「こうして」を「こうする」に替え、後の文と距離を置けば、後方照応指示の用法となるが、現段階では未だ後方照応指示とは判断しにくい。よって、(44)の“这样”は（44’）の「こうして」と広義的に対応しているが、指示用法が対応していないことになる。

日中指示詞の対照研究の中で、一口に“这”の「前指」指示用法は「コ」系指示詞と対応していると言っても、場合によっては指示用法も対応しているが、時にはただ「コ」系指示詞に翻訳されているだけで、指示用法は一致していないことが明らかになった。

(45) 祥子说不清的那点事是这样：曹先生在个大学里教几点钟功课。学校里有个叫阮明的学生，一向跟曹先生不错，时常来找他谈谈。曹先生是个社会主义者，阮明的思想更激烈，所以二人很说得来。不过，年纪与地位使他们有点小冲突：曹先生以教师的立场看，自己应当尽心

的教书，而学生应当好好的交待功课，不能因为私人的感情而在成绩上马马虎虎…《骆驼》

（45’）祥子がはっきりわからないと言ったのは、じつは<u>こういう</u>ことだった。曹先生は大学で何時間か授業をもっている。阮明という学生がいたが、この学生が先生と話が合って、いつも話しにきていた。先生は社会主義者だったし、阮明はもっと過激な思想の持主だったもので、ふたりはとにかく馬が合ったが、年齢と地位の関係でいささかぶつかるところがなきにしもあらずだった。曹先生は教師の立場から、自分は誠心誠意授業をすべきであり、学生は学生で真剣に授業をうけるべきであって、個人的感情で成績に手かげんをくわえることはできないと考えていた。〔駱駝〕

（45）の“这样”は後文に書かれている内容“曹先生在个大学里教几点钟功课…（曹先生は大学で何時間か授業をもっている…）”を示し、吕叔湘（1985）に示されている典型的な「前指」用法である。（45）の前文は短い文ではあるが、二つの指示詞が用いられ、まず“那点事”は“这样”と照応し、それから後文で“这样”を説明する。訳文では“这样”は「こういう」に訳されて、後文の「曹先生は大学で何時間か授業をもっている。…学生は学生で真剣に授業をうけるべきであって、個人的感情で成績に手かげんをくわえることはできないと考えていた。」は「こういうこと」を説明している。（45’）には具体的な先行詞が文脈に現われていないが、指示詞を含む名詞句は後文の内容と照応する関係があり、後方照応指示関係が成立しているように見える。よって、（45）の“这样”は（45’）の「こういう」と指示用法まで対応している狭義的な対応だとわかる。

5.2.2“这”と「ソ」系指示詞の対応表現

“这”は「ソ」系指示詞と対応する例は「コ」系指示詞と対応する例より極めて少ない。人物や時間などを指し示す例がほぼなく、修飾として使用されている“这”は「ソ」系指示詞に訳されている例のみである。

“这 4＋么/样/么样”＋ (NumCL) ＋N/NP

（46）因为，情报站和张奇林的办公室就在同一座楼中，他完全可以去找张奇林面谈，并且，无论是办公室还是家中，张奇林都有电话，他也无妨打个电话，可是他不，他写信。庞其杉就是<u>这么</u>个人，他宁愿写信，而尽量避免面谈，甚至避免打电话——他那大学时期的爱情悲剧，至少从表面现象上看，便是由他这种令人难以理喻的古怪行为造成的。《钟》

（46’）なぜなら、情報室と局長室は同じ建物にある。直接話そうと思えば、いつでもできた。また局長室か家に電話を入れてきてもよかったのだ。其杉とは、<u>そう</u>いう男だった。話や電話はおっくうで、むしろ手紙のほうが気が楽だった。悲劇に終わった彼の大学時代の恋愛も、表面から見る限り、こうした理解し難い性格から引き起こされたものだった。〔鐘〕

（46）の“这么”は数量詞“个”とともに人を修飾している。「其杉」はどんな人なのかを後文の“他宁愿写信，而尽量避免面谈，甚至避免打电话…（話や電話はおっくうで、むしろ手紙のほうが気が楽だった…）”によって説明している。“庞其杉就是这么个人（庞其杉はそういう人）”の前に“因为，情报站和张奇林的办公室就在同一座楼中，…他写信。（情報室と局長室は同じ建

物にある。直接話そうと思えば、いつでもできる。…彼は手紙を書く。）”という文がある。この文も「其杉」はどのような人かについて書いている。（46）の“这么”は前文、後文のどちらと照応しているか判断がつかない可能性があるが、前文と後文の内容を比べれば、前文より後文のほうがより明確で、具体的に人物像を説明していることがわかる。よって、中国語の原文では“这么”は後文の内容と照応している「前指」だとわかる。一方、日本語の訳文では「そういう男だった」に訳され、前文の内容と照応している。つまり、訳文の指示詞「そう」は後方照応指示ではなく、前方照応指示である。したがって、（46）の“这么”は訳文では指示詞に訳されているが、それぞれの指示用法が異なっている。

（47）世界上有**这样**的父亲吗，他不能给女儿带来钢琴，他不能给女儿带来鲜花，他连一个象样的洋娃娃也没给女儿买过。他给他小小年纪的女儿，愚傻的女儿，说话带乡下味儿的女儿带来的是不应该掉的眼泪！即使是该死，让做父母的死吧！即使是千刀万剐，让我千刀万剐吧，不要伤害我的儿女，不要！一切罪孽都是我的，不是孩子们的！《人形》

（47’）**そんな**父親がこの世のドコにいる。娘にピアノはもとより、きれいな花も、可愛い西洋人形も買い与えたことはなかった。それなのにこの幼い娘に、愚かな、田舎なまりの娘に、あるまじき涙を流させるとは！死ぬなら代わって親たちが死ねばいい！八つ裂なら私が身代わりになろう！この娘だけは決して決して傷つけてはならぬ！罪業はすべて私のもの、決して子供らのものではない！〔応報〕

（48）世界上有**这样**的父亲吗？他竟能对十五岁、十六岁、十七岁、十八岁的孩子大发神经、叫苦连天，他竟能把自己的灵魂里的沉重负担转嫁给自己的孩子……而孩子在自立以后反而从来没有为自己的事情打扰父亲。如果说生活冷淡了倪吾诚，倪吾诚不是更加十倍百倍地糟蹋了、耽误了、背叛了生活吗？他究意为家为国为社会为他人做过一点什么呢？这样想下去倪藻只能发抖。《人形》

（48’）世の中に**こんな**父親がいるだろうか。ほんの十五、六、十七、八の子供にカンシャク玉を破裂させ愚痴りちらす。己が魂の負った重荷を、息子に肩代わりさせる気か……息子は自立して以来、自分の事でけして父親を患わせはしなかったのに。父には非情な世間であったとしても、父自身はその十倍いや百倍も世間を踏みにじり裏切ったではないか。家のため国のため社会のために、父は一体何をしたというのだ。こう考えてくると倪藻は身震いが止まらなかった。〔応報〕

（47）と（48）の前文は“世界上有这样的父亲吗？（世の中にこんな父親がいるの？）”で共通する。しかし、訳文では（47）の“这样”は「そんな」に訳されているのに対して、（48）の“这样”は「こんな」に訳されている。2 つの例を比較してみると、それぞれの後文は“世界上有这样的父亲吗？”について、説明していることがわかる。そのうえ、2 例の後文の構造も類似し、“他（不）能…，他（不）能…”のような並列式複文である。また、内容からみると、2 つの例とも登場人物“倪吾诚”を批判し、後文はその批判をするための具体的な例を取り上げながら、“倪吾诚”が父親として相応しくないことを説明している。中国語文（47）と（48）の“这样”は「前指」用法だと言える。一方、日本語の訳文では（47’）と（48’）の訳語が異なって

いるが、両方とも後方照応指示だと判断できる。（47’）と（48’）のような 2 例の前文は同じ文であり、後文の構造も類似しているにもかかわらず、訳された指示詞が異なる。

裸の“这样”

（49）今天便又是**这样**。生而不着。用手扇。拿来扇子扇。用嘴吹。从火炉的腹部的肚脐眼（捅进通条掇灰用的）里临时加插进一根劈柴，都没有管用。带着猫屎味的黄烟熏红了眼睛。她流泪了。《人形》

（49’）今日がまた**そう**であった。なかなか燃えつかない。手であおぎ、団扇であおり、口で吹いた。コンロの横の口（火掻き棒を突っ込んで灰を落とすのに用いる）からこの期におよんで焚木を一本差し込んだが、もう後の祭。猫の糞のような悪臭を放つ黄色い煙にいぶされて目が赤くなり、涙が流れでる。〔応報〕

（49）の“这样”は裸で使用されている。後文の“生而不着。用手扇。拿来扇子扇。用嘴吹。…她流泪了。（なかなか燃えつかない。手で扇ぎ、団扇で扇ぎ、口で吹いた…涙が流れ出る。）”は“这样”に関して詳しく説明しているため、「前指」だと思われる。しかし、（49）の“这样”が用いられている前文にある“今天便又是这样。（今日もそうだ）”の“又”に注目しておきたい。“又”は「また」という意味なので、前回も同様のことがあったことを暗示している。よって、（49）の“这样”は以前の事を指している「回指」用法と、後文の内容を指している「前指」用法の両用法を担っていると理解できる。一方、日本語の訳文では指示詞「そう」に翻訳されている。訳文「今日がまたそうであった」の「また」があるため、以前の事を指す前方照応指示と後文の内容を指す後方照応指示の両方指していることは明らかである。原文（49）“这样”は訳文（49’）の「そう」と指示用法まで対応する狭義的対応である。

木村（1983b：71-72）は「後方照応に関する従来の議論の関心は主として、この種の用法が一般にコ系のみに限られ、ソ・ア両系は用いられない」と述べ、また、日本語記述文法研究会（2009：30）には「指示表現[7]よりも指示対象があとにある後方照応も、まれに用いられることがあり、…思考や話の内容を指すことが多い。後方照応ではコ系が選ばれることが多く、ソ系はまれである」とある。本来後方照応として使用されている指示用法は前方照応指示より少なく、そのうえ「コ」系指示詞が中心なので、「前指」の“这样”は日本語の訳文では「ソ」系指示詞に訳されるのはまれだと推測できる。

（50）“妈妈，懂事太多了不好吧？同学们说我思想不稳定，情绪忽高忽低。是**这样**的，妈妈。我一看见报上登的好人好事就激动，一碰见生活中的坏人坏事就泄气。我保证以后克服。你监督我，噢？妈妈！”《人啊》

（50’）「お母さん、あんまり分別があるのは良くないんでしょ?お友だちが私のこと、思想と情緒が不安定だって言うわ。ほんとうに**そうな**のよ、お母さん。新聞で善人善行の記事を読むと感激して発奮するけど、生活の中で悪人悪事にぶつかるとたちまちしょげてしまう。でも、これからはきっと克服するわ。監督してね、お母さん!」〔人間〕

(50) の“这样”の用法は典型的な「前指」用法と異なって、“是这样的”は前文に書かれている“妈妈，懂事太多了不好吧？同学们说我思想不稳定，情绪忽高忽低。（お母さん、なんでもわかることはよくないでしょう?クラスメートが私のこと、思想と情緒が不安定だって言う）”の文と繋がって、後文の“我一看见报上登的好人好事就激动，一碰见生活中的坏人坏事就泄气。（新聞で善人善行の記事を読むと感激して発奮するけど、生活の中で悪人悪事にぶつかるとたちまちしょげてしまう）”を指し示している。それと同時に後文の“我一看见报上登…”は“是这样的”と“思想不稳定，情绪忽高忽低”の両方を説明している。しかし原文の全体的な構造からみると、“这样”はやはり文脈指示の「前指」用法である。他方、日本語の訳文では「ほんとうにそうなのよ」に訳されて、前文に書かれているクラスメートの自分に対する評価と照応しているため、明らかに後方照応指示ではないことがわかる。よって、(50) の“这样”は (50’) では「そう」に訳されているが、指示用法が対応していないと言える。以上の (46) (49) (50) の分析から中国語文では「前指」の“这样”は日本語の訳文では「ソ」系指示詞に訳されても、指示用法が日中で対応していないことが多く、ほぼ前方照応指示で訳されていると明らかになった。それは後方照応指示の「コ」系指示詞が多く、「ソ・ア」系指示詞が少ない説と合致している。また、この 3 例が共通しているところに着目すれば、原文の指示対象が指示詞の後にある「前指」から訳語の指示対象が指示詞の前にある前方照応指示になる原因がわかる。その原因を以下にまとめる。①指示詞を用いた文は前文と後文の間にある。そして、指示詞を用いた文は前文と意味的に緊密に繋がり、後文は前文と指示詞を用いた文の両方を説明する。②指示詞を用いた文に「また」など、前文にすでに述べたことを記している語がある。これらの条件がそろうと、日本語の訳文で前文を指し示す前方照応指示に訳されても、不自然にならない。(46) (49) (50) は以上の 2 つの条件のどちらかに当て嵌まるため、前方照応指示に訳されている。

5.2.3“这”と「ア」系指示詞の対応表現

「前指」として使用されている指示詞“这”が「ア」系指示詞に訳されている例は「ソ」系指示詞に訳されている例と同様に少ない。その中では人物や時間などを指し示す例はなく、修飾の働きをする“这么/这样/这么样”のみである。

“这 4＋么/样/么样”＋ (NumCL) ＋N/NP

(51) “<u>这样</u>的朋友，给脸不要脸！我好心想替她介绍凌汝才，可是——叫马克思的鬼魂把她迷住啦！她，这样的人物都瞧不上，拆我的台——偷着跑啦。好哇，我要碰见她，一定饶不了她!” 《歌》

(51’) 「<u>あんな</u>友だちってないわ。人が面子をたててやったのに、その好意を無にしちゃうなんて！かの女のためを思って、凌さんを紹介してやったのよーマルクスの亡霊に、とりつかれてるんだわ！あんなりっぱな男性が気にいらず、あたしの顔をつぶしてーこっそり逃げだしちまうなんて。いいわ、こんど会ったら、ぜったいにゆるさないから」〔歌〕

(51)の“这样”は直後の名詞を修飾している「前指」用法である。“这样的朋友，给脸不要脸！（こんな友達は恥しらず）”は前文であり、後文の“我好心想替她介绍凌汝才，可是——叫马克思的鬼魂把她迷住啦！她，这样的人物都瞧不上，拆我的台——偷着跑啦。（人が面子をたててや

ったのに、その好意を無にしちゃうなんて！彼女のためを思って、凌さんを紹介してやったのよーマルクスの亡霊に、とりつかれてるんだわ！あんなりっぱな男性が気にいらず、あたしの顔をつぶしてーこっそり逃げだしちまうなんて。）”は指示詞を用いた前文を説明している。訳文では「あんな友達ってないわ」に訳され、(51)の“这样”は(51’)の「あんな」と同じく性質、方式、程度を代称、限定する指示詞なので、指示詞の種類で対応している。一方、指示用法から見れば、ずれが生じることがわかる。(51’)の「あんな」の指示用法は後方照応指示ではなく、話し手の長期記憶に蓄えたものを思い出した観念指示用法である。高革萍（2002ｃ）では「日中後方指示詞の機能」[8]は①提案②直接引用③内容説明④前置きの 4 つに分類し、さらに、④前置きをⅰ聞き手への対人的配慮、ⅱ話題への状況的配慮に分けている。(51）の“这样”の指示用法は③内容説明に当て嵌まる。再び(51’)を見ると、原文（51）の指示詞の用法と同じであり後文は前文を説明している。しかし、後方照応指示の「コ」に訳されず、記憶にあるものを思い浮かべる「ア」系指示詞に訳されている。よって、日本語文では指示詞は後文を説明しているかどうかより、話し手と聞き手の領域が重視され、話し手と聞き手両方とも共通の情報なら、それを優先して、「ア」を用いている現象が見られる。

“这 4＋么/样/么样”＋ Adj

(52) ①不看我的面也该看看孩子。你惭愧不惭愧？你难过不难过？②上哪儿找**这么**好的孩子去？③藻儿最近考国语、算术、常识都是一百分，修身是九十八。你知道吗？他们的考试成绩，他们的作业，你问过他们一道四则题吗？《人形》

(52’）①あたしはともかく、子供は見捨てるわけにいきますまい。済まない、悪かったと反省はないのかしら。②**あんな**良い子がどこにいます。③娘は近頃国語、算数、常識ともに百点満点、修身は九十八点。御存知でした？子供たちの試験の成績や宿題、数学の応用問題のことなど、貴方お訊ねになったことがあって？〔応報〕

（52）の“这么”は形容詞“好”を修飾し、“这么好”は“孩子”を修飾している。子供たちがどんなに良い子かは後文に書かれている“藻儿最近考国语、算术、常识都是一百分，修身是九十八。（藻ちゃんは近頃国語、算数、常識ともに百点満点、修身は九十八点。）”という文で詳細に説明している。（52）は（50）と同じで、“这么”が用いられている文“上哪儿找这么好的孩子去？”は前文と後文の間にある。そして“这么”の前文は子供について述べているため、“这么好的孩子（こんなよい子供）”は前文に書かれている子供を指しているか、後文に書かれている“藻儿”を指しているかの判断が付かなくなってしまう。つまり、「前指」か「回指」のどちらかであるかが判断しにくい。（52）の“哪儿找这么好的孩子去？” の“好”に注目すると、前文では子供について述べているが、良い子供かどうかを定義していない。つまり、前文に書かれている“孩子”と“哪儿找这么好的孩子去？”の“孩子”および後文の“藻儿”は同一人物ではあるが、それぞれの関係は異なっている。その関係を以下の公式で示せる。

①　“孩子”≅　②の“孩子”＝③の“藻儿”

上記の公式で示しているように、①の“孩子”はよいかどうかに触れていないため、②の“孩

子”は①より③の“藻儿”と共通点が多く、後文と照応していると判断できる。もう1つ考えられるのは、②の“这么好的孩子”は①の“孩子”と③の“藻儿”もの両方を指し示していると判断できる。訳文（52’）①の子供と②の良い子、③の娘は同一人物であり、原文（52）と同じく、③は②に対しての説明である。訳文での指示詞“这么”は「あんな」に訳されている。（52）は会話文なので、話し手と聞き手双方が知っている人を指す場合は「コ」、「ソ」ではなく、「ア」系指示詞を用いる。ここでも日本語は話し手と聞き手の共通情報かどうかを重んじ、指示詞を選ぶ際にそれが優先されることが明らかになった。

（53）①我不愿再看到那些干活儿的人，更不愿看到盛气凌人的马燕宁，自从吃忆苦饭发生争吵之后，燕宁就再也没有来过。我无论如何也弄不懂，为什么在短短的时间里，②燕宁发生了**这么**大的变化，③她完全变成了一个陌生人，她那热情的微笑不见了，脸上的镜片后面，剩下的只是冷酷的表情。这使我不禁想起了在一本书里读过的一个民间故事。《梦》

（53’）①もう中庭の人々は見たくない。居丈高な燕寧を見るのはなおさらいやだ。野菜団子の一件以来、燕寧は来ていない。こんなわずかの時間で、②どうして燕寧が**あれほど**変わってしまったのか、どう考えても納得がいかなかった。③彼女は見ず知らずの人に変わってしまい、やさしいほほえみも消え、眼鏡のうしろには冷酷な表情しか残っていない。私は知らず知らず、ある昔話を思いだした……〔夢〕

（53）の例も（52）と同じく、“这么大的变化”の前文①は「馬燕寧」について述べており、後文③“她完全变成了一个陌生人，她那热情的微笑不见了，脸上的镜片后面，剩下的只是冷酷的表情。(彼女は見ず知らずの人に変わってしまい、やさしいほほえみも消え、眼鏡のうしろには冷酷な表情しか残っていない。)”は②の“这么大的变化”について説明している。よって、(53）の“这么”の用法も「前指」と「回指」の2つあると考えている。(53）が地の文で、(52）が会話文で2例の文体は違う。(53）の訳文でも「ア」系指示詞が使われ、「あれほど」に翻訳されている。「こんな、そんな、これほど、それほど」を避けて、「ア」系指示詞を選らんだ理由はやはり話し手と関わるのだろう。話し手が述べていることが長期記憶に蓄えたものならば、「ア」系指示詞を用いることになる。

5.3 「回指」の “那”と日本語の指示詞の対応表現

前節では中国語の近称指示詞“这”の「回指」「前指」用法と日本語の指示詞との対応関係を分析したが、本節では中国語の遠称指示詞“那”の例を分析する。非現場指示として使用されている“这”の指示用法は「前指」と「回指」の2種類に分けられるが、“那”は「回指」用法しかないため[9]、「回指」用法の“那”が日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞と対応している例に絞って考察する。

まず “那”が指し示す対象によって大きく①「人・事物」②「場所」③「時間」④「修飾」の4つの枠組みに分け、それぞれ“那1”、“那2”、“那3”、“那4”で示す。それらが日本語の指示詞と対応する場合、どのような環境で対応しているのかを観察し、日中指示詞の共通点や類似点を検討する。

5.3.1“那” と「コ」系指示詞の対応表現

吕叔湘(1985：203) は「回指」の “这”のほうが“那”より多く用いられると述べている。徐丹 (1988) によると“这”と“那”は使用頻度に不対称現象があり、“这”は“那”より多い。そこから、中国語文では「回指」用法の“那”は“这”より少ないため、日中対訳作品ではもっと少ないだろうと推測したが、調査した日中対訳作品の資料では“那”が「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳された例は“这”の場合より多いという結果が出た。これらの用例を指示詞が指す対象によって分類し、指示詞の前後にある品詞によって選別して分析する。

“那 1”＋ (NumCL) ＋N1

(54) 可是表面上她却依然对一切都淡漠，依旧沉默寡言。同学中，她只和一个名叫陈蔚如的女孩子要好，因为那女孩子对她温存、和善，她同情林道静的不幸遭遇，给她热情和鼓舞，因此她们成了好朋友。《歌》

(54’) だが、表面から見ると、あいも変らず、すべてに対して冷淡で、口数も多くなかった。クラスメートの中で、ただひとりの仲良しは、陳蔚如だった。この娘は林道静をあたたかく迎えいれてくれ、性格もやさしく、林道静の不幸な運命に同情して、いつもはげましてくれたからだ。こうして、ふたりはすっかり親友になった。〔歌〕

(55) 周永振说：“热心我们都有。到这儿来了，决不会白吃饭，瞎添乱。” 高大泉（中略）思考着就要开始的新工作和新生活，心里非常激动。伙伴们提出的一连串带着傻气的问话，惹得他不住暗笑。同时，那工人的爽快回答，又使他感到特别亲切，句句都有启发、受教育。《金》

(55’) 周永振が言った。「熱意だけはみな持ってんです。ここへ来た以上は、絶対むだ飯くらいのやっかいもんにはなんねえつもりです」高大泉は(中略)これから始まろうとしている新しい仕事、新しい生活を思い、気持をたかぶらせていた。仲間たちの馬鹿げた質問には、ひそかに笑ったが、この労働者の明快な答えには打たれ、その一言一言に啓発され教えられた。〔道〕

(54) の“那”＋N1(“女孩子”)は前文の“一个名叫陈蔚如的女孩子（ひとりの女の子、名前は陳蔚如だ）”を指し示す。(54) の指示詞“那”は「回指」の指示用法であるが、(54’) の訳文では「コ」系指示詞に訳され、前方照応指示用法である。中国語文では「回指」の場合“那”と“这”の両方とも使用できるが、(54) は地の文で、第三者の立場から語られているため、心理的な距離は遠いわけである。よって、文法的には“这”と“那”はどちらも使えるが、より心理的に遠い距離を示す“那”を使用している。日本語の場合は、指示詞と先行詞の関係が代行する場合、三枝 (1998) によると「その」は「この」と入れ替えることはできず、「その」を使わなければならない。(54’) の指示詞「この＋N1 (娘) 」と先行詞の「陳蔚如」は同一人物のうえに、一文に現れ、典型的な照応関係である。「この」を用いることによって、主人公の視点から語ることになり、いきいきとした表現で、文学的な色彩を強めている。

(55) も地の文で、“那工人”は前文に現れている「周永振」を指し、(54) と同様に「回指」用法である。(55) の“那”+ N1(“工人”)は、(55’) で「この＋N1 (労働者) 」と訳され、日中の指示詞が対応している。日本語の訳文では、指示詞「この＋労働者」は先行詞「周永振」

を指し、「この労働者」とは「周永振」のことを指しているので、（54’）と同様、典型的な照応関係と言える。原文では第三者の視点から述べているため、前文にある人物は“那＋…”で指すのに対して、訳文では主人公の視点から叙述しているため、「コ」系指示詞を用いている。

“那 2＋里/边/儿”

（56）那庙原是清朝的一座王府，后来改为佛寺，正名叫普庆寺。解放初，许多农村来的临时工，晚上就聚在那里住宿，大家你帮我，我帮你……（中略）荀师傅不禁又回忆起一九六０年，郭墩子在单位号召工人回乡的情况下，决定退职还乡以后，聚在他家喝酒的情景。《钟》

（56’）その廟は、昔、皇族の邸宅だったが、のちに寺院となり、正式には普慶寺とよばれていた。解放初期、農村からやってきた日やといは、夜はここに泊まり、互いに助けあった……（中略）荀興旺はまた、一九六〇年、郭の仕事先で労働者に村へ帰るようにと、よびかけていたころのこと思い出した。郭はそのよびかたにこたえ、退職して村へ帰ることを決め、彼の家に来て、酒をくみ交わした。〔鐘〕

中国語の指示詞“那”は場所を指し示す場合、主に“那里/那边/那儿”と「“那”＋N2」の形をとる。今回、それらが日本語の指示詞とどのように対応しているかを調べたが、予想に反し、“那里/那边/那儿”の例は先行研究の主張ほど多くは見られなかった。

（56）の“那里”は前文にある“普庆寺”を指している。ここで後ろの文に「思い出す」や「1960年」など過去を示す表現がたくさんあるため、“普庆寺”は昔の時代から存在している場所と判断できるので、過去を示す“那”を用いたのである。しかし訳文では「ここ」と訳されている。

(PP) ＋“那 2”＋N2

（57）在这条大街最南头，马路东边十字路口拐角处，有一家门面颇大，品种颇全的国营小吃店，还有一家门面极小、专卖“褡裢火烧”的个体小吃店。按说姚向东既然肚子饿了，搜索出他衣裤兜里的所有“钢蹦儿”来，还是能从①那两家买到足以果腹的食品的，但姚向东此刻却没注意到它们—他走在大街西边，西边十字路口拐角处是开张不久的“天津狗不理包子铺”，大约刚有一屉三鲜馅包子出笼，从②那包子铺里飘散出好一股诱人的暖烘烘的香气。《钟》

（57’）この通りの南口の東側に構えの大きい国営の軽食店がある。品目もかなりそろっている。「火焼」だけを専門に売る小さな個人経営の店もある。腹ぺこの姚向東は、ポケットにある小銭をすっかりはたいて①この二つの店で食べさえすれば、十分こと足りたはずである。ところが彼はそこに気がつかなかった。通りの西側を歩いていたのだ。十字路を折れた西側の曲がり角のところには、「狗不理」の呼び名で知られた天津肉饅頭屋がある。②この店はできてまもない。ちょうどふかしあがったところとみえて、プーンと美味しそうな匂いがただよってくる。〔鐘〕

（58）当年的鼓楼前大街，义溜胡同附近有一家规模不小的酒肆。“义溜”其实是“一绺儿”的谐音，因为那胡同狭窄得两个人迎面相遇，必得侧身谦让才能通过，所以人称“一绺儿”。《钟》

（58’）昔、鼓楼前大街の義溜胡同の近くにかなりの構えの飲み屋があった。「義溜」はひとすじという意味の「一児」と字音が似ているが、それはこの路地が、人とすれちがうとき

には体を横にずらせないと通れないほど狭いことに由来している。〔鐘〕

(57) (58) の指示詞はともに「“那”＋N2」の形であるが、(57) は距離、(58) は過去、現在の時制と関わっている。(57) の “那两家”は通りの南口の東側にある大きい国営の軽食店と「火烧(小麦粉で作られた餅)」だけを専門に売る小さな個人経営の店を指していて、“那包子铺”は前にある「狗不理」という天津肉饅頭屋を指している。いずれも文脈指示の「回指」である。また、前文で語っている 2 つの飲食店は主人公“姚向东”がいる所と離れているため、“那”を用いている。(58) の“那胡同”は (57) と同じで、前文にある指示対象“义溜胡同”(義溜胡同)を指している。また、文頭に“当年”（昔)があるので、過去の出来事を示している。よって、中国語文では“那”を使用しなければならない。日本語の訳文では過去、現在や遠近などを考慮されず、「コ」系指示詞を選んでいる。その原因は文脈指示の「コ」は、直前の話題の中の対象を指すことができる上、臨場感が沸く効果があるので、「コ」系指示詞を使用していると考えられる。

“那”と“去(qù)”

(59)詹丽颖朝胡同外走去，她往位于鼓楼前大街东侧的“春茗茶庄”而去，那茶庄在方砖胡同和帽儿胡同之间的街面上，紧挨着大华玻璃商店。《钟》

(59’) 彼女は胡同の入口のほうへ足を向けた。鼓楼前大街の東側にある「春茗茶荘」へ行くのだ。この茶屋は方磚胡同と帽児胡同との間にあり、大華ガラス商店と隣合わせである。〔鐘〕

中国語の“来(lái)/去(qù)”は方向を示す動詞である。指示詞“这/那”あるいは“这里/那里”は“来”と共に使用する場合、“这”はほぼ“来”、“那”はほぼ“去”と共起する。(59)“那”は前文にある“春茗茶庄”を指し示している「回指」であり、“春茗茶庄”の後ろに“去”もあるため“那”を用いなければならない。訳文では、本来文脈指示が特に前文に現れている内容を指し示す場合は「ソ」系指示詞を用いることが多いが、庵 (2002) は、「『この』は固有名詞と結びつきやすく、先行詞を言い換えた形での照応がかなり見られる。」と言っている。また、「『その』は先行詞をそのままの形で受ける。『この』はトピックとの関連性をマークし、『その』はテキスト的意味の付与をマークする」とも述べている。よって、(59’) のように先行詞「春茗茶荘」を「茶屋」に言い換える場合、「コノ」を選んだと考えられる。

“那 3＋会儿/时候/时”

(60)但那时奶奶是单家的明媒正娶的媳妇，爷爷与她总归是桑间濮上之合，带着相当程度的随意性偶然性不稳定性，况且我父亲也没落土，所以，写到那时候的事，我还是称呼他余占鳌更为准确。《红》

(60’)だが、そのとき祖母は単家の正式の嫁であり、祖父と彼女との結びつきはかなり気ままで、場あたり的で安定を欠く淫らな野合でしかなかった。しかもわたしの父はまだこの世に生まれていなかった。だから、この時期のことを書く場合に、わたしはかれを余占鰲と呼ぶのがやはり正しいだろう。 〔高粱〕

曹秀玲(2000)が、中国語の指示詞“这”と“那”の平均使用率[10]からみると“这”は“那”の2倍になる。そのうち時間を示す“那时/那会儿”は“这时/这会儿”より3倍も使用率が高いという結果が出されている。筆者が調査した日中対訳作品では時間を指す指示詞“那”は「コ」系指示詞と対応する例が少なく、「ソ」系指示詞に対応する例が「コ」系より多いが、最も多いのは「ア」系指示詞との対応例である。

(60)の“那时候”は前文にある出来事が行われている時代を指している。また、話し手は祖父の若い頃のことを語っているので明らかに過去であり、長期記憶に蓄えられているものを引き出す場合、“那”を使用するのが一般的である。ここで(60)の語り手は蓄えられている記憶を引き出し、現在の視点から昔のことを語っているので“那时候”は“这时候”と置き換えることができない。一方、日本語の場合は過去のことは必ず中称指示「ソ」系・遠称指示「ア」系で指し示すとは限らない。訳文(60’)のように“那时候”は「この時期」と訳されている。ここで(60’)の「この時期」は「その時期」を代わりに用いても差し支えない。しかし、「その時」を用いると、より客観的で冷静な作品であるような印象を与える。

“那3”＋N3

(61) “是我老糊涂了，”姜赵氏拍了一下大腿，想起了一些什么。“那天我去‘短鼻子’那里买肉，只看见‘热乎’也在那里，她正和‘短鼻子’嘁嘁喳喳地说话，见我不就言语了。‘短鼻子’还看了我一眼。《人形》

(61’) 「母さんうかつやった」老母はハタと膝をたたいた。何か思い当たったらしい。「この間『チョビ鼻』のどこへ肉を買いにいったら『お節介』がおって、二人で何やら話してじゃが、わたしを見たらピタリと話やめて、『チョビ鼻』がチラチラこっちを見よったが」。〔応報〕

(62) 曹县长说：“那日我可是被那戴氏女子蒙骗住了。”《红》

(62’) 「この前は、まったくあの戴鳳蓮にしてやられた」〔高粱〕

指示詞“那”は時間を表す名詞“年/月/日/天”と結合し、“那年/那（个）月/那日/那天”という形で用いられ過去や未来を表す。(62)の“那天”は前文にある “姜赵氏拍了一下大腿，想起了一些什么（老母はハタと膝をたたいた。何か思い当たったらしい）”と関連がある。記憶に蓄えられているものを引き出しているので、時間的には過去であり、“那天”を用いているのである。訳文では「この間」と訳されている。ここに中国語指示詞の用法の違いが見られる。日本語では一般的に近称の「コ」系指示詞は過去を指し示すことができるが、中国語文では(61)のように話し手が過去のことを述べているのが明確な場合、“这”は用いられない。(62)の“那日”も過去を示し、“曹县长”の記憶にある情報を引き出している。(62’)の訳文では「この前」に訳され、「その前」に置き換えることができない。金水(1989) は「この・ここ」を用いた時間・時期・期間を表す慣用表現「この間」「この前」は比較的近い過去の時点を指すと述べているが、近称指示「コ」系が過去を示すことができる要因について述べていない。金水の研究をさらに進めた田口 (2011) は、その要因を考察している。田口は(61’)(62’)の「この間」・「この前」のような日本語の時間的指示詞用法を認知文法の観点から考察している。その結果として、「コ」系は

現在を示すと共に、既知現実（known reality）も示すので、過去の出来事にも用いられると述べている。

中国語では程度や性質、状態を示す指示詞は主に、“这么/这样/这么样”“那么/那样/那么样”がある。“这么/那么”について吕叔湘(1985：270)は以下のように定義している。

> “这”“那”是指示代词，“这么”，“那么”也是指示代词，它们的作用都是指示，分别在于：“这”“那”指示事物，扩展到指示性状和动作，也就是把它当做事物看；“这么”“那么”，指示事物的性状和动作的样式，扩展到具有某种性状的事物。
>
> (“这”“那”は指示代詞、“这么”，“那么”も指示代詞であるが、これらの役割はすべて指示である。“这”“那”は事物の指示から性質や動作の指示へ発展した。すなわち性質と動作を物事に見立てたのである。“这么”“那么”は事物の性状や動作の様態を指示することから一種の性状をもつ事物を指すように発展した)。

以下は“那么/那样/那么样”が動詞と形容詞を修飾している例で日本語の「コ」系指示詞に翻訳された場合、それぞれどのように対応しているかを観察する。

“那 4＋么/样/么样”＋ V

(63) 可是，谭静觉得自己再也没有勇气去安慰方丹了，她只能在心里默默请求方丹原谅：“方丹，你怪我吧，恨我吧，骂我吧……方丹，我们是那样地热爱生活，热爱未来，可是，生活给我们的打击太多了，（後略）”《梦》

(63’) しかし自分には、もう方丹を慰める元気はない。譚静は心の中で方丹に許しを求めた。方丹、あたしを責めてよ、うらんでよ、ののしってよ……方丹、あたしたち、こんなに一生懸命生きてるのに、真剣に将来のことを考えてるのに、どうしてこんなひどい目にばかり会うんだろう！？（後略）〔夢〕

(64) 可是这腰下的丰臀一摆，和光又听得婉小姐说：“我想，有这么一个孩子在家里，多少也热闹些，也多一件事来消磨时光。不过这是我现在的想法，从前我可不那么想。”《霜》

(64’) その時、その腰の下の豊かなふくらみがゆらりとして、彼女の声がした。「こんな子供がいたら、ともかく家のなかが賑やかになるし、それに、暇つぶしにもなると思うのよ。もっともこれは、あたしのいまの心境で、まえには、こんなこと考えもしなかったんだけど」〔霜〕

“那么/那样/那么样”は動詞を修飾している。地の文（63）“那样地热爱生活（こんなに一生懸命生きている)”の“热爱”と会話文の（64）“那么想（そんなに考える)”の“想（考える)”は動詞である。（63）に先行詞はないが、指示詞“那样”は過去のように一所懸命生きることを指し示している。過去のことなので、中国語では過去、未来を示す“那样”を用いている。(63’)では近称指示「こんな」に訳し、書き手は事件が発生した時点に戻り、当時の事物を述べている。（64）の“从前我可不那么想”の“那么”は主に、前文の“不过这是我现在的想法” の“这”と

共に使用することによって、対比的な表現になっている。前文の“这是我现在的想法”がなければ、“这么”も使用可能と考えられる。訳文の前文で「これ」を用いているにもかかわらず、“那么”は「こんな」に訳され、読み手との心理的距離を縮める。

“那 4＋么/样/么样”＋Adj

(65) 道静懊丧得一言不发。她真想发起脾气跳下车去，但又压制住自己：毕竟这是过去的朋友，而且她也革过命，和许多革命的朋友有过联系；再说人家那么热情……想到这里，她的气渐渐消了。《歌》

(65’) 道静は後悔と腹だたしさに、ひとことも答えなかった。かんしゃくを起こして、車からとびおりようかと思ったが、やっと、じぶんをおさえた。なんといっても、かの女は過去の友だちなのだ、それに革命に参加したこともあり、たくさんの革命家の友人と、つながりをもったことがある。それに、こんなにも熱意をしめしてくれるのだ…そう思うと、心中の怒りも、だんだんおさまってきた。〔歌〕

(66) “石保禄那家伙认为是奇货可居，简直不肯让人家先看一看。”竞新有点着慌似的说，他没想到老头儿会提出那么多的问题来。《霜》

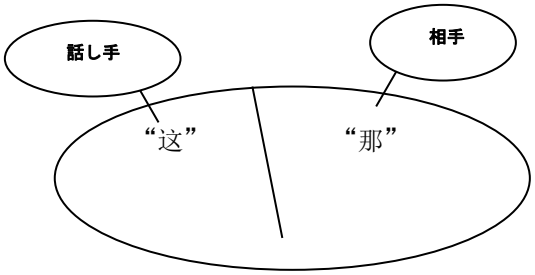
(66’) 「石保禄の奴、もったいぶって、下見もさせてくれないんですよ」競新はいささか慌てた。まさか老人がこんなに多くの問題を持ち出すなんて、考えてもいなかったのである。〔霜〕

(67) 谷新民接着说：“我现在跟你深入地讨论这个问题，（中略）此人的别的方面我没调查研究，没有发言权。因为，据我推理，他如果想要搞这类活动，不会采用这种明显的自我矛盾的办法，也不会那么急切地要求上级去调查；下去人一看，土地没有白着一块，岂不立刻垮台了？”《金》

(67’) 「この問題を突っこんで討議するのに、わたしは君のあの『ということで』を無しにするよう主張するね。（中略）まあ、これはわたしの憶測だが、かれがもしそういう動きをするつもりなら、こんなにはっきり自己矛盾するような方法をとるはずがないし、こんなに急いで上部に調査に来るよう要求するはずもない。人をやってみれば、畑はみんな蒔付けが終わっているのはすぐに判るからな。たちまちボロを出すだろう？」〔道〕

(65) の“那么热情（そんなに熱意を持つ）”、(66) の“那么多（そんなに多い）”、(67) の“那么急切（そんなに急いで）” はそれぞれ「“那么”＋形容詞」の形になっている。“那么/那样/那么样”は形容詞を修飾する場合、程度を示す。(65) の“那么热情”は相手が主人公(道静)に優しかったり、熱意を持ってあれこれしてあげたりしたことを指し示している。過去のことなので、中国語では“那”を優先的に使用する。また、中国語文では相手はこちら側に優しいとか、厳しいとかについて評価する場合に内と外の関係を明確に持っている文においては、文脈指示でも心理的な距離を考慮することが多い。【図 5－2】に示したように相手のことなら“那”、話し手側のことなら“这” で指し示す。しかし、相手や話し手などの関係を明示する必要がなければ、相手のことでも“这”で指し示すことができる。(65’) では「コ」系指示詞に訳され、相手と話し手の関係を区別する役割を果たすというより、語り手自身がそれに強い関心を寄せ、心的態

度を聞き手に押し付けていると考えられる。



【図 5-2】“这”と“那”の話す領域

(66) の“那么多的问题（こんなに多くの問題)”と (67) “那么急切地要求上级去调查（こんなに急いで上部に調査に来るよう要求する)” は (65) と同様に、過去のことを指しており、また文脈から (66) の話し手と相手、(67) の話し手と話題の登場人物は同じ立場になっておらず、それぞれ対立していることが分かる。よって (66) 、(67) は (65) より内と外の関係を明示する必要性が高いため、相手と心理的な距離が遠い“那”で指し示す。訳文で「こんな」に訳されたのは (65’) と同様、話し手がその場にいることを重視し、読者に強い関心を持たせようとしているからである。

“那 4＋么”＋NumCL

(68) 在韩德来的生活里，只有过去在辘轳把儿胡同 9 号院儿里神聊，看着赫家老两口恐惧的目光，听着冯寡妇“敢情”的应和，只有在那个时候才享受过这种舒坦劲儿。他自己当然是不会产生如此的对比、联想的。他只觉得那么多人围着他，追他，求他，哄着他，尊崇他，他的骨头架子美得要酥，他的日子还是过得蛮自得，蛮快活，又不是坐在院儿里独饮独唱的那个韩德来啦！《辘轳》

(68’) 韓徳来の人生においても、こういった愉悦は、かつて轆轤把胡同九号の「院子」で、ご高説をのたもうていたころ、あの赫家の老夫婦のおびえたまなざしと、馮未亡人の「敢情!」という唱和の中で味わっただけである。もちろん彼自身がそんな比較や連想をするはずがない。こんなにたくさんの人が彼をとり囲み、追いすがり、懇願し、ご機嫌をとり、崇拝するのをみて、骨までとろけそうな心地良さを感じていただけである。彼は再び心満ち足りた愉快な日々を送ることができる。もはや「院子」の中で、独り寂しく茶をすすり、京劇に憂さをまぎらすような韓徳来ではないのだ。〔轆轤〕

“这么”と “那么”は数量詞とセットになり、名詞を修飾するケースが多く見られる。史隽 (2011) によると“这么/那么”は数量概数を示す役割と数量の大きさを強調する役割の２種類に分けられる。前者の場合は副詞などの力を借りて数量の大きさを強調するタイプと、副詞を使用しないが副詞を加えることができるタイプの２種がある。それに対して後者の場合は“这么/那么”のみで数量の大きさを強調している。 (68) の「“那么”＋NumCL」は後者だと認識できる。「“那

么”+ NumCL」の“那么”が数量詞を修飾すると、数量が少ないか、あるいは多いことを示す。(68)の“那么” は、人数が多いことを示すが、実際に多いかは別として、話し手自身が多いと思っている際に“那么”で数量詞を修飾する。訳文では「こんな」と訳され、韓徳来がたくさんの人に囲まれて嬉しくてたまらない場面をいきいきと表現している。

5.3.2“那”と「ソ」系指示詞の対応表現

先行研究で「回指」用法の“那”と日本語の「ソ」系指示詞の対応関係について言及する研究はあったが、それはいずれも指示対象を分類せず、分析している。本節では指示詞を事物、場所などに分けたうえで、指示詞“那”と「ソ」系指示詞の対応状況を考察し、語形から用法まで詳しく対照する。

調べた日中対訳作品では人物を指し示す“那”が「ソ」系指示詞に訳された例は「コ」系指示詞より遥かに多い。指示詞が表れる文体としては、地の文のほうが会話文よりずっと多いとわかる。“那”の例を取り上げながら、分析する。

“那1”＋ (NumCL) ＋N1

(69) 我一听果然有申诉材料，忙接过登记本子看了看，并问他：“这份材料是谁处理的？”他告诉我是一位科长处理的。我出去找来了**那**位科长，他不经意地说：“三次申诉都给了吴书记了！”《天云山》

(69’) 果して訴状があったと聞いて、私は急いで登記簿を受取って見ながら、「これは誰が処理したの？」とたずねた。一人の課長が扱ったというので、私は**その**課長を呼び出すと、彼は「訴状は三回とも呉書記に渡しました」と口をすべらせた。

〔天雲山〕

(69)の“那”は前文に書かれている“科长（課長)”を指し、文脈指示の「回指」用法で、(69’)の「その」も文脈指示用法である。「その」は直接名詞「課長」を修飾し、「その＋N」の形になる。庵（2002）は「この」は固有名詞と結びつきやすく、先行詞を言い換えた形での照応がよく見られるが、「その」は先行詞をそのままの形で受けると論じている。(69’)の「その課長」は前文にある先行詞「課長」をそのまま受けるため庵(2002)の主張を改めて裏付けている。

(70) 荀师傅在以后的一段时间里，修鞋不象往日那么麻利。他心里搁着一桩心事。今天要来的是他当年战友的女儿。**那**战友也是冀中人，名叫郭墩子，他们前后脚参的军，一块儿在枪林弹雨中出生入死，一块儿奇迹般地活了下来，后来又一块儿进城当了工人。《钟》

(70’) そのあとの彼の仕事ぶりは、ふだんのようにはかどらなかった。悩みごとがあるのだ。今日の来客というのは、昔の戦友の娘だった。**その**戦友も河北省中部の生まれで、名前を郭墩子といった。二人は相前後して入隊し、一緒に弾丸の雨をくぐり、そして奇跡的に生きのびた。後に、二人はまた一緒に北京へ来て労働者になった。〔鐘〕

(70)の“那”は名詞“战友”とともに、前文で出てきた“战友”を指している。ここでは指

示詞“这”と取り替えることができない。文の総合的な意味からみると、主人公“荀师傅” は今日昔の戦友の娘が来ることをきっかけに過去の事を思い出している。現在の事と過去の事を対比して述べる場合、時間通りに述べるのが一般的である。過去の中に存在する人物なので、“那”で指し示す。訳文では文脈指示の照応指示用法の「その」に訳され、中国語文の指示詞用法と同じく「Dem＋N」になる。「その」は中称指示で、“那”は遠称指示で、両者とも近称指示ではない。したがって、(70) と (70’) の指示詞は対応していると考えられる。日本語文の「その戦友」の「その」を用いている理由は、(69’) と同様で、指示詞「その」は「その＋N (戦友) 」の形で先行詞「戦友」をそのまま受けて用いているからである。

“那 1”＋ (NumCL) ＋N1・ PP

(71) 白雪公主会欢迎她，白雪公主会告诉矮人们说，这位中国小姑娘很可怜，她的爸爸和妈妈老打架，而且，她长得也不好看，脸上老是起痦子，点掉一个小的就会生出一个大的，她也没有好的衣服穿，她上的学校里有一位日本教官，她害怕**那**位穿黄呢子服装的日本教官。《人形》

(71’) 彼らの仲間入りをしたいと思うこともあった。白雪姫はきっと歓迎してくれるだろう。そして小人たちに、これは中国の可愛想な少女で、パパとママの仲が悪く、自分も醜く生まれついている上に顔にホクロがよくでき、小さいのを取ると大きいのができる、服も奇麗なのがない、通っている小学校には日本人の教官が一人いて、**その**カーキ色の服の教官を倪萍は酷く怖がっている、などと紹介するだろう。〔応報〕

地の文 (71) の“那位穿黄呢子服装的日本教官”は指示詞「“那”＋NP」の形で、前文に現れている人物を指す「回指」指示用法である。訳文では“那”は「その」に訳され、その上、(71) の名詞文“穿黄呢子服装的日本教官”は「カーキ色の服の教官」に訳されており、原文と訳文はともに「Dem＋NP」となるので、完全に日中指示詞が対応している狭義的対応である。

以上の例から指示詞を固有名詞や名詞句の前に置き、その固有名詞と名詞句を示す人を指す場合、同格指示ではないため、指示詞と固有名詞はどちらも省略できず、両方とも訳されるとわかる。

“那 1＋里/边/儿”

(72) 每当打开一本书，我的眼前就展现出一个新的世界。读着安徒生的童话，我就仿佛生出了一对翅膀，飞过高山，飞过海洋，飞进一个美丽的王国。**那里**有明媚的阳光，宁静的原野，金色的小房子，绿色的大森林。《梦》

(72’) 新しい本を開くたびに目の前に新しい世界が開ける。アンデルセンの童話を読んだ私は、高い山や広い海を飛び越え、美しい王国へ旅をした。**そこ**には暖かな日差しと静かな原野、深い暗い森があり、私は親指姫になって蜜蜂の伴奏付きで蝶たちと踊った。 〔夢〕

(73) 坐了许久，他偷偷的用那只大的黑手向腰间摸了摸。点点头，手停在**那里**；待了会，手中拿出一落儿钞票，数了数，又极慎重的藏回原处。《骆驼》

(73’) しばらくのあいだ坐っていて、彼は大きな垢だらけの手でそっと腰のところをまさぐっ

た。そしてひとつうなずくと、**そこ**で手をとめた。しばらくして、一束の札を取り出して数え、また大事に大事にもとの場所にもどした。〔駱駝〕

(74) 三弟和我很有点相像，长的相像，性情也相像，我们最谈得来。我在北平西郊某大学教书的时候，他正在**那里**读书，课余，我们常常同到野外去散步谈心。《女人》

(74’) 三弟は私に、ずいぶんよく似ている。顔も似ているし、性格も似ていて、いちばんウマが合う。私が北京西郊にある某大学で教師をしていたとき、三弟は**そこ**の学生だった。よくいっしょに郊外を歩いて語りあった。〔女〕

(72) の“那里” は、前文に述べている「高い山や広い海を飛び越え､美しい王国」を指しているため、中国語指示用法の「回指」に当たる。そして、指示する場所は想像の世界で現実には存在しない遠い場所と解釈できる。(73) の“那里”は主人公の腰の部分を指し示す。主人公がお金を確認する一連の動作にまず腰のところを探って、それから探し当てたところに手を止めるという場面を描写している。前文に手が腰のところを探っている場面を述べたので、後文で再度詳細せずとも分かるため、指示詞“那里”で指し示している。(74) の“那里”は話し手が昔仕事をしていたところであり、また話題の主人公（三弟）がかつて勉強していた場所であるので、指示詞“那里”を使用したと考えられる。そして、例 (72) (73) と同じように前文で述べている場所を指し示すため「回指」用法の“那里”を選んだと考えられる。3 つの例の訳文は全て「そこ」に訳され、文脈指示の前方照応指示である。(72) (73) (74) の“那里”は (72’) (73’)、(74’) の「そこ」と語形から指示用法まで対応していると言える。

“那 2” +N2/NP

(75) 解放后，他报考了华北革命大学，**那**实际上是个短训班性质的学校。当时各行各业急需干部，“革大”及时地把各种各样的干部输送到有关的部门，韩一潭被分配来当了一名编辑。《钟》

(75’) 解放後、彼は華北革命大学に入った。**そこ**は実際は短期養成の学校にすぎなかった。当時、どこでも幹部を必要としていたので、「革命大学」ではそうした人たちをさまざまな部署にまわしていた。韓一譚は編集部にまわされた。〔鐘〕

(76) 贝子虽是逊于亲王、郡王、贝勒的第四等贵族，但**那**府第也颇为轩昂华丽。《钟》

(76’) 貝子は、親王、郡王、貝勒につづく四等王侯貴族だが、**そこ**はかなり豪壮なかまえの邸宅であった。〔鐘〕

(75) は「“那” + NP」の形で、(76) は「“那” +N2」の形である。(75) の“那”は前文に書かれている先行詞“华北革命大学 (華北革命大学)”を指している。(76) の前文に直接場所を表す先行詞がないが、“那府 (その王府)”に関わる叙述があるため、 “那”は「回指」指示用法である。訳文 (75’) では本来 1 文になっているところは、2 文に分けている。(75’) と (76’) ではそれぞれ場所を指し示す照応指示の「そこ」に訳され、原文の“那”は「ソ」系指示詞と対応していると言える。

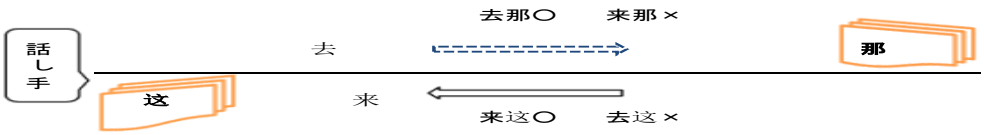
“那 2”と“来（lái）/去(qù)”

(77) 唉唉！”他吃惊的叹息，同时觉得脸上骤然发热了，脊梁上还有许多针轻轻的刺着“吁……。”他很长的嘘一口气，先斥退了脊梁上的针，仍然想，“幸福的家庭的房子要宽绰。有一间堆积房，白菜之类都到**那边**去。《彷》

(77’)「やれやれ」彼はびっくりして歎息した。同時に頬がにわかにほてってきた。それに背中を沢山の針でチクチク刺されているような気がした。「フーッ……」と彼は長い息をついて、まず背中の針をはらいのけてから、なおも考えをつづけた。「幸福な家庭は部屋が広々としていなければならぬ。物置部屋があって、白菜なんかはみな**そこ**へ置く。主人の書斎が別に一間あり、壁にはずらりと書架が列んでいる。〔彷〕

場所を指し示す“那”の前や後ろに方向動詞“来（lái）”と “去(qù)”があり、共に使用する場合は、行く場所を表す。中国語の方向動詞“来”と“去”はそれぞれ“来这”、“去那”のようにセットになって使用されている（前置詞“从（cóng）”などがある場合は含まれていない)。そのため、“来”と“去”の前や後に場所を示す名詞や指示詞が共起することが多い。日中対訳資料の例の中の「“那 2”＋“去”」あるいは、「“去”＋“那 2”」のパターンでは、「ソ」系指示詞と対応している数は、「コ」系指示詞と対応している例より多く見られる。

（77）の“那边”も“那里”や“那儿”と同様に場所を表す指示詞である。ここの“那边”は前文にある“有一间堆积房（物置部屋）”を指し、文脈指示の「回指」用法である。ここの“那边”は指示詞“这边/这里/这儿”と取り替えることができない。その原因は“那边”の後ろに“去”がついているからである。原文“白菜之类都到那边去（白菜なんかはそこへ置く）”は倒置文である。朱德熙（1995）によると「通常、主語は必ず述語の前にあり、修飾語は中心語の前にあり、目的語と補語は必ず動語のうしろにある。」であるから、今の“白菜之类都到那边去”の目的語“那边”は、動詞の前に来たため倒置文になる。本来の形は“白菜之类都到那边”あるいは“白菜之类都去那边”である。以下【図 5-3】に示しているように中国語では“去（行く）”は行くと同様に方向性がある動詞であるので、近称指示詞“这”が使えない。一方、“来（来る）”は“那”が使用できない。日本語訳文では場所を指す指示詞「そこ」に訳され、前文の「物置部屋」を指し、狭義的な対応関係になる。



【図 5-3】方向動詞“来”、“去”と“这”、“那”の関係

(78) 他假作无意地问了一下薛永全，薛永全告诉他，人家眼下是国务院的正局级干部，说不定过两天就升副部长、部长！卢胜七那天没敢喝酒，背上直冒冷汗，出了薛家的屋，低着头一溜烟地快步窜出了院子，从此再不敢去**那**院串门……《钟》

(78’) そのあと彼はさりげなく薛永全に尋ねた。すると国務院の局長クラスの幹部で、ひょっ

とするといまに副部長か、部長に昇進するかもしれないという。その日、彼は酒を一滴も口にしなかった。それでも背中が冷や汗でじっとりした。薛永全の家を出るとき、彼はうつむいたまま大急ぎで離れた。二度とそこへ行く勇気がなかった。〔鐘〕

(78) の“那院（その庭）”は前文に書かかれている“院子（庭）”を指している文脈指示の「回指」である。 “这”にも「回指」用法があるが、(78) の“那”の前に方向動詞“去”があり、“去＋那”の構造になっているため、話し手の視点から述べ、話し手はもうすでに“那院”から去っていたので、【図 5-3】に表しているように、やや離れている目的地（“那院”）に行く行動を示す場合、 “那”しか使用できない。訳文では「そこ」に訳され、指示詞“那”と狭義的な対応関係になる。

(79) 土墙院的门虚掩着。推门进去，只见矮小的东屋门口正围着几个邻家的女人，她们显然是出于热心来帮忙的。小东屋的门关着，一束束细线般微弱的灯光从门缝里透射出来，怪叫声也是从那里传来的。《梦》

(79’) 中庭の扉は手で押すとすぐに開いた。庭に入ると、屋根の低い小さな東側の部屋の前に、近所の女の人たちが何か手伝えることがないかと集まっていた。部屋の扉は閉まっているが、戸のすき間から弱々しい光がもれ、そこから叫び声も伝わってくる。〔夢〕

(79) の“那里”は“小东屋”を指している文脈指示の「回指」用法である。(79’) では「ソ」系指示詞の「そこ」に訳され、原文と同様に文脈指示である。よって、(79) の場所を示す“那里”は (79’) の場所を指す「そこ」と完全に対応している狭義的な対応である。以上の (69) ～ (79) 例の日中指示詞が、指示内容から指示用法まで完全に対応している。

“那 3＋会儿/时候/时”

(80)在东京的留学生很有学法政理化以至警察工业的，但没有人治文学和美术；可是在冷淡的空气中，也幸而寻到几个同志了，此外又邀集了必须的几个人，商量之后，第一步当然是出杂志，名目是取“新的生命”的意思，因为我们那时大抵带些复古的倾向，所以只谓之《新生》。《呐》

(80’) 東京にいる留学生のなかには、法政や理化、さらには警察や工業を学んでいる者はたくさんいたが、文学や美術をやっている者はいなかった。それでも冷淡な空気のなかで、数人の同志を見つけることができた。そのほかにも必要な数人をかり集め、相談の結果、当然手はじめに雑誌を出そうということになった。雑誌の名前は「新しい生命」という意味をとることになり、そのころ私たちは、たいていかなり復古的傾向があったから、たんに『新生』と名づけた。〔呐〕

日中対訳資料の用例では時間を表す指示詞“那”は主に a.“那会儿/那时候/那时”と b.「“那”＋(NumCL)＋N3 (“年/月/日/天”)」、c.「“从(cóng)”＋“那…”」という 3 つのタイプがある。“那会儿/那时候/那时”は 1 つの語として時間を指し示すことができるが、「“那”＋(NumCL)＋N3 (“年

/月/日/天")」は指示詞“那”と時間を表す名詞“年（年）/月（月）/日（日）/天（日）”と合わせて時間を示す。また、「“从”＋“那…”」の “从”は介詞で、時間の起点を表す。

(80)の指示詞“那时”は魯迅が東京で留学していたある時期を指しているので、過去のことを指す文脈指示の「回指」用法である。日本語文では主に話し手と聞き手が共有していない出来事に関して述べる時は、「そのころ・その時」を用いる。一方、話し手と聞き手の共通の体験に関する事柄を話し手が述べる際は、「あの時・あのころ」を用いる。したがって、魯迅は日本に留学した経験を読み手に伝える場合、中国語の指示用法からみると確実に過去の事柄であるので当然“那…”を使用するが、日本語の指示用法からみると文脈指示の場合、話し手と聞き手の共通した経験ではないので、「ソ」系指示詞を選択している。

つまり、中国語の時間を指し示す指示詞は、主に発話する時間の先か後かを基準にして使用され、過去・現在・未来を優先的に考慮して指示詞を選択する。それに対して、日本語の時間を指す指示詞を用いる場合、過去・現在・未来より、話し手と聞き手の共通記憶があるかどうかを、指示詞の選択条件としている。

(81)真是，毕业后，要是弄个好职位，我第一个心愿就是给你缝两件丝绒袍子（中略）我可最喜欢你穿咖啡色的或者淡绿色的，那显得又年轻、又大方。**那时**，叫人们看看我的静是个、是个惊人的漂亮的姑娘……”《歌》

(81’）まったくだ。卒業して、もしりっぱな職業についたら、ぼくの第一にしたいことは、きみにジョーゼットの旗袍を二着と、上等などんすの服を四、五着、こしらえてあげることだ。（中略）ぼくはきみが、コーヒー色かライトブルーのものをきるのが、いちばん好きだ。とても若く奥ゆかしく見える。**その**ときには、ぼくの静がどんなに美人か、みんなに見せびらかしてやるんだ……」〔歌〕

(82)不远处传来了几声橐橐的皮靴响和低低的人语声，按两三个月来的习惯，他知道已经是清晨三点钟了，这是值班的卫兵们在换黑夜的最后一班岗。再有一两个钟头天就大亮了，**那时候**，到**那时候**——不，每一分钟他都可能被突然从地上拖走。《歌》

(82’）近くからばたばたという軍靴の音と、低い人声が伝わってきた。ここ二、三カ月来の習慣から、かれは、もう夜半の三時で、当直衛兵が、最後の夜間交替をしているのだということを知っていた。もう一、二時間もすれば夜があげる。――**そのとき**になったら、**そのとき**になったら――いや、一分きざむごとに、かれは、とつぜん、ひきずりだされるかもしれないのだ。〔歌〕

(81)(82)の中国語指示詞“那时”と“那时候”は(80)の“那时”とは異なり、未来を指し示している。朱德熙（1982）によれば、時間を示す“这会儿”は発話時、叙述中に言及した過去の一時点を指すことはできるが、未来を指すことはできない。逆に“那会儿”は過去あるいは未来の一時点を指すことはできるが、発話時を指すことができない。“这时候/这时/这会儿”、“那时候/那时/那会儿”はそれぞれ同じシリーズの時間を指し示す指示詞であり、“这时候/这时”は“这会儿”と同様に未来を指すことができないが、“那时候/那时”は“那会儿”と同じく過去や未来を指し示すことができる。そのため、(81)(82)の“这时候/这时”は“那时候/那时”と入れ替える

ことができない。一方、日本語の訳文では両方とも「その時」に訳されている。文脈指示として用いられている「その時」は、実際の出来事ではなく、仮定された出来事と、予想される未来の出来事を指し示す場合に使用されるが、「あの時」は用いることができない。(81)(82)のような「回指」用法として用いられた遠称指示詞“那”と前方照応指示用法として用いられた日本語の中称指示詞「その」は、形も指示用法も対応していると言える。

“那”＋(NumCL)＋N3（“年/月/日/天”）

(83) 据薛大娘他们回忆，在那几年里，院里头好象就没有荀磊这么个孩子似的。他一下学便坐在他家所在的那个小偏院里念书，偶尔提个水桶到公共自来水管那儿接水，脸儿白白净净的，见人羞怯地笑着打招呼，懂礼得让人反倒觉得他古怪。《钟》

(83’) 薛家のおばさんの話だと、そのころこの四合院には、荀磊なんていう子供はいなかったみたいだという。学校から帰ってくると、自分の住んでいる小さな偏院で勉強している。ときたまバケツをさげて水道のところへ水をくみにくるが、色白で、誰かに会うと、はにかみながらあいさつする。あまり礼儀がよすぎて、かえって変な子だと思われたくらいだそうである。〔鐘〕

(84) 海老太太不等他问完便用劲地说：“敢情！那一年春上我出的阁，那场大火 ，记得是阴历五月十四晚半晌着起来的。第二天我跟我们掌柜的逛‘荷花市场’，一进大堤，满耳朵听见的全是那大火的事……”《钟》

(84’)「ええ、ええ。ちゃんと覚えてますとも。わたしはその年の春に嫁入りしたんですよ。あの火事はたしか陰暦の五月十四日の夜中ごろ起きたんですよね。その翌日、わたしはうちの旦那と『蓮花市』に出かけたんですが、どこへ行ってもその話でもちきりだったんですよ」〔鐘〕

(83)(84)の指示詞“那”は時間を示す名詞とともに、「“那”＋NumCL＋N3（“年/月/日/天”）」の形になっている。(83) の“那几年”と(84) の“那一年”は全て話し手が記憶に蓄積している情報を指し示しているため、過去を示す“那”を用いている。“那几年”と“那一年”は、“那”を数量詞と時間を表す名詞と共に使用しているが、両者に異なっているところがある。“那几年”は具体的にどの年なのかを指し示さず、概ね X 年から Y 年までという時間範囲を指しているが、“那一年”は具体的な年を指している。よって、訳語も異なり、前者は「そのころ」、後者は「その年」になる。(83)(84)の指示詞が含まれた短文の構造は（83’）と（84’）の指示詞「その」が含まれた短文と異なり、指示詞“那”と「その」が対応していると判断できる。

「“从(cong)”＋“那”…」

(85)这种地窝子既没有窗子，也没有门板。据说有一年刮大风，狂风卷来的碱土挤住了地窝子的木门，很多人被活活闷死在里边。从那以后，人们就只在地窝子口上挂一个草帘子来遮挡风尘和寒冷。《梦》

(85’) 部屋には窓がないのは無論だが、扉さえない。話によると、ある年、暴風が吹き荒れ、巻き上げられた土が積もって木の扉をふさいで、大勢の人を生き埋めにしたらしい。その時から

人々は、ただ一枚のすだれで砂ぼこりや寒さに耐えているということだ。〔夢〕

(86)当他们准备结婚的时候，薛纪跃便告诉她："我爹我妈要给你买一块瑞士雷达小金表，可得在咱们结婚那天才能给你戴——为的是求个吉利。(後略)"从**那**天起，一只闪闪发光的瑞士小金表，便不断在潘秀娅的想象中和梦境中出现。《钟》

(86')そして二人がいよいよ結婚することになったとき、紀躍が言った。「父さんと母さんが君に金色の腕時計を買ってあげると言ったよ。ラドーを。だけど結婚式の日でなきゃあげられないって。縁起のためだとさ。(後略)」**その日**から、きらきら輝くスイス時計が、秀の夢に現われては消えた。〔鐘〕

(85) のような「"从(cóng)" ＋ "那" ＋ "以后(yǐ hòu)"」は前置詞 "从" と指示詞 "那" が共起して使用している例は多く、過去のある時間から始まることを意味する。一方、前置詞"从"と指示詞"这"を共に用いると、現在あるいは発話時点から始まることを表す。(85') では話し手は聞き手が知らない経験や出来事を述べているので「ソ」系指示詞を使用し、「その時（そのとき）」に訳されている。(86)の指示詞"从那天起"は(85) の"从那以后"と形が異なっているが、同じ構造である。紀躍は父さんと母さんが君に金色の腕時計を買ってあげると言った日を指し示すので、買ってあげると言ったのは過去のことであり"那"を用いる。(86') では「その日」に訳されている。指示用法からみると(85) (86)2 例とも文脈指示の「回指」用法であり、訳文では同じ文脈指示の前方照応指示用法の「ソ」系指示詞に訳され、互いに対応していると判断できる。つまり、狭義的な対応関係を持っている。

"那 4 ＋么/样/么样" ＋V

(87) "我们得象择乱麻那样择一择，缕一缕；不能凭着一股火，一口气，瞎扑乱撞。你们**那样**干，不是爱护咱们的领头人高大泉，是害他；（後略）"《金》

(87') 「わしらももつれた麻をほどくように、一本一本選り分け、その元をたどっていかなければならん。カッとなって、ガムシャラにぶつかってってはなんねえ。**そういう**やり方は、わしらの先達の大泉をかばうんじゃなくて、かえって困らせることになる。(後略)」〔道〕

(88) "说什么？"良材的温和的声音在暗中响。"哦——譬如，从前我觉得我那位老同学的妹妹很好，可是现在我就不**那么**想；又譬如，也许今天中意了另外一个，然而明天如何，我自己也不能回答。"《霜》

(88')「それで？」良材のおだやかな声が闇のなかから返って来た。「うん——たとえば、以前ぼくは、その友人の妹が好きだった。しかし今は**そう**でもない。またたとえば、ぼくがきょう誰かが好きになったとしても、あすはどう変わるか、それが自分でもわからない」〔霜〕

(89) 祥子喝了他一碗茶，把心中的委屈也对他略略说了几句。"你想独自混好？"老人评断着祥子的话："谁不是**那么**想呢？可是谁又混好了呢？（後略）" 《骆驼》

(89') 祥子はお茶を一杯もらい、それを飲みながら自分の悩みをかいつまんで話した。「それであんた、ひとりでやっていけると思うのかね？」 爺さんは考えぶかげに口をきった。

「だれだって**そう**できたらいいと思っているさ。だけど、それができた者はいやしない。(後略)」 〔駱駝〕

(87) の“那样干”の“那样”は動詞“干（やる）”を修飾して、話し手が皆の態度に対しての批判として用いられている。皆の態度についての評価なので、過去を示す指示詞“那”で示す。また、前文に述べてある「カットなって、ガムシャラにぶつかる」などは皆の態度なので、それを後文で指し示す場合、用いられている指示用法は文脈指示の「回指」である。この例文では“这”は“那”と入れ替えることもできる。しかし、(87) の話し手は前文に述べたやり方に反対で、心理的な距離も遠く、そのやり方を指す指示詞は遠称指示の“那”であれば、話し手の気持ちと一致する。(87’) では「そう」に訳され、前文の内容と照応して後方照応指示が用いられている。原文の“那样干”の構造は「“那样”+V 」、訳文の「そういうやり方」の構造は「“そういう”+N」になる。つまり、原文の“那样”を修飾する品詞は訳文では変えられた。(87) の“那样”と (87’) の「そういう」は修飾している品詞が異なっているが、指示用法は対応していると言える。

(88) の“那样想”は前文に書いてある内容（昔の友人の妹が好きだったこと）を指しており、過去の考え方なので“那”を用いる。訳文では「ソ」系指示詞に訳され、後方照応指示である。(88) の“那样”は (88’) の「そう」と対応していると見える。しかしここで注目しておきたいのは、やはり原文では「“那样”+ V」の構造であるが、訳文では「そうでもない」に訳され、「指示詞+ V」の構造ではない。

(89) の“那样想”の文は否定と疑問を用いて誰でもそのように考えていることを強調している。年寄は祥子の自分が独立したいという考えに対しての答えなので、“那样想”で祥子の考え方を示している。(87)、(88) と同様に「ソ」系指示詞に訳されて対応しているが、原文で用いられた指示詞の後ろにある動詞が訳されていない。それに対して (89) の“那样想”は「そうできたら」に訳され、「Dem+ V」の形になっている。以上の例文を通して、“那样”と「ソンナ」が日中対訳作品では対応している場合が予想ほど多くないことと、中国語原文では「Dem+ V」で用いられるが、訳文では指示詞と動詞の両方とも訳されるケースが少ないことがわかる。

“那 4 ＋么/样/么样”＋Adj

(90) 现在让我们谈一下赡养问题。尊夫人现在没有职业。又是你单方面要求离婚。感情不和，这她是有可能承认的，当然，也不**那么**简单。《人形》

(90’) 次にお子さんの養育の問題ですがね。奥さんはいま無職だし、また貴方の一方的な離婚要求です。性格の不一致ということは、奥さんも認めるかもしれません。もちろん**そう**簡単にいくとは思いませんがね。〔応報〕

(91) “可不是，”永顺说，竭力想附和良材的意见，以便松缓这难堪的紧张，大粒的汗珠挂在他的多皱的面颊。然而他始终不明白良材为什么要生**那样**大的气，他觉得自己并没说错了半句话。《霜》

(91’) 「それもそうだ」永順は、良材の意見に相槌を打つことで、この気詰りな空気をゆるめようと躍起になっていた。大粒の汗が、しわだらげの顔に吹き出した。しかし彼には、良材がなぜ**そんな**に怒るのか見当がつかなかった。自分では、ひとことも間違ったこと

をいったおばえがないのだ。〔霜〕

(92) 讲究的四合院，这里外院的界墙上，往往还嵌着一些透景的变形窗，或扇面形，或仙桃形，或双菱连环，或石榴朝天……我们讲到的这个四合院，当年也还没有**那么**高级。《钟》

(92’)立派な四合院になると、内院と外院を仕切るこの塀には、すかし窓がはめこまれている。その形も多種多様で、扇子の形、桃の形やら、菱形を二つ連ねた形、上向いたざくろの形といろいろである。本書のこの四合院は、当時、**それ**ほど高級ではなかった。〔鐘〕

(90) の“那么简单”、(91) の“那样大”、(92) の“那么高级”はそれぞれ「“那么/那样/那么样”+ Adj」の構造である。(90) の“那么简单”は奥様がスムーズに夫との性格の不一致を認めるかどうかを指している。一方、訳文では「そう簡単にいく」に訳され、“那么”と「そう」は対応している。(91) の“那样大”は怒りの程度についての修飾で、過去のことなので“那”を用いていると考えられる。訳文では「そんな」に訳され“那样”と対応しているが、原文と指示詞の後にくる品詞が変わっている。つまり、原文では「Dem ＋ Adj 」の形だが、訳文では「Dem ＋V」になっている。(92) の“那么高级”は前文に描写している立派な四合院を指し、文脈指示の「回指」用法である。全文の内容を考えないと、“那么高级”は「そんな高級」と訳しても構わない。しかし、“那么高级”の前に“没有（méi yǒu）”という否定が置いてあるので、「そんな高級」を否定するより「それほど高級ではない」のほうがふさわしいと訳者が判断したのだろう。

今回調べた日中対訳作品の例文から以上の 3 つの例のように修飾する“那么/那样/那么样”は日本語の「ソ」系指示詞と対応していても、日本語の修飾する「そんな」に訳すとは限らなく、文脈の内容によって、「それ」「そう」などに訳されている事象が多い。また原文では“那么/那样/那么样＋Adj”の構造であっても、日本語訳では形容詞の変わりに動詞や名詞など後にくる品詞が変わることがわかる。

“那 4 ＋么/样/么样”＋NumCL

(93) 薛师傅是当过喇嘛。（中略）父亲是拉排子车给人运货的，母亲是为绢花行剪花瓣的。对于他们**那样**一个家庭来说，凡能糊口的事由都是一种职业。《钟》

(93’) 薛師傅は昔ラマ僧になったことがある。（中略）父親は大入車を引く運搬工で、造花屋で働く母親は絹の花びら切りをしていた。**そう**いった家庭では、口すぎになることは、すべて一種の職業とされていた。〔鐘〕

(94) 说实在的，以他现在的这个水平，如果到国外去，他能混得满不错嘛！买一栋楼住住，搞它一座带花园的别墅，怕都不是什么难事，可人家并没有**那么**个想法，能忍心说他贪得无厌吗？……”《钟》

(94’) 洛さんはもう相当の力量をもっているので、国外でならかなりうまくやっていけるはずです。家を買うのも、庭つきの別荘を手に入れるのも造作ないでしょう。けれど彼は**そんな**考えを起こしたこともないんですよ。欲の皮が張っているというのはちょっと気の毒じゃないですか…」〔鐘〕

調査した日中対訳作品では、“那么/那样/那么样”が 2 つ以上の数詞と共に使う例は少なく、

ほぼ（93)、(94）のように“那么/那样/那么样”の後に数詞を置く。それらを日本語に訳すと数詞が省略され、「Dem＋NumCL＋N」から、「Dem ＋N」に変化する。(93）の“那样一个家庭”は「“那么/那样/那么样” ＋“一” ＋量詞」の構造である。訳文では「そういった家庭」と訳され、「ソ」系指示詞を使用しているが、数量詞を省略している。(93）の「回指」用法の“那样”は（93’）の後方照応指示の「そう」、(94）の「回指」用法の“那么”は（94’）の後方照応指示の「そんな」に翻訳され、それぞれ対応している。

以上の例から中国語「“那么/那样/那么样”＋NumCL＋N」の構造における数量詞が“(一）个”のような「数詞“一”＋量詞」の場合、日本語の訳文では指示詞は訳されるが、数量詞を省略しているとわかる。

“那 4”＋“样”＋N

(95） “太太一定不答应。这样一来，什么都完了。请你不要去说。……我没有**那样**的命。”《家》

(95’)「奥さまはけっしてお許しにはなりません。あたしばかりではありません。あなたもみなさんに笑われます。あたしを欲しいなんて。あたし**そんな**運命ではありませんわ」〔家〕

(96) 当然，张奇林并未主动向他求过画，倒不是有什么顾忌，实在是心里并没产生过**那样**的想法，自己的客厅里挂不挂画本是无所谓的一件事；《钟》

(96’）張奇林は自分から画を求めはしなかった。べつに気がねがあったわけではない。**そんな**考えがなかっただけのことだ。応接室に画があろうとなかろうと、もともとたいして気にならなかった。〔鐘〕

(95)、(96）の“那样的命”“那样的想法”は各々「“那样”＋N」の形になり、文脈指示「回指」用法である。(95）の“那样的命”は会話の中で奥様が許してくれないことを指しているため、前方照応指示の「そんな運命」に訳され、“那样”と「そんな」が対応している。(96）の“那样的想法”は「そんな考え」に訳され、(95）と同様“那样＋N”の形になって、訳文に用いられた「そんな＋N」と対応しているため、(96）の“那样”は（96’）の「そんな」と狭義的な対応関係を持っている。

5.3.3“那”と「ア」系指示詞の対応表現

指示詞“那”は「ア」系指示詞に翻訳された例は、「ソ」系指示詞に訳された例より少ないが、「コ・ソ・ア」系指示詞に訳された例のうちに 2 位になっている。そのうちに最も多いには人物・物事を指す“那 1”、2 位は時間を指す“那 3”、場所を指す“那 2”と修飾する“那 4”の例数はだいたい同じである。

“那 1”＋ (NumCL) ＋N1

(97）“那亦只好由他去罢。咱们是见到了哪一点，就办到哪一点。”说着，王伯申站了起来，（中略）他仰脸笑了笑，忽地又转眼朝儿子民治瞥了一眼，嘴里又说：“子安，明天先找朱竞新，探一探**那**老头儿的口风，然后你再见他。”《霜》

(97’）「勝手にやらせるさ。向こうの出方次第で、いくらでもやりようはある」そういいながら席を立った王伯申は(中略)心地よげに笑ったが、不意に息子の民治に一瞥をくれて、

「子安、あすは、まず朱競新に会って、**あの**年寄の腹を探ってみることにしてくれ。本人にはそのあとで会うようにした方がよかろう」〔霜〕

(98) “有兔子，有狍子，对了，还有熊瞎子，**那**家伙才逗哩。” 《梦》

(98’)「うさぎとか、ノロ……そうだ、あてなし熊もいる。**あいつ**はおかしい」 〔夢〕

(99) “李占鳌那臭麻子变啦!”刘秀英噘着小嘴抹着眼泪， “他在党部还帮着党官训我们、笑话我们。**那**丑小子真不是好东西!”《青春》

(99’) 「李占鰲のあばたは変ったんです！」劉秀英は唇をとがらせると、涙をこすった。「あいつは国民党県本部で、党の役人を手伝って、あたしたちに説教し、あたしたちを馬鹿にしたんです。**あいつ**は悪党です」〔青春〕

(97) の“那老头儿”、(98) の“那家伙”、(99) の“那丑小子”はそれぞれ前文に述べた動物や人物を指し示す。「“那”＋N1（“老头儿”)」は“朱竞新”を指して、「“那”＋N1（“家伙”)」は“熊瞎子”、「“那”＋N1（“丑小子”)」は“李占鳌”を指し示す。 全て「回指」用法である。一方、訳語では“那老头儿”は指示詞「あの＋N1（年寄)」に訳されている。話し手の“王伯申”と聞き手である“王伯申”の息子は「あの年寄」が誰を指しているかを双方ともよく知っているので、「あの」で指し示す。(98) の“那家伙”は指示詞「あいつ」に訳され、(97’) と同様、話し手と聞き手の両方が知っている動物なので、「ア」系指示詞を用いる。そして、“那家伙”と「あいつ」は同じくだけた表現である。(99) の“那丑小子” は「あいつ」に訳され、話し手と聞き手が双方とも知っている人物で、「そいつ」や「こいつ」などではなく「あいつ」を用いている。“那丑小子”と“那家伙”も、若干のマイナスイメージを含んでいる。また、訳語の「あいつ」もそのようなニュアンスを表すことができる。したがってこの 3 例の人物を指す日中の指示詞は各方面で対応していると言える。

“那 4＋里/边/儿”

(100) “我么？”许宁想了想微微一笑，“到陕北去。听说红军长征已经到达陕北。毛泽同志也到了①那里。小林，说句实话，我找了你好久，你能够和我们一同去②那个神圣伟大的地方吗？”《青》

(100’) 「ぼく？」許寧は、ちょっと考えてから微笑した。「陝北にいく。話によると、赤軍は長征を終えて、すでに陝北へ着いたそうだ。毛沢東同志も①そこにいる。林君、じつをいうと、ぼくが長いこと、きみを捜しまわっていたのは、きみがぼくたちと一緒に、②あの神聖で偉大な所へいけたらと、きみ、一緒にいけるかね？〔青〕

(100) の①“那里”は“陕北”を指し示し、文脈指示の「回指」用法である。訳文の「そこ」も前文にある場所（「陝北」）を指し、文脈指示の前方照応指示である。よって、①の“那里”と (100’) の「そこ」とは対応していると言える。②の“那个”は“…地方”と共に場所を指し、“陕北”を指示している。②も①と同じ文脈指示の「回指」だと考えられる。しかしながら訳文の②は「ソ」系ではなく、「ア」系指示詞に訳されている点で差異が見られる。日本語の照応的用法については久野 (1973) によると、「ア系は話し手、聞き手ともによく知っている場合のみに用

いられる。」と述べている。したがって、一回目の“那里”は「ソ」系に訳され、二回目は聞き手にとって既知のことであると訳者が判断して「ア」系指示詞を選んだ可能性が高い。もう一つ考えられるのは話し手にとって指す場所は「神聖で偉大な」所であり、聞き手にも「陝北」は「神聖で偉大な」所と共通の認識を持たせたい気持ちを「アノ」に込めたのだろう。

(101) 但是当听他说到最后，说到了现实充满着火药气味等话的时候，她才警觉起来，慢慢抽回了自己的手，小声说：“泽，别总叫我为难好不好？你应当了解我。……当然，我忘不了北戴河，我们在那儿初次认识。”《青》

(101’) だが、最後の、いたるところに火薬のにおいが充満している、ということばを耳にしたとき、かの女は、はっとして心をひきしめた。静かにじぶんの手をひき離しながら、かの女は小声でいった。「沢、わたしを困らせないで。あなたはわたしを理解すべきよ……もちろん、わたしだって、北戴河を忘れないわ。わたしたちは、あそこで初めて知りあったんですもの」〔青〕

(101) の“那儿”は前文にある“北戴河（北戴河）”を指し、文脈指示の「回指」用法である。(101’) の「あそこ」は同じ「北戴河」を指し示しているが、話し手と聞き手の二人とも知っている場所、即ち共用情報なら日本語では「ア」系指示詞で指し示す。それに対して、中国語の場合は“这”と“那”二系列しかないため、日本語のように情報の共用や新古などによって用法を詳細に分けられない。(101) のような文脈指示の「回指」用法は、本来“这”と“那”どちらにも使えるが、話し手が明らかに過去のことを述べる場合、“这”は用いられない。ゆえに、(101) のように“那儿”は「あそこ」に訳され、遠称指示詞で対応しているが、“那儿”と「あそこ」を使用する基準が異なる。これも中国人学習者が日本語の「ソ」系と「ア」系指示詞を見分けられない一因だと考えられる。

“那 2”＋NumCL＋N2

(102)“咱们家是从旧社会那个火坑里爬出来的，共产党是咱们的大救星，咱们一生一世都得跟着共产党走，奔的目标是社会主义。明白吗？”《金》

(102’)「おれたちの家は、旧社会つうあの地獄からはい出したんだ、共産党はおれたちの救いの星だ、おれたちは一生涯共産党について行き、めざす目標は社会主義でなければなんねえ。わかるか？」〔道〕

(102)の「“那”+ NumCL（“个”）+ N2 （“火坑”)」は、前にある“旧社会”を指し示している。指示詞を使用せず、“咱们家是从旧社会爬出来的(おれたちの家は、旧社会からはい出したんだ)”だけでも通じるが、“那个火坑”を加えることによって旧社会に対する憎しみ、恨み、恐怖などを表すことができる。本来、旧社会と言えば、不幸、悲しみなどのイメージと繋がる。ここで“那个火坑”でさらに不幸の程度が増し、“旧社会”に対するイメージを具体化している。ゆえに、“旧社会那个火坑”と“他那人”は同じ構造「N＋“那”＋N」であるが、前者は意味の変化があるに対して、後者は意味的にそれほど変わっていない。“他那人”の場合、“那”の指示

機能が弱くなり、訳語では指示詞が省略されているが、(102)の場合は指示する対象に新たな意味を与え、指示機能を働かせているため、日本語の指示詞に訳出されていると考えられる。また、「ア」系指示詞は話し手と聞き手の共通の情報を指す場合や、話し手の特別な体験を述べる場合に用いるので、訳者は考え(「旧社会」＝「地獄」)を伝えるため、聞き手も分かるはずと想定し、(文頭に“咱们家”が置いてあるので、聞き手も家族で、話し手が話したことがわかるはず。)「ア」系指示詞を用いていると判断できる。よって、訳文では指示詞を省略することが出来ず、「あの」に訳されている。

“那 4＋会儿/时候/时”

(103)种种的回忆都杂沓地来了。然而种种的回忆都引到一个结论：父亲每举一事，决不中途怀疑它的对不对。好像①**那时候**一切事情就分成两大堆：一堆是善，一堆是恶。而且②**那时候**人们的见解也是那么干脆：好与不好，人人所见是一律的。《霜》

(103’)さまざまな思い出が一時にわいてきた。しかし、このさまぎまな思い出は、すべてひとつの結論をみちびきだした。父親は、なにかをやるときは、それが正しいかどうか、途中で迷うようなことは決してなかった。まるで①**あの**ころは、すべてのことが善と悪の二つの大きな塊りにわかれていたようで、②**あの**ころのひとたちの見解も、善と悪にきっぱりと一律にわかれていたようであった。〔霜〕

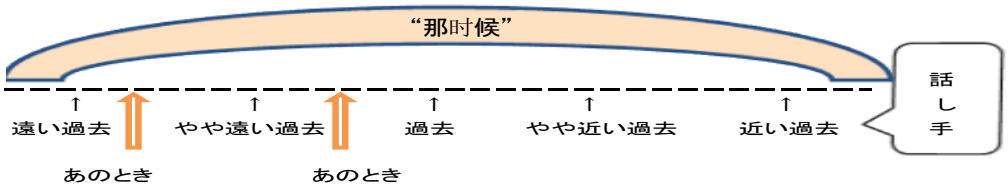
(104)忽然希冀，忽然惧怕，他心中象发了疟疾。这比遇上虎妞的时候更加难过；**那时候**，他什么不知道，象个初次出来的小蜂落在蛛网上；现在，他知道应当怎样的小心，也知道怎样的大胆，他莫明其妙的要往下淌，又清清楚楚的怕掉下去！《骆驼》

(104’)こもごもおこる期待と恐怖に、彼の胸はまるで瘧にかかったようであった。こんどは虎妞にあったときよりもつらかった。**あのとき**は、はじめて蜘蛛の網にかかった子蜂のようなもので、なにも知らなかった。ところがいまは用心することも大胆になることも知っていながら、自分でもわけがわからずにとびこんでゆきそうなのだ。また、はっきりとわかっていながらおちてゆきそうなのだ。〔駱駝〕

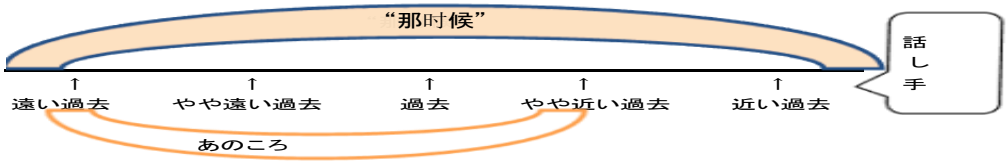
(103)も思い出話なので、無論当時の時間を指し示す場合に“那…”で指し示している。また、前文には先行詞がないが、前文に書かれた“然而种种的回忆都引到一个结论：父亲每举一事，决不中途怀疑它的对不对。(このさまぎまな思い出は、すべてひとつの結論をみちびきだした。父親は、なにかをやるときは、それが正しいかどうか、途中で迷うようなことは決してなかった)”と関連があるため、「回指」用法である。一方、日本語の訳文では「あのころ」を用いて、前文に書かれた事の起きた時間を指している。ここで「あのころ」を用いた理由は、話し手の記憶に蓄えた特定の体験で、「独り言の場合や、話し手の特定の体験について尋ねる場合など、聞き手が知らないことでも話し手が体験した出来事でありさえすれば、「アノころ」を用いる」(金水 1989c：34)。

(104)の“那时候” も過去の時間を表し、前文の“遇上虎妞的时候(虎妞にあったとき)”を指している「回指」用法である。(104) と(103)は原文では指示詞“那时候”で過去のある期間内の時間を表しているが、訳文(103’)と (104’)は同じ“那时候”に対して 2 つの訳語「あのこ

ろ」と「あの時」に訳されている。「あのころ」は大幅な時間帯を指し示しているが、「あの時」は一時の時間を指すことが出来る。(104)の“那时候”はその瞬間に感じたことを示しているため、「あの時」は「あのころ」よりふさわしい訳語だろう。【図 5-4】に示しているように、「あのとき」は過去を示す時間軸の「近い過去」や「遠い過去」などの相対的に一時的な短い時間を指すことができるが、【図 5-5】に示しているように「あのころ」は主に「遠い過去」から「やや近い過去」までの相対的に長い時間を指し示す。中国語の“那时候”は短期的と長期的な時間の両方ともに使えるので、「あのとき」と「あのころ」ともそれぞれ対応できる。



【図 5-4】「あのとき」と“那时候”の対応関係



【図 5-5】「あのころ」と“那时候”の対応関係

“那 4+么/样/么样”+Adj

(105)燕宁激愤地一挥胳膊：“毛主席说：‘革命不是请客吃饭，不是做文章，不是绘画绣花，不能①**那样**雅致，②**那样**从容不迫，文质彬彬，③**那样**温良恭俭让，革命是暴动，是一个阶级推翻一个阶级的暴烈的行动。’所以呀，我们对那些反动派决不能客气。毛主席说：‘凡是反动的东西，你不打，它就不倒。’”《梦》

(105’)燕寧はカッとなって腕をひとふりした。「毛主席はこう言ってるよ。『革命は友だちを呼んでご馳走することでも、文章を書くことでもない。絵を描いたり刺繍をすることでもない。①**そんな**ふうに優雅に悠揚迫らぬ態度で上品に慎ましく進めることはできない。革命は暴動である。ひとつの階級がもうひとつの階級を覆す激烈な行動である』。だから私たちは、ああいう反動派に遠慮することは決してできないのよ！毛主席いわく『およそ反動的なものどもは、君が倒さないかぎり、いつまでも倒れない』」〔夢〕

(105)の①“那样雅致（あんなに優雅）”、②“那样从容不迫（あんなに悠揚迫らない)”、③“那样温良恭俭让（あんなに優しく、うやうやしい)”の共通点としては、“那样”の後に形容詞が付いていることである。“那样雅致，那样从容不迫，那样温良恭俭让”は前文に述べている“请

客吃饭，做文章，绘画绣花”という動作と照応し、“那样…那样…那样…”という対句の型で“请客吃饭”“做文章”“绘画绣花”の相関性がある3つの短文を並列させて、生き生きとしたイメージを効果的に表現している。訳文では①の“那样雅致”は「そんなふうに優雅に」に訳され、①の“那样”は「そんな」と対応している。②“那样从容不迫”③“那样温良恭俭让”の“那样”は訳文では省略され、「悠揚迫らぬ態度で上品に慎ましく進めることはできない」に訳されている。中国語では②と③の“那样”を省略したら、どこが区切りかわからなくなり、意味が理解しにくくなる。日本語文は中国語文ほど“那样…那样…（そんな…そんな…）”あるいは“那么…那么…（そんな…そんな…）”のような対句の型で指示詞を用いない[11]。（105’）では1つの指示詞しか訳されていない。

“那4＋样/么样” ＋（NumCL）＋N

(106)有一次在老师宿舍门口，他碰到了老师，他给老师鞠了躬，老师竟给了他块小点心吃。他还没吃过**那样**的点心呢，又酥又脆又甜。老师示范地一遍又一遍地读他的造句，全班都承认他造得好。《人形》

(106’）先生の宿舎の前を通りかかって先生にお辞儀をすると、お菓子を下さったもん。**あんなに**美味しいお菓子は食べたことがない。サクサクと柔らかで甘いの。先生は彼の文を何度も何度も読みあげ、クラスのみんなが良いと褒めた。〔応報〕

（106）の“那样的点心”の指示詞“那样”は名詞を修飾し、過去のこと“老师竟给了他块小点心吃（先生がお菓子をくださった）”を指している。吕叔湘（1980）によると“那样”は“那么样”と同じ意味で、程度、方式、性質、状態を指し示すことができるが、数量を指すことはできない。“那么”は程度、方式、数量を指し示すことができるが、性質、状態を指すことができない。“那样的点心”の“的”は“那样”が名詞を修飾する場合によく使用されるが、名詞の前に数量詞がある時、“的”を省略できる。例えば、“那样一块点心（あんな1つのお菓子）”（106’）の訳文では指示詞「あんな」に訳され、「あんなに美しいお菓子」で前文の「お菓子」を指している前方照応指示である。（106’）の「あんな」と（106）の“那样”と同じ遠称指示詞だし、指示用法も対応しているため、（106’）の「あんな」と（106）の“那样”は対応していると言える。

5.4 まとめ

本章では非現場指示として使用されている“这/那”の「回指」用法と“这”の「前指」用法と日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞との対応状況を考察してきた。中国語文で使用率が高い「回指」の“这”の考察結果を次の3つの方面から論述する。A.“这”が「コ」系指示詞に翻訳された原因を検討したもの、B.“这”が「ソ」系指示詞に翻訳された例を考察したもの、C.“这”が「ア」系指示詞に翻訳された原因のまとめである。

A1．王亜新（2004）や王湘榕（2011）が述べているように、中国語の指示詞“这”は日本語の指示詞「コ」と対応することが多い。しかし、その意味と指示機能が全て対応している例はそれほど多くはない。多くの例は指示詞に訳され、広義的に対応しているが、指示機能が対応して

いないことが明らかになった。また、「コ」系指示詞に訳されても全て原文と一致するとは限らない。例えば、時間を指す指示詞“这时/这天”などは必ず日本語の時間を指す「この時」「この日」などに訳されるとは限らず、「こんな」などに訳されることがしばしば見える。特に裸の“这” は 1 つの文を指して、主語になる場合、「こんな」「この」より「これ」「ここ」「こちら」などのような単独で指示対象を指すことができる指示詞に訳されることが多い。

A2. 時間を指し示す“这时”や “这一天”などは、前文に書かれている過去の時間を指しているが、過去を表すというより聞き手に臨場感を感じさせるために近称指示の“这”を選んでいるとわかる。訳文では現在や過去と関係なく、語り手はビデオを再生しているかのように聞き手に出来事を語り、その生き生きとした場面を再現するために、同じ近称指示の「コ」系指示詞を選び、「こんな時」「この日」などの表現を用いる。

A3. 原文では程度を示す“这么”などが形容詞を修飾したり、動詞を修飾したりしている。訳文では修飾の「こんな」に訳され、後に置く品詞は原文で用いた“这么”が修飾する品詞と異なるケースが多い。その原因の一つとして、本来日中両国の言語の中で生じた語彙の相違が考えられる。つまり、同じ意味を示す語彙でも、中国語では名詞などになるが、日本語では動詞などになるものである。

B1. 中国語の「回指」用法の“这”は訳文では、「コ」系指示詞に訳すこともでき、「ソ」系指示詞に訳すこともできる。しかし、日本語では「コ」系指示詞も前文の内容を受けたり、指したりすることができるが、指す対象や先行詞などが指示詞の直前にある場合、「ソ」系指示詞が多く用いられる。また、指示詞が指しているものは前文の名詞句全体ではなく、その一部のみを指す場合、「これ」ではなく「それ」を用いる。庵他（2001：12）の解説と一致している。

B2. 調べた例群では場所を指し示す“这”は「ソ」系指示詞と対応する例が極少なく、全て地の文に表れる。その中ほとんどが固有名詞“这里/这边/这儿”で場所を指し示す例と「“这”＋N（場所を示す名詞）」の形になっている。

B3. 原文が過去のことを現在目の前で起きていることのように語り、ビデオで再生するように生き生きと場面を再現している場合は、“那”と“这”を入れ替えることができない。このような“这”が「ソ」系指示詞と対応している理由は、日本語訳文の訳者と原作者の視点が異なるからである。訳者は目の前で事件が起きているように語るのではなく、ただ過去の出来事である点を重視して、前方照応指示の「コ」系指示詞ではなく、前方照応指示の「ソ」系指示詞に訳しているとわかる。また、そのような文の特徴としては、文末に過去形を用いることが多い。

C1. 調べた例群では「回指」用法の“这”は「ア」系指示詞に訳された例が極少なく、そのうち場所と時間を指す例が最も少なく、大体が人と物事を指し示す例である。ここで注目しておきたいのは、“这”が「ア」系指示詞に訳された例において会話文は地の文より多い。聞き手と話し手が存在する会話なら、聞き手と話し手が共有している知識や情報などに「ア」系指示詞が用いられることが多いと推測できる。それは庵他（2001：5）が述べているように「文章における文脈指示ではアは使われない」ということを裏付けている。

C2. 中国語文では指示詞を使用する場合、遠近や過去、未来、現在を優先する。過去の事に関しては、“这”と“那”の両方とも使用できるが、話したばかりの内容は“这”のほうがよく用いられる。一方、日本語の場合、遠近や過去、未来、現在を配慮しながら、話し手と聞き手の領域

を重視している。話し手と聞き手の領域に共存する知識なら、必ず「ア」系指示詞を用いる。これは日本語と中国語指示詞の指示用法のずれだと言える。このことは金水他（1989：38）と高革萍（2002b：133）が「話し手と聞き手の共通情報なら、日本語では特に会話文なら「ア」系指示詞を用いられる」と述べているのと合致している。仮に、前文と同じ内容で聞き手が知らない情報であれば、訳文では「ア」系ではなく、「ソ」系に訳される。

C3. 中国語文では、話し手は長期記憶に蓄えている情報を思い出す場合は遠称の“那”、話し手自身と関わっていないことなど、心理的な距離が遠い場合も遠称の“那”を用いる。しかし、会話の内容を変えていくうちに、本来話し手に関係がない人物や事柄などが、話し手と利益が結びつくようになる場合、“那”で指していたものは、話し手にとって心理的な距離が近くなるため、近称指示詞“这”で指し示す。一方、日本語文では中国語文のような心理的な変化につれて、遠称指示詞から近称指示詞に変わることはなく、文の始めから終わりまで、話し手と聞き手が両方とも知っている情報なら、「ア」系指示詞という基準で指示詞を用いる。

C4. 時間を指し示す“这”は「ア」系指示詞と対応する例が極めて少ない。中国語文では過去のことでも、読み手に臨場感を感じさせるために、現在事件が起こっている現場のように“这一天”で時間を示している。日本語文では「ア」系指示詞は話し手と聞き手の共通の体験に関する事柄を述べる場合のほかに、独り言の場合や話し手の特定の体験について尋ねられているとき、聞き手が知らない出来事でも、話し手の経験であれば、「あのとき」など「ア」系指示詞で時間を指すことができる。

C5. 这样…”は動詞などを修飾し、方式や程度を示している。中国語の原文で“这样”を“那样”と入れ替えても意味は変化しないが、日本語の訳文では「コ」と「ソ」を「ア」に入れ替えると、話し手と聞き手の双方とも知っている旧情報が片方しか知らない新情報になる。このような例では中国語の指示詞“这 / 那”はともに使用できるが、日本語の訳文では「ア」系しか使用できない。

「回指」用法の“这”は「コ・ソ・ア」系指示詞の 3 つに対応できることが明らかになった。よって、その関係は以下の【表 5−1】のように示せる。

【表 5-1】「回指」の“这”と「コ・ソ・ア」系指示詞の対応

回指の“这”→「コ」系指示詞（地の文と会話文）
→「ソ」系指示詞（地の文と会話文）
→「ア」系指示詞（会話文と独話文）

以下で「前指」の“这”が日本語指示詞と対応している例を考察した結果をまとめる。A は「前指」の“这”が「コ」系指示詞に翻訳された原因、B は「前指」の“这”が「ソ」系指示詞に翻訳された原因、C は “这”が「ア」系指示詞に翻訳された原因をまとめたものである。

A1. 調べた例群では「前指」用法が「回指」用法より遥かに少ない。その中で人物、事物を表す例は時間、場所などを指す他の 3 種類の例より多いことがわかる。また、中国語文では「前指」用法であるが、日本語の訳文では現場指示に訳されることがある。“这”は日本語の近称指示詞と対応しているが、指示用法は対応していない。その原因は日中で着目している焦点が異なって

いるためである。中国語はビデオカメラで先ず撮影して、それから読者に見せるように第三者の立場から述べているが、訳文は中国語と同じ事実を述べているが、話し手は読者と同じステージに立っているように目の前に実物があり、それを見ながら語っている。

A2.“这么”はそれぞれ数量詞と共に名詞を修飾し、後文では指示詞が指している事を説明している。このような例は典型的な「前指」用法であり、「前指」に関する先行研究（吕叔湘 1985など）はほとんどこのようなタイプの例である。このような例は「コ」系指示詞に訳され、中国語の「前指」用法と日本語の後方照応用法と対応している確率が高い。高革萍（2002c）では「“这”はコ系後方照応指示詞に訳すことができることがわかった。したがって、日本語から中国語に訳す場合、日中後方照応指示詞は完全に対応させることができないが、中→日で見た場合、“这”とコが対応している」というように中国語から日本語に訳す日中後方照応指示詞の対応関係をまとめている。しかし、調査した群例からみると、一口に “这”の「前指」用法は「コ」系指示詞と対応していると言っても、指示用法も対応していることもあれば、「コ」系指示詞に訳されているだけのこともあり、指示用法が一致していないことが明らかになった。

B1.「前指」の“这”が「ソ」系指示詞と対応する例は「コ」系指示詞と対応する例より極めて少ない。人物や時間などを指し示す例がほぼ存在しておらず、修飾として使用されている“这”は「ソ」系指示詞にのみ訳されている。しかし、その“这”の例文には共通する部分がある。例文の“这…”は前文と後文の内容とも照応しているように見えるが、実際には前文より後文のほうがより明確に、具体的に説明していることがわかる。このような「前指」用法は日本語の指示詞に訳されることはあっても、後方照応指示が用いられることは稀である。この結果は先行研究の木村（1983b）、日本語記述文法研究会(2009)の「本来後方照応として使用されている指示用法は前方照応指示より少なく、そのうえ『コ』系指示詞が中心である」という論説と合致している。

B2.“这”が「ソ」系指示詞に翻訳された例では、次の 2 つの条件のどちらかに当て嵌まると後方照応指示と前方照応指示の両方に訳される。ⅰ．指示詞は前文と後文の間にある。そして、指示詞を用いた文は前文と意味的に緊密に繋がり、後文は前文と指示詞を用いた文の両方を説明している。ⅱ．指示詞を用いた文に「また」など指示内容が、前の文脈ですでに述べられていることを明記した語がある。これらの条件に当て嵌まると、「前指」の“这”は日本語の訳文では前方照応指示に訳されても、不自然にならない。

B3.「前指」として使用されている指示詞“这”が「ア」系指示詞に訳されている例は「ソ」系指示詞に訳されている例と同様に少ない。その中には人物や時間などを指し示す例がなく、修飾を示す“这么/这样/这么样”のみがある。また「ア」系指示詞に訳されている例の特徴としては、会話文が多く、語った内容は話し手と聞き手が双方とも知っている情報である。日本語文では指示詞は後文を説明しているかどうかより、話し手と聞き手の領域を重視し、話し手と聞き手にとって共通の情報なら、それを優先して「ア」系指示詞を用いることが窺える。

以下は文脈指示の「回指」として使用されている中国語の指示詞“那”と日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞の対応状況を考察した結果である。

A.人物を指し示す“那”は「コ・ソ・ア」系指示詞と対応する場合、主にa.「“那 1”＋ (NumCL) ＋N1・NP」b.「PP+“那 1”+ (NumCL) +N1」の 2 つの形に分類できる。a.「“那 1”＋ (NumCL)

＋N1」は“那女孩子（この娘）”“那工人（この労働者）”のように指示詞が直接的に人を示す名詞とともに人物を指し示す。あるいは指示詞と名詞の間に数量詞があって、“那个女人(その女)”のように指示詞（“那”）、数量詞（“个”）、人を指し示す名詞（“女人”）と共に用いる。b.「PP+“那 1”+（NumCL）+N1」は“你那磊子哥（その磊子兄さん）”のように指示詞が人称代名詞と共起して人物を指す。「PP（“你”）＋N1（“磊子哥”）」と「“那”＋N1（“磊子哥”）」は同じ人物を指し、指示詞と人称代名詞は片方を省略しても意味に差し支えないため、人称代名詞を訳出せず、指示詞のみを訳す、あるいは人称代名詞のみを訳すことが多い（指示詞が訳出されていない現象は第 2 章で述べる。）。調査した日中対訳作品では「“那 1”＋ （NumCL）＋N1・NP」の形がほとんどになるが、b.「PP+“那 1”+（NumCL）+N1」の形も僅かにある。ここで注目しておきたいのは、第 2 章で述べた「PP+“那 1”+（NumCL）+N1」は、指示詞と人称代名詞は“孟蓓这姑娘”、“他那个人”のように人称代名詞と指示対象が同一人物であり、並列関係を持つが、本章で述べた「PP+“那 1”+（NumCL）+N1」の人称代名詞と指示対象は、同一人物ではなく所属関係になる。人称代名詞を省略しても所属関係であることがわかるため、指示詞だけを訳出している。

上述の人物を指す“那”は日本語の指示詞と対応している例を考察した結果、胡俊（2006）が述べた「日本語では、指示詞が人称代名詞の機能を持っているが、中国語の指示詞はその機能を持っていない。人称は人称代名詞“他”“她”等で表す。そのため、日本語の人称代名詞として使われている指示詞が中国語の人称代名詞に対応している。」という論点には問題点があることを浮き上がらせた。中国語の指示詞「“这/那”＋“人”」あるいは「“这/那”＋N1」は人を指し示すことができ、人称代名詞と共に“我这人/他那人”で人を指すこともできる。さらに日本語では中国語と同様に、人称代名詞（彼・彼女）などがあるため、日本語の指示詞は人称代名詞の機能を持っているが、中国語の指示詞はその機能を持っていないとは断言できないことを示唆している。

B. 時間を指す「回指」の“那”は、日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞と対応している用例の観察を通して、日中両言語の指示詞には、使用上の基準の異同が見えた。中国語文で話し手は明らかに過去で、長期記憶に蓄えられているものを引き出す場合、“那”を使用するのが一般的である。そして語り手が蓄えられている記憶を引き出し、現在の視点から昔のことを語る際、“那时候”は“这时候”と置き替えることができない。一方、日本語文では過去のことは必ずしも中称指示「ソ」系・遠称指示「ア」系で指し示すとは限らない。臨場感を持たせる際に、「コ」系指示詞、客観的で冷静な作品であるような印象を与える際に「ソ」系指示詞を選別して用いられる。また、日本語の「コ」系指示詞は現在を示すと共に、既知現実（known reality）も示すので、「この・ここ」を用いた時間・時期・期間を表す慣用表現「この間」「この前」は比較的近い過去の時点を表すことができる。

中国語の「回指」の“那”が「ア」系指示詞に訳されている場合は、記憶に蓄えているものを引き出していることが多い。中国語の時間を指し示す指示詞は、主に出来事が発話時点よりも先か後に発生したかを基準にして使用され、過去・現在・未来を優先的に考慮し、指示詞を選択する。それに対して、日本語の時間を指す指示詞は、過去・現在・未来より、話し手と聞き手の共通体験かどうか、話し手の特定の体験かどうかを、指示詞を選択する必須の条件としている。聞き手が話し手の特定の体験について尋ね、聞き手が知らないことでも話し手が体験した出来事なら「ア」系指示詞が使用される。ここからわかるのは、日本の遠称指示「ア」系と中国語の遠称

指示“那…”は同様に過去を示せるが、日本語の場合は指示用法に関して特に詳細に規定して、話し手と聞き手が共通の知識かどうか、話し手の特定の体験かどうかで指示詞を選ぶ。また、会話文では「回指」の“那”は「ア」系指示詞に訳された例が多いことから、堀口（1990），迫田（1996）が主張している「『ア』系指示詞が多く使用され、互いに一体感・仲間意識といった満足感が得られる。」と一致している。

C. 「回指」用法として用いられた“那”は日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞に訳されても、指示詞“那”の種類や指示詞の後ろにつく品詞が訳文では変えられるケースが多く見られる。特に修飾する“那么/那样/那么样”は「コ・ソ・ア」系指示詞と対応している例が最も多い。その“那么/那样/那么样”は日本語の指示詞に訳されても、日本語の修飾する「そんな」に訳されるとは限らない。文脈の内容によって、「それ」「そう」などに訳されている現象が多い。原文では“那么/那样/那么样+Adj”の構造であっても、日本語訳では形容詞の代わりに動詞や名詞など後にくる品詞が変わることが多い。

また、修飾を示す指示詞が用いられる場合、中国語文ではよく“那样…那样…”あるいは“那么…那么…”という対句の型で相関性がある2つの文を並列して使用する。一方、日本語文では「そんな…そんな…」あるいは「あんな…あんな…」のような対句の型で指示詞を用いることは少ない。調査した例群では“那样…那样…”と “那么…那么…”の対句の型で使用されている用例を日本語に訳す場合、“那样”あるいは“那么”は1語しか訳されていない現象が見える。

D. 中国語の指示詞“那”は「前指」用法がなく、「回指」用法のみであるが、日本語の訳文では「コ・ソ・ア」の3系列の指示詞と対応する場合、前方照応指示用法、観念指示用法、絶対指示用法に翻訳されている。遠称指示の“那”は中称指示の「ソ」系、遠称指示の「ア」系指示詞と対応していると思われるが、近称指示の「コ」系指示詞と対応している例もある。「コ」系指示詞に訳されている例からみると、原文は地の文の場合、第三者の立場から語っているため、心理的な距離は遠く“那”を用いるが、訳文では主人公の視点から語ることになり、「コ」系指示詞に訳され、生き生きな描写によって特殊な表現効果を高めている。

原文では1つの文であったが、訳文では訳者によって二文に分けられ、文脈関係が変わるため、「ア」系指示詞を選らんだケースもある。また、調査した日中対訳作品では「回指」用法の“那”は「ソ」系指示詞に翻訳されている場合、ほぼ前方照応指示用法であり、「回指」用法の“那”と前方照応指示の「ソ」系指示詞は指示用法が対応している。特に「“那”＋N」の形は日本語の「この・その+N」に訳されることが多く、庵（2002）の「『この』は固有名詞と結びつきやすく、先行詞を言い換えた形での照応がよく見られるが、『その』は先行詞をそのままの形で受ける」という主張を改めて裏付けている。

注

第5章

1) 王湘榕（2011：30）では指示詞の有標性について金水・田窪（1990）松浦（2004）の論文を引用して以下のように記述している。

指示詞の使用頻度と分布範囲の相違による有標性と無標性について、金水・田窪（1990）

は近称のコが明らかに文脈指示では有標であり、何らかの強調的な効果をもたらすと述べている。一方、指示詞の無標性について、松浦（2004）は接近性・領域性に関係なく、現場指示において相当するものがなく、単に前に出てきたものを指すソ系指示詞を「無標先行指示のソ」としている。つまり、日本語のテキストにおいて、「ソ」は使用頻度が「コ」より高く、分布範囲が「コ」より広いため、自然に無標となると言える。言い換えれば、「コ」は使用頻度が「ソ」より低く、分布範囲も「ソ」より狭いため、有標となり、強調的な効果が目立つと考えられる。

2) 裸の“这”というのは“这里”、“这样”、“这么”、“这么样”、“这时”など「“这”＋…」で構成されている指示詞と異なり、“这”のみで時間や物事などを指し示す指示詞を意味する。

3) 日本語記述文法研究会（2009：24）では「こう」「そう」「あう」を副詞とし、主な働きは様態、性質や特徴、程度、発言や思考の内容を指示する指示表現であると定義したが、本論では「こう」「そう」「あう」は指示表現ではなく、指示詞とする。

4) 蒋华(2005：102）の“这”の“上指”“下指”とは吕叔湘(1985)で定義されている「回指」指示用法と「前指」指示用法に当たる。

5) 金水（1989：41）は、「会話では、聞き手の知らない物事を持ち出して再び指し示すには、ソやコを用いる。普通、アは使えない」と述べている。

私の遠い親戚で中村という人がいますが、こんどその人が本を出したんです。

6) 高革萍（2002ｂ：133）は中国人学習者のアンケート調査を行った。以下の例は実際にアンケート用紙に記載された例である。

甲：山本さんを知っていますか。

乙：もちろん知っていますよ。（この・その・あの）人とは十年の友達ですよ。

金水（1989c：38）では、「ア」系指示詞については以下のように述べている。

文脈指示のアで指し示せるのは、自分と相手とが、共通の過去の体験の中で出会って知っている物事（人・もの・事柄・場所・時間…）である。

「大学院生の、木村さんをご存じですよね」

「ええ、知っています。あの人とは、10 年以上の友達です」

7) 日本語記述文法研究会（2009：30） は「指示表現」とは「談話に登場する人やもの、場所や時間、抽象的な概念などを言語表現で指し示すことである。」と述べている。つまり、本論で定義した指示詞に当て嵌まる。

8) 高革萍（2002ｃ）では「日中後方指示詞の機能」は中国語や日本語文では指示詞は指示対象の前に置いてある文脈指示を指していると述べている。本文の中国語指示詞“这”の「前指」と日本語指示詞の「後方照応指示」と同じである。

9) 吕叔湘(1985：25)によると中国語の指示詞“那”には「前指」の用法がない。最近の論文ではその主張と異なる説もあるが、まだ十分に説明しきれていないところがあり、本研究で調べた例文では「前指」用法の“那”がなかったため、本論では「回指」として使用されている“那”のみに焦点をあてる。

10) 平均使用率というのは“这”と“那”は場所・時間・事物などを指し示す場合の平均的な使用率を示す。

11）中国語文では “那样…那样…” あるいは “那么…那么…” のような対句の型で 2 つの状態が同時に持続していることを表す。例えば、“又干净又整洁”（清潔であり、整然としている）のように、“那样…①那样…②” では①と②は意味や構造など総合的に等しい 。

【第三部】教科書における用法別指示詞の全数調査および日本語教育への応用

本研究の第三部は、第6章・第7章からなっている。指示詞の使用状況のアンケート調査の協力者が使用している日本語教科書を詳しく分析し、第2章・第3章・第4章・第5章で得られた結果を合わせ、指示詞の提示順、提示法を検討する。第6章では現在中国で行われている日本語教育で第一外国語の教科書として用いられている《新编日语》の指示詞を調査する。第7章では第二外国語の教科書として使用されている《标准日本语》の指示詞を調査する。

第6章《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》における用法別指示詞の全数調査

本章は《新编日语》Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの4冊を通して、各指示詞の提示率、提示順、指示用法を総合的に調査する。まず、教科書を選ぶ理由と調査する目的を述べ、調査方法を示す。次に、《新编日语》を構成する6項目の「単語」「前文・本文」「会話」「文法解説・文法説明」「読解文・応用文」「練習問題」から指示詞を用いた例を採集し、指示詞の用法を「現場指示・文脈指示・観念指示」に分け、項目別に各用法の指示詞の提示率などを統計する。場面設定や、文脈があるかどうかを確認しながら、一冊ずつ指示詞の提示状況を把握した上で、用例を統計し、4 冊を合わせて分析する。最後に、《新编日语》の4冊の調査、分析をまとめ、教科書の問題点に基づく日本語教育への提案を述べる。

6.1 調査目的

教室習得環境における成人学習者の学習方法においては、外国語の文法や語彙を自国語に訳して習っていくのが一般的である。その際、指示詞のように日本語と中国語が対応していない場合には、学習者は困惑し、誤用を起こしやすい。特に日本語の文脈指示用法に関しては、初級レベルのものであっても、中級レベル以上の学習者でも誤用を起こすということが中国の大学で行われた日本語指示詞のアンケート調査結果から明らかになった。[1)]

そこで、本章では学習することが困難である指示詞を中国の日本語教科書ではどのように取り扱っているかに焦点を定めた調査・分析を行う。日本語教育の視点から見た指示詞研究の一環として、日本語教育における効果的な指示詞指導を考えることを目指した教科書調査を行い、より合理的な指示詞の提示方法を見つけ、中国人学習者向けにわかりやすい教材を提供できる方法を探ることが目的である。

6.2 調査対象及び方法

近年中国では日本語を学ぶ人が増え、各大学において様々な教材が模索され使用されている。今回、調査対象として選んだのは中国語で説明されている日本語教科書《新编日语Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ》合計4冊である。これらは先に触れたアンケート調査対象に使われている教科書であり、中国政府に認められた中国教育部「十一五企画」[2)] 高等日本語教育用教材である。現在日本語を第一外国語として設けている大学で数多く使用されているものでもある。《新编日语》の各章は主に「単語」「前文・本文」「会話」「文法解説・文法説明」「読解文・応用文」「練習問題」から成り立って

いる。修士論文(邱麗君　2008 未刊行)では「文法解説・文法説明」の項に限って調べたが、精密なデータを集められなかったため、今回は単語、前文など 6 項目に現れた指示詞をすべて調査する。あらゆる面から指示詞の提示状況を把握した上で、抽出した「コ・ソ・ア」系指示詞が指し示す対象の種類を日本語記述文法研究会（2009）により、「事物・人・場所・時間・修飾関係」に大別し、各指示詞の指示用法を「現場指示・文脈指示・観念指示」に分ける。また、指示詞が使用された文は「会話文・地の文・独話・その他」に分類して考察する。

6.3 教材の内容分析と比較

本節は《新编日语》Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの各冊を通して具体的な分析と比較の内容を述べる。まず各冊に文法として提示されている指示詞は指示用法別に挙げながら分析する。それから、1 冊の中の各課では「単語」から「練習問題」の 6 項目で提示された指示詞を算出する。それによって、1 冊に現れている指示詞の数がわかる。また、「単語」以外に抽出した指示詞の例に文脈や場面設定がないケースが存在するため、指示用法の使用率図に示したように「判断できない」というパターンと上述した 3 つの指示用法を分けて調べる。さらに、提示率が高い順に教科書に現れた全ての指示詞を指示用法別に分けて詳細に統計し、分析する。それによって、1 冊にどの指示詞が最も多く提示されているかを明らかにし、当該指示詞はどの項目でよく現れているかもわかる。そして、当該指示詞のどの指示用法が多く用いられているかも示すことができる。

6.3.1《新编日语Ⅰ》分析と比較

《新编日语Ⅰ》は主に日本語科の一年生が使用する教科書であり、学習時間は半年程度なので日本語学習の入門教科書または初級日本語学習者のテキストと言える。重要だと思われる文法や文型を《新编日语Ⅰ》は「文法解説」に載せており、指導する際には教師も時間をかけて「文法解説」に載っている内容通りに教えている。【表 6-1】は「文法解説」に提示された指示詞の例文を整理したものである。【表 6-1】から明らかなことは、《新编日语Ⅰ》の「文法解説」では 4 課を通して、指示詞の現場指示用法を詳しく採り上げているが、文脈指示用法は「この・その・あの」と「これ・それ・あれ」を簡単に採り上げただけであるということである。つまり《新编日语Ⅰ》は指示詞の現場指示用法を学習文法のメインとして取り扱っていると言える。そして、「‥は‥です」「‥に‥があります」などの基本文型に用いるために、第一冊の第 1 課の「単語」という早い時期に、入門文法項目として「コ・ソ・ア」を採り上げて導入している。

第 2 課の「前文」では、「あの人は顧さんです。」「これはふくです。」「それもふくです。」「あれはほんです。」のように「これ・それ」などが使用され、「単語」の項目でも提示されて中国語の訳が付けられている。また、【表 6-1】に載せたように「文法解説」で事物を指し示す「これ・それ・あれ」の現場指示用法がまとめて書かれている。そして、練習問題にも十分に採り上げられている。第 3・4 課も第 2 課同様、語彙から文法、練習問題まで全面的に指示詞が提示され、初級レベルの範囲においてではあるが、密接に連繋させながら教えられていることがわかる。

一方，文脈指示用法は第 8 課から導入され、抽象的な概念の説明は多少あるが、「それ」と「その」しか例文を提示しておらず、「コ」・「ア」系指示詞の文脈指示用法には全く触れていない。【表 6-1】に示しているように、文法項目として採り上げられた指示詞は第 8 課までになっている。

それらのうち、第８課以外は、全て現場指示である。

【表 6-1】《新编日语Ⅰ》の「文法解説」に提示された指示詞の指示用法の分類表

《新编日语Ⅰ》		
番号	提出課と例文	用法
1	第2課「これ、それ、あれ」 ＜「コレ・ソレ・アレ」は～ですか。＞ ＜「コレ・ソレ・アレ」は～です。＞ 例：それはあなたの服ですか。（那是你的衣服吗?） はい、これはわたしの服です。（是的，这是我的衣服。） 李さんの服はどれですか。（小李的衣服是哪件?） 李さんの服はあれです。（小李的衣服是那件。）	現場指示
2	第3課「ここ、そこ、あそこ」 例：そこはしんしつですか。（那儿是寝室吗？） がくせいのクラブはどこですか。（学生俱乐部在哪儿？） がくせいのクラブはあそこです。（学生俱乐部是那儿。）	現場指示
3	第４課「この、その、あの」 例：このちずはあたらしいです。（这张地图是新的吗？） あなたのほんはそのつくえのうえにあります。 （你的书在那张桌子上。） としょかんはどのたてものですか。（图书馆是哪幢楼？）	現場指示
4	第5課「コソア」系指示詞の分け方 系列： コ系近称 ソ系中称 ア系遠称 ド系不定称 類別： 指示代名詞： 事物： これ それ あれ どれ 場所： ここ そこ あそこ どこ 方法： こちら そちら あちら どちら 連体詞： この その あの どの	現場指示
5	第８課「これ、それ、あれ」 「この、その、あの」 ＜「コノ・ソノ・アノ」＋名詞は～です。＞ ＜「コレ・ソレ・アレ」は～ですね。＞ Ａ：パーテイーもありました。賑やかで楽しかったです。 そして、その日はちょうど私の誕生日でした。 （有晚会，非常热闹，愉快。而且那天正好是我的生日。） Ｂ：それはよかったですね。 （那不错啊。）	文脈指示

《新编日语Ⅰ》の各課にある指示詞の具体的な使用状況から見ると、「単語」や「前文」などでは指示詞が用いられている課が限られていることがわかる。それに対して、「練習問題」は第2課から第20課に至る19課で大量に指示詞を使用しており、「練習問題」の指示詞の提示率が最も高い。また、「これ」・「この」・「それ」・「その」・「あれ」・「あの」など各種の指示詞が使われている。例えば、以下のような例がある。

(1)この料理はお口に合うかあわないか食べてみてください。(《新编日语Ⅰ》: 356)
(2)その部屋にだれかいますか。 (ibid. : 123)
(3)これは先生のお荷物ですか。 (ibid. : 146)
(4)この病院の建物とあの病院の建物と、どちらが新しいですか。
(ibid. : 209)

以上の例文は全て現場指示である。まだ初級という段階なので非現場指示より現場指示のほうが多いと見える。練習問題では文脈指示が重視されているように見えるが、文脈がないため読み手はどの指示用法かが判断できず、あやふやな意味を読み取るしかない文が多い。例を挙げると、次のようなものである。

(5)あの先生はイギリスに行ってまだ帰っていません。 (ibid. : 406)
(6)この鉛筆は三本で百円です。(ibid. : 373)
(7)そのとおりにすれば間違いありません。(ibid. : 356)

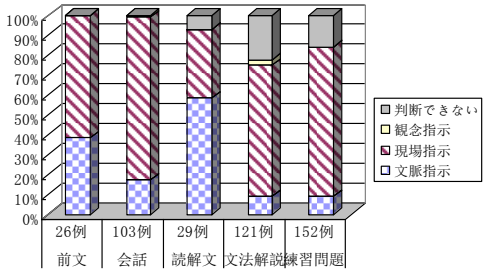
例(5)(6)(7)は第19課と第20課で提示された例文である。これらの例文は文脈指示用法か、観念指示用法か、文脈がないので判断できない。一方、文脈がある例文では簡単な現場指示用法を中心として扱い、文脈指示用法は極めて少なく、わずか16例だった。

(8) 六時十五分に運動場へ行きます。そこで十五分ぐらい朝の運動をします。(ibid. : 106)
(9) いい友達と四人でレストランで食事をしました。そのレストランは静かできれいです。
(ibid. : 356)
(10)青木さんはいろいろな趣味をもっています。その中で一番好きなのはスポーツです。
(ibid. : 356)

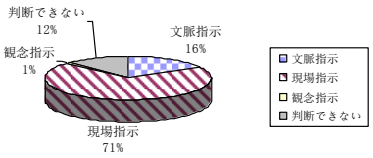
例(8)(9)(10)は文脈指示である。「そこ」は前の文脈の運動場を指し示す。「そのレストラン」はいい友達と四人で食事をしたレストランを指している。「その中」は青木さんがもっているいろいろな趣味を指し示す。

指示詞を使用した例文は多いが、現場指示より文脈指示のほうが少ないという現象は「練習問題」に存在するだけではない。《新编日语Ⅰ》を見てみると、「文法解説」の121例では文脈指示は僅か11例であり、現場指示は80例ある。「練習問題」の152例では文脈指示はたった14例であり、114例は現場指示で、現場指示が多く使用されている。「読解文」では文脈指示用法のほう

が多いが、全体に例文が 29 例と少ないため判断材料にならない。



【図 6-1】
《新編日语Ⅰ》の各項目
における指示用法の使用率



【図 6-2】
《新編日语Ⅰ》に用いられた
指示用法の使用率

【図 6-1】は《新编日语Ⅰ》の各項目における指示詞の指示用法の使用状況を示したものである。「前文」に現れた指示詞のうち、現場指示は約 38%、文脈指示は約 62%になっている。「会話文」では現場指示は約 82%、文脈指示は約 17%で現場指示が大きく上回っている。「読解文」で用いられているのは文脈指示が 59%弱に達する。「文法解説」については現場指示が 66%を超えているが、文脈指示は 10%に満たない。「練習問題」では現場指示が 75%、文脈指示 10%弱であり、「文法解説」と同様に現場指示が文脈指示より遙かに多く用いられている。つまり、「読解文」では文脈指示が多く用いられ、「前文」「会話文」「文法解説」「練習問題」では現場指示が多く用いられていることが明らかである。【図 6-2】は五項目全体の指示詞の指示用法の使用率を示している。全体から見ると、《新编日语Ⅰ》では現場指示が文脈指示より多く用いられ、前者は 71%を示しているが、後者は 16%に留まっている。現場指示は《新编日语Ⅰ》の提示重点として取り扱われていることがうかがえる。一方観念指示は 1%であることから、たまたま使われただけだと推察される。

《新编日语Ⅰ》で各指示詞が「前文」や「会話」など各項目で使われた状況の調査結果によると、第一冊によく使用されているのは「この・これ・それ・その・あの・ここ・そこ」である。使用された指示詞のうち、「この」の使用数は 106 回に達するのに対し、「こんな」と「あんな」はわずか各 2 回に過ぎない。「練習問題」に使われた指示詞は極めて多く、例えば「この」は約 5 割近くが「練習問題」に用いられている。しかしながら、「練習問題」に扱われている指示詞の例文は、文脈がないため、現場指示か文脈指示かを見分けることができない。また、「文法解説」にある指示詞の例文も文脈がないケースが多い。「前文」に用いられている例文の中から選んだ文なら意味が通じるが、いきなり挙げられた文では意味や指示用法の確認ができない可能性がある。使用頻度をみると、第 1 位は「この」、第 15 位は「あんな」となっているが、実際の生活でよく使用される指示詞がこのような順番になるかどうか疑問である。言語の習得と実践は緊密に繋がっており、実際の使用率が高い順に教科書で提示すれば、学習者はコミュニケーション能力をアップさせることができ、誤用を減らす有効な方法になると考えられる。

最も注目したいのは、本来《新编日语Ⅰ》は現場指示を中心として、文脈指示は入門編程度と

いう主旨で、観念指示は導入していないにもかかわらず、「練習問題」や「文法解説」の例文に観念指示が扱われている点である。これは学習者を混乱させる要因となっており、この教材の問題点だと言えよう。

6.3.2《新编日语Ⅱ》分析と比較

《新编日语Ⅱ》の各課における指示詞別の使用状況を見ると以下のような特徴があげられる。まず、「単語」では、提示されているのは「コ・ソ」系指示詞に過ぎないことと「この・その」が数多く用いられていることである。また、「会話文」ではほぼ「コ」・「ソ」系指示詞が使用され、「ア」系指示詞はあまり見当たらない。そして、第一冊と違って、第8課「そのうち」・第10課「この間」・第12課「そのかわり」・第14課「このたび」と「これほど」のように、修飾を表す指示詞を用いて時間や程度などを表す例が提示され、内容的にも難しくなっていっていることが窺える。

次は現場指示として用いられた具体例を取り挙げながら、「前文」や「読解文」などの項目にある指示詞を分析してみる。

(11)中島:すみません。靴売場はどこですか。
店員:靴売場ですか。ここをまっすぐ行くと、エスカレーターがあります。エスカレーターのところを右に曲がってまっすぐ行くと、左側にあります。
(《新编日语Ⅱ》:26)

例(11)の「ここ」を見ると、第一冊にあった「ココは公園です。」のような簡単な用法から日常生活で道を聞く場合によく使用する「ココを曲がる・ココをまっすぐ行く」などに変化してきていることがわかる。

(12)店員:そうですか。これなんか、いかがでしょうか。
中島:うーん。こういうデザインはちょと。
店員:では、これは?サイズは二五。五センチですが。(ibid.:27)

(13)係:ああ、方向が反対ですよ。マイナスの方を向こう側に、プラスの方をこっち側にしてください。
周:こうですか。(ibid.:27)

また例(12)(13)のように「こう」なども用いられている。第一冊より指示詞の種類が増加していると見られる。一方、下に記した例文のように、極簡単な初級レベル学習者に向けた「この…は…」「これは…」の用法も少なくない。特に「文法解説」ではそのような現象が著しい。

(14)この魚は死んでいる。(ibid.:110)
(15)この人はやせている。(ibid.:110)

(16)**この**子の顔はお父さんに似ている。(ibid. : 110)
(17)**この**本はもう読んでしまいました。(ibid. : 110)
(18)**これ**は記念に残しておいてください。(ibid. : 110)
(19)**この**本は劉先生によって翻訳されました。(ibid. : 204)
(20)**この**本は田中さんから借りたのです。 (ibid. : 206)

ほぼ全ての課の「文法解説」では指示詞が大量に使用されているが、第一冊のようにまとめて指示用法を教えることはなく、他の文法事項を説明する際にたまたま使用されたケースが多かった。

(21)**ここ**は買い物便利です。(ibid. : 86)
(22)**この**本は一年生には難しいですね。(ibid. : 86)
(23)来年、**この**建物を図書館にするそうです。(ibid. : 87)
(24)**そんな**ことがないとは限りません。(ibid. : 89)
(25)**その**ことは李さんと相談したらいいです。(ibid. : 91)

上記の 6 つの例文は第 4 課の「文法解説」で提示された例であり、使用された指示用法は全て第一冊でまとめて教えられたものである。「ここ」の用法は第一冊の第 3 課に載せられている。また、「この・その」の用法は第 4 課に載せられている。

「読解文」では指示詞の使用はほかの項目と較べれば多くないうえに「コ・ソ」系が中心に扱われている。また、《新編日语Ⅱ》の「読解文」は主にやや長い文章で成り立っているので、用いられた指示詞は文脈がないケースがすくない。

(26)日本の会社は共同体で、**そこ**に勤める社員は協力し合って仕事をしなければなりません。(ibid. : 352)
(27)日本人はよく会社の人と酒を飲みます。酒を飲んだり、カラオケで歌ったりすることによって仕事のストレスを解消したり、互いのコミュニケ-ションを深めたりするのです。**それ**によって人間関係がスムーズになれば、結果的には会社によい影響をもたらすというのが、日本的な考え方です。 (ibid. : 352)

(26)の「そこ」は前の文にある「日本の会社」を指し示す文脈指示である。(27)の「それ」も文脈指示で、前の文に述べた日本人がよく会社の人と酒を飲んだり、カラオケで歌を歌ったりすることを指す。

「練習問題」で使用された指示詞は「会話」には及ばないが、全項目中二位になる。そこでは、「コ・ソ」系指示詞がメインとして取り扱われていることと、文脈がない例文が多いことが注目される。

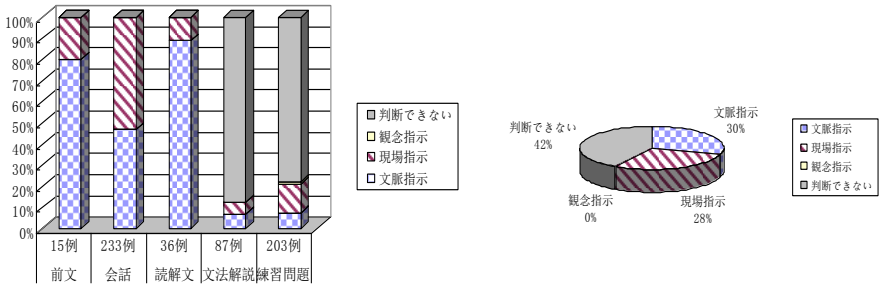
(28)**その**すばらしいニュ-スを聞いてみんなうれしくてたまりませんでした。(ibid. : 65)

(29)こんな結果になったことはみんなが意外に思います。(ibid.：71)

(28)(29)は文脈がないため会話文か地の文かさえ判断できず、指示用法はもっと把握できない。このような、内容から会話文か現場指示かがはっきりしない例文は「練習問題」の8割を超える。

(30)それを聞いて、ますます行くのがいやになりました。(ibid.：143)
(31)このテープは何回も聞きましたが、やはりわかりません。(ibid.：145)
(32)そこは危ないですから、入らないでください。(ibid.：235)
(33)こんな大きい荷物を背負って歩くのはたいへんですね。(ibid.：235)

(30)の「それ」は一見文脈指示に見えるが前に文脈がないため正確に判断できない。(31)の「この」は現場指示だと思われるが話し手と聞き手はどんな場所にいるか、現場にテープがあるかどうかがわからないため、本論では指示用法が判断できないとする。同様に(32)の「そこ」と(33)の「こんな」も現場指示だととれそうだが、文脈がないため厳密には現場指示と言えない。【図6-3】は《新編日语Ⅱ》の各項目で用いられる指示詞の指示用法の使用率を示したものである。「前文」で使用された指示詞の文脈指示用法は75%を上回っているが、現場指示は25%に届かない。233例の「会話」では文脈指示は40%を超え、現場指示は約60%近くになっている。36例の「読解文」では文脈指示は極めて多く約85%であり、現場指示は約15%で顕著な差が認められる。87例の「文法解説」では文脈指示は極少なく5%弱に過ぎず、現場指示も5%弱になっている。ここで注目すべきところは、例文に文脈がないため指示用法が判断できない文が約90%に上っていることである。「練習問題」も「文法解説」と同様で、指示用法が判断できない文は数多く80%に達しており、文脈指示はほぼ5%、現場指示は15%未満である。観念指示は《新編日语Ⅰ》と提示されかたが近似しており、1%にもなっていない。ここでわかったのは、《新編日语Ⅱ》の「前文」「会話」「読解文」では文脈指示の使用頻度が高いが、「文法解説」と「練習問題」では使用頻度が低いことと、観念指示は提示されているが学習者に学ばせるのではなく、たまたまに使われたにすぎないことである。【図6-4】は五項目全体の指示詞の指示用法の使用率を示している。《新編日语Ⅱ》で扱われた指示詞の例文の中では用法が判断できない例が最も多く42%を上回る。文脈指示と現場指示には大きな差が見られず、前者は30%を占め、後者は28%である。《新編日语Ⅰ》は現場指示用法を中心としていたが、《新編日语Ⅱ》では文脈指示が現場指示とほぼ同程度に用いられており、用法の提示のしかたに変化が見られる。



【図 6-3】
《新编日语Ⅱ》の各項目
における指示用法の使用率

【図 6-4】
《新编日语Ⅱ》に用いられた
指示用法の使用率

《新编日语Ⅱ》における各指示詞の指示用法の全調査結果からわかるように、《新编日语Ⅱ》では「こちら」を提示しているのに、「そちら・あちら」を取り挙げていないというのは問題である。また、同じ体系の「この・その・あの」であるが、「この」だけが 188 回も扱われていて、「その」は 73 回、「あの」は僅か 34 回に過ぎない。そして、極めて少ないのは「あんな」で、わずか 2 回しか使われていなかった。ここから明らかになったのは、第二冊では指示詞を体系的に理解させるために取り立てて教えるのではなく、たまたま例文に指示詞も入っているというだけのことだということである。

《新编日语Ⅱ》を使用する学習者は日本語科の一年生で、日本語の学習経験は半年から一年程度に当たる。《新编日语Ⅰ》は主に現場指示を中心として提示し、第 8 課で文脈指示用法を導入しているので、《新编日语Ⅱ》では《新编日语Ⅰ》の後に続いて現場指示用法を深め、ただ「これは…です」という入門編程度のところに止まらず、中級レベルの現場指示用法も重視されるべきだろう。このことは、物理的距離だけでは説明することのできない、心理的距離や縄張りに関わる指示用法を徐々に学習者の意識に浸透させ、学習者が中級・上級にステップアップするための基盤になる。[3)]

また、《新编日语Ⅱ》は文脈指示を中心にして提示すべきだと一般に思われている。しかしながら、全体的に何を中心に提示しているかがわかりにくい。第一冊と同じく、数多くの例文には文脈がないため、現場指示か文脈指示か観念指示か区別することができず、読み手は推測しながら正解を探るしかない。そして、観念指示は導入していないのに例文に出しているため、学習者は観念指示が現場指示か文脈指示に属していると誤解しやすい。

調査の結果により、指示詞用法に関しては《新编日语Ⅱ》は学習者の学習段階を考慮しておらず、《新编日语Ⅰ》との一貫性がなく、また、各課の連絡も密接ではなく、指示用法の整合性が配慮されていないと言える。

6.3.3《新编日语Ⅲ》分析と比較

《新编日语Ⅲ》にある指示詞が各課に提示された状況について、まず「単語」から見ると、指示詞が用いられているのは第 10 課までである。また、「あんな」は連体詞と定義し、「この辺り」は“这里/附近/这种程度”(ここ・このあたり・この程度)と訳している。しかし、第 5 課に用いられている「この辺り」の例文は「この辺りでいいですか。」に過ぎない。それは場所を表す「ここ」を意味する現場指示である。肝心な「この程度」の意味で使われた例文がない。そして、現場で何か発見した際に驚いた表情で物を指して言う「それそれ」も新たな語彙として第 8 課で取り扱っている。だが、これはそもそも現場指示詞「それ」を重ねて使用したものなので、未習語彙として挙げる必要はないだろう。「そのうちに」と「そうして」はそれぞれ副詞と接続詞に定義されている。第 9 課では「その都度」と「その折り」を慣用表現として扱い、“每回/每次(每回・

毎度)”及び“那时(そのとき)”と中国語で訳している。しかし、そうすると指示詞との関係がまったく見えなくなる。結局、第三冊の「単語」では、指示詞は体系的に取り扱われず、副詞や接続詞として紹介されているのである。

「本文」では指示詞を若干用いているが、第二冊と同じで、「コ・ソ」系指示詞に過ぎない。そして、文脈指示と現場指示を比較すると文脈指示のほうがずっと多い。例えば、次のような例である。

(34)封筒やはがきの上部にある口は、郵便番号を書き入れるところです。**それ**がない場合にも表書きの上部に書き込みます。(《新编日语Ⅲ》:22)

(35)晴れたり、曇ったり、雨が降ったり、雪が降ったり、風が吹いたり、天気は様々に変化します。**この**天気の変化は、私たちの生活に深い関係があります。 (ibid.:68)

(36)素朴な、少年少女のなぞなぞ遊びは、すっかり下火になってしまったように思いますが、どうでしょうか。もしそうだとすれば、**その**なぞなぞ遊びに代わる遊びは、今のみなさんにとっては何でしょうか。 (ibid.:114)

(34)の「それ」は前文脈に書かれている封筒にある郵便番号を書き入れるところを指し示し、「この」は晴れたり、雲ったり、雨が降ったりなど変化する天気を指す。(36)の「その」は素朴な、少年少女のなぞなぞ遊びを指している。三つの例文は全て文脈指示である。また、第三冊から徐々に観念指示が導入されており、「本文」では若干取り扱われている。例えば、以下はその例である。

(37)「**この**木」が一度出てしまったので、次に「**この**糸の色は、ナアニ」というのはすぐに「紫」とこたえられてしまいました。 (ibid.:114)

例文に用いられた二つの「この」は全て話し手の頭の中にある物を指し示す場合に用いる観念指示である。

「会話」は「練習問題」に比べれば、指示詞の使用が少ないが、全項目中第二位になる。そこでは文脈指示、現場指示、観念指示のすべてが用いられている。また、現場指示と文脈指示の「こう」を一冊でまとめて教えている。

(38)そして新しいフィルムを**こういう**方向で入れるんです。(ibid.:91)

(39)やぎは、きつねの言うことを、すこしも変だと思わないし、なんでも言うとおりになっています。わたしは、**こういう**性質は嫌いです。(ibid.:205)

(38)の話し手はカメラにフィルムを入れる際に説明するため「こういう」を用いて、現場にあるカメラを持ちながら話している。つまり現場指示である。次の例文(39)の話し手は山羊がなんでも狐の言うとおりになる性格を指して「こういう」を使用したので文脈指示だと言える。

「応用文」では「コ・ソ」系指示詞だけではなく、「ア」系指示詞も用いられる。第10課から

は指示詞の使用数が増える。第 20 課では 9 種類の指示詞を提示している。

(40)雪は夜になってもやみませんでした。**その**夜、貧しげな農家のうす暗い土間でなわをなっている男。(ibid.：429)
(41)きょう町へ行く途中、ツルを助けてやった、**あの**農夫です。縫い物をしているのは、その妻です。(ibid.：429)
(42)実は私は、**この**あいだ助けていただいた鶴でございます。(ibid.：433)
(43)娘は泣きながら外に出ていく。夫婦は、あわてて、**その**あと追う。(ibid.：433)
(44)**これ**は、何という織物かね。(ibid.：432)
(45)はい、あやしきにございます。**これ**を町へ持っていって、売ってください。
(ibid.：432)

以上の 6 つの例文は第 20 課にある指示詞を用いた例の一部である。第 20 課は日本の昔話『ツルの恩返し』を選んで、「応用文」として採り上げている。その昔話に指示詞が大量に使用されている。例文の「その夜」は夜になっても雪がやまない夜を指し、文脈指示である。「あの農夫」はツルを助けてやった農夫を指し、「その妻」は前の文に書かれている「あの農夫」の妻を示している。両方とも文脈指示である。次の「この間」「その後」も文脈指示である。(44)の「これ」は現場指示用法で、現場にある織物を指し示している。「応用文」の指示用法の中では文脈指示が最も多く、二位は現場指示で、三位は観念指示である。「文法説明」は最も多く指示詞を取り扱っている。そこには次のような例がある。

(46)いま**こっち**からそのロケット機にテレビ電話をかけて、メケメケを呼び出し、**そっち**へ電話するように言ってあげます。(ibid.：232)

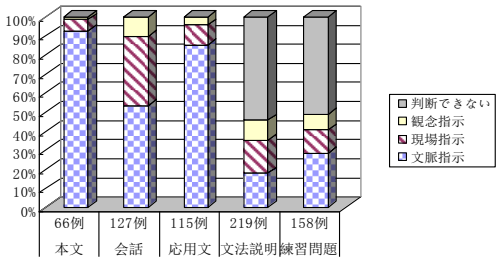
(46)のように、第三冊で用いられた現場指示は電話をかける場面で使う指示である。これは、話し手と聞き手がお互いに見える位置にいるのと違ってともに見えないので、やや難しい現場指示と言える。

「文法説明」と「練習問題」にはなにより用法の判断できない文が多く、それは全ての例文の 5 割を超える。以下の例は「練習問題」にある例文である。

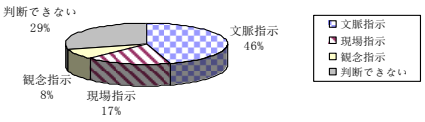
(47)**この**方法で練習すれば、必ず上手になります。ただし(　　)。
(ibid.：336)

(47)の「この」方法はどの方法を指しているかわからないので、指示用法が判断できない。【図 6-5】は《新編日语Ⅲ》の各項目で用いられる指示詞の指示用法の使用率を、【図 6-6】は《新编日语III》全体の指示用法の使用率を示したものである。【図 6-5】が示しているように、「本文」の 66 例に文脈指示が 90%と群を抜いて多く、現場指示は 4 例だった。「会話」では指示詞の例文が 127 例あり、その中で最も多いのはやはり文脈指示で約 50%だが、次に多いのは現場指示の約

40%である。残りは全て観念指示であり 10%を上回っている。「応用文」の 115 例で最多なのは文脈指示であり 85%近くとなっている。次いで現場指示が 10%を占め、観念指示は約 5%を示している。「文法説明」と「練習問題」の調査結果は類似し、用法の判断できない例文が極めて多く、前者は 54%、後者も 51%に達する。



【図 6-5】
《新編日语III》の各項目
における指示用法の使用率



【図 6-6】
《新編日语III》に用いられた
指示用法の使用率

また、「文法説明」にある文脈指示の例文は他の項目と比べると少なく約 18%にとどまるが、観念指示は 10%に上る。最後に「練習問題」では文脈指示 28%、現場指示約 12%、観念指示は 10%近くの順になっている。【図 6-6】によれば、《新编日语III》の中では文脈指示が最も多く 46%である。以下続いて、現場指示 17%、用法の判断できない例 28%、観念指示 8%となっている。《新编日语III》の指示詞の使用状況を《新编日语Ⅰ》・《新编日语Ⅱ》と比較すると、観念指示が次第に増加している。そして、文脈指示の使用率もこの二冊より高く、徐々に増加が認められる。一方、ここで用法の判断できない例文の数に着目したい。《新编日语》のⅠ・Ⅱ・Ⅲの 3 冊とも用法の判断できない文が主に「文法説明」と「練習問題」に集まり、《新编日语Ⅲ》の「文法説明」でそれが他を大きく引き離して 54%にのぼっているということは、中上級学習者が指示詞を間違える一因だと考えられる。

《新编日语Ⅲ》における各指示詞の指示用法の全調査結果でわかるように《新编日语Ⅲ》では場所・ものを指す指示詞と修飾関係を表す指示詞 15 種が用いられている。その中で圧倒的に多く使われているのは「この」176 回で、次は「その」131 回である。それに対して、同じ体系に属する「あの」は 56 回と少ない。また、「これ」は 82 回、「それ」は 68 回用いられているのに、「あれ」はわずか 4 回であり、場所を指す指示詞「こちら」は 10 回、「そこ」は 11 回に対して「あそこ」は 3 回だけと、差が目立つ。これらのことから、編集者には指示詞の提示頻度に対する配慮が欠けていると言えよう。

中国人学習者は「ア」と「ソ」系指示詞がそもそも理解しにくく誤用を起こし易い。編集者が「コ」系指示詞を数多く用い、「あれ」などを僅かしか採り上げていないことは、この教科書を使う中国人学習者にとって知識が偏ってしまう可能性が高く、不明なところは理解できないまま終わってしまうであろう。《新编日语III》は前二冊より文脈指示用法が増加しているが、各指示詞に文脈がなく用法の判断できない例文が使用されている。それは、例えば「この」と「そんな」

では約4割、「あの」では約3割、「こんな」では5割を上回っている。本来、前二冊を踏まえた文脈用法を中心に明確な場面を設定し、自然な会話や応用練習を重視しながら新たな文脈用法を提示すべきであるが、現状では文脈がないため、その文が会話文か地の文かも不明で、何の指示用法で使われているか判断できない。これでは学習者は《新编日语III》に提示されている指示詞を見ても意味が理解できないと思われる。教師側が全てこの教科書に頼って欠けた知識を補わないとすれば、学習者の指示詞の理解は初級レベルに留まる一途であり、指示詞の誤用は化石化するおそれがある。

6.3.4《新编日语IV》分析と比較

《新编日语IV》の各課における指示詞の提示状況は、前述の三冊と異なって「単語」に指示詞を用いていない。日本語科二年生の後期課程に使用する教材として「単語」に指示詞を提示する必要性がないと編集者が考えたのだろう。次に「本文」の指示詞を検討してみる。「本文」の第4課と第11課では指示詞を取り扱わず、第10課では4種類の指示詞を用い、第5課・第8課・第9課・第14課・第18課では3種類ずつの指示詞がある。第10課に提示された指示詞の例文を取り挙げる。

(48)日本では、農村にちゃんと一家が残り、**その**家から若者だけが離れて単身都会へ出て来るという形が多い。(《新编日语IV》: 202)

(49)農村から出てきた若者が大都市の工場へ入ると、互いにすぐ話も自由に通じるし、上役から言われた仕事も理解でき、一応こなせる。**こういう**若者が農村の自然の中で元気に育ち、大都会へ出てきて、安い賃金で勤勉に働き、貯蓄にも励んで、日本経済の推進力となってきたのである。(ibid. : 203)

(50)農村では、妻と子供、それに老人がさびしく家を守っているところも多い。若者達は都市に出て行き、父親もまた、一年の半分近くを都会へ出稼ぎに行っているのである。**この**ように過疎化した農村からは、もう今までのように若い労働力を送り出し続けることはできない。(ibid. : 203)

(51)**それ**どころか、農家の後継者不足自体が問題になっているのである。(ibid. : 203)

(48)の「その家」は日本の農村に若者以外が残る一家を指す。いわゆる前方照応指示である。(49)の「こういう」は農村で元気に育ち、大都会で安い賃金で勤勉に働き、貯蓄にも励んでいる若者を示し、後方照応指示である。(50)の「この」は若者達が都市に出て行き、妻と子供、老人が家を守っているところが多い農村の過疎化を指し示す。(51)の「それ」は過疎化した農村から、もう今までのように若い労働力を送り出し続けることはできないことを示す。国語辞書など「それどころか」を接続詞として説明するケースが多いが、本論文では「それ」を接続機能を持つ指示詞と称する。

「会話」で扱われる指示詞は「本文」より著しく多くなっている。第16課では7種類の指示詞を用い、第4課では6種類あり、第5課も5種類の指示詞が使用されている。「応用文」と「会話」を比較すると、「応用文」に使用された指示詞のほうがやや少ないが99例もあり、文脈指示を主

に取り挙げている。例文を挙げる。

(52) 記者：五十嵐勝さんは熱心に中国人留学生の世話をしてくださるそうですが、**その**きっかけはどんなことだったでしょうか。(ibid.：337)

(53) 五十嵐：わたしの店の近くに、中国人留学生のための船橋寮というのがありましてね、**その**留学生たちが野菜を買いに店へ来るようになったのがはじまりでした。
(ibid.：338)

(54) 記者：映画『北京の西瓜』に、五十嵐さんが成田空港で「林正中様の愛人様歓迎」と書いてプラカードをかかげて待っている場面がありましたが、**あれ**はほんとうのことですか。

五十嵐：そうですよ。留学生やその家族を成田空港へ送り迎えするのも、私の重要な仕事になっています。(ibid.：340)

(52)(53)(54)いずれも文脈指示であり、「そのきっかけ」は五十嵐勝さんが熱心に中国人留学生の世話をするきっかけを指し示す。「その留学生」は船橋寮というところに住む留学生を指し示す。(54)の「あれ」は映画『北京の西瓜』に映された五十嵐さんが成田空港で「林正中様の愛人様歓迎」と書いてプラカードをかかげて待っている場面を指している。

《新编日语Ⅳ》の「文法説明」はほかの項目より平均的に指示詞を用いているように見える。そして各課にある指示詞の種類も少なくない。その中で第6課が最も多い7種類を使用している。二位は第8課・第10課と第16課の6種類、三位は第13課・第15課の5種類である。例えば、

(55)彼は買った靴は十年以上ははき続けたし、食べ物を残し捨てるようなことは決してなかった。**そういう**小さな節約の積み重ねが今日の彼の財産を築いたといえる。
(ibid.：213)

(56)**あんな**人にやらせると手を焼くから、ほかの人にやらせたほうがいいよ。
(ibid.：218)

(55)は前方照応指示であり、(56)は観念指示である。前者は彼が買った靴を十年以上はき続けたことと食べ物を残し捨てない節約のことを指し示す。(56)は話し手と聞き手の記憶にあり、「あんな人」と言ったらともに誰を指しているか分かる。

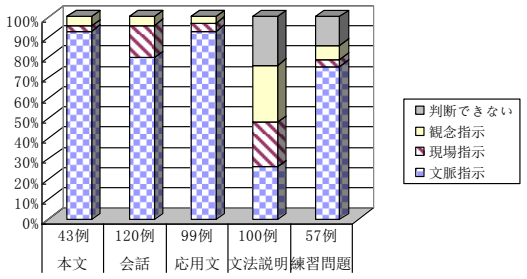
最後に「練習問題」のデータを分析する。《新编日语Ⅳ》の「練習問題」には指示詞の提示はそれほど多くない。指示詞が1種類だけの課もかなりある。例えば、第3課・第7課・第13課・第14課は「その」、第12課は「それ」のみである。指示用法から見ると、前述した項目と同様文脈指示が圧倒的に多かった。現場指示の使用率は観念指示と同様で、極小値になっている。これは四冊の中では唯一のことである。つまり、中級学習者から上級学習者になっていくうちに《新编日语》は徐々に現場指示の使用が減少していることが明らかになった。例を挙げる。

(57)課長： 山田君、この前頼んでおいた報告書どうなった。(ibid.：222)

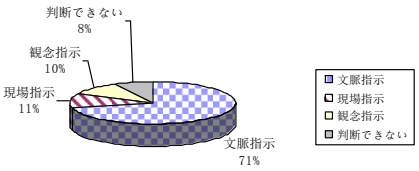
山田：ああ、**あれ**ですか。もうしわけありません。だいたいできているんですが、まだ、最後の部分が終わってなくて。　　(ibid.：222)

(58)庭の隅には、ビニルハウスがありました。…**その**となりには、豚や鶏を飼っている小屋がありました。　　(ibid.：226)

(57)の「あれ」は文脈指示である。課長と山田さんが知っている報告書を指している。



【図 6-7】
《新編日语Ⅳ》の各項目における指示用法の使用率



【図 6-8】
《新編日语Ⅳ》に用いられた指示用法の使用率

【図 6-7】は《新編日语Ⅳ》の各項目で用いられる指示詞の指示用法の使用率を、【図 6-8】は《新編日语Ⅳ》全体の指示用法の使用率を示したものである。

【図 6-7】から明らかなように、《新編日语Ⅳ》の各項目にある文脈指示は前 3 冊を大きく上回るが、現場指示は前 3 冊と比べて減少している。詳しく見ていくと、「本文」では文脈指示は約 93%に上り、現場指示は僅か 2%に過ぎない。観念指示は 5%弱を示している。「会話」では文脈指示が約 80%に達し、現場指示は 16%弱に留まっている。残り 4%足らずは観念指示である。「応用文」では文脈指示は多く 93%に及ぶ。ほかに現場指示は 4%あまり、観念指示は 3%足らずとなっている。「文法説明」では各指示用法がかなり平均的に用いられており、各指示用法の比率は文脈指示 26%、観念指示 28%、現場指示 22%、用法の判断できない例文 24%という順になっている。「練習問題」では文脈指示は 75%を占めている。現場指示は僅か 4%に過ぎない。残りは観念指示が 7%であり、用法の判断できない例文は 14%となっている。《新編日语Ⅳ》の各指示用法の使用率は【図 6-8】に示されている。文脈指示はほかの指示用法より非常に多く 71%を占め、現場指示は僅かに 11%である。観念指示は前 3 冊と比べて多く用いられ 10%に達している。指示用法が判断できない文はほぼ 8%である。

《新編日语Ⅳ》における各指示詞の指示用法の全調査結果から見ると、《新編日语Ⅳ》はほかの三冊と異なり、それぞれの指示詞が文脈指示に非常に多く用いられていることがわかる。例えば、「その」の 8 割、「それ」の 9 割の用法は文脈指示用法である。そのうち、最も使用率が少ない「あの」も 3 割を上回っている。また、観念指示もその他の三冊より多く提示されていることがわかる。ここから、《新編日语Ⅳ》は日本語中級者向けに編纂されており、選ばれた文章や会話

などはやや難しく、中級レベルか上級レベル近くになるため、文章・会話の中の指示詞は初級で学んだ簡単な現場指示と違い、文脈指示中心となっていると考えられる。また、《新编日语Ⅳ》では取り上げられた 14 種の指示詞が体系的であり、場所・事物を指し示す指示詞と修飾関係を表す指示詞の「コ・ソ・ア」三系列が全て揃えて提示されている。「こう」・「そう」のみは「ああ」が足りなかったが、それほど使用率が高い指示詞ではないので、テキストの整合性には影響を及ばさないだろう。すなわち本教科書の難易度が上がっているといえる。しかしながら、文脈指示や観念指示を文法として取り上げておらず、これらは単に「本文」や「会話」などに使われているだけである。《新编日语Ⅱ・Ⅲ》ほど多くないが文脈がない指示用法の例もある。《新编日语Ⅳ》を用いる学習者は主に日本語科の二年生で、学習経験は 1 年半から 2 年ぐらいである。本教科書は第一冊のみ入門編程度に指示詞を文法として導入しているが、ほかの三冊ではまとまった記述がなく、「前文」や「会話」の例文に用いられているだけなのが現実である。したがって、この《新编日语Ⅳ》を学んでも、文にある指示詞を一つ一つ真剣に考えなければ、学習者は初級レベルの現場指示と《新编日语Ⅰ》に提示された程度の簡単な文脈指示しか把握できない状態になるだろう。

6.4《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》の比較

《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》の四冊を通して、各指示用法を比べると、現場指示は第一冊 71%、第二冊 28%、第三冊 17%、第四冊 11%という結果になっている。したがって、《新编日语》では現場指示は主に第一冊で多く使用されていることが明らかになった。そして、学習者の学年が高くなるとともに現場指示の使用率が下がる傾向が認められる。次いで、文脈指示は第一冊では 16%だが、第二冊では 30%となり、第三冊では 46%に上り、第四冊では最も高く 71%に達している。この結果から、《新编日语》では文脈指示は第四冊でよく扱われていることがわかった。また、現場指示と正反対に、学習者の学年が高くなるにつれて文脈指示の使用率が徐々に上がる傾向が窺える。続いて観念指示の結果を比較して見ると、第一冊では僅か 1%に過ぎず、第二冊ではほとんど扱われていない。第三冊と第四冊では急に増加し、前者は 8%を占め、後者は 10%になっているように大きな変化が認められる。文脈指示用法と同様に学年が上がるにつれ、使用率が高くなっていく。最後に、例文に文脈がないため用法の判断できない例の率を観察すると、第四冊 8%、第一冊 12%、第三冊 29%、第二冊 42%の順になっている。一般的に第二冊と第三冊は一年生と二年生が使用する教科書であり、主たる文法事項がまとめられている。このように 4 割もの例文が指示用法の判断できない教科書を使われたら、指示用法の理解について混乱を起こす可能性が高いだろう。また、四冊とも用法の判断できない例文が「文法説明・文法解説」と「練習問題」に多く存在するのはこの教科書の一つの特徴である。

《新编日语》の四冊では 15 種類の指示詞が用いられている。その中で「この」は四冊合計で 570 回取り扱われていた。次いで多いのは「その」の 342 回である。最小値は「あんな」の 16 回である。連体修飾「この・その・あの」の提示率が高い。事物を指し示す「これ・それ・あれ」の中では「コ・ソ」系が多く提示され、「ア」系指示詞は 12 位で僅か 33 回だった。ここで問題になるのは、同じ事物を指し示す指示詞なのに、提示率に大きな差が見られることである。そしてまた、「ここ・そこ・あそこ」も同様に、頻度に差が見られる。これは普段よく使われる指示詞の頻度順と合致して

いるのか疑問である。さらに注目したいのは、トップになった「この」は 570 回取りあげられ、最下位の「あんな」は 16 回に過ぎないことである。つまり、本教科書では指示詞が釣り合いよく扱われていないと言える。

6.5 まとめ

《新编日语》は現場指示と文脈指示を区別して纏めており、第一冊で説明しているのはこの教科書の特徴だと思われる。第一冊では、現場指示が詳しく書かれており、日常生活によく使われている指示詞を全て採り上げ説明している。このような教え方であれば、中国の学習者は「コ・ソ・ア」系指示詞が現場指示の用法だけではないと理解できるだろう。しかし、《新编日语》の四冊では数多くの指示詞の例文を用いていながら、明確な場面設定がなく、文脈もないケースが多く、観念指示を導入していないのに例文に用いていたりするので、学習者は指示用法を混乱させる可能性が高い。また、本来教材で取り扱う文法は学習段階によって難易度が変わっていくと思われるが、《新编日语》では、現場指示用法の提示は第一冊の初級レベルに留まっていることと、第一冊から第三冊まで指示詞の難易度がそれほど変わらいことから、指示詞の指導は重視されていないと考えられる。

さらに注目すべきなのは、現場指示用法と比べて、文脈指示は文法として詳しく書かれておらず、説明の例文も少ないことである。ほかの三冊も極めて多くの文脈指示詞を扱っているが、指示用法を学ばせるのではなく、ただ提示した文章や会話にたまたま用いられているだけだと思われる。したがって、指示詞の提示に関しては各課の関連性と各冊の一貫性が欠けていることが一目瞭然である。四冊に例文が 2153 例あることは、指示詞の重要性を示唆している。しかし、《新编日语》は総合教程の教材として使用されているのに、学習者の学習段階を考慮せず、一貫性を持たせておらず各課の連絡が密接ではなく、指示用法の整合性が配慮されていない現実から、これを用いて勉強している学習者が指示用法を把握するのは困難だと言える。

6.6 教科書の問題点に基く日本語教育への提案と今後の課題

今回調査した《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》では、文脈指示より現場指示用法が重視されている。一方、実際の生活では現場指示用法が使われることは多くない。特に「これはなんですか。」「それはテープです。」というような会話は現実に成立し難いものであると木村(1992)は指摘している。したがって、どんな学習者に向けた教材であるとしても、文脈指示より現場指示用法を重視することは学習者にとって体系的な理解を齎すことにはならない。また、指示用法をはっきり区別せず、文脈がなく、場面設定がない例文を導入した場合、中国の学習者は、「コ・ソ・ア」系指示詞を使用する際に指示用法の違いを単なる印象の違いだけで処理してしまう恐れがある。

《新编日语》で日本語を学んでいる中国の学習者にアンケートした結果、学年を問わず文脈指示の間違いが圧倒的に多いことがわかった。これも文脈指示用法が日本語の教材において重要なものであるということを示唆している。中国の学習者にとって文脈指示用法は難解であり、日本語教材における提示にはより細心の注意を払うべきである。

注

第6章

1) 教科書の調査についての詳細は邱麗君 2008 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文「文脈指示を中心とした日中指示詞の対照」を参照。

2)「十一五」は、そもそも中国が調和ある発展とゆとりある社会の建設を目指す国家戦略であり、いわば「社会主義調和社会」を目指す重要戦略である。こうした文脈のなかで、中国教育部「十一五企画」は中国教育の持続的、かつ健全な発展を図ろうと策定されたものとみられる。

3) 以下の例文は中国人学習者のアンケート調査では過半数の上級学習者が誤用を生じたので、こういう話し手に近いのは「コ」、相手に近いのは「ソ」で簡単に理解できない現場指示は中級レベルとする。

（甲は乙の背中を掻いている。）

甲：痒いのは<u>ここ</u>？

乙：いや、<u>そこ</u>じゃない、もっと下。

甲：<u>ここ</u>？

乙：うん<u>そこそこ</u>。

調査資料

周平・陈小芬（2009）《新编日语Ⅰ》　上海外語教育出版社

周平・陈小芬（2007）《新编日语Ⅱ》　上海外語教育出版社

周平・陈小芬（2008）《新编日语Ⅲ》　上海外語教育出版社

周平・陈小芬（2008）《新编日语Ⅳ》　上海外語教育出版社

第 7 章《标准日本语初级(上.下)中级(上.下)》における用法別指示詞の全数調査

第 7 章は第 6 章の調査を補うため、独学で日本語を学ぶ学習者と教室で第二外国語として学ぶ学習者の教科書である《标准日本语初级(上.下)中级(上.下)》における用法別の指示詞の全数調査を行う。《标准日本语》の構造に沿って、「単語」「会話」「文法説明」「応用文」「練習問題」(「読解文」)の 5 つ～6 つの項目に分ける。第 6 章の調査と同様にその 5 つの項目から全ての指示詞の用例を採集し、指示用法と用例の文体を分けて考察する。このような作業を各冊で行い、1 冊ずつの調査と比較してから、初级(上.下)中级(上.下)四冊の結果を合わせて、それぞれの特徴をまとめる。

7.1 調査目的

日本語の指示詞に関しては佐久間（1936）を起点として、その後日本語学、国語学、言語学、日本語教育学などで膨大な量の研究が積み重ねられているにもかかわらず、中国の教育現場では学習者の指示詞の誤用が目立ち、初級学習者はともかく中上級者でもしばしば間違えているのが現状である。そこで、学習することが困難である指示詞が中国の日本語教科書ではどのように取り扱われているかに焦点を定めて、第 6 章では《新编日语》における指示詞の指示用法調査を行った。そこから明らかになったこととして、《新编日语》の四冊では指示詞の例文を数多く用いているが、明確な場面設定がなく、文脈もないケースが多くあり、観念指示を導入していないのに例文を用いたりする現象が特に目立ったことがあげられる。

《新编日语》は中国では日本語科の教科書として採用されているが、日本語を第二外国語として学ぶ学習者あるいは独習者の多くは《中日交流标准日本语》を教材として使う。本章では同じ日本語教科書である《中日交流标准日本语》での指示詞の取り扱いに関して同様な問題が存在しているかどうかに着目して調査を行いたい。そして、その調査結果を、中国で行った日本語学習者のアンケート調査で得た結果と合わせ、日本語が専門科目ではない学習者のために指示詞のよりよい教授方法を検討する。

本章では紙幅の節約のため、以下《中日交流标准日本语》は《标准日本语》、《中日交流标准日本语初级上》は《标日初级上》、《中日交流标准日本语初级下》は《标日初级下》のようにそれぞれ省略する。

7.2 調査対象及び方法

近年中国では日本語科の学習者以外にも社会人の学習者や第二外国語として日本語を学ぶ人が増えている。中国では様々な教材が販売されているが、よく売れているのは中国語の説明が付いている日本語教科書《标准日本语》である。その教科書の初版[1)]は 1988 年に出版され、今回の調査対象である《标准日本语》の初級は 2005 年に改訂された第二版である。中級の第二版は 2008 年 4 月に出版された。中国中央テレビ局日本語講座の教材としても用いられていた。そのため、中国人学習者においてはその教科書を知らない人がいないほど注目された。

《标准日本语》は初級上・下と中級上・下の合計四冊である。《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》と較べればやや語彙は少なく、文法は簡単なレベルだが、現代日本人の日常生活に近い会話や応用

文を多く採りあげており、割りと使用しやすい教材だと思われている。《标准日本语》の初級上・下は主に単語、基本文、会話、文法説明、応用文、練習問題、読解文から成り立っている。その中の基本文は会話文と応用文から選んだものなので、基本文にある指示詞は省くことにする。《新编日语》と同じく、修士論文（邱麗君 2008　未刊行）では「文法説明」に限って調べたが、精密なデータを集められなかったため、今回は「単語」、「練習問題」など 6 項目に現れた指示詞を全て調査する。まず指示詞が使用された文は「会話文・地の文・独話・その他」に分け、指示用法を「現場指示・文脈指示・観念指示」に分類してから、指示対象を「事物・人・場所・時間・修飾関係」に大別して考察する。

7.3 教材の内容分析と比較

本節では《标准日本语》の初級(上. 下)と中級(上. 下)の具体的な分析と比較の内容を述べる。文法解説で提示した指示用法の実例を取り上げながら考察していく。また各冊の第 1 課から最後の課まで、表れている指示詞を項目別に統計する。どの課に指示詞がよく用いられているか、どの項目に指示詞が多いかを正確に把握することができる。さらに、その統計した指示詞の指示用法を確認する。《新编日语》と同じく 3 つの指示用法と判断できないものとに分け、4 つのパターンで確率を算出し、図で示す。そして、以上の調査した内容を指示詞の提示率が高い順で示し、その指示詞が各項目に出現している数と使用された各指示用法の数を明確に示し、確率を求める。この手順に沿って、《标准日本语》に用いられた指示詞を満遍なく調査する。

7.3.1《标日初级上》の分析と比較

《标日初级上》は《标准日本语》シリーズの初級レベルの導入部分であり、日本語学習の入門書と言える。この教科書が指示詞を如何に導入しているか、各指示詞の提示順番や、各指示用法の提示率などを調べる。まず《标日初级上》の文法として提示した指示詞の実例を挙げる。次に、挙げた実例を分析する。最後に、一冊を通して統計したデータをもとにして分析し、比較する。

《标准日本语》から取りあげた実例は(J…)のようにほかの例文と区別している。なお、(J…)にある例の訳は教科書のままになっているが、説明文の訳は筆者が加えたものである。

(J1)《标日初级上》　第 2 課　＜文法説明：33＞

1．これ・それ・あれは名詞です。

“これ”“ それ”“ あれ”是指示事物的词。相当于汉语的“这、这个”“那、那个”。汉语里有“这”“那 ”两种说法，而日语里有“これ”“ それ”“ あれ”三种说法。其用法如下（「これ、それ、あれ」は事物を指示する。中国語の“这、这个”“那、那个”と大体同じである。中国語には“这/那 ”と二種類の言い方があるが、日本語には「これ、それ、あれ」と三種類の言い方がある。その用法は以下の通りである。）：

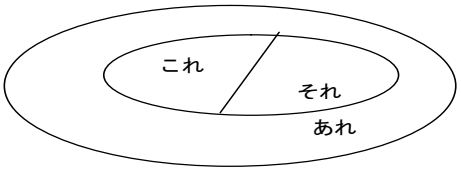
(1)说话人和听话人相隔一段距离，面对面时(話し手と聞き手が距離を置いて、向き合って話す場面。)

これ：距说话人较近的事物［说话人的范围、领域内的事物］(話し手に近い事物を指す。［話し

手の範囲、領域内の事物])

それ：距听话人较近的事物［听话人的范围、领域内的事物］(聞き手に近い事物を指す。[聞き手の範囲、領域内の事物])

あれ：距说话人和听话人都较远的事物［不属于任何一方范围、领域内的事物］(話し手と聞き手からともに遠い事物を指す。[話し手、聞き手の範囲、領域内に属さない事物])



【図 7-1】対立型の場合

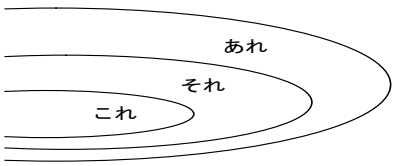
(《标日初级上》文法解説：33)

(2) 说话人和听话人位于同一位置，面向同一向时（話し手と聞き手は同じ位置にあり、同じ方向を向いて話す場面）

これ：距说话人、听话人较近的事物(話し手、聞き手に近い事物を指す）。

それ：距说话人、听话人较远的事物(話し手、聞き手にやや遠い事物を指す）。

あれ：距说话人、听话人更远的事物(話し手と聞き手にさらに遠い事物を指す）。



【図 7-2】融合型の場合

(ibid.:33)

(J2)《标日初级上》　第 2 課　＜文法説明：34＞

2. この／その／あの　　名は　　名です

修饰名词时，要用“この”“ その”“ あの”。其表示的位置关系与“これ”“ それ”“ あれ”相同

(名詞を修飾する場合、「この、その、あの」を使用する。話し手、聞き手との関係は「これ、それ、あれ」と同様である)。

このカメラはスミスさんのです。(**这个**照相机是史密斯先生的。)

その自転車は森さんのです。(**那**辆自行车是森先生的。)

あのノートはだれのですか。(**那**个笔记本是谁的。)

(J3)《标日初级上》　第 3 課　＜文法説明：　43＞

1. ここ／そこ／あそこ は　　名です

指示场所时，用“ここ”“ そこ”“ あそこ”。所表示的位置关系与“これ”“ それ”“ あれ”相同(場所を指示する時、「ここ、そこ、あそこ」を使用する。話し手、聞き手との関係は「これ、それ、あれ」と同様である)。

ここはデパートです。(这里是百货商店。)

(J4)《标日初级上》　第3課　＜文法説明：45＞

3. 礼貌语言(丁寧語)③

(1) こちら／そちら／あちら／どちら

“こちら／そちら／あちら／どちら”是“ここ／そこ／あそこ／どこ”的礼貌说法。“こちら／そちら／あちら／どちら”原本是表示方向的词语(「こちら、そちら、あちら、どちら」は“「ここ、そこ、あそこ、どこ」の丁寧な言い方。本来「こちら、そちら、あちら、どちら」は方向を表す言葉である。)。

受付はどこですか。(接待处在哪儿？)

あそこです。(在那儿。)

(J5)《标日初级上》　第7課　＜文法説明：91＞

2. そうですか

“そうですか”是应答时经常使用的说法。读降调时，表示理解了所听到的新信息。相当于汉语的“是吗”(“そうですか”は答える場合によく使用する言い方である。文末を下降調で読んだ時は、新しい情報を理解したことを意味する。中国語の「是吗」に相当する)。

いつもそば屋で昼ご飯を食べます。(我经常在荞麦面馆吃午饭。)

そうですか(↘)。(是吗。)

如果句尾读升调，则表示对对方所说的内容持有疑问（もし文末が上昇調であれば、相手が言った内容に疑問を持っていることを意味する。)。

3. そうですね①

用于同意对方的建议。注意“ね”的发音不能拉长，拉长后语意会发生变化（相手の発話に賛成することを表す。注意すべき点は「ね」の音を長く伸ばさないことである。長く伸ばすと別の意味に変わる)。

李さん、今日はそば屋へ行きますか。(小李，那咱们今天去荞麦面馆怎么样？)

そうですね。(好啊。)

(J6)《标日初级上》　第11課　＜文法説明： 137＞

4. そうですね②

第7课我们学习了“そうですね”表示同意对方提议的用法(第7课“表达及词语讲解3”)“そうですね”还可以用在疑问句后面，表示说话人在思考接下来要说的内容。另外，应用课文中“そ

うですね”前面的“うーん”也用于表示在考虑怎样回答（第 7 課で学習した「そうですね」は相手の言う事に賛成することを表す(第 7 課「表現および文法解説 3」)。また「そうですね」は疑問文の後ろに用いると、話し手がこれから話す内容について考えていることを表す。応用文にある「そうですね」の前の「うーん」もどのように答えたらいいかと考える時に使う)。

日本の食べ物はどうですか。（日本吃的东西怎么样？）
そうですね…、とてもおいしいです。でもちょっと高いです。（怎么说呢 …非常好吃，就是贵了点儿。）

(J7)《标日初级上》　第 14 課　＜文法説明： 174＞

第 2 课我们学习了指示物品的“これ/それ/あれ”（第 2 课“语法解释 1”），而指示状态，动作时则用“こう／そう／ああ（这样 / 那样)”应用课文中对小李的提问“速達で出しますか。(用快件寄吗？)”，吉田回答时是用“そう”承接了上面的内容，没有使用“速達で出してください”，而用了“そうしてください”。(第 2 課で学習したのは物事を指し示す「これ・それ・あれ」の用法であるが（第 2 課「文法解説 1」)、状態、動作を指す時は「こう・そう・ああ（这样 / 那样)」を用いる。応用文では李さんに「速達で出しますか。(用快件寄吗？)」と聞き、吉田さんは前の内容と関連させるため、“そう”を使い、“速達で出してください”ではなく、“そうしてください”と答えた。）

速達で出しますか。(寄快件吗？)
ええ、**そう**してください。(对，寄快件。)

(J8)《标日初级上》　第 21 課　＜文法説明：255＞

8. そのほうがいいです

动词的“た”和“ない形”可以后续“ほうがいいです”，名词及指示事物的词也可以后续“ほうがいいです”来表示比较、选择的意思（動詞の「た形」と「ない形」の後ろ、名詞や物事を指し示す指示詞の後ろに「ほうがいいです」を使うことによって比較、選択を表す。）
名词及“これ/それ/あれ”用“名词/これ/それ/あれ＋の＋ほうがいいです”的形式。“この/その/あの”用“名词/この/その/あの＋ほうがいいです”的形式。(名詞及び「これ・それ・あれ」の場合は「名词・これ・それ・あれ＋の＋ほうがいいです」の形になる。）

ビールのグラスは、**これ**と**あれ**とどちらがいいですか。（啤酒杯，**这个**和**那个**，哪个好？）
（拿起手边的杯子）**これ**のほうがいいです。（**这个**好。）

另外口语中谈到对方的事情时，可用“その”，即用“そのほうがいいです”表示接受对方的建议(また話し言葉では相手のことに触れる場合は「その」を用いる。つまり「そのほうがいいです」で相手の提案などを受け入れることを示す。）

ホテルを予約したほうがいいですか。（饭店还是先预约为好吗？）
そうですね。連休ですから，**その**ほうがいいですね。（是啊。因为是连休，先预约的好啊。）

《标日初级上》では文法として取り扱われた指示詞は現場指示である。第2課から「これ・それ・あれ」を提示し、融合型と対立型に分けて例文を採りあげ、図も加えながら説明している。説明文では融合型と対立型という専門用語を用いていないが、その二つの定義に沿って解説したことが明らかである。1988年に出版された《标准日本语》の初版も第2課から現場指示を提示したが、対立型用法だけを解説し、融合型用法には触れなかった。そこから改訂版は初版より現場指示の提示に関して詳細に述べており、日本語文法と一致していることが窺える。

同じ第2課の（J2）実例では「この・その・あの」を用いているが、「名詞を修飾する場合、『この、その、あの』を使用する。話し手、聞き手との関係は「これ、それ、あれ」と同様である。」と極簡単に触れているだけである。その説明文から「この・その・あの」の現場指示の対立型用法を導入していると言える。第3課では場所を表す「ここ・そこ・あそこ」を採りあげているが「この・その・あの」の提示方法と同様一言で終わってしまい、読み手は意味を探りながら判断するしかないだろう。第3課では「こちら・そちら・あちら」を「ここ・そこ・あそこ」の丁寧語として紹介し、方向として使用する例文を採りあげていないことがわかった。また第7課、第11課、第23課の「そうですか」、「そうですね」、「そうだ」も指示詞「そう」についてはまったく触れず、ひとつの決まった言い方として取り扱っている。もっとも説明が多い第21課の「そのほうがいいです」では「これ・それ・あれ」、「この・その・あの」と「ほうがいいです」の接続方法を詳しく解説している。

《标日初级上》では指示詞の現場指示を提示しているが、「これ・それ・あれ」以外の場所を指し示す指示詞、修飾する「この・その・あの」などについては非常に簡単に述べているだけである。これは、指示詞を文法として体系的に提示していないことを示唆するものである。

次に、1 冊に現れた指示詞の分析と比較を行うために、まず《标日初级上》の各課の指示詞の使用状況をみていく。指示詞を採りあげた密度が高いのは第2課と第3課、第14課で、五つの項目に全てある。初めて日本語を学ぶ独習者に、最も早く提示しているのは指示用法の現場指示だとわかる。そして、他の教科書と同様に「これ・それ・あれ」を中心として、現場指示用法を説明している。第2・3課では場所を表す指示詞と連体修飾する「この・その・あの」に簡単に触れている。「文法説明」や「応用文」、「練習問題」と比べて「単語」と「会話」に用いられる指示詞が非常に少ない。よって(J1)～(J8)挙げた実例以外はほぼ指示詞を提示するためではなく、ほかの文法や文型を説明するためにたまたま使われたものであることが窺える。例を挙げて見ていく。

(1)**この**パンフレット/もらいます(《标日初级上》: 187)
(2)**あれ**は航空会社の広告ですよ。ずいぶん派手ですね。
　派手ですが、わたしは嫌いじゃありませんよ。(ibid. : 194)
(3)小野：じゃあ、お汁粉はどうですか。いいお店を知っています。**そこ**に行きましょう。
　李：お汁粉？ぜひ、食べたいです。(ibid. : 211)
(4) ホテルを予約したほうがいいですか。

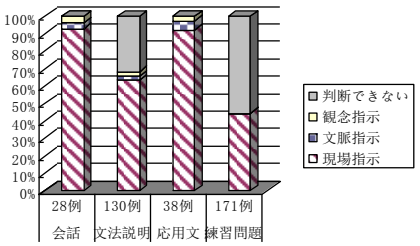
そうですね。連休ですから、そのほうがいいですね。（ibid.：255）

(5) あの人の名前は…ええと、あっ、そうだ、田中さんですよ。（ibid.： 275）

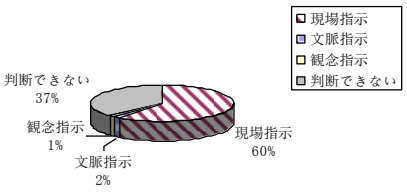
(1) は「てもいいですか」という文型を練習させるために用意された練習問題である。学習者は通常、指示詞「この」の存在を気にぜず、「もらいます」の辞書形を思い出せば、「て形」に変えて、「てもいいですか」と直接接続する。(2)の「あれ」は「広告」を指すために用いられたものである。説明文は全て「派手」に関わるものであり、前の文脈もなく、現場指示だと理解しても、「対立型」か「融合型」かは判断できない。(3)の設定は、初詣の帰りで小野さんが寒いと感じ、李さんを誘い温かいものを食べに行く場面である。小野さんが言った「そこ」は前の文脈に採りあげた「いい店」を指し示すため、文脈指示用法と言える。しかし、本格的に文脈指示を導入するのは《标日初级下》である。ここでは文脈指示を用いているが、説明がないため学習者を現場指示と混乱させる可能性が高いだろう。(4)では文脈指示の「そう」と「その」が使用されているが、その説明文では「その」＋「ほうがいいです」のような決まった言い方を提示している。即ち、「この・その・あの＋ほうがいいです」と「これ・それ・あれ＋の＋ほうがいいです」に分け、勧誘表現の提示を主として、指示詞と勧誘表現の接続法を説明するために指示詞に触れただけだと考えられる。(5)は観念指示の代表的な用法である。しかしながら、それまで観念指示用法をまったく導入していないのに、突然用いているので、学習者はすでに説明されている現場指示だと誤解してしまうだろう。

【図 7-3】は《标日初级上》の「文法説明」や「会話」など各項目にある指示詞の指示用法の使用状況を示したものである。「会話」に現れた指示詞のうち、現場指示は約 85%を超え、文脈指示と観念指示は各約 3%に満たない。「文法説明」では現場指示は 60%弱、用法の判断できないものは約 35%、もっとも少ない文脈指示と観念指示は各 3%弱である。「応用文」で用いられた現場指示の使用率は 92%に達する。文脈指示は約 5%、観念指示は約 3%である。「練習問題」では現場指示が 45%弱、用法の判断できないものは 55%強となっている。よって、各項目にある指示詞の用法では現場指示が多く用いられていることが明らかになった。文脈や場面設定がないため、指示用法を判断できないものは主に「文法説明」と「練習問題」に集まっている。《标日初级上》の「会話」と「応用文」は各々の場面があり、出来事をめぐって発話したり、述べたりしているので文脈がないケースは少ないのだろう。「文法説明」、「練習問題」は「会話」、「応用文」と異なり、短い文や会話でなければ膨大な量になるため、考慮しながら場面を設定しないと一つずつ繋がりのない文になってしまう。これも《标准日本语》だけ存在している問題点ではなく、前章で調査した《新编日语》にも目立つことである。

【図 7-4】は《标日初级上》にある五項目全ての指示詞の指示用法の使用率を示している。各指示用法では現場指示が圧倒的に多く 60%を示しているが文脈指示は 2%に過ぎない。現場指示が《标准日本语》の提示重点として取り扱われていることが示される。一方観念指示は 1%になっていることから、編集者がたまたま使っただけだと窺える。その他に、指示用法が判断できないのは 37%であり、全ての指示詞の 3 分の一を超えている。したがって、《标日初级上》では文脈や場面設定が重視されていないと言える。



【図 7-3】
《标日初级上》の各項目
における指示用法の使用率



【図 7-4】
《标日初级上》に用いられた
指示用法の使用率

さらに《标日初级上》における各指示詞の指示用法の悉皆調査結果を検討する。各指示詞が「応用文」や「会話」など各項目に使われた状況の調査結果によると、よく使用されるのは「この・ここ・これ・その・あの・それ」である。使用された指示詞では、「この」の使用数は 115 回に達するのに対し、「こう」と「そう」はわずか各 1 回に過ぎない。そして、「ここ」「これ」の使用回数は 54 回と 49 回になっている。また、「その」「あの」の使用回数は同じく 36 回に達する。使用回数が 10 回以下になっているのは「そこ・あちら・こちら・そちら・そんな・そう・こう」である。ここで注目したいところは、「そこ」は場所を表す指示詞なので、一般的に事物を指し示す「これ・それ・あれ」の次に提示される指示詞であり、使用率が高いと思われるが、《标日初级上》では 8 回しか採りあげられていないことである。このことは、「文法説明」で「これ・それ・あれ」を現場指示用法の代表として第 2 課から提示しながら、ほかの指示詞の現場指示用法には言及していないのと問題は同じである。

ここから《标日初级上》は現場指示を導入しているが、特定の指示詞に偏り、体系的な提示ではないことが明らかになった。これでは学習者は「これ・それ・あれ」以外の指示詞に関しては混乱するのではないだろうか。

7.3.2《标日初级下》の分析と比較

《标日初级下》の語彙数と学習難易度は、主に日本語能力試験 3 級レベルに相当する。《标日初级下》の既習者は日本語能力試験 3 級の取得を目指す。そのような教科書が提示する指示詞種類と提示順番に注目したい。

《标日初级下》の「文法説明」にある指示詞は実例(J9)～(J17)で 9 例ある。9 例のうち「それで」「そう言えば」「それに」「それじゃ」「それにしても」のような「ソ」系指示詞は 5 例も取り上げられている。そのうち指示詞「それ」を含む表現は 4 例ある。また、《标日初级下》は《标日初级上》と異なり、指示詞を文法として説明しておらず、ほとんど 1 つの語彙の意味や 1 類の文型を中心にして説明している。そして《标日初级上》と重複している箇所も見える。実例を取り上げながら、分析していく。

(J9) 《标日初级下》　第 25 課　＜文法説明：7＞

2. あれ［指人的词(人を指し示す指示詞)］

“これ／あれ”本来是指示事物的词，但有时也用于指人。不过由于其礼貌程度较低，所以直接用来指人时，只限于指示或介绍自己的家人或部下。当然如果本人不在场，或者在远处而听不到谈话时则不在此例。(「これ・あれ」は本来事物を指し示す指示詞であるが、たまに人物も指す。しかし、人を指す場合は丁寧度が低いため、自分の部下や家族を紹介する場合に限られている。本人がその場に居ない場合や遠いところに居て、話の内容を聞けない場合は例外である。)

あれは受付の戴さんですよ。(**那**是接待处的小戴。)

(J10)《标日初级下》　第 25 課　＜文法説明： 8＞

5. このあたり

“あたり”表示某一场所的周边，除可接在“この／その／あの／どの”等词后面外，还可接在一些表示具体场所的名词后面，如“新宿のあたり”。(新宿一带)(「あたり」はある場所の周辺を示す。「この・その・あの・どの」の後に付く他に具体的な場所を表す名詞に付くことができる。例えば“新宿のあたり”。)

このあたりはよく渋滞します。(**这**一带经常堵车。)

(J11)《标日初级下》　第 25 課　＜文法説明：8＞

2. それで

表示前面句子的事态为后面句子事态的原因、理由。(前文の内容が後文の出来事の原因や理由になる。)

日本には握手の習慣がありません。**それで**、つい握手するのを忘れます。(日本没有握手的习惯，**因此**，一不注意就忘记握手了。)

在应用课文中，以对方叙述的事情为理由，说话人使用“それで”引出其导致的结果。(応用文では、相手が述べた事を理由にして、話し手は「それで」で結果を話し始める。)

今日から光デパートは新春セールなんです。(从今天起，阳光百货商店新春大减价。)

―ああ、**それで**、朝からお客さんがたくさんいたんですね。(**原来如此**，所以从早晨起顾客就很多啊。)

“だから（所以)”也表示原因，理由。但与“それで”相比，其语气较强，且后面可以是表示祈使或推测的句子，而“それで”则不行。(「だから（所以)」も原因や理由を表す。しかしながら、「それで」と比較すると、前者は語感が強く、文末に命令形や推量形を使用できるが、「それで」は使えない。)

(J12)《标日初级下》　第 27 課　＜文法説明：27＞

5. そう言えば

由正在进行的对话或说话现场的某种情况联想到另外一些情况时使用。应用课文中，小戴谈及公园而回忆起孩提时代的事情，因此用了“そう言えば”。(話している内容やその現場のことから

ほかの事を連想できる場合に用いられる。応用文では戴さんは公園について話しているうちに、幼少時代の事を思い出し、話し始めたので、「そう言えば」を使用する。）

そう言えば、小さい時、よく祖母と一緒に公園へ行きました。（**说起来**，我小时候常常和祖母去公园。）

(J13)《标日初级下》　第 28 課　＜文法説明：37＞

2. それに

用于前后句的内容为累加关系。多见于口语。（後文は前文に内容を加え、繋げている。よく話し言葉で用いる。）

陳さんに不動産屋さんを紹介してもらいました。**それに**、李さんや馬さんもいろいろとさがしてくれています。（老陈给我介绍了一家房产公司。**而且**，小李，小马也都在帮着找呢。）

(J14)《标日初级下》　第 30 課　＜文法説明：63＞

2. それじゃ

是“それでは（那么）”的比较随便的说法，用于口语。（「それでは（那么）」ほど丁寧ではなく、砕けた言い方である。よく話し言葉で用いる。）

甲：どうして昨日来なかったですか。（昨天为什么没来啊？）

乙：熱があったんです。（发烧了。）

甲：**それじゃ**、仕方ないですね。（那样的话，就没有办法了。）

(J15)《标日初级下》　第 33 課　＜文法説明：99＞

3. それにしても

用于尽管认可了作为前提的某种情况或事项，但说话人仍有另外的感觉或者认识。应用课文中的“大勢並んでいるわね”说的是虽然机场的拥挤是正常情况，但今天的拥挤程度也太不寻常了。另外，第二个例子表示尽管森说要晚到，但是也实在太晚了。（前提状況や事柄は理解できるが、それでも話し手は自分なりの考え方がある。本文の「大勢並んでいるわね」という言葉は空港の混雑は普通の状況だが、今日はいつも以上に混雑していることを意味する。例 2 の森さんは遅れると言ったが、まさかそんなに遅れると思わなかったというニュアンスがある。）

それにしても，大勢並んでいるわね。（要说，这排队的人可真多呀。）［自言自语（独り言）］

(J16)《标日初级下》　第 34 課　＜文法説明：110＞

5. あちこち

表示多种场所或多个方向。本来的形式是“あちらこちら”，在会话中一般短缩为“あちこち”或“あっちこっち”。（多数の場所や多数の方向を表す。本来の形は「あちらこちら」であるが、話

し言葉では省略して「あちこち」あるいは「あっちこっち」になる。）

夏休みに**あちこち**旅行しました。（暑假我到**各处**去旅游了。）

(J17)実例　《标日初级下》　第 47 課　＜文法説明： 257＞

1. あっ、そう

是“ああ、そうですか”的较随便的说法。只能用于同辈之间，或对地位、年龄、身份比自己低的人使用。应用课文中，是东京总公司的总经理对部下加藤分公司经理这样说的，所以没有问题。（「ああ、そうですか」の砕けた言い方。目上の人や上司には使えず、身分や地位が同じ位の人や地位・年齢・身分が自分より低い人にしか用いない。応用文では、東京本社の社長が部下である子会社の社長加藤に使用しているので、正しい用法である。）

小野さん、ぼく、残業があるから、先に帰って。（小野，我要加班，你先回去吧。）
―あっ、そう。じゃあ、お先に失礼。（噢，是吗？那我先走了。）

《标日初级下》では、文法として取り扱われている指示詞の指示用法は主に文脈指示であるが、「文法説文」では文脈指示用法に触れず、文型や接続詞を解説している。第 25 課の「あれ」と「このあたり」は現場指示用法で、前者は初級上で提出された事物を指す「あれ」と異なり、人を示す。後者は「あたり」を提示するため、「この・その・あの」を持ち出したと見られる。第 27 課の「そう言えば」と第 33 課の「それにしても」の提示法は極めて類似し、両者とも用いる場面を説明してから、その課で使用された例文だけに重点を置いて中国語で解説しているが、文脈指示用法については全く述べていない。そのため、学習者は「そう言えば」と「それにしても」しか理解できず、基本的な「そう・それ」の文脈指示用法が把握できない限り、「そう・それ」の後に他の言葉が付いた場合にはとまどうだろう。また、第 28 課の「それに」と第 30 課の「それじゃ」の提示法も類似している。前者は「累加や累増」の関係を持つ二つの文を接続すると説明し、後者は「それでは」の砕けた言い方と述べたのみである。「それでは」と「それに」に関する、本来の文脈指示としての「それ」との関係は全く述べていない。即ち、「それじゃ」の指示用法も提示不明瞭と言える。第 47 課の「そう」の説明ではどのような聞き手に用いるかを詳細に述べているが、前文の話を受ける「そう」の代表的な文脈指示用法であることには少しも触れていない。

《标日初级下》の文法説明では、文脈指示用法として使用された指示詞を提示しているが全て意味の説明や文型・接続詞から解説している。そこから初級下ではまだ指示詞の文脈指示を本格的に提示していないことが明らかになった。《标日初级下》の難易度は日本語能力試験 3 級に当たり、語彙量は上・下冊合わせて 3000 語程度である。そうした教科書では指示詞の文脈指示用法を導入すべきかどうかを捉えなおす必要があるだろう。

次に、全課の指示詞の分析と比較を行う。《标日初级下》の各課における指示詞の使用状況を調べた結果から見ると、新たな語彙として採りあげられた指示詞は、第 25 課・第 27 課・第 29 課・第 34 課・第 38 課の「このあたり」・「この辺」・「このまま」・「そう言えば」・「そんな」である。「コ・ソ」系指示詞はあるが「ア」系指示詞はない。全体から見ると初級上より、本冊の指示

詞の使用は大幅に増加している。第 25 課から第 36 課までは主に「文法説明」と「練習問題」に集まっているが、第 37 課から第 48 課まではほぼ「応用文」と「練習問題」で用いられている。しかしながら、「練習問題」で採りあげられた指示詞には指示詞を練習するためのものが極少なく、ほぼ他の練習でたまたま使用されただけのものである。そして、その中では現場指示用法として用いられるているものが圧倒的に多い。これでは学習者にとって指示詞の練習には十分に役に立たないことが明らかである。一方、「応用文」では現場指示用法も数多いが、文脈指示用法の例文もある程度提示されている。ところが、文脈指示用法に応じる説明文が整っていないため、せっかく提示した文脈指示は学習者に理解されないまま終わってしまう恐れがある。

(6) 戴：そう言えば、小さい時、よく祖母と一緒に公園へ行きました。
森：へえ、いっしょに運動をしたんですか。(《标日初级下》: 29)
(7) 李：戴さん、自分より年上の森さんに「歌いなさい」と言うのは失礼ですよ。
加藤：そうだね。この場合は「歌ってください」と言わないとね。(ibid. : 55)
(8) 李：日本にいる時、日本人の男性が友達に、「来い」「遠慮するな」などと言っているのをよく聞きました。これは親しい人に使うんですね。(ibid.)

上述した例文は全て文脈指示用法である。(6)の「そう言えば」は「単語」と「文法説明」にそれぞれ提示されているが、意味的な解説がなされているに過ぎず、「そう」の文脈指示用法に関しては述べられていない。(7)も同様、話し手は相手が話した内容を認め、前文の内容を照応するために「そう」を使うわけである。ここで既に 2 回「そう」の文脈指示用法が現れたが、「そう言えば」のようにただ言葉の意味の解説に留まらず、「ソ」系指示詞の文脈指示用法から導入し、「そう＋…」の型まで進んで解説したら、学習者は体系的に理解できるはずである。田中(1981)によると、照応とは、「一般に文の中の、あるいは一貫性のある文連続の中の二つの言語形式が同一の対象を指示している場合のその二つの言語形式の関係を意味する」。照応の種類に関しては、先行詞と照応詞との間の指示詞関係分類及び位置関係よって「文脈の中で先行詞が照応詞に先行する照応を前方照応(anaphora)」と定義している。(8)は代表的な前方照応指示である。「『来い』『遠慮するな』など」は先行詞に当たり、「これ」は前文の「来い」「遠慮するな」などを指し、つまり先行詞を照応している。また、本来文脈指示ではよく使用されている照応指示用法を詳細に解説すべきであるが、《标日初级下》では一切それらに触れていない。

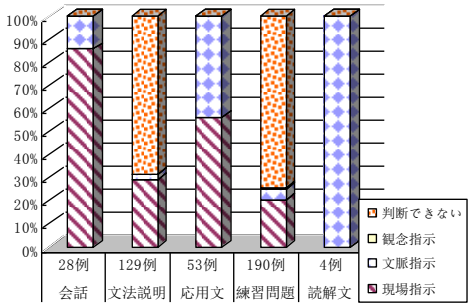
【図 7-5】は《标日初级下》の各項目で用いられる指示詞の指示用法の使用率を、【図 7-6】は五項目全体の指示詞の指示用法の使用率を示したものである。

【図 7-5】が示しているように、《标日初级下》では「読解文」を除けば現場指示が文脈指示より多い。しかし、各々を観察すると、「応用文」では現場指示は約 55%を占め、文脈指示は約 45%となっている。前冊《标日初级上》の「応用文」と比較すると、文脈指示は 40%増加し、現場指示は 37%減少していることがわかる。また、本冊の「会話」では文脈指示は 14%となって、前冊の 4 倍と大幅に増加している。現場指示は 86%を占め、前冊より 7%減少している。ゆえに、教科書では学習内容の進度によって、中級レベルに近づけば、文脈指示の使用も増えていくことがわかる。

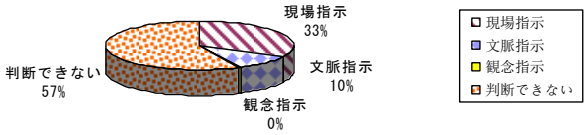
「練習問題」では現場指示は 20%強だったが文脈指示は 5%に満たない。「読解文」では指示詞

の使用が僅か 4 例で、全て文脈指示用法である。一方、指示用法が判断できないのはほぼ「文法説明」と「練習問題」に集まっている。前者は 68%を超え、後者は 74%に近い。したがって、《标日初级下》では場面設定や文脈作りを重視していないことがわかる。

観念指示は本冊では 1 例に過ぎず、「練習問題」でたまたま用いられたものである。それに対して前冊では 4 例の観念指示が各々「会話」・「応用文」・「文法説明」で用いられている。両方とも観念指示の数が少ないことから、中級までは観念指示を導入しないという《标准日本语》の編集者の趣旨が窺える。



【図 7-5】
《标日初级下》の各項目
における指示用法の使用率



【図 7-6】
《标日初级下》に用いられた
指示用法の使用率

【図 7-6】によれば、《标日初级下》では現場指示の使用率が最も高く 33%である。文脈指示は 10%となり、観念指示は 1 例に過ぎない。他方、指示用法を判断できない例は 57%に達している。《标日初级上》と比較すると文脈指示は 8%増加し、現場指示は 27%減少している。ここから、指示用法の基礎とされる現場指示は次第に減少し、文脈指示の使用が徐々に増加していることが認められる。しかし、《标日初级下》では文脈指示より現場指示の用例が多いことは教材として問題がある。《标日初级上》より高レベルな教材である《标日初级下》における指示詞の提示は現場指示に留まらず、文脈用法、観念用法まで導入すべきである。もう一つ問題になるのは二冊とも指示用法が判断できない例が非常に多いことである。初級学習者だからこそ、しっかり文脈作りや場面設定を工夫しないと、最初から指示用法を区別できず、理解できない可能性が高いだろう。

《标日初级下》における各指示詞の指示用法の悉皆調査結果から見ると、使われた指示詞の中で最も多いのは「この」172 回、次は「ここ」46 回・「あの」45 回・「その」36 回・「これ」30 回となっている。《标日初级上》と比べれば、よく用いられる指示詞はほぼ一致しているが、使用された数の順番は多少異なる。1 位と 2 位・4 位は二冊ともそれぞれ「この」・「ここ」・「その」だが、《标日初级下》の 3 位は「あの」であるのに対して、《标日初级上》のほうは「これ」である。また、5 位は《标日初级下》では「これ」だったが、《标日初级上》では「あの」となる。そして、物を指し示す「これ・それ・あれ」、連体修飾「この・その・あの」、場所を示す「ここ・そこ・あそこ」を全て提示している。しかしながら、同じ体系の「この・その・あの」であるが、「この」だけが 172 回も扱われていて、「あの」と「その」は僅か 45 回と 36 回に過ぎない。また、日常生活

によく用いられる「そこ」は極めて少なく、わずか4回しか使われていなかった。ここから明らかになったのは、《标日初级下》では指示詞を体系的にとりあげて教えるのではなく、たまたま例文に指示詞も入っているというだけだということである。

さらに、文脈指示用法が本冊ではある程度用いられているが、文法として詳細に解説しておらず、文型と語彙あるいは接続詞として説明しているのは問題点である。本来、この上下二冊を通して、基本的な日本語を覚えて中級に進む学習者のために、主な文法を教えるべきである。ところが、指示詞の現場指示用法は融合型と対立型に分けて述べているにもかかわらず、文脈指示については基本的な使い方さえ明確に説明していない。

7.3.3《标日中级上》の分析と比較

《标日中级上》は《标日初级上》と《标日初级下》と同じシリーズであるが、語彙や文法は全体的に難易度が上がり、《标日中级下》と合わせて日本語能力試験の2級レベルに相当する。《标日中级上》の「文法説明」では(J18)～(J32)の合計15例で指示詞を取り上げている。前2冊と比較して倍に増えているとわかる。また、本格的な文脈指示の導入は《标日中级上》からである。（J19）（J25）（J26）（J27）（J28）（J31）（J32）の7例で文脈指示用法を導入し、説明している。本冊では文脈指示を重視していると見えるが、初級と重複する現場指示用法も提示している。（J21）の「こちらにお願いします」と（J22）の人を紹介する「こちら」は《标日初级上》の文法と重複している。実例を取り上げながら、分析していく。

(J18)《标日中级上》　第1課　＜文法説明： 29＞

11. そこで[2)]

JRや私鉄の各路線では、運行の方向を表すのに特別な言葉を使っています。それは、「上り」「下り」という言葉です。…**そこで**、こんななぞなぞがあります。（在JR及私铁的各条线路上，为表明运行方向而采用特殊的词语，即“上行”“下行”。）

道が分からなくて困りました。**そこで**、近くにいた人に教えてもらいました。（迷了路，不知如何是好。于是，向旁边人打听。）

(J19)《标日中级上》　第1課　＜文法説明： 29＞

12. こんな「指示上下文内容(指示前文と後文の内容①)」

“こんな”是指示词“このような”的比较随便的说法。通常指示词多用于指示前述词语或内容，而本课中指示“～あります”后面的句子内容。和“こんな”一样，指示后述内容时，使用“これ”“この”“これらの”等以“こ”开头的指示词。（「こんな」は「このような」の砕けた言い方である。多くの場合、前述の単語や前文の内容を示す。本課では「～あります」の後の内容を指す。「こんな」と同じく後文の内容を指し示す際に「これ」「この」「これらの」など「コ」系指示詞を使用する。）

これは秘密だけと、大川さんは昨日会社を休んでコンサートへ行ったらしいです。

(这件事不要告诉别人，大川好像请假去听音乐会了。)

(J20)《标日中级上》　第 2 課　＜文法説明： 37＞

4. その節[3)]

"その節"一般仅限于"その節はお世話になりました""その節はありがとうございました"等提到前不久发生的事并表示感谢的场合，但没有"あの節""この節"的用法。(「その節」は「その節はお世話になりました」や「その節はありがございまうとした」などのような最近の出来事に言及し、感謝する場面に限られた言い方である。しかし、「あの節」や「この節」という言い方はない。)

その節はお世話になりました。(**那时**多亏了您的关照。)

(J21)《标日中级上》　第 2 課　＜文法説明：38＞

5. こちらにお願いします[4)]

JC 企画の李さんがいらしゃいました。(JC 策划公司的李小姐来了。)
―あ、そうですか。じゃあ、**こちら**にお願いします。
(哦，是吗。那就请她到**这儿**吧。)

(J22)《标日中级上》　第 2 課　＜文法説明：38＞

7. 介绍某人（人を紹介する）

在工作场合介绍某人…在介绍中，无论对本公司的人还是外人吗，都使用"こちら（这/这位)"，不使用"これ"或"この人"这样的称呼。(職場で人を紹介する時…紹介する場合、自社の人や外部の人などいずれにしても、「こちら」を使用し、「これ」や「この人」を使わない。)

こんにちは、李さん。紹介します。**こちら**は、今度に「金星」プロジェクトの責任者で、佐藤です。(您好，李小姐。我来介绍一下，这是此次"金星"项目的负责人佐藤。)

(J23)《标日中级上》　第 3 課　＜文法説明：66＞

8. それでも

"それでも"是连词，表示暂且认可前句的内容，然后陈述与前句不相符的情况，相当于汉语的"尽管如此""即使那样"。(「それでも」は接続詞である。前文の内容を認めたうえで、前文と違う内容を述べる。中国語の"尽管如此""即使那样"と相当する。)

日本人の名字の種類は、30 万に近くあります。**それでも**世界の第 2 位です。(日本人的姓氏有近 30 万个。**即使那样**还只是世界第 2 位。)

(J24)《标日中级上》　第 4 課　＜文法説明： 86＞

10. これまで

“これまで”与“今まで”的意思相同（📖中级第 3 课会话），但“今まで”可以表示非常临近现在的极其短暂的过去，如 1 秒钟之前，而“これまで”只用于较大时间范围的过去。（「これまで」と「今まで」の意味は同じであった(中級第 3 課の会話)が、「今まで」は現在非常に近い極短い過去を示す。例えば 1 秒前などである。「これまで」は長い時間範囲の時だけ使用する。）

これまで(=今まで) この制度を利用するのは、ほとんどが女性でした。（以往利用这项制度的基本上都是女性。）

(J25)《标日中级上》　第 4 課　＜文法説明： 88＞

15. “これ”“この”与（と）“このように”　「指示上下文内容（文脈指示）②」

以“こ”或“そ”开头的指示词除了具有指示眼前事物的场景指示功能外，还具有指示文章中特定内容的上下文指示功能。有时指示前述内容中的词句，有时指示后述内容（📖中级第 1 课课文）。这种指示上下文内容的用法，是以“あ”开头的指示词所不具有的。（「こ」・「そ」系指示詞は目の前の事物やシーンを指示する指示機能のほかに、文章では前文と後文の特定の内容を指示する機能を持つ。時には前文の内容を指し、時には後文の内容を指す (中級第 1 課本文)。このような文脈指示用法は「あ」系指示詞は持たない。）

① “これ”与“この”(「これ」と「この」)

用于指示前述内容中的某个要素本身。本课中，“これ”指示前述内容中出现的“フレックスタイム制度”。(既述の内容を示す。本課では、「これ」は前文の「フレックスタイム制度」を指し示す。)

さらに、フレックスタイム制度を導入する会社も増えています。**これ**は、自分の出勤と退勤の時間を自由に決められる制度です。(而且，执行弹性工作时间制度的公司也在增加。**这**是项可以由自己自由决定上下班时间的制度。)

“このように”的用法(の用法)

“このように”常常用作连词连接前后句子，用于指示前述内容，意思是“如前文所述”，除“このように”之外，还有“そのように”“ あのように”“ どのように”等指示词，但是只有“このように”具有连词功能。而且，“このように”指示前述内容时，往往不是承接一个短句，而是承接一个长句甚至多个句子，然后以总结前述内容的形式出现。课文中，“このように”指示此前陈述的所有内容，然后在“このように”后面概括陈述文章的整体内容。(「このように」はいつも前文と後文を繋げ、前文の内容を指示する。中国語に訳すと“如前文所述”という意味である。「このように」のほかに「そのように」「あのように」「どのように」などの指示詞がある。しかし、「このように」のみが接続詞の機能を持っている。しかも、「このように」が前文を指す場合、短文一文だけではなく、長い文や複数の文を指し示すことができる。そして、前述の内容を総括する。本課の中で、「このように」

は前に述べた全ての内容を指し、「このように」の後ろは上述の内容を全般的にまとめたものである。）

このように、日本のサラリーマンの働き方は、かつてに比べると大きく変化しています。（**综上所述**，日本的工薪族的工作方式与过去相比有了很大的变化。）

② 指示后述内容（後文の内容を指す）

上面的①②是指示前述内容的用法，另外还有提前指示后述内容的用法（📖中级第一课课文）。

下例中“佐藤さんの考え方は間違っていると思います”这个意见是后述内容，但使用“これ”提前指示该意见。

（上記の①②は前述の内容を指示する用法である。そして後述の内容を前もって指示する用法がある（中級第一課本文）。下に書いてある「佐藤さんの考え方は間違っていると思います」という意見は後述の内容だが、「これ」を用いて事前にこの意見を取り挙げる。）

これはわたしの個人的な意見ですが、佐藤さんの考え方は間違っていると思います。（**这**是我个人的意见，我认为佐藤的想法是错误的。）

(J26)《标日中级上》 第5課 ＜文法説明：105＞

それを聞いて ［指示上下文内容（文脈指示）③ 対话（対話）］

对话中“それ”“ その”等以“そ”开头的指示词，一般指示对方所及范围内或对方提到的事物。而说明自己即将陈述的或对方不知道的事情时，用“これ”“ この”等以“こ”开头的指示词。（会話での「それ」「その」などは「そ」系指示詞であり、一般的に相手が言い出した事物や相手が触れる範囲内のものを指す。これから自分が述べることや相手が知らないことなどを述べる場合に、「これ」「この」など、「こ」系指示詞を用いる。）

それを聞いて安心しました。（听您这么说，我就放心了）

(J27)《标日中级上》 第6課 ＜文法説明： 122＞

4. えっ、先輩？あの佐藤さんが？「指示上下文内容（文脈指示）④」

句子本来是“あの佐藤さんが先輩？（那位佐藤先生是你的学长？）”。“あの”用于指示自己和听话人都熟知的事情。本课中“あの佐藤さん”是指自己认识的那位“佐藤さん”。提到对方所不知道的人时不能使用“あの”。（本来は「あの佐藤さんが先輩?(那位佐藤先生是你的学长？)」であり、「あの」は自分と相手がよく知っていることを指す。本課での「あの佐藤さん」は、自分が知っている「佐藤さん」を指し示す。相手が知らない人には「あ」は使用できない。）

竜虎酒造の佐藤さんなんだけど、なんとぼくの大学の先輩だったんだ。（说起龙虎酒业公

司，他竟然是我大学的学长呢!）

えっ、先輩？あの佐藤さんが？（学长？那位佐藤先生？）

(J28)《标日中级上》　第 10 課　＜文法説明：211＞

7. その数　「指示上下文内容（文脈指示）⑤」

“これ”“それ”指代句子中的具体名词。指代句子中名词时一般不用“あれ”“あの”。本课中的“その”指代前面句子中的词语“銭湯”。(「これ」・「それ」は文にある具体性の名詞を指し示す。文の中の名詞を指す場合に、「あの」「あれ」を使用しない。本課では「それ」は前文の「銭湯」を指す。)

銭湯とは、多くの家にお風呂がなかったころに作られた入浴施設のことだ、現在では**その**数も少なくなってきているが、最近では…

(所谓“钱汤”，就是在以前很多人家里都没有浴室时修建的公用洗浴设施。如今虽然…)

在文章中曾经出现的事物一般用“そ”指代，但是如果是特别要向对方解释，说明的内容可以用“こ”。但是，根据指代的内容，有时候只能使用其中之一（📖中级第 1 课课文，第 4 课课文)。(文の中においては一度あった事物は「そ」で指し示すが特に相手に強調したい内容を「こ」で指し示す。しかし、指示の内容によって、その中の一つしか使用できない場合がある(📖中級第 1 課の本文, 第 4 課の本文）。)

ステーキとサラダを作りました。**それ/これ**が今日のおかずです。(我做了牛排和沙拉，**这**就是今天的菜。)

① 用“この”的情况(「この」の使い方)

提起对方不知道的话题时，使用“これ/この”的形式（相手の知らない話題を言い出す時、「これ・この」を用いる。)

新幹線という鉄道があります。**これ**(**この**鉄道）は特別な特急列車の路線です。(有种叫做新干线的铁路。**这**<**这**种铁路>是特殊的特快列车的路线。)

② 用“その”的情况(「その」の使い方)

陈述与前文所述内容相反或成对比的内容时，使用“その”（前文の内容と逆か、対比する場合に、「その」を使用する。)

陳さんは、以前は全くお酒を飲まなかった。その陳さんが今では毎日お酒を飲んでいるなんて…（陈先生以前滴酒不沾。而这就是这个陈先生现在却天天喝酒…）

“その”还有很模糊指代的用法。有的名词，如“範囲”“名前”“数”等。如果不在前面加

上限定词语就不知道具体所指什么。使用这样的名词时，如果只是模糊的限定，就可以采用前接“その”的形式，如“その範囲”“ その名前”“ その数”等。通常，“そ”指代前面已经出现过的事物，但是模糊限定用法的“その”通常指代后面即将出现的内容。(また「その」は曖昧な指示の使い方を持っている。ある名詞、例えば「範囲」「名前」「数」などが挙げられる。前に限定の言葉を加えなければ、何を指しているのか不明確である。こういうような名詞を使う場合、単に曖昧に限定するなら、「その」を使用する。例えば「その範囲」「その名前」「その数」などが挙げられる。通常「そ」は前に述した事物を指すが、曖昧な限定の使い方では「そ」は後述の内容を指示する。)

その値段(=食材の値段) を聞けばだれもが驚くような食材といえば松茸です。(一听说价格谁都会吃惊的食品原材料，那就是松蘑。)

(J29)《标日中级上》　第 15 課　＜文法説明： 303＞

1.　こっち/そっち/あっち　「コソア①」

“こっち”“そっち”“あっち”“どっち”表示方向。本课中，由于是让对方来自己所在的方向，所以用“こっち”。相反地，如果远离自己的方向，一般用“そっち”或“あっち”“こちら”和“そちら”也表示方向（📖初级第 3 课），但还可以表示场所的礼貌语。“こっち”和“そっち”是“こちら” “そちら”的较随便的说法。(「こっち」・「そっち」・「あっち」・「どっち」は方向を表す。本課では相手に自分の領域に来させるので、「こっち」を用いる。逆に、自分の居場所から離れれば「そっち」や「あっち」を使用する。「こちら」と「そちら」も方向(📖初級の第 3 課)を表すことができるし、場所を表す丁寧語としても使用できる。「こっち」と「そっち」は「こちら」と「そちら」の砕けた表現である。)

王さん、こっち、こっち！（小王，这边，这边！）

(J30)《标日中级上》　第 15 課　＜文法説明：304＞

6.　それはそうと

用于结束此前的谈话，提起一个新的话题，或者转换话题谈起一件突然想起来的事情。主要用于口语。(これまでの話を終わらせ、新しい話題を持ち出すために使用される。あるいは話題を変え急に思い出したことを話す。主に話し言葉に用いる。)

それはそうと、商売の話を始ましょうか。(这个话题先不说了，咱们开始谈生意吧。)

(J31)《标日中级上》　第 15 課　＜文法説明：312＞

1.　これもまた「指示上下文内容（文脈指示）⑥」

本课中，“これ”指日餐专卖店。在之前的内容中叙述了存在种类繁多的中餐和西餐馆，其后接着叙述日本餐馆也同样多种多样，因此使用了助词“も”（📖初级第 3 课）和“また”

（📖中级第 1 课课文），构成了“～もまた”的形式。
本課の「これ」は日本料理店を指している。前文では様々な中華料理や洋食を述べたが、その後の日本料理店も同じように多様だったので、助詞「も」と（📖初級の第 3 課）と「また」（📖中級の第 1 課本文）を使用し「～もまた」の形になる。

「うどん」「そば」「天ぶら」「寿司」「すき焼き」など、**これ**もまた多様である。
（如乌冬面，荞麦面，天妇罗，寿司，日式牛肉火锅等等，**其**种类也很多。）

(J32)《标日中级上》　第 16 課　＜文法説明：331＞
5.　これを見ると「指示上下文内容（文脈指示）⑦」
本课中，“これ”指示图表。通过图表分析出来的内容紧接在其后（本課では「これ」は図表を表す。グラフから読みとれた結果がその後に続く。）。

これ（昨年の資料）を見ると、あまり大きな数字の変化はないようだ。
（从去年的资料来看，数字变化好像不大。）

《标日中级上》の「文法説明」では、指示詞の提出は四冊の内、最も多く、初めて文脈指示用法を明確にしている。そして、「指示上下文内容①」（29 ページの「こんな」）、「指示上下文内容②」（88 ページの「これ・この・このように」）のように番号を付け、7 課連続で説明している。文脈指示には前方照応と後方照応があり、《标日中级上》ではそれを分けて説明し、指示対象が後ろにある場合は「コ」系指示詞を使用し、指示対象が前にある場合は「コ・ソ」系指示詞を用いると述べている。また「こんな」をはじめ「これ･この･これから」など「コ」系指示詞の文脈指示用法にある後方照応指示を説明した上で、文章では前文と後文の特定の内容を指示する「コ・ソ」系指示詞を導入している。さらに、「これ・この」の前方照応指示用法を紹介し、前の後方照応指示と分けて解説しているのがこのテキストの特徴である。特に「このように」の前方照応指示用法を説明する際に、「このように」の接続詞の機能から指す前文は一つの短文だけではなく、長い文や複数の文まであることを総括的に説明している。

また、「ソ」系指示詞については、文脈指示の「一般的に相手が言い出した事物や相手が触れる範囲内のものを指す」という根本的用法を説明しつつ、「これから自分が述べることや相手が知らないことなどを述べる場合に、「これ･この」などを用いる」と「コ」系指示詞と対比している。また、「あの」を通じて、「ア」系指示詞の文脈指示用法を語っている。そして、例文をあげながら「あの」は自分と相手がよく知っていることを指すが、相手が知らないことに「ア」を使用できないとも述べている。ところで、文脈指示⑥「これもまた」と⑦「これを見ると」の「これ」は前方照応指示であるが、説明文では意味しか述べていないので、学習者には理解し難いだろう。全体的に見ると《标日中级上》の「文法説明」では、文脈指示用法を持つ指示詞を数多く用いているが、「それはそうと」や「その代わり」などは文脈指示として取り扱われておらず、意味を説明するだけの段階に留まっている。文脈指示用法として提示された指示詞も「コ」・「ソ」・「ア」系に分けて順番に説明するということをしておらず、バラバラにしたり、重なったりしているの

で、学習者に混乱を齎す恐れがある。

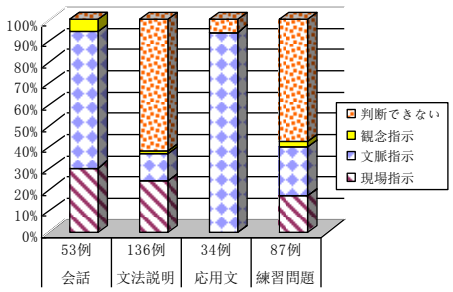
次に、各課の指示詞の分析と比較を行う。《标日中级上》の第 1 課から第 16 課までの各課の指示詞の使用状況を述べる。「単語」で採りあげられた指示詞は第 2 課・第 4 課・第 8 課と第 15 課にあり、それぞれ「この・その・あんな・これ・そう」である。第 2 課では「あんな」を語彙として提示しているが、指示詞の用法には全く触れず、軽く連体詞とだけ説明し、以下の例文をあげている。

(9) あんな人が教師では学生がかわいそうです。
(10) こんなに給料が安くては困ります。
(11) そんな大きな声を出しては近所迷惑です。

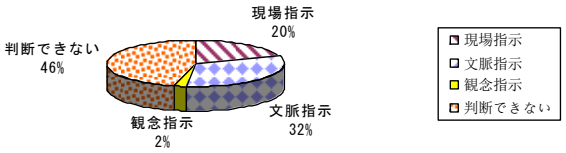
《标日中级上：47》

この 3 つの例文は各々「コ・ソ・ア」の連体修飾指示詞を用いているが、各指示詞の指示用法をどのように区別するかは書いていないので、恐らく学習者はそれを見分けられないだろう。「コンナ」などのような指示詞は無論連体修飾する機能があるが、指示という機能も無視してはならない。連体修飾する機能によって接続法が決められ、指示する機能によって「こんな」など指示詞の区別が決められているわけである。

また、主に「会話」や、「練習問題」、「文法説明」の三項目に指示詞が多数提示されている。本冊では特に「文法説明」に最も多く指示詞が用いられている。ここから《标日中级上》で初めて文脈指示を正式に提示したことがわかる。また《标日初级上》、《标日初级下》と異なって、本冊では文脈指示に重点を置いていることが窺える。



【図 7-7】
《标日中级上》の各項目
における指示用法の使用率



【図 7-8】
《标日中级上》に用いられた
指示用法の使用率

【図 7-7】は《标日中级上》の各項目における指示詞の指示用法の使用率の調査結果である。「会話」には指示用法を判断できない例文がなく、現場指示は約 30%を占め、文脈指示は約 64%を超え、観念指示は 6%近くになる。初級と異なって、文脈指示は現場指示よりずっと多い。《标日中级上》では学習段階によって指示用法の使用率が変化する。すなわち、中級になると「会話」

では文脈指示用法が急激に増加し、現場指示用法が著しく減少することが明らかになった。一方、「文法説明」では現場指示用法は25%に足らず、文脈指示は12%前後、残りはほぼ判断できない例で、観念指示が2例ある。「応用文」では文脈指示は94%弱を占め、用法が判断できないものは6%になっている。ここで注目して欲しいのは「応用文」には現場指示がないことである。初級の「応用文」ではまだ半分前後が現場指示だが、中級になると急激に用いられなくなっている。これは「会話」の文脈指示用法提示率と合致していて、学習段階が高くになるにつれて現場指示の代わりに文脈指示が多く使用されていることがわかる。最後の項目「練習問題」では現場指示は約17%、文脈指示は約23%、用法が判断できないものは約57%、観念指示は約3%を占める。中級の「練習問題」では、文脈指示は現場指示より多いだけであるが、初級と比較すれば文脈指示が大幅に増加している。要するに、「会話」「応用文」「練習問題」では、文脈指示用法は初級より中級の方が明らかに増えていると言える。この理由としては、編集者が中級から文脈指示に重点を置くことと、中級レベルに応じた文章や会話にはそもそも文脈指示用法の使用が多くなることの二つが考えられる。

【図7-8】は全体の指示詞の指示用法の使用率を示している。【図7-8】によれば、《标日中级上》では現場指示は20%になり、文脈指示は32%を占め、観念指示は最も少なく2%に過ぎず、判断できないものは相変らずどれよりも高く、46%である。ここでは中級になっても観念指示はそれほど多くないことと、全体から見ると現場指示と比べ、文脈指示のほうが若干多いことがわかった。《标日初级下》と同じく文脈作りや場面設定がない文が多いため、指示用法を判断できない例が半分近くあり、これも教科書の問題点として注意すべきところであろう。

さらに《标日中级上》における各指示詞の指示用法の悉皆調査結果を検討していく。各指示詞が「応用文」や「会話」などに使われた状況の調査結果によると、よく使用されるのは「この・その・これ」である。前二冊と同じく最も多く用いられたのは「この」であり、使用数は121回に達し，二位の「その」と三位の「これ」はそれぞれ59回と41回になっている。「こう」と「あれ」はわずか各1回に過ぎない。そして、「あの」「それ」など他の指示詞は全て30回に満たない。ここで注目したいところは、上位三位のうち、「コ」系指示詞は一位と三位になり、「ソ」系指示詞の「その」は二位になっているが、「ア」系指示詞は四位で、25 例に過ぎないことである。しかしながら、中国の大学で行われた日本語指示詞のアンケート調査の結果から見ると、文脈指示については「コ・ソ」系だけではなく、「ア」系指示詞の誤用率が相当高いので、文脈指示に重点を置くなら「ア」系指示詞も重視すべきであろう。また、《新编日语》の調査結果と類似する《标日中级上》での指示詞使用頻度の順位は、実際の生活で使用率が高い順番と合致しない傾向が見える。言語の習得と実践は緊密に繋がっており、実際の使用率が高い順に教科書で提示しないと、学習者の日本語習得に差し支えるのではないかという危惧を抱かせる。

日本語科の学生を対象にする教科書ではないが、文脈指示用法を正式に中級上から導入し、数多く採りあげていることと、前方照応指示と後方照応指示を分けて解説しているのは《标准日本语》の学習しやすいところであろう。それは前章に述べたように《标日初级上》では現場指示を「対立型」と「融合型」を分けて説明したことと合致している。ここから改定版の《标准日本语》は《新编日语》より詳細に指示詞を提示していると見える。この教科書を使用する学習者は、現場指示を用いる際には「対立型」と「融合型」を区別してから用い、文脈指示は前方照応指示と

後方照応指示を意識しながら使用するだろう。

7.3.4《标日中级下》の分析と比較

《标日中级下》は《标准日本语》のシリーズでは最後の一冊であり、全部で16課しかないが、取り扱われている文章が長いので、文脈指示を数多く用いている。前3冊と同じように、各課の「単語」「応用文」など6項目から指示詞を抽出し、統計する。《标日中级下》に現れた指示詞と指示用法の提示率、提示順、提示方法を徹底的に調査する。その調査結果をもとに分析を行い、日本語教育現場で使用される日本語教科書における指示詞の提示について提言する。

まず、文法説明に関する実例の分析と比較を行う。《标日中级下》で文法説明に取り扱われた指示詞は(J33)～(J46)の14例がある。《标日初级下》と同様に文法説明としての提示にもかかわらず、1つの語彙として意味的に解説しただけで済む項目が目立つ。大きなデミリットは、「文法説明」で提示された指示詞は文脈がなく、中国語で意味だけを説明したことである。第二外国語で日本語を学ぶ学習者は日本語教師側の指導がない（独学）可能性があるため、そのような提示方法で取り上げた指示詞を正確に理解できるか疑われる。以下は《标日中级下》の「文法説明」に現れた指示詞と関係がある説明文である。

(J33)《标日中级下》　第18課　＜文法説明：39＞

16. この度

“この度”表示“这次”“最近”的意思，用于表达最近的过去，最近的将来或眼前的事情。(「この度」は「这次」「最近」という意味であり、最も近い過去を表している、近い将来や目の前のことを示す。)

この度の地震では、100人以上が亡くなりました。(在这次地震中，有100多人遇难。)

(J34)《标日中级下》　第20課　＜文法説明：70＞

4. “ここのところ”

“ここのところ”的意思是“最近，近来”。“ところ”本来表示场所，但是也用于“ここのところ”　“このところ”(最近，近来)。(「ここのところ」の意味は、「最近，近来」である。「ところ」はもともと場所を表し、「ここのところ」(最近，近来)を表示する。)

ここのところ、失敗だらけなんです。(最近总出差错。)

(J35)《标日中级下》　第23課　＜文法説明：134＞

指着说话人和听话人眼前的事物进行说明时，较远则用“あれ”，较近则用“これ”指代。一般来说，“それ”用于指代距离听话人较近的物品。指代方向用“あちら”“ こちら”“ そちら”(📖初级第2课)。(話し手と聞き手の目の前の事物を説明する場合、遠くは「あれ」、近くは「これ」で指し示す。一般的に「それ」は聞き手に近い物を指す。方向を示すのは「あちら」・「こちら」・「そちら」である (📖初級第2課) 。)

これは、秦の時代、今から 2000 年前の遺跡です。（这是秦代，即距今 2000 年以前的遗迹。）

(J36)《标日中级下》　第 24 課　＜文法説明：157＞

4. そう言われてみると、そうですね

与“そういえば（说起来，还真是的啊）”相同，用于听到某种信息，并同意其内容（📖中级第 12 课会话）。经常用于对方指出了自己没有意识到的某种意外的事实。（「そういえば」と同じで、ある情報を聞き、その内容を認めること(中級第 12 課会話)。相手に自分が気づいていない意外な事実を知らせてもらう時によく使われる。）

(J37)《标日中级下》　第 24 課　＜文法説明：166＞

7. そうはいっても

“小句（简体形式）+といっても”表示虽有某种程度的认定但实际并非如此的一种转折关系（📖中级第 6 课课文）. 本课中的“そうはいっても”的“そう”指前文的内容。具有连词的作用，放在句子前面。（「句＋といっても」はある程度認めているが実際にそうではないという逆接の関係を表す（📖中級第 6 課本文）。「そうはいっても」の「そう」は前文の内容を指し示し、接続詞の機能を持ち、文頭にくる。）

(J38)《标日中级下》　第 24 課　＜文法説明：166＞

9. あの手この手をつかって

“あの手この手を使って”是一种惯用表达，意思是“采用各种各样的手段”。（「あの手この手を使って」は一種の慣用表現として様々な手段を使うことを意味する。）

CM を見せる側は、あの手この手を使って、何とか嫌がる視聴者がチャンネルを変えないように努力しなければならないわけだ。（这就是播出广告一方不得不绞尽脑汁，为了让讨厌广告的观众不该换频道而努力奋斗的原因。）

(J39)《标日中级下》　第 25 課　＜文法説明：182＞

4. ここまで

“ここ”除了有像“ここまで来てください（请到这里来）”那样表示具体空间范围的用法，还有表示时间等抽象范围的用法，如在研讨会中使用的“では，ここで発表者に自己紹介をしていただきます（那么，现在就请发言人做自我介绍）”。本课中的“「金星」ブロジェクトがここまで来だぞ”就是后者，表示“金星项目进展到了如此阶段”的意思。除了“ここ”，“そこ”，“あそこ”等也有相同的用法。（「ここ」は「ここまで来てください」のような具体的な空間の範囲を表す以外に時間など抽象的な範囲を表す使い方もある。例えば、セミナーで使用する「では，ここで発表者に自己紹介をしていただきます」。本課の「『金星』ブロジェクトがここまで来だぞ」は後者である。「ここ」、「そこ」、「あそこ」も同様の用法がある。）

ここまでくれば、大丈夫。お母さんの病気は治ますよ。
（能恢复到这个程度，那就不要紧了。您母亲的病一定会好的。）

(J40)《标日中级下》　第 26 課　＜文法説明：203＞

4. こう見えても

惯用口语表达方式，用于实际状况与外观不相符合时。与指示词“これ”“ あれ”相对应，可以使用“こう見えても（即使看起来这样）”“ああ見えても（即使看起来那样）”。（話し言葉の慣用表現である。実際の状況と見た目がかみ合わない時に、使用する。指示詞「これ」・「あれ」と対応し、「こう見えても」と「ああ見えても」が使える。）

こう見えても、力仕事には自信があるんです。（别看我这样，干体力活儿还蛮有自信的。）

(J41)《标日中级下》　第 26 課　＜文法説明：205＞

8. そういうことですか

听到或看到某事，弄懂了某种情形或谈话内容时，可以使用“そういうことですか（原来是这样啊）”（聞いたり見たり、会話の内容やある状況が分かってきた時、「そういうことですか」が使用できる。）。

(J42)《标日中级下》　第 26 課　＜文法説明：210＞

8. ここ 100 年で

表示“近～年”时，用“ここ～年”“この～年”的说法。类似的说法还有“これまでの～年”（📖中级第 4 课课文）。但是，“ここ”“この”包括现在的时间，而“これまでの”则表示迄今为止的过去的事情，不包括现在的时间。（「近…年」を表す時、「ここ…年」・「この…年」の言い方がある。これと似たような言い方は「これまでの…年」（📖中級第 4 課本文）。しかし、「ここ」・「この」は現在の時間を指すが「これまでの」は今までの過去の時間を表し、現在の時間を表示しない。）

ここ 100 年で地球の気温は 0.6 度上昇した。（近百年来，全球气温上升了约 0.6 度）

(J43)《标日中级下》　第 27 課　＜文法説明：222＞

8.　それらとは別に　「指示上下文内容（文脈指示）⑧」

“それ(ら)”是指代前述内容的指示词，“それとは別に”的意思是与所指代的内容不同，“一方”等表达方式相同（📖中级第 3 课课文），作用是补充与前述内容不同的信息。（「それ(ら)」は前述の内容を示す指示詞である。「それとは別に」は指示内容とは違って、「一方」と同じく(📖中級第 3 課本文）、前述の内容と異なる情報を補う役割を果たす。）

彼は英会話学校で働いています。しかし、それとは別に芸術家としても活動しています。

（他在英语口语学校上班。但是除此之外，他还作为一名艺术家从事艺术活动。）

(J44)《标日中级下》　第 29 課　＜文法説明：274＞

4. そう　～ではない

“そう+二类形容词+ではない”“ そう+「一类形容词的词尾“い”变成“く”的形式」+ない”的意思是“并不是那么…”。“そう”一般指前面的内容，但在该表达方式中不指代具体事物。而表示“那么”“那样”的意思。（「そう+形容動詞+ではない」・「そう+『形容詞の語尾の“い”は“く”になる』+ない」とは「そんなに…」という意味である。「そう」はよく前の内容を指すがこの表現では具体的なものを指さない。“那么”や“那样”を表す。）

地球上では何でもない「食べる」という行為も、空気と重力のない宇宙では**そう**簡単ではなくなる。（在地球上不值得一提的吃这个动作，在没有空气和重力的太空中也变得不那么简单。）

(J45)《标日中级下》　第 30 課　＜文法説明：286＞

指示词的用法（指示詞の用法）

在指示上下文内容时，“これ”“この”“こう”既能指代前面叙述过的内容，还可以指代后面将要叙述的内容（📖中级第 4 课课文，第 10 课课文）。“それ”“ その”“ そう”则只能指代前面提到的内容。此外，“あれ”“ あの”“ ああ”不用于指示上下文内容。（前文と後文の内容を指す場合、「これ」・「この」・「こう」は前文に述べた内容や予めこれから後文に述べる内容を指すことができる（📖中級第 4 課本文，第 10 課本文）。「それ」・「その」・「そう」は前文で述べた内容しか指さない。また、「あれ」・「あの」・「ああ」は前文と後文の内容を指す用法はない。）

彼の発言は間違いだった。**その**ことは本人も認めています。

（他的发言是不对的。**这**一点他本人也承认了。）

(J46)《标日中级下》　第 31 課　＜文法説明：317＞

16. それもそのはず

“それもそのはず”[5]是“それ+も”与“その+はず”组合构成的，表示“之所以有这样的事情，看了后面的事实就会觉得是理所当然的了”。有时“それもそのはず”还后续表示理由或原因的助词“で”，构成“それもそのはずで”的形式（📖初级第 27 课）。

（「それもそのはず」は「それ＋も」と「その＋はず」を組み合わせて作られたものである。「後ろの事実を見たら、こんなことがある原因は当たり前だと思われる」を表す。時には「それもそのはず」の後は理由や原因を示す「で」がつき、「それもそのはずで」の形になる。（📖初級第 27 課））

なんだか熱っぽくてだるい。**それもその**はずで、体温を測ったら、40 度もあった。

（总觉得有点发烧，浑身乏力。果不其然，一测体温，竟然有 40 度。）

《标日中级下》はシリーズの最後であり、日本語を独学する学習者の頂点だと言われている。「文法説明」では中級上ほど指示詞を取り上げていないが、現場指示と文脈指示を分けて説明している。文脈指示の説明は中級上と連続しており、中級上の「指示上下文内容①～⑦」に中級下の「指示上下文内容⑧」が続く構成となっている。また、中級上と同様に 286 ページ では正式に「これ・この・こう」などを指示詞と称し、「それ・その・そう」は前文の内容だけを指せるが、「これ・この・こう」は前文と後文の両方の内容を指すことができるとしている。一方、「あれ・あの・ああ」について、前文と後文の内容を指すことができないと述べてながら、どのように使用するかを説明していないところは注目しておきたい点である。

《标日中级下》の説明文を見ると、「あれ・あの・ああ」は文脈指示に分類されていないことがわかった。恐らく日本文法研究で言うところの観念指示に分類されているのだろう。即ち自分の概念の中にある事物を指す用法である。邱丽君（2010，2011a）は、中国の大学で行われた日本語指示詞のアンケート調査で、観念指示の誤用率が非常に高いことが明らかになったので、教科書で観念指示として「あれ・あの・ああ」の用法を提示すべきだと示唆している。

また、《标日中级上》の第 1 課・第 2 課では、「こちらにお願いします」の用法と自己紹介する場合の「こちら」の使い方を説明しているが、これらは指示詞の用法としては取り扱われていなかった。しかしながら、本冊第 18 課では、「こちら」は方向を指示する機能を持つため、比較する場合に「これ」より効果的だと述べている。したがって、《标日中级下》では《标日中级上》より徐々に指示という概念を浸透させようとする傾向が見えてくる。

他方、「そんなですか」など《标日初级上》と同じく簡単に意味を説明するだけで済ませる項目もある。また、《标日初级上》で既に重点を置いて説明した現場指示であるが、《标日中级下》では再び「あれ」は遠い所を指し、「これ」は近い所を指すと文法説明の新たな項目として取り出したものも見える。

《标日中级下》の全体から見ると《标日中级上》のように文脈指示を集めて解釈する箇所は少ないが、指示詞を含む項目で見ると、多数の指示詞の用法から項目の全体の意味と用法を説明しているのは本冊の特徴と言える。

次に、《标日中级下》にある指示詞が各課に提示された状況の分析と比較を行う。まず「単語」から見ると、前三冊と異なって指示詞を取り扱っていないことが一目瞭然である。それと逆に「会話」・「文法説明」・「練習問題」では大量の指示詞が用いられている。特に「文法説明」はほかの項目に比べてより多いことが見える。

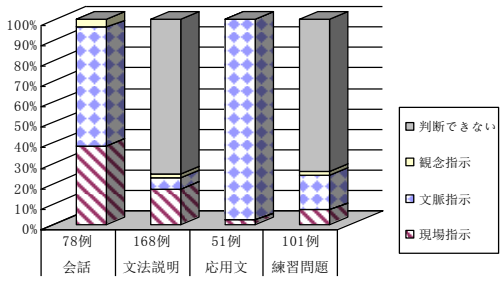
また、文脈指示の前方照応指示と後方照応指示を各々採りあげている。例えば

(12) これまでの黒、白とシルバーのほかに、明るい赤と緑を用意したことも影響している。**この**新しい感覚の色が若い年代に好まれたようだ。（《标日中级下》: 239）

(13) 近年、世界のあちこちで、異常気象が続いている。猛暑や豪雨、洪水、干ばつなどが起こり、台風やハリケーンも**その**規模と被害が拡大している。**これ**は地球温暖化が進んでいることと関係があるといわれている。 （ibid. : 208）

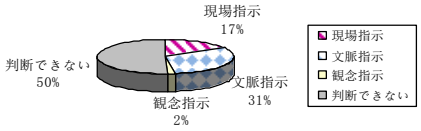
(14) **これ**は秘密ですが、A 社は来月倒産するそうです。 （ibid. : 184）

(12)は練習問題にある例であり、指示対象は指示詞「この」の前に現れているので、前方照応指示に当てはまる。(13)は本文に用いた文で、「その」は規模と被害を修飾し、前文に語っている猛暑や豪雨などで起こる被害を指し示すので、前方照応指示である。後文の「これ」はまだ前文の「近年から…その規模と被害が拡大している」を指している。したがって、文では前方照応指示を二回使用している。(14)は「文法説明」にある後方照応指示である。「これ」は後文に述べている「A 社は来月倒産するそうです」を指している。



【図 7-9】

《标日中级下》の各項目
における指示用法の使用率



【図 7-10】

《标日中级下》に用いられた
指示用法の使用率

【図 7-9】は《标日中级下》の各項目で用いられる指示詞の指示用法の使用率を示したものである。【図 7-9】から明らかなように、《标日中级下》の「会話」「応用文」にある文脈指示は前 3 冊を大きく上回っている傾向が見える。それに対して、現場指示は前 3 冊と比べて減少している。詳しく見ていくと、「会話」では文脈指示は約 58%に達するが、現場指示は 38%に過ぎない。観念指示は 4%弱を示している。「文法説明」の文脈指示は最も少なく約 5%に達せず、現場指示も約 17%に留まっている。観念指示は 2%足らずである。残り 76%を超えるものは全て用法の判断できない例である。「応用文」は本冊の中では文脈指示が最も多く 98%に及んでいる。それに対して現場指示は僅か 1%に留まる。「練習問題」での文脈指示は 17%を占めている。現場指示は僅か 7%に過ぎない。残りは、観念指示が 2%であり、用法の判断できない例文が 74%に上っている。調査結果から、本冊では文脈指示が多数提示されているのが一目瞭然である。用法の判断できない例文はほぼ「文法説明」と「練習問題」に固まっている。そこから、この教科書の「文法説明」と「練習問題」では場面の設定や文脈作りを重視していないことが窺える。

《标日中级下》の全体の指示用法の使用率は【図 7-10】に示されている。文脈指示の使用率はほかの指示用法より高く 31%を占め、現場指示は 17%だった。観念指示は前 3 冊と同じく少なく 2%のみである。指示用法が判断できない文はほぼ 50%である。この結果から、《标准日本语》では中級になると文脈指示が導入され提示率も高くなることと、観念指示は基本的に提示しないことが明らかになった。また前三冊と比較すれば、指示用法が判断できない例はほぼ変わらず、かなり多いことがわかった。

《标日中级下》における各指示詞の指示用法の全調査結果により、《标日中级下》はほかの三冊と同様に、使用率が非常に高い指示詞もあり、使用率が極て少ない指示詞もあることがわかる。一位から三位までは 30 回以上使用された指示詞である。一位の「この」は 172 回に達したが、13 位の「あそこ」は 1 回しか使用されていない。「この・その・あの」は四冊とも使用率が高く、本冊では全て四位以内に収まっている。一方、場所を表す「そこ」は僅かに 3 回しか使用されておらず、「あそこ」は最も少なく 1 回に過ぎない。《标日中级下》で採りあげられた 13 種の指示詞には、場所を指し示す指示詞と修飾関係を表す指示詞の「コ・ソ・ア」三系列が揃って提示されているが、物事を指し示す「あれ」が足りない。「あれ」は使用率のかなり高い指示詞なので、テキストの整合性に影響を及ぼすのではないだろうか。

各指示用法を観察すると、「その」「これ」などの指示詞は、現場指示用法より文脈指示用法のほうが多く用いられていることがわかった。ここから《标日中级下》は日本語中級者向けという主旨があり、選ばれた文章や会話などはやや難しく、中級レベルか上級レベルに近くなるため、当然のこととして文章・会話の中の指示詞は初級で学んだ簡単な現場指示と違い、文脈指示中心となっていると考えられる。しかしながら、観念指示は文法として採りあげておらず、「練習問題」や「会話」などに使われているだけである。

《标日中级下》は《标日中级上》のように一気に数多くの文脈指示詞を提示していないが、中級上を基盤にしてやや難しい文脈指示の用法を徐々に導入していることがわかる。また、本教科書を使用するのは主に日本語学習 3 年目程度の学習者である。《标日初级上》で現場指示に重点を置き、《标日中级下》で文脈指示に重点を置くのはこの教科書の特徴だと言える。すでに二年間日本語を学んだ学習者にとっては、指示詞の基本的な用法は把握できているだろう。

7.4《标准日本语初级(上.下)中级(上.下)》の比較

《标准日本语》は日本語科専攻用教科書ではないが、《标日初级上》では現場指示に重点を置き、「対立型」と「融合型」に分けて説明し、《标日中级上》から文脈指示用法を正式に導入して文脈指示に重点を置き、前方照応指示と後方照応指示を区別して解説しているのが本教科書の学習しやすいところであろう。ここから改定版の《标准日本语》は初版より詳細に指示詞を提示していることがわかった。この教科書を使用する学習者は、現場指示を用いる際には「対立型」と「融合型」を区別して用い、文脈指示は前方照応指示と後方照応指示を意識しながら使用できるだろう。また、《标准日本语》の初・中級を通して日本語を学んだ学習者は、少なくとも指示詞の基本的な用法は把握できるだろう。

《标准日本语初级(上.下)中级(上.下)》の各指示詞の全調査結果によると、《标准日本语》の四冊では数多くの指示詞の例文を用いているが、特に「文法説明」や「練習問題」に明確な場面設定がなく、文脈もない例が多いため、学習者は指示用法を混乱する可能性が高い。また、「そうですか・そうですね・そうだ・そのほうがいいです」のような表現は《标日初级上》に数多く使用されているが、一つの決まった言い方として意味だけ説明している。ここで文脈指示を導入する段階の妥当性を検討すべきである。

四冊に指示詞の用いられている例文が 1512 例もあることは指示詞の重要性が示唆されている。しかし《标准日本语》では指示詞を体系的に整えておらず、指示用法の整合性が配慮されていな

いことによって、学習者が指示用法を正しく把握する上では偏りが生じる可能性が高いだろう。

7.5 まとめ

ア.《标准日本语》は日本語科専攻用教科書ではないが、《标日初级上》では現場指示に重点を置き、「対立型」と「融合型」を分けて説明し、《标日中级上》から文脈指示用法を正式に導入して文脈指示に重点を置き、前方照応指示と後方照応指示を区別して解説しているのが本教科書の学習しやすいところであろう。ここから改定版の《标准日本语》は初版より詳細に指示詞を提示していると言える。また、このような指示詞の分け方は日本語文法と一致している。《标准日本语》を使用する学習者は、現場指示を用いる際には「対立型」と「融合型」を区別して用い、文脈指示は前方照応指示と後方照応指示を意識しながら使用できるだろう。一方、《标日初级上》の各課の指示詞の使用状況から見ると、指示詞を採りあげた密度が高いのは第 2 課と第 3 課、第 14 課で、「単語」や「会話」、「文法説明」五つの項目に全てある。初めて日本語を習う独学者に、最も早く提示しているのは指示用法の現場指示である。そして、他の教科書と同様に「これ・それ・あれ」を中心として、現場指示用法を説明しているが、第 2・3 課では場所を表す指示詞と連体修飾する「この・その・あの」に簡単に触れたのみである。「文法説明」や「応用文」、「練習問題」より「単語」と「会話」に用いられる指示詞が非常に少ない。(J1)～(J8)でまとめている実例以外では、ほぼ指示詞を提示するためではなく、ほかの文法や文型を説明するためにたまたま使われていることが見られる。ここから《标日初级上》は相当早く現場指示を導入しているが、特定の指示詞に偏り、体系的な提示ではないことが明らかになった。

イ.《标日初级上》では文脈指示の文があるが、本格的に文脈指示の導入が始まったのは《标日初级下》である。その「会話」では、文脈指示は《标日初级上》の 4 倍と大幅に増加し、現場指示は《标日初级上》より約 7%減少している。よって教科書では学習内容の進度によって中級レベルに近づけば、文脈指示の使用も増える一方だと考えられる。他方、《标日初级下》の文法説明では、文脈指示用法として使用された指示詞を提示しているが全て意味の説明や文型・接続詞から解説している。本来この《标日初级上》と《标日初级下》二冊を通して、基本的な日本語を覚え、中級に進むため、そこでは主な文法を教えるべきである。ところが、指示詞の現場指示用法は融合型と対立型に分けて述べているにもかかわらず、文脈指示は基本的な使い方さえ明確に説明していない。文脈指示用法は《标日初级下》ではある程度用いられているが、文法として詳細に解説しておらず、文型と語彙あるいは接続詞として説明しているのは問題点である。また、観念指示用法の例も見えた。観念指示用法は本来現場指示や文脈指示と類似するところがあり、観念指示用法をまったく導入していないのに突然用いると、学習者はそれまでに説明された現場指示だと誤解しやすいだろう。《标日初级下》の難易度は日本語能力試験 3 級に当たり、語彙量は上・下冊合わせて 3000 語程度である。このようなレベルの教科書では、指示詞の観念指示用法を導入すべきかを捉えなおす必要があるだろう。《标日初级下》の全体から見ると、《标日初级上》より指示詞の使用が大幅に増加し、主に「文法説明」、「応用文」と「練習問題」に集まっている。しかしながら「練習問題」で採りあげている指示詞には指示詞を練習するためになるものが極少なく、ほぼ他の練習でたまたま使用されたものだけである。そして、その中では現場指示用法として用いられているものが圧倒的に多い。これでは学習者にとって指示詞の練習には十分に役に立

たないことが明らかである。一方、「応用文」では現場指示用法も数多いが、文脈指示用法の例文もある程度提示されている。ところが、文脈指示用法に応じる説明文が整っていないため、せっかく提示した文脈指示は学習者に理解されないまま終わってしまう恐れがある。

ウ.《标日中级上》では、主に「会話」や「練習問題」、「文法説明」の三項目に指示詞が多数提示され、特に「文法説明」では四冊の中で最も多く指示詞が用いられ、初めて文脈指示用法を明確にしている。《标日中级上》では学習段階によって指示用法の使用率が変化し、初級と異なって、文脈指示は現場指示よりずっと多いことが見える。そして、(J19)(J25)(J26)(J27)(J28)(J31)(J32)に示しているように順番を付け、連続して7課を通し説明している。文脈指示には前方照応と後方照応があり、《标日中级上》ではそれを分けて説明し、指示対象が後ろにある場合は「コ」系指示詞を使用し、指示対象が前にある場合は「ソ」系指示詞を用いるなどと述べている。さらに、「これ・この」の前方照応指示用法を紹介し、後方照応指示と分けて解説しているのはこのテキストの特徴である。 ここから《标日中级上》は《标日初级上》、《标日初级下》と異なって、文脈指示に重点を置いていることが窺える。一方、全体的に見ると《标日中级上》の「文法説明」では、文脈指示用法を持つ指示詞を数多く用いているが、「それはそうと」や「その代わり」などは文脈指示として取り扱われておらず、意味を説明するだけの段階に留まっている。文脈指示用法として提示された指示詞も「コ」・「ソ」・「ア」系に分けて順番に説明するということをしておらず、また、体系的に整えられていることもなく、重なったりしているので、学習者に混乱を齎す恐れがある。また、《标日初级下》と同じく文脈作りや場面設定がない文が多いため、指示用法を判断できない例が半分近くもあり、これも教科書の問題点として注意すべきところであろう。

エ.《标日中级下》はこのシリーズの中では最も難しいものであり、日本語能力試験の2級に相当する。「単語」を見ると、前三冊と異なって指示詞は取り扱っていない。それと逆に「会話」「文法説明」「練習問題」では大量の指示詞が用いられている。特に「文法説明」はほかの項目に比べてより多いことが見える。《标日中级下》の全体から見ると、《标日初级上》のように文脈指示を集めて解説する箇所は少ないが、指示詞を含む項目で見ると、多数の指示詞の用法から項目の全体の意味と用法を説明しているのは本冊の特徴だと言える。《标日中级下》は《标日中级上》のように一気に数多くの文脈指示詞を提示していないが、中級上を基盤にしてやや難しい文脈指示の用法を徐々に導入しいることがわかる。また、本教科書を使用するのは主に日本語学習3年目程度の学習者である。《标日初级上》で現場指示に重点を置き、《标日中级上》と《标日中级下》で文脈指示に重点を置くのはこの教科書の特徴だと言える。すでに二年間《标准日本语》日本語を学んだ学習者にとっては、指示詞の基本的な用法は把握できているだろう。

一方、調査結果から《标日中级下》では文脈指示が多数提示されているが、用法の判断できない例文はほぼ「文法説明」と「練習問題」に固まっている。そこで、この教科書の「文法説明」と「練習問題」では場面の設定や文脈作りを重視していないことが示唆される。

7.6 教科書の問題点に基く日本語教育への提案と今後の課題

《新编日语》の調査結果と類似する《标准日本语》での指示詞使用頻度の順位は、実際の生活での使用率の順位と合致しない傾向が見える。言語の習得と実践は緊密に繋がっており、実際の

使用率が高い順に教科書で提示しないと、学習者の日本語習得に差し支えるのではないかと危惧を抱かせる。

日本語科の学生を対象にする教科書ではないが、《标日初级上》では現場指示を「対立型」と「融合型」に分けて説明して、文脈指示用法を正式に中級上から導入し、数多く採りあげていることと、前方照応指示と後方照応指示を分けて解説しているのは《标准日本语》の学習しやすいところであろう。ここから改訂版の《标准日本语》は《新编日语》より詳細に指示詞を提示していることがわかる。この教科書を使用する学習者は、現場指示を用いる際には「対立型」と「融合型」を区別して用い、文脈指示は前方照応指示と後方照応指示を意識しながら使用するだろう。

また《标准日本语》の改訂版は初版より指示詞を重視していることから、今後作られる教科書は引き続き発展が期待できる。日本語研究、国語研究では指示詞のカテゴリーや指示用法の分類に関しては多岐に分かれており、日本語の教科書でどれを採用するか躊躇う現状はやむを得ない面があるが、指示詞の根本的な用法を初級から導入し、文章や談話などで使用頻度が高い指示詞の文脈を作り、場面設定して提示すれば学習者の正用率を高めるのではないか。そうした前提そのものを再考した新たな日本語教科書の登場が待たれている。

注

第7章

1）1985年12月13日中国教育部の人民教育出版社は日本の光村図書出版社と共同で中国の社会人のために中国人学習者独学用日本語教材を編集することを決めた。四年間の努力の結果、1988年7月に≪中日交流標準日本語≫の初級が出版された。1990年1月に中級も出版され、初・中級を合わせて4冊である。そして、テレビ講座用テープやＣＤもついている。2005年に≪中日交流標準日本語≫の初級が改訂され、2008年4月には改訂した中級が出版された。現在中国市場に販売されているのは改訂されものである。

2） “そこで”と“それで”の区別については、《标日中级上》では以下のように述べている。

“そこで”是连词，用于补充某场景或状况出现之后产生的情况，尤其常常用于补充新出现的必要的情况（📖初级第43课）。本课中，此前一直在谈论日本铁路的话题，到此稍微改换一下角度，提出另一个话题。（「そこで」は接続詞である。あるシーンや状況が現れたことを説明するために使用されている。特に新たな状況が現れた場合に、それを説明するために使用される（📖初級43課）。本課では、ずっと日本の鉄道の話題について話していたが、ここで少し別のトピックを提唱するために角度を変え、別の話題を出した。）

“それで”（📖初级第26课）和“そこで”的用法十分相似，二者都可用于承接前述内容而导出其后的内容。但是，“それで”表示前述内容是后述内容的原因或理由。而“それで”表示出现了某事或某种情况，陈述与该状况密切相关的事情。本课中的“そこで”以前述内容为前提，提出“こんななぞなぞがあります”这一新情况进行介绍。与其相反，下面使用“それで”的这个例句，表明前述内容是形成这个谜语的原因。（「それで」（📖初級第26課）と「そこで」の使い方は非常に似ており、両方とも、前述の内容を受け、その後の内容をエクスポートすることができる。しかし「それで」は前述が、後述の原因や理由を表す場合に使用される。「そ

こで」は何かおきた場合、文と密接に関連していることを述べる時に用いる。本課の「そこで」は前述の内容を前提にし、「こんななぞなぞがあります」を導入した。それとは逆に、下の例文に使用された「それで」は前文に述べたことがこの謎の形成の理由になるので、用いた。）

3) “その節”の詳しい説明は《标日中级上》の＜文法解説：36＞に示されている。

“この間はどうも”“先日はありがとうございました”“その節はお世話になりました”开场白还经常提及上次见面时的事情并表示感谢。例如，上次收到礼物后再次见面，即使收到礼物时已经说过感谢的话了，也还要说“先日は結構な物をありがとうございました（谢谢您前些天送给我那么好的礼物）”，表示没有忘记上次的馈赠而再次感谢对方。类似的说法还有“先日はごちそうさまでした（谢谢您前些天的热情款待）”“（先日はお邪魔しました前些天打扰您了）”等。如果忘记说这样的寒暄语，可能会被认为是没有礼貌的人，因此特别要注意。（「この間はどうも」 「先日はありがとうございました」 「その節はお世話になりました」のようなあいさつは「この前会った時」の話をして感謝の意を表す。例えば、前回プレゼントをもらった後、再び会って、プレゼントをもらった時も感謝の言葉を述べたとしても、また「先日は結構な物をありがとうこざいました」などと言わなければならない。前回の贈り物のことを覚えていて、再び感謝の気持ちを相手に伝える。これと似たような言い方に「先日はごちそうさまでした」などがある。こういう挨拶を忘れると失礼だと指摘されるので、特に注意が必要である。）

4) 《标日中级上》の第2課では「こちらにお願いします」を使用する理由が以下のように書かれている。

本课中李秀丽来拜访大山，接下来的话题是希望把她请进来，而对此大山极其同事都很清楚，所以大山没有说“こちらに案内してください（请带到这里来）”，而是说“こちらにお願いします”。同样，佐藤使用“今回もよろしくお願いします（这次还请您多关照）”这种说法的前提也是双方都很清楚请求的内容，即希望协助做事，一起好好合作。在这种场合仅用“お願いします”则意思不够明确，要在前面加上“こちら（の方）に”或“よろしく”之类的话，以免产生误解。如上所述，“お願いします”可以与各种各样的词搭配，用来替代具体的动词。由于这是极其常用的表达方式，要特别注意不能把意思弄错了。（この課では李秀麗が大山を訪ねたので、続いて大山が李さんを部屋に案内する話である。この事を大山とその仲間たちはよく知っているので、大山は「こちらに案内してください」ではなく「こちらにお願いします」と言った。同様に、佐藤が使用した「今回もよろしくお願いします」も話し手と聞き手が双方とも承知した内容であることを前提とする。即ち皆で協力して一緒に仕事をするという願いである。この場合、「お願いします」だけでは意味が不明確なので、前に「こちら(の方)に」か「よろしく」などを付け加え、誤解されないようにする。このように、「お願いします」はさまざまな言葉と組み合わさり、具体的な動詞に代わる役割がある。これは極一般的な表現なので、意味を取り違えないように注意しなければならない。）

5) 第31課では、「それもそのはず」の前の「クモの糸で人の体を支えることに成功した」は実験の結果を表す。その後の「クモの糸は鉄の数倍強い」は理由を示す。このように「それもそのはず」は前の事実と後ろの理由を結び、前の事実にとって、後ろの理由が信頼できるこ

とを表す。

調査資料

《中日交流标准日本语初级上》人民教育出版社（2005）
《中日交流标准日本语初级下》人民教育出版社（2005）
《中日交流标准日本语中级上》人民教育出版社（2008）
《中日交流标准日本语中级下》人民教育出版社（2008）

終章

1 本研究のまとめ

本研究は、序章、第一部（第 1 章・第 2 章・第 3 章)、第二部（第 4 章・第 5 章)、第三部（第 6 章・第 7 章)、終章合計 3 部、9 章から構成されている。以下では各章で明らかになったことを要約する。

序章では日中指示詞の対照研究を行う動機と目的、本研究の研究対象、研究内容、研究方法と教科書調査の目的、調査対象、データの分析方法などについて述べた。

第一部では日中指示詞の先行文献に沿って、本研究を位置づけ、両言語の指示詞の非対応表現については指示機能の虚化、指示機能の拡張という視点から分析すると同時に、指示詞の省略表現から見た日中指示詞のずれを論じた。

第 1 章では、日中指示詞の指示領域と指示機能に関する研究をまとめ、指示詞の日中対照研究における問題点を絞り出し、本研究の基本的な枠組みを設定した。

第 2 章では、指示詞の指示機能が弱くなり、ほかの機能が指示機能より発達している場合に、日中指示詞が対応しにくいことが明らかになった。また、時間を示す指示詞においては、絶対指示用法と日本語のアスペクト・テンスに関わる指示詞が中国語の“这/那”と対応していないことが多いことが判明した。日中指示詞が対応できない原因を以下に示す。

ア．中国語の接続機能を持つ指示詞は語形からみると一般的な指示詞“这/那”と変わらず、外観のみでは、日本語の接続機能を持つ指示詞とそうではない指示詞のように明確に区別できない。また、そのような“这/那”は日本語より因果関係が弱く、前文は後文の根拠という程度の関係を示すに過ぎない。さらに日本語には逆接を示す「それが」「それにもかかわらず」のような指示詞の用法があるが、中国語の“这/那”はそれほど逆接機能が強くない。指示機能が低く、接続機能が発達している指示詞は日本語と中国語の両方に存在しているが、「そのため」などの接続機能を持つ日本語の指示詞は、“这/那”の接続機能よりも発達することが対応しにくい要因だと言える。

イ．“这么/那么”が虚指になる場合、指示機能は極端に低下し、副詞の機能のほうがより強く働き、文中で副詞性修飾語、連用修飾語になる。このような“这么/那么”は日本語の指示詞と対応し難く、「なんと」のような感動詞、あるいは形容詞、副詞として訳されることが多い。また、「X 像 Y 那样」の“那样/那么/那么样”は後続の文成分を修飾すると同時に指示の役割も担っている。訳文ではほぼ比喩、比況を表す「X は Y のようだ・みたいだ」の形で現れる。そして、指示詞“这么/那么”が副詞と共起して程度を示す場合に、その指示詞と副詞はそれぞれ指示対象を修飾することができるが、日本語の訳文では指示対象は指示詞か副詞のどちらか一方の修飾しか受けない。修飾語になる日中指示詞は上記の場合、対応しにくいことが明らかになった。

ウ．“我这人/他那人”のような指示詞が人称代名詞と共起して一度人称代名詞や人名が指し示した人物を再度指示詞で指し示す同格指示は、人称代名詞と指示詞が並列関係や所属関係を構成しており、指示詞を省略してもフレーズの意味に差し支えないため、指示詞の指示機能が弱く

なっている。一方、日本語の場合は人称代名詞と指示詞「この・その・あの」が組み合わさり「この私」のような「Dem＋PP」の形を形成することができるが、これは同格指示ではなく、指示機能は虚化していない。よって、同格指示の「PP・N1＋“这/那” 」は、ほぼ日本語の指示詞と対応できず、また同格指示の変形も同格指示用法と同じ理由で対応していない例が多い。

エ.「“这/那” ＋ NumCL＋NP」の数量詞も指示機能を担っているため、ある文脈の中の一つ、あるいはいくつかの個体を指す特定指示（individual）で、ある種の人あるいは事物を指す総称的な指示（generic）になる。「総称的な指示」として使用されている“这/那＋些/种/类”は不定標識になり、指示詞の指示機能が低下しているため、日本語の訳文では翻訳されず、省略されることがある。

オ. 中国語文では時間を示す際に、進行中の動作を表す場合は“这…”で示すことができるが、日本語では、指示詞に訳されず、「テイル」型に訳される。また、発話現在で述語が表す出来事が終わっていない場合、日本語文では指示詞よりも、テンスとアスペクトを用いて表現するほうがより多く見られる。

カ. 日本語の観念指示用法にあたる「あの世」は聞き手が判断できないことであり、発話者さえ指す場所が把握できない様態なので、指示機能が相当弱くなっていると考えられる。指示機能が虚化している指示詞（同じ意味を示す）が両言語ともに存在すれば、対応できるが、「あの世」のように、中国語に意味や機能が類似する指示詞がなければ、指示詞を使用せずに“来世”などに訳される。また、中国語の指示用法には日本語の絶対指示用法と似ている用法（「Dem+年/月/曜日/日」）があるが、日本語の絶対指示と対応できない現象が際立つ。

第3章では日中指示詞の省略表現に関する先行研究を整理し、日中対訳作品の例文から見た省略表現を分析した。そこから日中指示詞の用法・機能の異同を見出し、日中指示詞が訳文で省略された原因を主に以下の「指示機能」、「指示用法」、「構文」の三側面から究明した。

指示機能からみた省略の原因はア①、ア②、ア③である。

ア①. 指示機能より標識機能が強く、指示対象を取り立てる場合、指示詞の代わりにほかの品詞を使用して、取り立てたい対象を焦点化する。このような文では指示詞を省略しても意味的に変化がなく、指示詞を復元しても非文にならない。また、中国語の指示詞“这/那”の指示機能が弱化し、指示対象が明確ではない場合、訳文では日本語の指示詞や、ほかの品詞に翻訳されたり、指示詞が省略されることがよく見られる。

ア②. 一般的に日本語文の修飾語になる指示詞「こんな・そんな・あんな」は、前にほかの修飾成分を置かず、裸の状態で使用される。他方、中国語文では修飾語になる “这样/那样”、“这么样/那么样”、“这么/那么”はよく前から修飾を受け、裸の状態ではなく、指示対象を指示詞と指示詞を修飾する文で二重に修飾する。このような二重修飾の文では指示詞を修飾する文が指示対象の属性を明確にすれば、指示詞が省略される。

ア③. 「それなのに」のような指示詞を語基として含んでいる「指示詞＋a」の形は接続機能を持っているが、「から」、「ので」など指示詞と関連がない接続表現とは異なる。前の内容を前提として後に予告的に関係づけていくのは指示詞「それ」なので、「それなのに」は指示詞「それ」の連続、その機能は指示機能の延長と見られる。このような指示と接続機能の二を担っている指

示詞は、中国語訳文では指示詞を省略したり、接続詞に訳されたりする場合がある。
指示用法からみた省略の原因は以下のイ①、イ②の二つがある。

イ①．後方照応として用いられた様態を示す「こう」が省略できるかどうかは、後文にある照応する内容や文の長さと関係する。「こう…」が指している内容が多ければ多いほど、訳文では指示詞を使用する可能性が高い。それに対して、「こう…」が指している内容が少なく、文も短い場合、訳文では指示詞が省略される可能性が高いと言える。

イ②．指示対象が話し手と聞き手の共通知識、共通体験であるかどうかによって、訳文では指示詞が翻訳されるか否かが決まる。中国語文では指示対象の特徴を示す固有名詞のみで話し手と聞き手の記憶に蓄えている共通知識、共通体験を指すことができるが、日本語文ではその固有名詞の前に「ア」系指示詞を用いなければいけない。

構文からみた省略の原因は以下のとおりである。

ウ．中国語の訳者が訳文全体の構造や指示詞の重複などを考慮して、人称代名詞や人を示す固有名詞を指示詞の代わりに使用していることがよく見られる。さらに、人称代名詞のみではなく、ほかの置き換える表現、例えば名詞文などで指示詞と等価の効果がある場合、指示詞は省略できる。

第二部では対訳資料を用い、照応指示用法（anaphora）に焦点を当て、「コ・ソ・ア」系指示詞が中国語の“这/那”に、“这/那”が「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳された場合、日本語から中国語へ、中国語から日本語への両方の視点から、両言語の指示詞の機能と用法の類似点及び相違点を解明することを試みた。

第 4 章では、前方照応指示と後方照応指示の「コ・ソ・ア」系指示詞が“这/那”系指示詞に翻訳された場合、指示用法や指示機能がどのように対応しているかを中心に考察した。

前方照応指示については、迫田（1998）で述べた「単純照応用法」のように典型的な照応用法の「コ」系では、“这”系の指示用法や指示機能と全て対応している確率が高いことが明らかになった。また、原文の指示詞と照応する内容が依頼などに関する表現である場合、前方照応指示に訳しても通じるが、話し手が相手のことを配慮し、婉曲的な前置きをしてから依頼内容を伝えるため、原文の前方照応指示として使用されている「コ」系指示詞は後方照応指示の“这”に訳されている現象が見える。このような日本語文の指示詞は中国語文では指示詞に翻訳されているが、指示用法が対応していない例が多い。

前方照応指示の「コ」系指示詞は“那”に翻訳される例が極めて少なく、4 例のみである。さらに、その 4 例は全て“这”、“那”のどちらに翻訳されても不自然にならない文であった。よって、前方照応指示の「コ」系指示詞はほぼ“那”系指示詞と対応していないと言える。

前方照応指示の「ソ」系指示詞については、“那”に翻訳されている頻度が「コ」系、「ア」系指示詞に比べ著しく高いことが判明した。また、前方照応指示の「ソ」系指示詞が「回指」用法の“这”と対応する例では、“这…”と “那…”の両方に翻訳される現象が見える。しかし、“那…”を使用すると、話し手の物事に対する関心度が明らかに“这…”より低くなる。訳者は話し手が物事に対して関心度が高いと判断した場合、“这…”を用いるわけである。

前方照応指示の「ア」系指示詞が“这”に訳された例は「コ」系、「ソ」系より少ない。話し手と聞き手に共通している出来事や経験、共有知識で使用されている「ア」系指示詞は“这”と“那”の両方と対応できる。話し手の長期記憶に蓄えられ、記憶に刻み込まれている場合、使用されている「ア」系指示詞は“那”と対応していることが明らかになった。

後方照応指示の例は前方照応指示に比べ極めて少なく、「コ」系指示詞を中心に使用されている。高革萍（2002ｃ）では「“这”と指示対象との間、余計な表現が表れず、ストレートな指示のしかたによって“这”の指示性が明確にされる。指示詞と指示対象との間に婉曲表現などの言葉が入ると、一つの『隔たり』が生じ、“这”の後方照応性が失われ、前方照応指示性が表れる」とまとめている。

調査した例群では高革萍（2002ｃ）が挙げた「後方照応性が失われ」た“这”の例と類似している例も中国語の「回指（前方照応指示）」に訳されたり、「前指（後方照応指示）」に訳されたりすることが明確になった。そのような例では、訳文において内容を強調する“呀”“啊”、内容を説明する“其实”などを用いることによって、高革萍（2002ｃ）が主張した中国語の訳文では後方照応指示（「前指」）に訳せない「コ」系指示詞も、「前指」の“这”に訳されることが明らかになった。

後方照応指示の例では「こんな」と「こう」が多く、ほとんどが指示詞と指示内容を直接引用するというパターンである。後方照応指示の例の前文を①、後文を②で示すと、直接引用するパターンは①→②の順番で、②は①の内容を説明し、補う役割を果たしている。①は②の内容についてまとめて、前置きという働きを担っている。①が前にこないと、②は唐突であり、一体何について話しているのか不明瞭であり、②を後に置かないと、①の文は不完全である。このような例は中国語の指示詞“这/那”と翻訳されるだけではなく、指示用法も対応していることが判明した。

第５章では、中国語の指示詞“这/那”を「回指（前方照応指示）」と「前指（後方照応指示）」の用法に分け、それぞれ日本語の指示詞との対応状況を考察した。

ア.「回指」を用いた“这/那”と「コ・ソ・ア」の対応

“这”は「コ」系指示詞、“那”は「ソ」系指示詞に翻訳されても、指す対象、指示機能、指示詞の種類が原文と全て一致するとは限らない。王亜新（2004）や王湘榕（2011）が中国語の指示詞“这”は日本語の指示詞「コ」と対応することが多いと論じたが、今回調べた例群では意味と指示機能が全て対応している例は少なく、多くの例は指示詞に訳されるも広義的に対応しているが、指示機能などが対応していないことが明らかになった。

また、“这”が「コ」系指示詞、“那”が「ソ」系指示詞と対応している要因は原文の著者と日本語訳の訳者が同じ視点から物事を述べていることにある。たとえ過去の事であっても、より聞き手に臨場感を持たせるために、近称指示の“这”を過去の時間として表す場合がある。それと同様に、訳者も著者と同じ視点から出来事を述べ、今や過去と関係なく、語り手はビデオを再生しているように読み手に出来事を語り、その生き生きとした場面を再現するため、同じように翻訳では近称指示の「コ」系指示詞を選ぶ。

中国語の指示詞“那”が「コ」系指示詞に訳されている原因は、a 原文が地の文で、著者は第三者の立場から語っているため、心理的な距離は遠いが、日本語訳者は主人公の視点から語ることにより、文学的な色彩を強め、特殊な表現効果を高めるために「コ」系指示詞を用いる。b 原文では一つの文であるが、日本語訳文では訳者によって二文に分けられ、文脈関係が変わるため、「コ」系指示詞に翻訳されている。

「回指」用法の“这”が日本語の「ソ」系「ア」系指示詞に翻訳された例は少ない。そのうち「ソ」系指示詞と対応しているものについて見ると、“这”はほとんどが場所を指す地の文での使用である。一方、「ア」系指示詞に翻訳された例は大体が人と物事を指し示す例で、ほぼ会話文での使用である。中国語文では、話したばかりの内容は文脈によって、“那”も使用できるが、基本的に“这”のほうがよく用いられる。“这/那”を選択基準は「時間の遠近」「距離の遠近」「心理的な距離」などであり、一方日本語では「話し手と聞き手の領域」を重視し、話し手と聞き手の双方の領域に共存する知識なら、必ず「ア」系指示詞を用いる。

また、中国語文では、話し手自身と関連性のないことを、心理的な距離が遠いと認識し、遠称指示の“那”を用いる。しかし、会話の内容が変化するにつれて、本来話し手に関係がない人物や事柄などが、話し手と結びつくようになると、話し手の心理的な距離が近くなるため、近称指示の“这”で指し示すようになる。一方、日本語文では中国語文のような心理的な変化につれて、遠称指示から近称指示に変わることはなく、文の始めから終わりまで、話し手と聞き手が両方とも知っている情報なら、「ア」系指示詞という基準で指示詞を用い、「コ」と「ソ」が「ア」と入れ替わると、話し手と聞き手双方とも知っている旧情報が片方しか知らない新情報になる。

イ.「前指」を用いた“这”と「コ・ソ・ア」の対応

対訳資料では「前指」用法の“这”が日本語の指示詞に翻訳された例は「回指」用法より遥かに少なく、人物、事物を表す例がほとんどで、指示用法は対応していないケースが多く、「前指」用法は現場指示に訳されたりしている。その原因は著者と訳者が着目している焦点が異なっているためである。中国語の原文はビデオカメラで先ず撮影して、それから読者に見せるように第三者の立場から述べている。しかし、日本語の訳文は話し手が読者と共に同一の場所に立っており、実物を目の前にしながら語ったものである。

“这么”は “事”を修飾し、後文では指示詞が指している事を説明するという典型的な「前指」用法の例（「前指」についての先行資料ではほとんどこのようなタイプの例である）は「コ」系指示詞に訳され、中国語の「前指」用法と日本語の「後方照応用法」と対応している確率が高い。

「前指」の“这”が「ソ」系指示詞と対応する例は極めて少ないうえに、以下の 2 つの条件に当て嵌まる必要がある。①指示詞は用いた文の前文と後文の間にある。そして、指示詞を用いた文は前文と意味的に緊密に繋がり、後文は前文と指示詞を用いた文の両方を説明している。②指示詞を用いた文に「また」など、前の文脈でもうすでに述べたことを記している語がある。それらの条件に当て嵌まると、「後方照応指示」と「前方照応指示」の両方に訳される。

「前指」として使用されている指示詞“这”が「ア」系指示詞に訳されている例も少なく、修飾語になる “这么/这样/这么样”のみである。そして、文体から見ると、会話文が多く、話し手と聞き手が双方とも知っている情報を表す。

第三部では日本語教育における指示詞の研究の一環として、日本語教科書では指示詞がどのように取り扱われているかについて 6 項目に分けて調査した。指示詞の導入から、提示順、提示法、練習問題、文脈や場面設定があるかどうかを調べ、教材の改善や作成について提言した。

第 6 章では《新编日语Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ》の 4 冊を通して、各指示用法を比較した。現場指示は主に《新编日语Ⅰ》で多く使用される、学習者の学年が高くなるとともに現場指示の使用率が下がるなどの傾向が見える。一方、文脈指示は《新编日语Ⅳ》で最も多く扱われ、現場指示と正反対に学習者の学年が高くなるにつれて文脈指示の使用率が徐々に上がる傾向が窺える。観念指示用法は最も少なく、指示詞の各用法全体の中では《新编日语Ⅰ》と《新编日语Ⅱ》を合わせて、僅か 1%、《新编日语Ⅲ》は 8%、《新编日语Ⅳ》は 10%になっている。文脈や場面の設定がないため、指示詞の用法が判断できない文は《新编日语》の 4 冊では、主に「文法説明」と「練習問題」に存在し、それぞれ《新编日语Ⅰ》12%、《新编日语Ⅱ》42%、《新编日语Ⅲ》29%、《新编日语Ⅳ》で 8%を占める。《新编日语》は現場指示と文脈指示を選別してまとめ、特に《新编日语Ⅰ》では現場指示が詳しく書かれている。日常生活によく使われている指示詞を全て取り上げ説明しているのはこの教科書の特徴だと思われる。しかし、《新编日语》の指示詞の練習問題などは明確な場面設定や文脈もないケースが多く、観念指示を導入していないのに例文に用いるなど、学習者を混乱させる可能性もある。特に《新编日语Ⅱ》と《新编日语Ⅲ》は日本語科の一年生と二年生が使用する教科書であり、主たる文法事項がまとめられたものである。例えば《新编日语Ⅱ》のように 4 割もの例文の文脈や場面の設定がなければ、指示用法の理解に差し支えるだろう。また、本来教材で取り扱う文法は学習段階によって難易度が変わっていくはずだが、《新编日语》では、現場指示用法の提示は第 1 冊の初級レベルに留まっていることと、第 1 冊から第 3 冊まで指示詞の難易度がそれほど変わらないことから、難易度の高い指示詞の指導が重視されていないことが明らかになった。さらに注目すべきなのは、現場指示用法と比べて、文脈指示は文法として詳しく書かれておらず、説明の例文も少ないことと、数多くの文脈指示詞を扱っている例が、指示用法を学ばせるのではなく、ただ提示した文章や会話にあったからという事実である。

《新编日语》の 4 冊では 15 種類の指示詞 2153 例が取り上げられている。その中でトップになった「この」は 4 冊合計で 570 回取り扱われていたが、最下位の「あんな」は 16 回に過ぎない。事物を指し示す「これ・それ・あれ」の中の「これ・それ」のみ数多く提示されたが、「あれ」は 12 位、僅か 33 回だった。ここで問題になるのは、事物を指し示す同じ指示詞であるにもかかわらず、提示率に大きな差が見られることである。そして、「ここ・そこ・あそこ」も同様に相違点が見られる。以上のことを考えると《新编日语》では指示詞がバランスよく扱われていないと言えるだろう。総合教程の教材として使用されている《新编日语》は、学習者の学習段階を考慮せず、説明に一貫性を持たせておらず、各課の連絡が密接ではなく、指示用法の整合性が配慮されてないという事実から、当該教材を使用する学習者は、正確に指示用法を把握するのが困難だと推測できる。

第 7 章では《标准日本语》の 4 冊における指示詞の提示状況を調査した。《标日初级上》では現場指示に重点を置き、「対立型」と「融合型」に分けて説明し、《标日初级下》では文脈指示を導

入している。しかし、《标日初级下》の文法説明では、提示した文脈指示用法の指示詞を全て意味の説明や文型・接続詞から解説している。《标准日本语》の場合、《标日初级上》と《标日初级下》2 冊を終えて中級に進むため、本来基本的な文法を教えるべきだが、指示詞の現場指示用法は融合型と対立型に分けて述べているにもかかわらず、文脈指示は基本的な使い方さえ明確に説明していない。《标日中级上》では、文脈指示用法に前方照応と後方照応があることを明確にし、順番を付け、連続して 7 課を通し説明している。一方、《标日中级下》では大量な指示詞が用いられているが、指示詞の説明はほぼ意味上の説明に偏っており、「文法説明」と「練習問題」には、どの用法であるかを判断できない例文が数多くある。観念指示用法は《标日初级下》から例文に見られるが、観念指示用法についての導入と説明が一切見当たらない。《标准日本语》は観念指示用法を学習範囲から外していると考えてよいだろう。

しかしながら、《标准日本语》は指示用法を学習しやすい側面も持っている。《标准日本语》は日本語科専攻用教科書ではないが、《标日初级上》で現場指示用法に重点を置き、《标日初级下》から文脈指示用法を導入し、《标日中级上》で文脈指示に重点を置き、前方照応指示と後方照応指示を区別して解釈しているという点である。また、改訂版の《标准日本语》は初版より詳細に指示詞を提示していることがわかる。この教科書を使用する学習者は、少なくとも指示詞の基本的な用法を把握することができ、現場指示の「対立型」と「融合型」を区別して用い、文脈指示の前方照応指示と後方照応指示を意識しながら使用できるだろう。ただ、《标日初级上》はかなり早く現場指示を導入するのだが、特定の指示詞に偏り、体系的な提示ではないことが明らかになった。また、《标日初级下》について見れば、特に「練習問題」での指示詞の使用が《标日初级上》より大幅に増加しているが、指示詞の学習を目的とした問題自体は少なく、他の練習を目的とした問題でたまたま使用された指示詞が多かったということだ。そして、それらは現場指示用法として用いられているものが圧倒的に多かったのである。このことから学習者が指示詞の多様な用法練習を十分に行えないことが明らかになった。さらに、「応用文」では文脈指示用法の例文もある程度提示されているが、文脈指示用法に対する説明文が整っていないため、せっかく提示した文脈指示が学習者に理解されないまま終わってしまう恐れがある。《标准日本语》の 4 冊では数多くの指示詞の例文を取り上げているが、特に「文法説明」や「練習問題」に明確な場面設定がなく、文脈もない例が多いため、学習者が様々な用法を区別できずに混乱する可能性が高い。また、「そうですか・そうですね・そうだ・そのほうがいいです」のような表現は《标日初级上》に数多く使用されているが、一つの決まった言い方として意味だけ説明している。このことから中級レベルで文脈指示を詳しく解説するのでは遅いのではないかという疑問も出てくる。今後は文脈指示を導入する段階の妥当性も検討すべきであろう。また、《标准日本语》の指示詞の使用頻度の順位は、実際の生活での使用率の順番と合致していない傾向が見られた。言語の習得と実践は緊密に繋がっており、実際の使用率が高い順に教科書で提示しないと、学習者の日本語習得に問題が生じる可能性がある。第 2 章と第 3 章では観念指示用法として用いられた「ア」系指示詞は中国語の訳文では省略されたり、狭義的に対応していないケースが多く見られる。これは日中指示詞の指示用法の相違点を意味している。また、日本語指示詞の観念指示は現場指示や文脈指示と類似しているところがある。《标准日本语》の難易度は日本語能力試験 2 級に当たり、語彙量は 4 冊合計で 6000 語程度である。このようなレベルの教科書において、指示詞の観念指示用法を導入すべ

きかを捉えなおす必要があるだろう。

2 日本語教育への応用

第2章から第5章までは、非現場指示としての日中指示詞の指示用法、機能における類似点と相違点を明らかにした。第6章から第7章までは日本語教科書《新编日语》と《标准日本语》における指示詞の全数調査を行うことによって、調査した教科書に存在している指示詞の提示に関する問題点を見出した。以上の成果を日本語教育に応用するため、本研究結果と日本語教育とのつながりについて述べる。

いままでの日本語教育現場で行われていた指示詞の指導は、指示用法を現場指示と文脈指示の2種類に分けるのが主流であり、第6章と第7章で行った教科書調査の結果のように現場指示用法の指導に重点を置き、現場指示用法を最優先課題とするものである。しかし、「これはなんですか。」「それはテープです。」というような会話は現実に成立し難いものであると木村(1992)はすでに指摘している。したがって、どのようなレベルの学習者に向けた教材であるとしても、文脈指示より現場指示用法を重視することが学習者にとって体系的な理解を齎すことにはならない。

また、観念指示用法にいたっては、中国語では指示用法の範疇ではないため、中国人の学習者にとって習得は極めて難しく、母語で理解しようとしても困難であることが推測される。そして、第3章と第4章で得られた結果により、観念指示用法は日中の指示詞が対応していないこと、日中指示詞の省略にずれが生じていることが判明した。さらに、第6章と第7章の教科書調査では観念指示用法の導入や解説がないにもかかわらず、当該用法が提示されていることがわかった。観念指示用法は本来現場指示や文脈指示と類似するところがあり、学習者はそれまでに説明された現場指示だと誤解する恐れがある。そのため、指示詞を指導する際に、現場指示と文脈指示だけではなく、観念指示も加えるべきだと本論文では主張する。

そして、調査した2種類の教科書では指示詞を語基とした「Dem＋…」のような接続機能を持つ指示詞を接続詞として解説し、意味的な説明に留まっていることがわかった。一方、第2章で述べた接続機能を持つ「それで、そこで、それから」などのような2語以上の複合である指示詞は、中国語の接続機能を持つ指示詞と異なる。語形からみると日本語の指示詞は中国語より接続詞に近く、機能からみると中国の“这/那”の接続機能の発展は日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞より遅れていると見られ、接続機能に関しては「虚指」の“那”の接続機能は「そこで」など接続機能を持つ日本語の指示詞より弱い（「虚指」の“那”＜「そこで」などの接続機能を持つ日本語の指示詞）ことが明らかになった。この日中指示詞の機能におけるずれが、中国人学習者の指示詞の誤用を招いていると予測できる。つまり、教科書において指示詞を語基とした接続機能を持つ指示詞に関する説明を接続詞という視点から始めることに問題があると言えよう。指示詞を語基とした接続機能を持つ指示詞については、指示詞の基本的な指示機能を説明したうえで、接続機能の説明を加えることで学習者の体系的な理解を促すことができると考える。

また、相手の問いかけに対して同意や反対などの応答や、直前の文の述語を代用するのに「そうだ・そうではない」などを用いることや、応答や述語代用の際様々な助動詞・動詞をつけた確信の度合を表す「そうらしい」などの表現について本研究で調査した教科書では明確に指示用法が表記されていないことがわかった。そのほかにも、「この3週間」・「この春」などの絶対指示

用法を教科書では、ただ「『コノ』と一年や一か月などのような具体的な期間の長さを表す表現と組み合わせて、現在までの期間を示す」と解説している。実際には指示詞に基づく用法でありながら、このような用法を日本語教育では別の表現として捉え、指示用法と切り離して指導していることがわかる。たしかに初級レベルの日本語学習者にとって、切り離して指導したほうが最初は理解しやすいかもしれない。しかし、中・上級レベルになると指示用法指導の整合性と一貫性が配慮されていなければ、指示詞の発展学習は望めず、初級レベルに留まってしまうおそれがある。これらの問題も日本語のレベルを問わず、指示詞の誤用を引き起こす原因の一つと考えられるだろう。

中国語母語話者が中国語の指示詞を選択する際、相手への配慮などは問題にせず、自分自身のことを基準にして決定する傾向があり、【自己依存型】と呼ばれている。話し手にとって距離が近いこと、関心が高いことなら、“这”、その逆なら“那”で指し示す。1 文の中で、話し手の指示対象に対する心理的な距離感が遠から近に変わることもある。また、逆に、話し手の指示対象に対する心理的な距離感が近から遠に変わることもある。この場合、１文の中で話し手は同一の指示対象に対して、“那”を用いたり、“这”を用いたりすることができる。一方、日本語は【他者依存型】と呼ばれ、特に話し手と聞き手が共有知識を持ち、共通の体験を指す場合は中国語の指示詞のように遠称から近称に変わることはなく、「ア」系しか使用できない。それは「ア」系指示詞に対して中国語の“这”と“那”の両方が対応できることからもわかる。よって、中国語の指示詞の用法と異なる「ア」系指示詞は教材の中で詳細に解説するべきである。

また、教科書調査において、提示された指示詞は文脈や場面設定がないため、指示用法を判断できない例文が５割あることがわかった。特に「文法説明」と「練習問題」にそのような例が集中している。前述したように指示用法には文脈指示があり、さらに前方照応指示用法と後方照応指示用法に分けられているが、文脈がなければどのような用法であるかが判断できないので、指示詞を指導する際に、教師は文脈の有無に注意を払うべきである。文章に用いられた指示詞は前文と後文が存在していることから判断できるが、「文法説明」と「練習問題」は文章から一部を切り取ったものであるため、注意が足りなければ、調査した教科書のようにどの指示用法であるかが判断できなくなる。

また、教科書には取り上げた指示詞が場所・事物を指し示す指示詞と修飾関係を表す指示詞の「コ・ソ・ア」三系列を体系的に提示していない現象が窺える。つまり、「コ」・「ソ」・「ア」系指示詞をそれぞれ分けて順番に説明しておらず、体系的にも整えられていないうえに、重複した説明も見られ、学習者に混乱を齎す恐れがある。

本論文では日本語学における指示用法と日本語教育における指示用法の捉え方に関して異なる点を見出だしたが、日本語の教科書や参考書などで如何にその指示用法を提示するか、順序としてどの段階でどの指示用法を解説し、練習するのが適切であるのかが、まだ明らかになっていないところがある。また、教育現場における教師側の指示詞の指導方法に関しては、現場指示用法についてはほぼ問題がないと言えるが、文脈指示用法に関しては検討の余地がある。文脈指示の指導方法については、まず談話と文章に分けておらず、練習問題には文脈がない。話し手(書き手)と聞き手(読み手)の関係の違いにより理解が変わる点などが考慮されておらず、適切な指導が行われているとは言い難い。指導方法の問題も日本語の参考書や教科書の指示詞の取り扱い方と関

係があると思われるが、筆者も教師の一人として、教材に不足しているところは補足し、指示詞の基本的な用法から拡張的な用法の順序で、どのようにすればより良い明確な場面設定ができ、自然な会話練習を提示できるかを今後の課題として検討したい。

3 本研究の方法論的評価と今後の研究の発展

本研究は日中対照の立場から「コ・ソ・ア」系指示詞と“这/那”系指示詞の機能上、指示用法の類似点と相違点を検討した。日本語教科書の調査を通して、日本語教育における指示詞の認識や、提示法や指導方法に存在する問題点を見出だし、日中の指示詞の対照で得られた結果を日本語の教材の作成にどのように生かすかについて論じた。

本研究は修士論文の研究成果をふまえ、修士論文では解決できなかった問題点を再検討し、明らかにすることができた。いままでの対照研究では作例や論文の筆者自らが翻訳したものを用例とすることが多かったため、用例が客観性に欠けるという問題があった。本論文ではより客観的な結果を出すために、出版された翻訳作品から用例を抽出するなどできるだけ多くの実例をとりあげた。同一訳者による翻訳作品に偏らないように、短篇小説は 57 篇、中・長篇小説は 38 篇、合計 95 篇の対訳作品を選び、そこから指示詞を用いた例を採取した。採取した例の指示用法がはっきり判断できるように、前文と後文には先行詞がない場合、指示関係がわかるように説明を加えた。

指示詞の研究では日本語は中国語より進んでおり、指示詞の日中対照研究は日本語の指示詞から中国語の指示詞へ、日本語側から考察したものがほとんどであるため、中国語側から日本語への考察が十分なされていない。本論文では日本語の指示詞が中国語に翻訳された場合と、中国語の指示詞が日本語に翻訳された場合の両方から考察している。この方法であれば、両言語の指示詞に関しては等価の部分だけではなく、等価になっていない部分も浮かび上がってくる。また、本研究では中国語の指示詞“这/那”の虚化から指示機能の弱化の有無は「コ・ソ・ア」系指示詞との対応にどのような影響を与えるかを検討し、逆に日本語の指示詞には中国語の指示詞“这/那”のような指示機能の弱化の現象が存在するかを明らかにした。そして、「そのうえ」「そのため」などのような 2 語以上の指示詞が語基になっている表現については指示機能の弱化と接続機能の発達という斬新な視点から解説した。この視点を取り入れることにより、「そのため」「そのうえ」などを別々の表現として区別することなく、指示詞の機能から解説することができるのである。つまり、「その」が持つ文脈指示の機能から説明し、さらに「そのため」「そのうえ」が持つ接続機能を教える方法により、「そのため」「そのうえ」などの表現を一つの枠組みに整理し、体系的に日本語を学習することができるのである。

また、日本語の指示詞の省略現象を論じた先行研究はあるが、中国語の指示詞の省略に言及する研究が少なく、日中指示詞の省略に関する議論も十分なされていない。本研究は指示詞の省略という視点から、中日指示詞が対応していない現象を新たな側面から観察し、両言語の指示詞が対応できない原因をより広い視点から論述した。

教材調査についても、教科書における指示詞の調査を行った研究もあるが、文型として取り上げられた指示詞とその用法の調査に留まっている。修士論文の研究でもそのような調査方法を用いたが、日本語教育現場における指示詞の導入、練習問題の設定など、指示詞の指導方法の一貫

性について議論できなかった。本研究の調査では調査した教科書に用いられた全ての指示詞を対象にして、教科書の内容を「単語」「前文・本文」「会話」「文法解説・文法説明」「読解文・応用文」「練習問題」の 6 項目に分け、全ての指示詞を指示用法別に分類し、各課、各冊ごとに結果を統計処理し、分析した。それによって、日本語教科書の各課、各冊、一つのシリーズにおいて、指示詞の提示の変化が一目瞭然となり、さらに、教師側が学習範囲から外した指示詞や指示用法がわかることで、文法として提示していない指示詞や指示用法を学習者が把握することができ、指示詞の発展学習を自分ですることもできる。つまり、提示方法の工夫次第で、学習者が自分のレベルやニーズに合った指示詞の学習を自律的に行うこともできるのである。

本研究では日中対訳作品を中心に日本語と中国語の指示詞を対照したが、そのうち文学作品が多いため、用例が文学作品に偏ってしまう。今後は調査資料の範囲をさらに広げ、談話資料を用い、両言語の指示詞を対照してみたい。また、第 2 章では日中指示詞の非対応に関しては考察したが、対応できない原因は様々であるが現在言えるのは①接続機能の発達②副詞に進化する指示詞③同格指示④同格指示の変形⑤標識と不定標識⑥観念指示⑦アスペクト・テンスとの関わり⑧絶対指示である。それらは「非対応」という枠組みでは僅かに一部だけ示し、数多くの疑問符はまだ解明されていない非対応の原因がまだまだ残されていることを示している。それは今後の課題として究明したい。今回の研究は指示詞の研究の入り口として、今後日中指示詞に関する研究の枠組みをさらに拡大し、未解明であるものを究明したいと考えている。

今回中国で出版された日本語教科書《标准日本语》と《新编日语》を満遍なく調査したが、数と種類に限られている。今後は日本で出版された日本語教科書を数種類選び、もっと広い範囲で調査を行う。

本研究で得られた結果は日本語教科書や日本語の副教材の作成に生かし、実際の中国高等教育の専攻日本語教育における教科書の作りに取りかかり、自らをはじめ指示詞の教え方を改善する。最終的に理論の研究と実践を結び、日中指示詞の対照研究から実際の教材・教具の作成、新たな教授法を生み出す学習環境デザインの構築へと連動させたい。

参考文献

（日本語文献）

庵功雄　(1992)「この」と「その」文脈指示の研究　大阪大学修士論文(未公刊)

庵功雄　(1994a) 結束性の観点から見た文脈指示：文脈指示に対するひとつの接近法『日本学報』13　大阪大学文学部日本学研究室 pp. 31-42

庵功雄　(1994b) 定性に関する一考察：定情報という概念について『現代日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科現代日本語講座 pp. 40-56

庵功雄　(1995a) テキスト的意味の付与について：文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に『日本学報』14　大阪大学文学部日本学研究室 pp. 79-93

庵功雄　(1995b) 語彙的意味に基づく結束性について：名詞の項構造との関連から『現代日本語研究』2　大阪大学文学部日本学科現代日本語講座 pp. 85-102

庵功雄　(1995c) コノとソノ：文脈指示の二用法 宮島達夫･仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（複文・連文編）下』 くろしお出版 pp. 619-631

庵功雄　(1995d) ソノＮとソレ：指示代名詞の分解可能性 宮島達夫･仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（複文・連文編）下』 くろしお出版 pp. 632-637

庵功雄　(1996a)「それが」とテキストの構造：接続詞と指示詞の関係に関する一考察『阪大日本語研究』8　大阪大学 pp. 29-44

庵功雄　(1996b) 指示と代用 ： 文脈指示における指示表現の機能の違い『現代日本語研究』3 大阪大学文学部日本学科現代日本語講座 pp. 73-91

庵功雄　(1997a)「は」と「が」の選択に関わる一要因：定情報名詞句のマーカーの選択要因との相関からの考察『国語学』188 pp. 134-124

庵功雄　(1997b) 日本語のテキストの結束性の研究　大阪大学博士論文

庵功雄　(1998) 名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察 『言語文化』35　一橋大学 pp. 21-32

庵功雄　(1999) ア系統指示詞の用法に関する一考察 『現代日本語研究』6　大阪大学 pp. 100-114

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』　スリーエーネットワーク pp. 2-14

庵功雄　(2002)「この」と「その」の文脈指示的用法再考 『一橋大学留学センター紀要』5 pp. 5-16

庵功雄　(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版

石川守　(2007)　直接法による指示詞「これ, それ, あれ」の導入と展開 『語学研究』第 115 号 拓殖大学語学文化研究所 pp. 1-25

石黒圭　(2000)「そして」を初級で導入すべきか『言語文化』37　一橋大学 pp. 27-38

市川孝　(1978)『国語教育のための文章論概説』 教育出版

井手至　(1952) 文脈指示語と文章 『国語国文』21-8　京都大学文学部国語学国文学研究室 pp. 1-22

伊藤淳子・林部英雄・小野博　(1987) 指示語を含む文脈の理解に関する発達的研究『横浜国立大学教育紀要』27 pp. 235-244

伊藤道雄　(1972) 文章の構成を理解させるための指導事例：文と文との続き方に気づき指示語や

接続語の役割を理解させる 小二 『教育科学国語教育』165　明治図書出版 pp. 33-37
今井新悟 (2010)「ここ、そこ、あそこ」の認知類型論:言語は空間をどう分割するか『立命館言語文化研究』22(2)　立命館大学国際言語文化研究所 pp. 99-101
今井四郎 (1978) 指示代名詞の指示機能について『北海道大学人文科学論集』15 北海道大学教養部人文科学論集編集委員会 pp. 1-16
井元亮 (2000) 否定と共起した「指示詞＋ほど」の用法について『筑波日本語研究』5　筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室 pp. 18-38
岩田一成 (2006) 日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語『日本語文法』6 (1) 日本語文法学会 pp. 38-55
上野恵司 (2002)『新版中国語考えるヒント』白帝社
上村隆一 (1996) コーパスによる日本語会話分析 : 指示詞の使用について 上田功他 (編)『言語探求の領域 : 小泉保博士古稀記念論文集』 大学書林 pp. 93-103
遠藤めぐみ (1988) 指示詞コ・ソ・アの使い分けにおける操作可能性と聞き手の非人格化の影響 『心理学研究』 59-4 日本心理学会 pp. 199-205
遠藤めぐみ (1989a) 日本語の指示詞コ･ソ･アの使い分けに関する言語心理学的研究『東京大学教育学部紀要』 28 pp. 285-294
遠藤めぐみ (1989b) 対話者の操作可能性から見た指示詞ソの使用『教育心理学研究』 37(1) pp. 61-66
王亜新 (2004) 文脈指示における日本語と中国語の指示詞の相違:日文中訳作品の実例分析 『言語と文化』 4　東洋大学言語文化研究所設置準備委員会 pp. 83-98
王亜新 (2007)「文脈指示」における日本語指示詞と中国語指示詞の相違－日中対訳作品の実例分析を通じて― 『テキスト構造に関する日中言語対照研究――言語と思惟の相関関係 (日中対訳文献における指示詞と接続詞の意味と機能を中心に) ――』 平成 14－15 年度科学研究費補助金基盤研究C研究報告書
王湘榕 (2011) 中文小説に見られる指示詞の日訳について 『人間文化創成科学論叢』 第 14 巻 pp. 29-36
王湘榕 (2013) 否定文における中国語の指示詞“那”の機能について:日本語のソ系指示詞、ア系指示詞との対照を兼ねて『日中言語対照研究論集』第 14 巻 日中言語対照研究会 pp. 95-106
王瑞来 (1996) 中国語における指示代名詞の性格について 『呴沫集』 9 pp. 120(359)-124(361)
王瑞来 (2003) 中国語指示代詞の性格に関する再論 『千葉商大紀要』41 pp. 1-9
岡崎友子 (1998) 指示詞 『国文学　解釈と教材の研究』43-11 pp. 127-128
岡崎友子 (1999) いわゆる「近称の指示副詞」について『語文』73 大阪大学国語国文学会 pp. 42-52
岡崎友子 (2010)『日本語指示詞の歴史的研究』 ひつじ書房
岡部寛 (1994)「こんな」類と「こういう」類 『現代日本語研究』1 大阪大学文学部 pp. 57-74
岡部寛 (1995) コンナ類とコウイウ類 : ものの属性を表す指示詞　宮島達夫・仁田義雄 (編)『日本語類義表現の文法 (複文・連文編) 下』 くろしお出版　pp. 638-644
小川典子 (2008)「そんなに～ない」と「あんまり～ない」における程度の基準について:指示

詞の有無を中心に『日本語の研究』4　日本語学会 pp. 140
奥田寛　(1995) 中国語の任意性指示詞“这”について(1)：語用論的アプローチ 『姫路獨協大学外国語学部紀要』8　姫路獨協大学外国語学部 pp. 204-217
郭玉英　(2009) 日中指示詞の対照研究:現場指示における「コ・ソ・ア」と「这・那」『国際文化研究』15　東北大学大学院国際文化研究科 pp. 73-83
郭玉英　(2010) 談話モデルによるコ系とソ系指示詞の捉え方：文脈指示の場合『日本認知言語学会論文集』10 日本認知言語学会 pp. 281-288
郭玉英　(2011a) 談話モデルにおける「コ･ソ･ア」とその結束性：文脈指示用法を中心に『国際文化研究』17　東北大学国際文化研究科 pp. 1-13
郭玉英 (2011b) 談話モデルにおける日中指示詞:文脈指示を中心に『日中言語対照研究論集』13 日中対照言語学会 pp. 101-113
加藤晴子 (2008) 中日対訳コーパスにみる「こ、そ、あ」と“這、那”の非対応 『応用言語学研究』10　明海大学大学院応用言語学研究科紀要編集委員会 pp. 117-126
金井勇人 (2003) 二人称指示における指示詞「そちら」についての考察：二人称名詞「あなた」との対照を通して『一橋大学留学生センター紀要』6　一橋大学 pp. 53-62
金井勇人 (2006) 指示詞「そちら」「そっち」の相違点について: 人称指示を事例に『日本語教育』129　日本語教育学会 pp. 21-30
金井勇人　(2007) 聞き手を指す「そちら」と「そこ」について 『日本語教育』134 日本語教育学会 pp. 110-119
金井勇人　(2010) なぜ聞き手を指す「そこのN」は非丁寧になるのか 『日本語/日本語教育研究』1 日本語/日本語教育研究会 pp. 139-156
金田章宏　(2004) 述語の指示性：指示語の文法化と「コソアリティ―」『国文学解釈と鑑賞』特集〈空間〉の言語表現 69(7) pp. 54-67
神尾昭雄　(1989) 情報のなわ張りの理論と日本語の特徴 井上和子 (編) 『日本文法小辞典』 大修館書店 pp. 223-244
神尾昭雄　(1990)『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』 大修館書店
木村英樹　(1982)『日本語・中国語対応表現用例集：指示詞』　日本語と中国語対照研究会
木村英樹　(1983a) 指示と方位：「他那本書」の構造と意味をめぐって 『中国語学・文学論集』東方書店 pp. 292-317
木村英樹　(1983b)「こんな」と「この」の文脈照応について『日本語学』 2-11 pp. 71-83
木村英樹　(1986)「その時計」と「この時計」『中国語』 319　中国語友の会 pp. 32
木村英樹　(1988a) 指示と量詞『中国語』343　中国語友の会 pp. 34
木村英樹　(1988b) 这是什么？『中国語』347　中国語友の会 pp. 34
木村英樹　(1990) 中国語の指示詞：「コレ/ソレ/アレ」に対応するもの 『日本語学』9-3 pp. 39-47
木村英樹　(1992) 中国語指示詞の「遠近」対立について:「コソア」との対照を兼ねて大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集（上)』 くろしお出版 pp. 181-211
邱麗君　(2012a) 日本語学と日本語教育学における指示用法のとらえ方 『指向』9 大東文化大学

大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻 pp. 135-148
邱麗君 (2012b) 日中指示詞の対照研究:「アノ」に対する中国語表現の比較と分析 『外国語学会誌』41 大東文化大学外国語学会 pp. 267-280
邱麗君 (2012c) 日本語教科書に現れる用法別指示詞の調査:四種類の日中教科書との比較を通して 『外国語学研究』 第 13 号 大東文化大学大学院外国語学研究科 pp. 233-244
金水敏 (1988) 日本語における心的空間と名詞句の指示について『女子大文学 (国文編)』39 大阪女子大学国文学科 pp. 1-24
金水敏 (1989a) 代名詞と人称『講座日本語と日本語教育 第四巻日本語の文法· 文体 (上)』 明治書院 pp. 98-116
金水敏 (1989b)『指示詞と人称· 指示詞用例集』昭和 63 年度科学研究費特定研究費 (1) 言語情報処理の高度化研究成果報告書
金水敏・田窪行則・木村英樹 (1989c)『日本文法セルフ・マスターシリーズ 4 指示詞』 くろしお出版
金水敏・田窪行則 (1990) 談話管理論からみた日本語の指示詞『認知科学の発展』3 講談社 pp. 85-115
金水敏・田窪行則 (編) (1992)『日本語研究資料集指示詞』 ひつじ書房
金水敏 (1999) 日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について『自然言語処理』6-4 言語処理学会 pp. 67-91
金水敏 (2002) 日本語の構文論『文法』 現代日本語講座 5 明治書院 pp. 55-78
久野暲 (1973) コ・ソ・ア 『日本文法研究』 大修館書店 pp. 185-190
倉持保男 (1987) 文章中の指示語の機能 『国文法講座 6 時代と文法 : 現代語』 明治書院 pp. 102-126
黒田成幸 (1979) (コ)・ソ・アについて 『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』くろしお出版 pp. 41-59
小泉保 (1988) 空間と時間における直示の体系 『言語研究』94 日本言語学会 pp. 1-24
高革萍 (2001) 日本語教育における指示詞について:中国人学習者の場合『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47 pp. 189-192
高革萍 (2002a) 指示詞実態把握調査とその誤用分析 : 中国人学習者を対象に『北條淳子教授古稀記念論文集』早稲田大学日本語研究教育センター初級教科書研究会 pp. 83-95
高革萍 (2002b) 指示詞の日中対照: 中国人学習者による誤用を参考に『早稲田日本語研究』10 早稲田大学国語学会 pp. 123-134
高革萍 (2002c) 後方照応指示詞の日中対照『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊 48 早稲田大学大学院文学研究科 pp. 93-103
高麗雅 (1986) 指示詞「コソア」についての一考察コノ・ソノ・アノを中心として 『日本語教育』60 日本語教育学会 pp. 221-227
高芃 (2004) 現代中国語指示代名詞“这”“那”に関する研究 名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文

高芃 (2006) 中国語の指示代詞“这/那”の虚化について『多元文化』第６号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科pp. 123-136
胡俊 (2005) 日本語と中国語の指示詞についての対照研究:現場指示の場合 『地域政策科学研究』第 2 号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科 pp. 29-51
胡俊 (2006) 日本語と中国語の指示詞についての対照研究:文脈指示用法の場合『地域政策科学研究』第 3 号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科 pp. 1-23
胡俊 (2010) 文脈指示における日本語と中国語の指示詞についての対照研究 : 論説文の場合『地域政策科学研究』第 7 巻 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科 pp. 127-138
小林由紀 (1997)「先行表現」をもたない指示語 :「その」の文脈指示とは言いにくい諸用法をめぐって『国文学研究』121 早稲田大学国文学会 pp. 68-79
小林由紀 (2012) 手紙文の中の現場指示的な指示語について『表現研究』96 pp. 25-34
近藤泰弘 (1987) 日本語の人称の性格について『日本女子大学紀要文学部』36 日本女子大学文学部 pp. 45-51
近藤泰弘 (1990) 構文的にみた指示詞の指示対象『日本語学』9-3 pp. 31-38
近藤泰弘 (1992) レ系指示詞の意味論的性格 『文化言語学 : その提言と建設』 文化言語学編集委員会編三省堂 pp. 365-376
三枝令子 (1998) 文脈指示の「コ」と「ソ」の使い分け『一橋大学留学生センター紀要』1 一橋大学留学生センター pp. 53-66
阪上彩子 (2006) 日本語学習者の指示と繰返し : KY コーパスを利用して『日本語・日本文化研究』16 大阪外国語大学日本語講座 pp. 173-182
阪上彩子 (2010) 日本語学習者の話し言葉における不適切な指示詞の使用『日本語・日本文化』36 大阪大学日本語日本文化教育センターpp. 27-44
阪田雪子 (1971) 指示語「コ・ソ・ア」の機能について『東京外国語大学論集』21 東京外国語大学 pp. 125-138
佐久間鼎 (1936)『現代日本語の表現と語法』 厚生閣
佐久間鼎 (1941)『日本語の特質』育英書院 (くろしお出版より復刊 1995)
佐久間鼎 (1951)『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』厚生閣
佐久間まゆみ (1990) 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(編)『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社 pp. 12-33
佐久間まゆみ (1992) 接続表現の省略と用法 『国文』77 お茶の水女子大学 pp. 63-74
佐久間まゆみ (2002) 接続詞・指示詞と文連鎖 『複文と談話』日本語の文法 4 岩波書店 pp. 117-189
迫田久美子 (1993a) コミュニケーションにおける「あれ」の用法と機能 『日本語教育』80 平成 4 年度第 8 回研究発表会発表要旨 日本語教育学会 pp. 195-196
迫田久美子 (1993b) 話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究 『日本語教育』81 日本語教育学会 pp. 67-80
迫田久美子 (1993c) 日本語学習者と日本人児童による指示詞コ・ソ・アの習得研究 : 穴埋めテストの調査結果に基づいて『広島大学教育学部紀要第 2 部』42 広島大学教育学部 pp. 199-206

迫田久美子（1996）指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程：対話調査による縦断的研究に基づいて 『日本語教育』89　日本語教育学会 pp. 64-75
迫田久美子 （1997a）中国語話者における指示詞コ・ソ・アの言語伝移『広島大学日本語教育学科紀要』7　広島大学教育学部日本語教育学科 pp. 63-72
迫田久美子 （1997b）日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究 『第二言語としての日本語の習得研究』第二言語習得研究会 pp. 57-70
迫田久美子 （1998）『中間言語研究：日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』渓水社
迫田久美子 （2001）母語の習得と外国語の習得：子供が母語を覚えるのと大人が外国語を習うのは違う 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子（編）『日本語学習者の文法習得』第11章 大修館書店 pp. 195-212
迫田久美子 （2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
迫田久美子 （2004）指示詞コ・ソ・アの正用と誤用 『月刊言語』33-11 大修館書店 pp. 130-131
迫田久美子 （2005）第二言語習得研究における「自然習得」の位置づけ: 自然環境学習者と教室環境学習者との比較から 『日本語学』24(3)　明治書院 pp. 44-56
迫田久美子 (2007) 日本語学習者によるコソアの習得:学習者はどこが難しいのか?『言語』36(2) 大修館書店 pp. 66-73
佐治圭三 （1971）外国人への日本語教育 『講座正しい日本語』5　明治書院 pp. 190-222
佐竹久仁子 （1980）指示詞「それ」省略の可否について『語文』37 大阪大学国文学研究室 pp. 1-11
讃井唯允 （1988a）中国語指示代名詞の語用論的再検討 『人文学報』198 東京都立大学人文学部 pp. 1-19
史雋 （2011a）中国語“这么 QN/”と“那么 QN/”構造における指示詞の機能：日本語との対照を兼ねて 40 『日中言語研究と日本語教育』 第 4 号　好文出版 pp. 40-47
史雋 （2011b）指示詞の照応用法に関する日中対照研究『日本語/日本語教育研究』第 2 号 ココ出版
史雋 （2012）日中指示詞の対照研究　平成 23 年度博士論文　一橋大学 一橋大学機関リポジトリ
柴田武 （1957）格・人称 『日本文法講座 1 総論』明治書院 pp. 197-222
柴田武 （1980）ことばにおける構造とは何か 『言語の構造』（『講座 言語』第 1 巻 ）大修館書店 pp. 4-41
柴田敏 （2001）（指示副詞＋係助詞）の緒形式について 『日本語と日本文学』33　筑波大学国語国文学会 pp. 1-13
朱德熙 （1995）『文法講議』白帝社
正保勇 （1981）「コソア」の体系『日本語の指示詞』日本語教育指導参考書 8　国立国語研究所 pp. 51-122
菅沼文子 （1999）最近の指示語研究と日本語からの貢献 ： 指示語使用における普遍性と個別性を求めて『日本女子大学紀要 文学部』49　日本女子大学 pp. 1-17
杉山さやか （2010）日本語の人称詞と指示詞この・その・あの『日本語用論学会大会発表論文集』第 6 号　日本語用論学会 pp. 65-72

杉山さやか （2013）日本語と中国語の指示詞の対照研究：「コンナ」類と「コウイウ」類，“这种”類と“这样的”類を例に 『日中言語対照研究論集』日中言語対照研究会 pp. 107-122
鈴木進一 （2009）明治以降における日本語指示詞研究の歴史 『人文研究』168 神奈川大学人文学会 pp. 189-237
鈴木進一 （2010）現代中国語指示詞の研究史：“这，那”を中心に『神奈川大学大学院言語と文化論集』16 神奈川大学大学院外国語学研究科 pp. 123-148
鈴木進一 （2011）中国大陸と台湾における指示詞の対照研究：“这・那”から見た遠近認知の相違について『人文研究』 174 神奈川大学人文学会 pp. 157-174
鈴木進一 （2013）中国大陸と台湾の空間認知に関する意識調査：“这・那” の選択から見た距離感の違いについて『年報非文字資料研究』 9 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター pp. 229-250
鈴木美都代・高橋太郎 （1989）コソアド代名詞はどんなものをさしうるか：直接的な用法の場合『研究報告集 10』 国立国語研究所報告 96 pp. 1-57
鈴木芳明 （2000）指示副詞サとサ系連語：指示性と一語化を中心に『日本語研究』20 東京都立大学日本語研究会 pp. 50-63
砂川有里子・清水由貴子・奥川育子 （2009）コーパスを用いた類義語研究：「それなのに」「そのくせ」「それでいて」の記述 『日中言語研究と日本語教育』2 日中言語研究と日本語教育編集委員会 好文出版 pp. 21-33
宋暁雨 （2002）指示語に関する日中対照研究：観念指示と文脈指示について 『麗澤大学大学院言語教育研究科年報』4 pp. 17-33
孫愛維 （2005）指示詞学習過程における JSL と JFL の相違性:台湾人日本語学習者を中心にお茶の水女子大学大学院修士論文
孫愛維 （2007） 第二言語としての日本語の指示詞習得の研究概観：非現場指示の場合 『言語文化と日本語教育．増刊特集号 第二言語習得· 教育の研究最前線』日本言語文化学研究会 pp. 55-92
孫愛維 （2008a）第二言語及び外国語としての日本語学習者における非現場指示の習得:台湾人の日本語学習者を対象に 『世界の日本語教育・日本語教育論集』18 独立行政法人国際交流基金 pp. 163-184
孫愛維 （2008b）第二言語及び外国語としての日本語学習者における現場指示の習得:台湾人の日本語学習者を対象に『日本語教育論集』24 国立国語研究所 pp. 49-64
高崎みどり （1988）文章展開における“指示語句”の機能 『国文学 言語と文芸』103 大塚国語国文学会 pp. 67-88
高崎みどり （1990）指示表現 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(編) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社 pp. 34-45
高崎みどり （2008）日本語の文連接表現：指示・接続・反復 『日本語の研究』第 4 号 日本語教育学会 pp. 95-102
高橋太郎・鈴木美都代 （1982）コ・ソ・アの指示領域について『研究報告集』3 国立国語研究所報告集 71pp. 1-44

高橋太郎　(1990) 指示語の性格『日本語学』9-3 pp. 4-21
田口慎也　(2011) 認知文法の観点からみた日本語指示詞の時間表現『言語科学論集』17 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座 pp. 1-19
田窪行則　(1987a) 普遍文法と外国語習得『日本認知科学会発表論文集』4 pp. 66-67
田窪行則　(1987b) 誤用分析 1『日本語学』6-4 pp. 104-107
田窪行則　(1989) 名詞句のモダリティ『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp. 211-233
田窪行則　(1990a) 対話における聞き手領域の役割について『認知科学の発展 3』 日本認知科学会 pp. 67-84
田窪行則　(1990b) ダイクシスと談話構造『日本語と日本語教育』12 明治書院 pp. 127-147
田窪行則・金水敏 (1996a) 対話と共有知識：談話管理理論の立場から『言語』25-1 pp. 30-39
田窪行則・金水敏 (1996b) 複数の心的領域による談話管理『認知科学』3-3 日本認知科学会 pp. 59-74
田窪行則　(1997) 日本語の人称表現　田窪行則 (編)『視点と言語行動』くろしお出版 pp. 13-44
田窪行則・金水敏 (2000) 複数の心的領域による談話管理　坂原茂 (編)『認知言語学の発展』ひつじ書房 pp. 251-276
田窪行則　(2002) 談話における名詞の使用　野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (編)『複文と談話 (日本語の文法　4)』岩波書店 pp. 191-216
田窪行則 (2011)『日本語の構造：推論と知識管理』くろしお出版 pp. 261-316
田中望　(1981)「コソア」をめぐる諸問題 『日本語の指示詞』日本語教育指導参考書 8　国立国語研究所 pp. 1-50
単娜　(2003) 中国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究 ： ダイクシスと照応を統合した観点から『言語文化と日本語教育』26　お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 pp. 61-66
単娜 (2004) あるトライリンガルの言語使用についての調査: 日本語指示詞の使用を中心に『三言語併用環境における日本語の発達に関する研究』長友和彦研究代表 (編) 平成 14～15 年度科学研究費補助金研究成果報告書 pp. 87-99
単娜　(2005) 日本語の指示詞に関する研究概観:対照研究を中心に『言語文化と日本語教育 増刊特集号』 日本言語文化学研究会 pp. 69-100
単娜　(2009) 中国語を母語とする学習者の指示詞コソアの習得に関する研究 : ダイクシスと照応を統合したモデルによる分析『言語文化と日本語教育』37 お茶ノ水女子大学日本言語文化学研究会 pp. 11-20
単娜　(2011) 日中両言語におけるダイクシス指示表現の比較対照 ： 認知言語学的な観点による一考察『研究紀要』18　東京成徳大学 pp. 123-133
張瓊玲　(1986) 日中両語における指示詞の研究:〈コ・ソ〉系と〈这・那〉系の対照を中心として『文献探求』17　文献探究の会 pp. 23-32
張麟声　(2001)『日本語教育のための誤用分析:中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク
陳露　(2004) 中国語の指示語から日本語との対照をかねて『国文学解釈と鑑賞 特集〈空間〉の

言語表現』7 pp. 188-198
堤良一 (2002a) 文脈指示における指示詞の使い分けについて『言語研究』122 日本言語学会 pp. 45-78
堤良一 (2002b) 指示詞モデルからみたア系列指示詞:モデルによる指示詞の包括的説明にむけて『岡山大学文学部紀要』38 岡山大学文学部 pp. 127-138
堤良一 (2002c) 指定指示と代行指示『応用日本語研究』創刊号 応用日本語研究会 pp. 44-61
堤良一 (2005) 文脈指示における指示詞:コ系列指示詞の機能を中心に 『岡山大学文学部紀要』43 岡山大学文学部 pp. 41-52
堤良一 (2008) 談話中に現れる間投詞アノ(一)・ソノ(一)の使い分けについて『日本語科学』23 国立国語研究所 pp. 17-36
堤良一 (2011) 西日本の若者のコソア:高橋調査法による岡山大学での調査から 『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』31 岡山大学大学院社会文化科学研究科 pp. 15-26
堤良一 (2012) 書評論文 岡崎友子著『日本語指示詞の歴史的研究』『日本語文法』12 日本語文法学会 pp. 113-120
堤良一 (2012)『現代日本語指示詞の総合的研究』 ココ出版
寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
東郷雄二 (1999) 談話モデルと指示:談話における指示対象の確立と同定をめぐって『京都大学総合人間学部紀要』6 京都大学総合人間学部 pp. 35-46
東郷雄二 (2000) 談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア『京都大学総合人間学部紀要』7 京都大学総合人間学部 pp. 27-46
東郷雄二 (2001a) 定名詞句の「現場指示用法」について『京都大学総合人間学部紀要』8 京都大学総合人間学部 pp. 1-17
東郷雄二 (2001b) 定名詞句の指示と対象同定のメカニズム 『フランス語学研究』35 日本フランス語学会 pp. 1-14
東郷雄二 (2002) 不定名詞句の指示と談話モデル『談話処理における照応過程の研究』科学研究費補助金研究成果報告書 pp. 1-35
時枝誠記 (1950)『日本文法 口語篇』岩波書店
外山美佐 (1994) 日、中両語における指示詞の比較について『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』9 筑波大学 pp. 1-18
中川正之・李浚哲 (1992) 日中両国語における数量表現『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版 pp. 95-116
長澤理恵 (2008)「{この/その}N{は/が}P」文における「は/が」に関する―考察:指示詞「この/その」と名詞句の性質との相関 『名古屋大学国語国文学』101 名古屋大学国語国文学会 pp. 118(1)-101(18)
長澤理恵 (2010a)「{この/その/あの}システム」文における名詞句の性質と指示詞「この/その/あの」との相関関係『名古屋大学国語国文学』名古屋大学国語国文学会 pp. 176(1)-161(16)
長澤理恵 (2010b) 指示詞「この/その」代行指示文における「は/が」の出現傾向:名詞句指示の様相と名詞句の性質から 『名古屋言語研究』4 名古屋言語研究会 pp. 59-71

中みき子 (1989) 指示詞「(コ)・(ソ)・(ア)」と「這」が対応する時 『研究論叢』34 京都外国語大学 pp. 425-432
中みき子 (1990) 小説における日・中指示詞の機能の差異について『研究論叢』35 京都外国語大学 pp. 278-287
西香織 (2000) 中国語指示詞の現場指示に関する一考察：日本語、上海語との比較・対照を通して『京都教育大学国文学会誌』29 京都教育大学 pp. 31-20
西田隆政 (2011) 書評岡崎友子著『日本語指示詞の歴史的研究』『日本語の研究』第7巻3号 日本語学会 pp. 67-72
日本語記述文法研究会（編）(2009)『現代日本語文法7 第12部談話第13部待遇表現』くろしお出版 pp. 15-47
馬場俊臣 (1988) 要約文の指示語使用の特徴 佐久間まゆみ（編)『文章構造と要約文の諸相(日本語研究叢書4)』 くろしお出版 pp. 47-60
馬場俊臣 (1991) 指示語：文脈指示のコ系･ソ系の使い分けについて『語学文学』29 北海道教育大学 pp. 29-37
馬場俊臣 (1992a) 指示語の文脈展開機能『日本語学』11-4 pp. 33-40
馬場俊臣 (1992b) 指示語：後方対応の類型について『表現研究』55 表現学会 pp. 20-27
馬場俊臣 (1993a) 指示語系接続詞と指示語「そうして、こうして」を例として『言語文学』31 北海道教育大学札幌分校 pp. 7-14
馬場俊臣 (1993b) 小学校国語教科書の現れた指示語『北海道教育大学教科教育学研究図書第２巻 教科と子どもとことば』 教育出版 pp. 17-28
馬場俊臣 (2006)『日本語の文連接表現:指示・接続・反復』 おうふう
馬場俊臣 (2010) 『現代日本語接続詞研究: 文献目録・概要及び研究概観』 おうふう
馬場俊臣 (2011) 指示表現 中村明他（編)『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店 pp. 104-105
林四郎 (1972) 指示代名詞「この」「その」の働きと前後関係 『電子計算機による国語研究(協)』国立国語研究所 pp. 110-131
林四郎 (1983) 代名詞が指すもの、その指し方『朝倉日本語新講座５ 運用Ⅰ』朝倉書店 pp. 1-45
林奈緒子 (1999) 指示機能をもつ程度副詞に見られる制約について：「こんなに」「あんなに」「そんなに」を例に『言語学論叢』18 筑波大学 pp. 25-38
ひけひろし (1986) 接続詞「そこで」「それで」『教育国語』86 pp. 74-88
堀口和吉 (1978a) 指示語「コ・ソ・ア」考 『論集日本文学・日本語５ 現代』角川書店 pp. 137-158
堀口和吉 (1978b) 指示語の表現性 『日本語・日本文化』8 大阪外国語大学 pp. 23-44
堀口和吉 (1990) 指示詞コ・ソ・アの表現 『日本語学』9-3 pp. 59-70
堀口和吉 (1992) 指示語の表現性 金水敏・田窪行則（編)『日本語研究資料集指示詞』 ひつじ書房 pp. 74-90
前田昭彦 (2005) ア系指示詞と聞き手の知職 『長崎大学留学生センター紀要 』13号 長崎大学留学生センター pp. 49-73
牧野成一 (1983) 省略と反復 『講座日本語の表現5 日本語のレトリック』中村明（編）筑摩書

房 pp. 73-87
牧野美奈子 (1993) 中国語の指示詞とテクスト 『中国語学』240 日本中国語学会 pp. 99-108
牧野美奈子 (1995) 広東語の指示詞と〈量＋名〉『中国語学』242 日本中国語学会 pp. 38-45
益岡隆志, 田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』 (改訂版) くろしお出版
三上章 (1955)『現代語法新説』刀江書院 (くろしお出版より復刊 1972) pp. 170-189
三上章 (1970) コソアド抄 『文法小論集』 くろしお出版 pp. 145-154
望月八十吉 (1968) 中国語の指示詞『中国語学』177 日本中国語学会 pp. 1-6
森田良行 (1967) 指示語の指導『講座日本語の文法 4 文法指導の方法』 明治書院 pp. 52-68
森田良行 (1982) 指示語の扱い方 『講座日本語教育』18 早稲田大学語学教育研究所 pp. 22-37
森田良行 (1987) 日本語教育と代名詞 『国文学 解釈と鑑賞』52-2 pp. 126-133
森田良行 (1990) 指示語について 『日本語学と日本語教育』 凡人社 pp. 327-342
森田良行 (1995) 指示詞表現とコソアド『日本語の視点：ことばを創る日本人の発想』 創拓社 pp. 104-113
森塚千絵 (2002) 日本語初級学習者の指示詞の習得過程に関する事例研究:ダイクシスと照応を統合した習得の枠組みから お茶の水女子大学大学院修士論文
守屋三千代 (1991) 指示詞 川口義一他 (編)『日本語を教える 2 日本語教育チェックブック』 バベレ・プレス pp. 140-171
守屋三千代 (1992) 日本語教育における文法教育の課題:習得状況からみた指示教育の問題点 『日本語日本文学』2 創価大学 pp. 11-27
楊蕾 (2011) 中国語における人称代名詞と指示詞との共起の特徴をめぐって:【人称代名詞＋“这/那”＋量詞＋名詞】構文とその日本語訳を中心に 日中対照言語学会 第26回大会 (2011年度冬季大会) pp. 1-8
吉本啓 (1992) 日本語の指示詞コソアの体系 『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房 pp. 105-122
李杰 (2004) 日中指示詞の対照研究 (1)：中国人日本語学習者の「コソア」の習得における困難点についての分析『福岡教育大学国語科研究論集』45 福岡教育大学国語国文学会 pp. 102 -89
李杰 (2005) 日中指示詞の対照研究 (2)：中国人日本語学習者の「コソア」の習得における困難点についての分析『福岡教育大学国語科研究論集』46 福岡教育大学国語国文学会 pp. 120 -109
李長波 (1994) 指示詞の機能と「コ・ソ・ア」の選択関係について『国語国文』63-5 pp. 37-54
李長波 (1998) 日本語の指示体系の史的変化について 『国語国文』67-12 pp. 18-38
李長波 (1999) 日本語定称指示詞の歴史的研究 京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文
李長波 (2002)『日本語指示体系の歴史』 京都大学学術出版会
劉月華他 (1988)『現代中国語文法総覧(上)』 くろしお出版
劉驫 (2009)「那」の文脈指示と観念指示：談話モデル理論による分析 『日本語用論学会大会発表論文集 』5 日本語用論学会事務局 pp. 313-316
劉驫 (2011) 談話における近称「这」の遠称用法：日本語指示詞との対照を兼ねて《汉日语言对比研究论丛》 北京大学出版社 pp. 134-145

劉驫（2012）物語における日本語と中国語の文脈指示詞の対照研究 ： 談話構造の観点から 『日中言語対照研究論集』14 日中言語対照研究会 pp. 78-92
梁慧（1986）「コ･ソ･ア」と「这・那」：日本語･中国語の比較対照研究 『都立大方言学会会報』116 pp. 9-18
芦英順 （2005a）指示詞「ア」と「这、那」の照応用法における日中対照 『社会言語科学会第15回大会発表論文集』社会言語科学会事務局pp. 136
芦英順・呉人恵・加藤重広 （2005b）指示詞の照応用法に関する日本語と中国語の対照研究 『富山大学人文学部紀要』43 富山大学 pp. 1-22
路玉昌（1999）中国語指示詞の文脈指示について『吉備国際大学社会学部研究紀要』9 pp. 135-144
路玉昌 （2000）コ・ソの文脈指示について：発話内容が先行表現となっている場合 佐治圭三教授古稀記念論文集編集委員会（編）『日本と中国ことばの梯（かけはし）：佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版 pp. 207-215
路玉昌 （2001） 小説・童話におけるコノ・ソノの文脈指示について 『吉備国際大学社会学部研究紀要』11 高梁学園吉備国際大学 pp. 77-87
路玉昌 （2006）中国語指示詞の文脈指示についての再考:日本語指示詞コソアへの対応と関連して 『吉備国際大学社会学部研究紀要』16 高梁学園吉備国際大学 pp. 67-76

（中国語文献）

陈玉洁 （2010）《汉语指示词的类型学研究》中国社会科学出版社
崔应贤 （1997）〈“这”比“那”大〉《中国语文》第 2 期 pp. 126-127
崔潮 （1989）〈说说汉语的指示代词〉《汉语学习》第 5 期 pp. 39-41
丁启阵 （2003）《现代汉语“这”、“那”的语法分布》 世界汉语教学 第2期pp. 27-38
付艳丽 （2007）《现代汉语省略句研究》东北师范大学硕士学位论文
方梅 （2002）〈指示词“这”和“那”在北京话中的语法化〉《中国语文》第 4 期pp. 343-356
胡俊 （2009）〈“こ”与“这”的比较研究—以人称指称、 时间表达为例〉《湖南农业大学学报》第 10 卷 3 期 pp. 89-91
黄伯荣 （1996）《汉语方言语法类编》青岛大学出版社
黄成稳 （2003）《实用现代汉语语法》 知识出版社
江天 （1980）《现代汉语法通解》辽宁人民出版社
蒋华 （2005）〈指示代词“这”的上下指差异研究〉《安庆师范学院学报》 第3期 pp. 101-102
蒋华 （2007）〈人们使用“这/那”类词时应避免的问题〉《湖南科技学院学报》第 11 期 pp. 187-189
梁敬美 （2002）〈“这”“那”的语用和话用功能研究〉《中国社会科学院博士论文》 中国社会科学院
刘月华 （2001）《实用现代汉语语法》 商务印书馆 pp. 82-91
刘丹青，刘海燕 （2005）〈崇明方言的指示词—繁复的系统及其背后的语言共性〉《方言》第2期 pp. 97-108
吕叔湘 （1980）《现代汉语 8 0 0 词》商务印书馆
吕叔湘 （1982）《中国文法要略》 商务印书馆
吕叔湘 （1985）《近代汉语指代词》（江蓝生补） 学林出版社

吕叔湘 (1990)〈指示代词的二分法和三分法—纪念陈望道先生百年诞辰〉《中国语文》第6期 pp. 401-405
马建忠 (1898)《马氏文通》商务印书馆
邱丽君 (2010) 2010 年度河南省社科联 、河南省经团联调研课题〈外语中母语迁移现象的研究〉(SKL－2010-1432)
邱丽君 (2011a)〈第二语言习得中误用原因的调查研究〉《河南广播电视大学学报》第1期 河南广播电视大学 pp. 54-56
邱丽君 (2011b)〈从母语迁移理论谈日语教学中误用的避免〉《河南教育学院学报》 第 2 期 河南教育学院 pp. 134-136
邵敬敏 (1991)〈“省略句”与“非主谓句”新说〉《语文学习》第7期pp. 26-28
沈家煊 (2002)《不对称和标记论》江西教育出版社pp. 251-287
王力 (1959)《中国現代语法 (下)》中华书局
王力 (1985)《王力文集 第二卷》山东教育出版社出版
王灿龙 (1999)《现代汉语照应系统研究》中国社会科学院研究生院博士学位论文
王灿龙 (2000)〈人称代词“他”的照应功能研究〉《中国语文》第3期pp. 228-237
王灿龙 (2004)〈说“这么”和“那么” 〉《汉语学习》第1期pp. 12-17
王道英 (2005)《“这”、“那”的指示功能研究》学林出版社
小川環樹 (1981)〈苏州方言的指示代词〉《方言》第 4 期 pp. 287-288
徐一平, 曹大峰 (2002)《日中対訳語料庫的研制与応用研究论文集》外语教学与研究出版社
徐丹 (1988)〈浅谈这/那的不对称性〉《中国语文》第 2 期 pp. 128-130
杨玉玲 (2010)《“这”、“那”系词语的篇章用发研究》中国广播电视出版社
张伯江，方梅 (1995)〈北京话指代词三题〉《吕叔湘先生九十华诞纪念文集》商务印书馆 pp. 149-158
张伯江，方梅 (1996)《汉语功能语法研究》江西教育出版社出版 pp. 155-216
张莹， 徐杰 (2011)〈弱势特征的激活与“代词/名词+时间处所词”结构〉《语文研究》第3期 pp. 15-21
张佩霞 (2006)〈从视点看中日文代词使用之异同〉《外语研究》第 4 期 pp. 32-34
张振亚，王彬 (2011)〈“那”的外指用法、虚化及其话语功能〉《阜阳师范学院学报》第 6 期 pp. 35-38
讚井唯光 (1988b)〈日汉指示代词用法的对比〉『第二届国际汉语教学讨论会论文选』北京语言学院出版社 pp. 528-547
朱德熙 (1982)《语法讲义》商务印书馆 pp. 85-89

(英語文献)

Chen Ping (2004) Identifiability and definiteness in Chinese. *Linguistics*. 42 (6)
Huang shuanfan (1999) The emergence of a grammatical cate-gory definite article in spoken Chinese . *Journal of Pragmatics* 31
Tao, Hongyin (1999) The grammar of demonstratives in Mandarin. *Journal of Chinese Linguistics* 27

既発表論文と各章の関係

第1章　「日本語学と日本語教育学における指示用法のとらえ方」『指向』第9号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2012 pp. 135-148

第2章　「“这/那”の指示機能虚化から見た中日指示詞の非対応」『語学教育研究論叢』第30号 大東文化大学語学教育研究所 2013 pp. 49-65
《郑州航空工业管理学院学报》第3期〈中日指示词的文脉用法中不对应现象探析〉郑州航空工业管理学院 2013 pp. 88-93

第3章　〈从日中对照的视角分析日语译文中指示代词的省略现象〉『国際連語論学会 連語論研究〈Ⅱ〉』日本語文法研究会 2013 pp. 134-143

第4章　「日中指示詞の対照研究-『アノ』に対する中国語表現の比較と分析-」『外国語学会誌』41号 大東文化大学外国語学会 2012 pp. 267-280

第5章　「日中指示詞の対照研究 - “这”が「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳された例を中心として - 」『ことば』第34号 現代日本語研究会 2013 pp. 59-69

第6章　「日本語教科書に現れる用法別指示詞の調査-四種類の日中教科書との比較を通して-」『外国語学研究』第13号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2012 pp. 233-244
「≪新編日語Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ≫における用法別指示詞の全数調査-日本語教育の視点から-」『外国語学研究』第14号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2013 pp. 195-202

第7章　「≪中日交流標準日本語≫初・中級における用法別指示詞の全数調査」『外国語学会誌』42号 大東文化大学外国語学会 2013 pp. 241-255